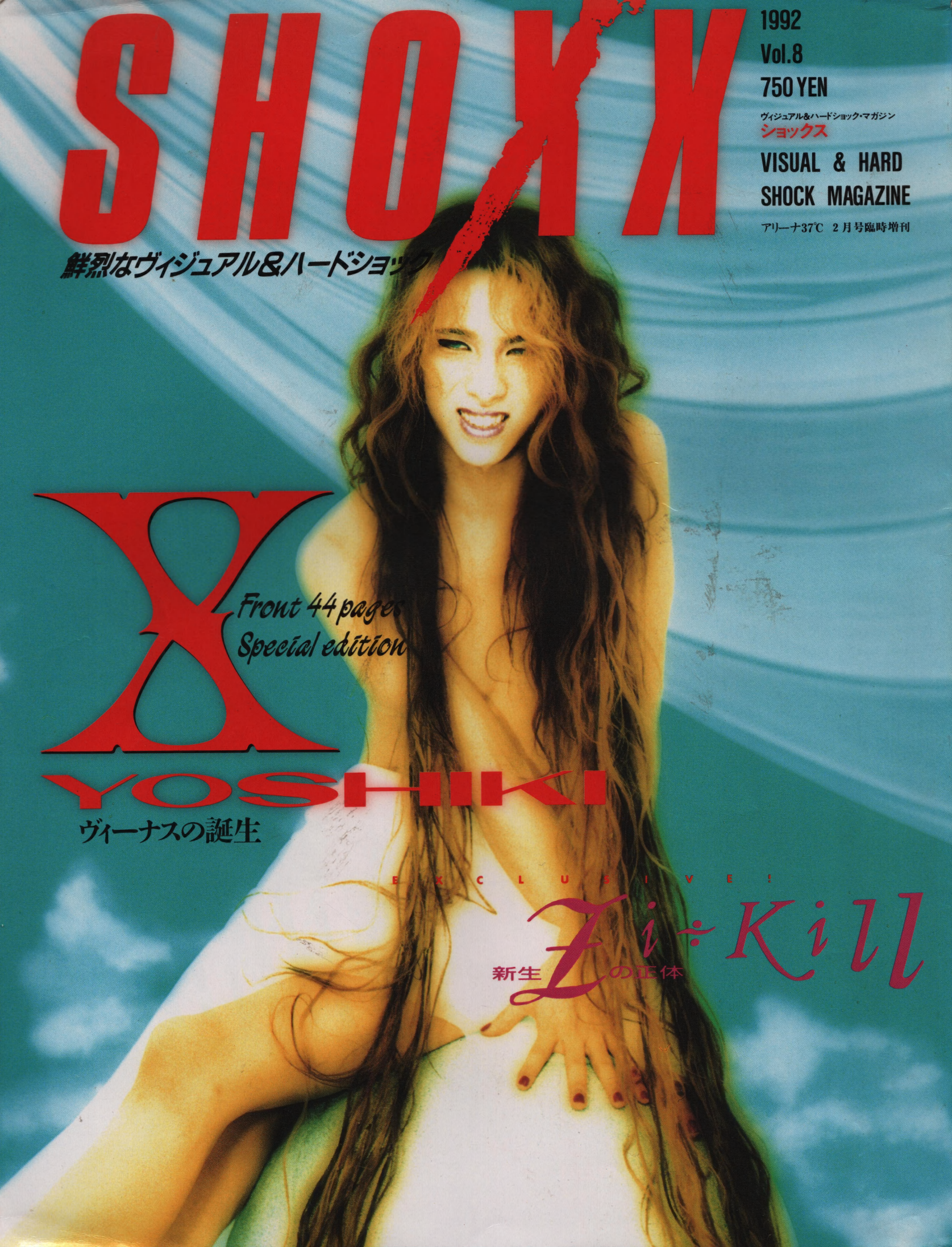
SHOXX

1992
Vol.8
750 YEN

ヴィジュアル&ハードショック・マガジン
ショックス
VISUAL & HARD
SHOCK MAGAZINE

アリーナ37℃ 2月号臨時増刊

鮮烈なヴィジュアル&ハードショック



Front 44 pages
Special edition

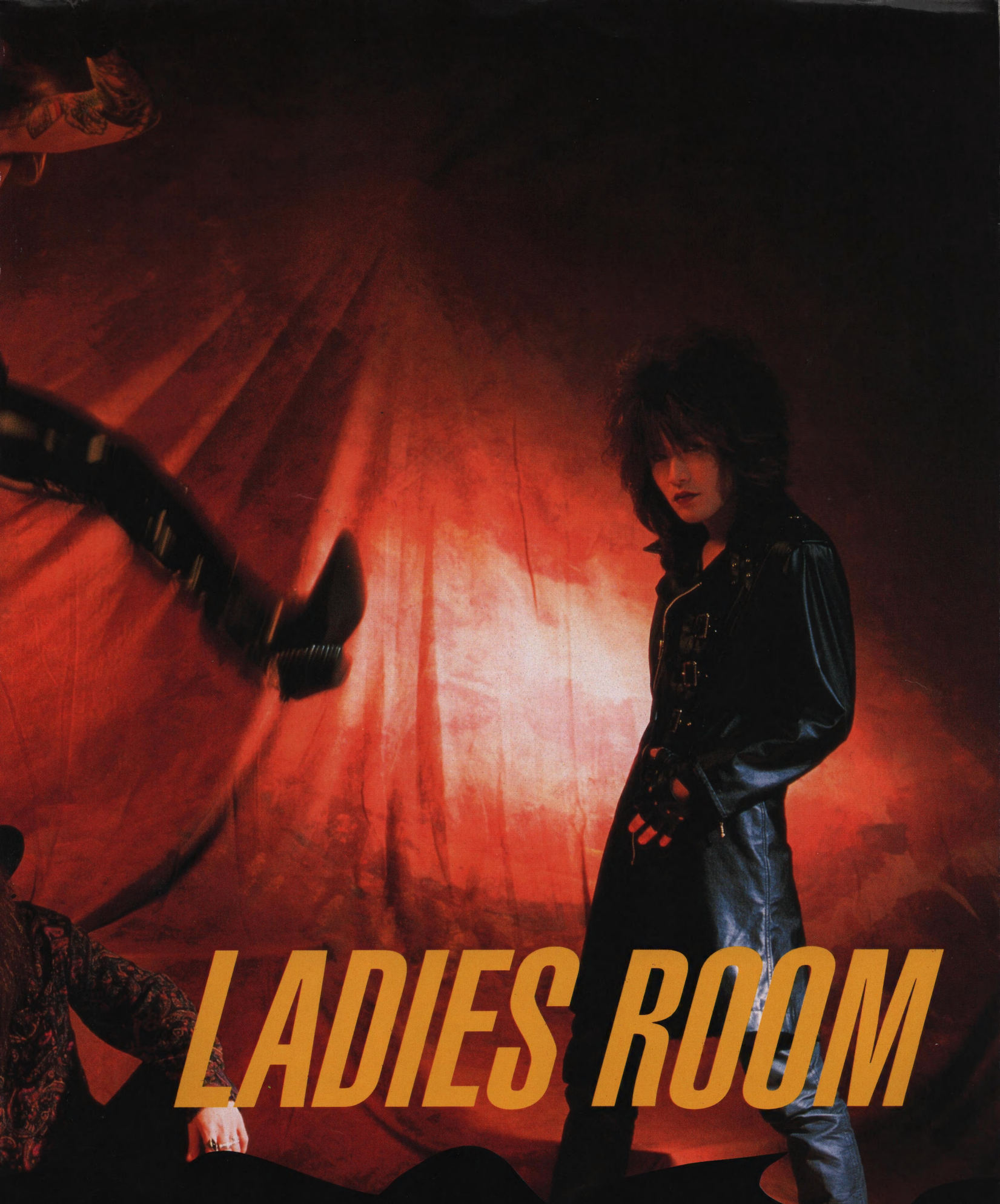
X YOSHIKI

ヴィーナスの誕生

EXCLUSIVE!

Zi:Kill

新生Ziの正体



INCLUDING 12 BRAND NEW SONGS : SEX DRIVE#2 (ALBUM VERSION)/
YOUR NAKED HEART/ONE NIGHT STAND/JUST LIKE A CANDY/NIGHT TO NIGHT/HARD TO SAY…/
BIG PIE/PURPLE HEAVEN/GIRL FRIEND/ROCKING HOUSE/CHECK^3 /LIGHT OF YOUR EYES

ESCB 1277 ¥2,800 (TAX ON)

LIFE SIZE

オマエの心をロックしたい

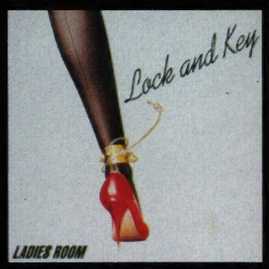
1992.2.1 RELEASE : NEW ALBUM

"LOCK AND KEY"

NOW ON SALE: "SEX DRIVE(SINGLE VERSION) c/w FAIRY TALE"
ESDB 3252 ¥800 (TAX ON)

"SPECIAL MAKING VIDEO" PRESENT
CDシングルに封入されている応募ハガキを持って、近くのレコード店にニューアルバムの予約をしに行こう。
抽選で1,000名様に"SEX DRIVE"のプロモーション クリップのスペシャル メイキング ビデオをプレゼント（詳しくは、応募ハガキをご覧下さい。）

Epic/Sony Records
A Division of Sony Music Entertainment (Japan) Inc



SHOXX Vol.8

Vol.9は3月21日発売！

GRANDSLAM

054 最後に、自分の音楽人生が終わったときに後悔したくはないから
橘高文彦（筋肉少女帯）

058 俺はここで宣言します！解散はない!!

062 **DEEP** 意識してないんですよ、最近は

067 **BUCK-TICK** 一対一の、心に触れ合うような感触

070 **DIAMOND YUKAI** ステージの上の"狼"

074 **AION** 今回のツアーはリラックスし過ぎ!?

076 **STILL ALIVE** 俺たちは地位とか名声はないけど

104 **しいもんきい** ついに、新トラック決定！

●特別企画
ロックンロール・パーティー
106 渋谷の夜は更けて…いや、明けていく

●大好評！ミュージシャンが作るページ
117 **アーチスト・ボックス**

●好評連載企画
124 **ロッキン・コミック"8ビート・ギャグ"**
130 **ロックンロール日記**

●恒例スペシャル
126 **わくわくプレゼント**

●ショックス連続企画〈第8回〉
VISUAL & HARD SHOXX INVASION
ヴィジュアル&ハード・ショックス・インヴェイジョン

110 **エックス at 渋谷エッグマン**
狂気乱舞

112 **ジ・アザーサイド**
単なるBGMになる物だけはやりたくない

114 **ライト＆シェイド**
一つのカテゴリーに固まらずに

発行所：株式会社音楽専科社　〒104 東京都中央区銀座5-1-7数寄屋橋ビル ☎03・3574・0201
発行人：福島昌実　編集人：星子誠一
印刷所：三共グラフィック株式会社
発行日：1992年2月20日
特別定価●750円（本体728円、送料260円）

万一、乱丁や落丁があった場合はお取りかえします 本誌の記事および写真の無断転載放送複写は固くお断りします

CONTENTS

X YOSHIKIの神秘世界

45ページ巻頭大特集

第1章▶激美!!YOSHIKI　ヴィーナスの誕生
第2章▶YOSHIKIの心象風景インタビュー
第3章▶YOSHIKI最新独占ロング・インタビュー16000字
第4章▶YOSHIKIのA to Z Part1
第5章▶Xジェラシー・ツアー全記録
第6章▶YOSHIKIのプロジェクト V2
第7章▶X with オーケストラ
第8章▶X at 東京ドーム '91.1.8

006

新生 Zi:Kill の正体

131 本誌独占!!今、初めてその全貌が明らかになった

LADIES ROOM

083 男と女のいろいろな関係

DIE IN CRIES

088 硝子の肖像

SISTER'S NO FUTURE

092 "ブッ飛び"戦闘機から振り落とされるな!

LUNA SEA

096 '91.12.29~30 日本青年館2days完全密着レポート

COVER MODEL:YOSHIKI(X)　PHOTO:HIDEO KANNO

STAFF ●Editorial Direction→Seiichi Hoshiko ●Editors→Seiichi Hoshiko/Naoko Endo/Reika Iwashita
●Art Direction→Page
●Design→Page Kie Nara Chiharu Doi

PHOTOGRAPHY:HIDEO KANNO
HAIR & MAKE UP, HAIR & FACE ACCESARY:TETSUYA KAMEYAMA
OBJECT STYLIST:EMI TAKAHASHI

SHIKI

醜く歪んだ天地の狭間に
生まれ出たる終末のヴィーナス。
身にまとわれた虚構の美貌は、
もはやそれ以上の意味を持たず
心を縛る愛は、
すでに錆び付いていた。
誰が彼をカリスマと呼び、
誰が彼にメシアを求めるのか。
彼の魂の叫び以外、彼に救えるものはない。
その魂の叫びこそ、ただ一つの彼の真実。
叫ぶことに疲れ果てても、
解き放たれる日は未だ訪れず……
耳の奥で響き続ける不協和音。
それは追憶のメロディーが奏でる
“X線上のアリア”

X

ヴィーナスの誕生

YO

INSIDE WORLD OF YOSHIKI

【ある瞬間における〝感性の肖像〟】

INTERVIEW:FUZUKI WATANABE
PHOTOGRAPHY:HIDEO KANNO

西欧美術史の1ページのごとく端麗な容姿。過去・現在・未来を問わず、存在するすべての事物を打ち砕く鋭利な神経。

刹那の美学を体現する人・YOSHIKIは4人の同志と共に現われ、Xと名のった。Psychedelic Violence。Crime Of Visual Shock――――。

怒濤の衝撃は、ある日あなたのドアを叩いた。

苛酷な快楽が、その目と耳を侵し始める。美と醜、栄と衰、愛と憎、生と死……。送り込まれてくる相反した2面性は、どちらが〝嘘〟とも〝美〟ともつかない。

やがて、あなたの中で何かが狂いだす。

あなたが感じているそれは、本当に〝現実〟なのか?

あなたが創り上げた〝虚像〟ではないのか?

あなたは一体、何に惹かれているのか?

Xの魅力の大きな一断面にアーティスト・YOSHIKIの存在があり、それは同時に唯一無比、かけがえのないものでもある。

ここではXの作品、ことYOSHIKIの作る詞やヴィジュアルといった、いわば〝虚像〟の側面を糸口に、彼の〝現実〟を探ってみようと試みている。

それは、ある瞬間におけるアーティスト・YOSHIKIの〝感性の肖像〟。

この誌面から、彼が抱く〝イマジネーションの中のリアリティー〟が伝わるだろうか。

例えば本誌で見せているヴィーナス姿など、撮影に関するアイディアは、音楽誌の編集者やデザイナーなど、外部から持ち込まれることが多い。与えられたシチュエーションでのフォト・セッションにおいて、彼は何を表現しようとしているのだろう。

「結構、ノリですよ。あんまり考えてないな」

そうだろうか。

撮影に同席していると、彼が鏡で自分の姿をチェックする回数が、かなり頻繁(ひんぱん)であることも気にかかる。

「やっぱり〝よく写る角度〟とか……」

アーティストによっては、自分が最も映える角度を把握し、常に同じ向きの同じ顔しか見せない人もいる。

YOSHIKIは、どうだろう?

「わかんない、まだ。〝コレだ!〟と思う時もあるけど、上がった写真を見てみると意外に……難しいですね」

けれど、笑顔はめったに見せない。

写真に見る彼の表情は、どれも緊迫したムードを漂わせている。ライヴであれだけ笑顔になるから、そのギャップは激しい。

「意識してるわけじゃないけど……でも、撮影の合間なんかゲラゲラ笑ってるでしょう(ー

ステージと私生活ではよく笑うけど、撮影の時は〝笑って〟って言われても無理があるしな……。何でだろう」

おそらくは、無意識のうちに自分を演出しているのだろう。

何も考えていないと言いながらも、カメラの前に立つYOSHIKIは、瞬時に何かを〝感じ〟て、別人となっている。

そうして撮影された写真が〝作品〟であり、フォトグラファーを〝アーティスト〟とするならば、彼は自分を〝素材〟だと認識しているのだろうか。それとも……。

「アーティストとアーティストのぶつかり合いじゃなきゃダメだな、と思いますけどね。まぁ〝素材〟でもいいんですけど。〝毒のある素材〟と思ってもらえれば」

彼が素材に甘んじる場合は、その〝毒気〟を活かすも殺すも、企画・ヘアメイク・コスチュームそしてカメラワークに賭かっているということだ。

今号における読者諸君の評価は、いかがなものだろう。

使用写真の選定には、もちろんYOSHIKI本人も関わっている。彼のチェックは厳しいとの評判。

「いや、厳しいというか(笑)……。長くやってると、カメラマンによる(写真の)クセもわかってくるんですよね。

同じ日に同じ状況で幾つも撮ることが多いから……〝この人は、よかったね〟とか、随分わかってきますよね」

彼は、何を基準に〝自分〟を選ぶのだろう。

「気分ですよ。だから、そんなにマズくないと思う写真は、いっぱいあるんですけど……。

ただ、使う場所も考えますよね。これを一点ここに使うなら、こっちの方がいいんじゃない? ということを言うくらい」

彼の話には〝ノリ〟とか〝気分〟といった言葉がよく聞かれる。いわゆる〝雰囲気〟というものだろうが、この場合は、イコール彼の〝感性〟と解釈していいだろう。

ところで、彼自身を表現する場として〝写真〟と〝CD〟〝ビデオ〟の間には、どのような違いがあるのだろう。

当然、音やヴィジュアルの有無といった客観的な違いではない。主観的に、だ。

「音楽に向かってる時は、全然、別人ですよ。もっと、おっかないし……厳しいですよ、すごく。自分にも厳しい代りに、まわりにも厳しいですけど、レコーディング中とか。

撮影じゃ〝わがまま〟って感じだけど(笑)。

ビデオの場合には、音はCDで出てるものだから、いつも〝プラスα〟を考えますよね」

ヴィジュアル・ショックと銘打っているXだけに、〝プラスα〟としての映像も十分、ショッキングで印象的だ。

が、それらのヴィジュアルが楽曲のイメージを限定してしまう怖さを感じたことはないのだろうか。

「たまにあるんだけど……それでイメージが限定されてしまうとしたら、そこまでの曲だと思ってるから、かえって何でもやっちゃい

ますよね」

言葉にはしない、楽曲への自信と誇りがうかがえる。

「映像に関しては、こだわってるんだか、こだわってないんだか、自分でもよくわからない……。こだわっているようで、結構〝あ、いいや〟って感じで、やっちゃうこともあるし（笑）」

この〝いいや〟が〝妥協〟とは違うニュアンスを持っていることに気付いてほしい。

一つ前の質問に対する彼の答えは、自分たちの楽曲が〝映像によるイメージの限定を受け得ない〟ことを含んでいる。

ということは、〝イメージ〟は無限に拡がるものであり、それを映像という〝形〟に変換するには、ある程度の限界がある。

とはいえ、こだわり方に差のある作品。クオリティーにも差は生じるのだろうか。

「こだわったほうが〝いい〟ですよね、少なくとも。少しだけ。

ただ、音楽に関して〝いいや〟っていうのは無いです」

彼の口元が、キッパリと言い放った。

YOSHIKIが、作品のモチーフとしている代表的なものに〝血〟〝薔薇〟〝死〟があげられる。

それぞれは、どんなイメージをもって、彼の中に存在しているのだろう。

「ひとことで言っちゃうと〝キレイ〟」

確かに〝キレイ〟と思えなくもない。

だがそれは、彼らのビデオの映像や歌詞が表現しているような、イマジネーションの世界に限られた美しさではないのだろうか。

実際に自分の流す血もまた、美しく思えるのだろうか。

「思うんですよ（笑）。（自分の掌を見て）〝あ、ステキ〟とか言ったら、気が変なんだと思われるだろうな（笑）。自分が流してても、客観的に見ちゃうんですよ、血を。あとから〝痛いんだ〟って思うけど。〝俺の血は、

ちょっと薄いかな〟とか〝血ノリの方がいい色だな〟とか（笑）、いろいろ。

この前も血だらけになったけど……」

数日前に右手を負傷したYOSHIKIは、包帯にチラリと視線を落とした。

「逆に、実存するものの方がリアルさがなかったりすることもあるな、って思っちゃった。あまりにもイメージが進み過ぎてて、現実の方がつまらないと思うこともある……。

俺の場合、現実と夢の境目っていうのがあまり無いし、ステージと私生活の境目っていうのもあんまり無いんです。昔はあったと思うんだけど、知らないうちにゴチャゴチャになって、境界線が無くなっちゃったみたいな。

だから、作品のタイトルじゃないけど〝夢の中に生きて〟……そういう感じですね」

実際の〝夢〟については、どうだろう。

眠りにおいて、よく夢を見るのだろうか。

「……そうですね（笑）。見ますね」

彼が見る夢は、主にモノクロだという。血や草木が、時折、淡く色付いている程度。

夢の内容は覚えているのだろうか。

「うん、覚えていることの方が多い……あ、どっちもどっちかな。だって、起きると5分後に仕事が入ってたりするんだもん（笑）。

だいたい（仕事の電話等で）起こされるパターンが多いんですけど、起きた途端にカッ飛んで仕事場に向かったり……」

そうして現実との境界線が失せていくのだ。

輪郭の曖昧な彼の夢の記憶が、作品に題材を提供することはあるのだろうか。

「そんなステキな夢、見ないからなぁ（笑）。〝あれが現実だったらヤだな〟とは思うけど。現実も夢もどうでもいいって感じ。今は。現実にしても夢にしても、別な意味での……〝妄想〟ですか。イマジネーションとか、考えてること、頭に浮かぶ映像とか。そういうものに、ずっと浸っててもいいし……」

現実も夢もどうでもいい。

そんなYOSHIKIにとって、今、いちばん大切なものとは何だろう。

「人でしょうね。自分以外の(笑)。人との繋がりとか……メンバーだったりスタッフだったり友達だったり」

自分のことは、大切じゃない?

「大切じゃないんじゃないですか、行動を見てると(笑)。まわりが、大切だと思わせるようにしてるけど(笑)」

自分への愛情・愛着は?

「よくナルシストって言われるけど、そうも思わないんですよね。自分で自分をいいとも思わないし……。たまに〝YOSHIKIさんみたいになりたい〟って手紙をもらったりすると、〝冗談じゃないよ〟って思うけど。〝この苦しみがわかるか!〟みたいな(笑)。

まぁ、その(苦しみの)分、感動もあるけど、あんまり人に勧められるもんじゃないからな……と言いながら、どこか好きな部分ないかなって考えてるんだけど、別に無いし。

俺なんか、どうでもいいんですよ。俺なんか、死んじゃえばいいんだ(笑)」

聞き覚えのある文句に〝それじゃHIDEさんですよ〟と突っ込みが入る。

「あれはもともと俺のセリフだったんですよ。知らない間に移っちゃって(笑)。〝YOSHIKI病〟なんですよ。俺のまわりにいると、感化されますからね」

〝死〟という言葉も、作品のモチーフの一つである。ビデオの中でも実に様々な〝死〟を表現しているX。

YOSHIKIは、自分の死を想像することがあるのだろうか。

「どうなるんだろうと思うくらいで…わからないなぁ。〝死後の世界〟を信じないわけでもないし、信じるわけでもないし。

いつも〝今、現在〟って思ってるから……瞬間瞬間ですよね。前後はどうでもいい」

この言葉に集約されるYOSHIKIの刹那的な生き様は、ステージひとつをとってみても、その身が示すとおりである。

〝瞬間を生きる〟YOSHIKIではあるが、あえて死の方法を選べるとすれば……。

「凍死ですかね。雪でも氷の上でもいいんだけど。死体がいちばんキレイだって言うじゃないですか。あとはガス自殺?

すごくステキな物語があって――ある女性が、ある男性をとても愛していたんですね。会社の同僚か何かだったと思うんですけど。でも、その男性の恋人にはどうしても勝てなくて、自殺を決意するんです。仕事を口実に呼び出された彼が、指定の時間に部屋を訪ねると、彼女は数時間前にガス自殺をしていて……血の気の引いた体が、真っ白になるそうですね。

彼女は最後に、自分のいちばん美しい姿を愛する人に見せたというあれは感動しましたね。それで彼女は幸せだったのかもしれないし……。YOSHIKIは出来るのか、って言われたら、わからないけど(笑)。でも、そこまで愛せる人がいたら、出来ないことないと思うし……。

どんなものでも〝汚い〟と思えるとダメなんですよ。キレイなものには惹かれますね。

そういう意味では、村上龍さんの〝トパーズ〟は、リアルすぎて好きになれなかったな」

〝死〟にさえも美しさを求めるYOSHIKI。彼の感性を支える基準として〝美〟は重要な位置にある。

そういった視点で彼が愛読する文学作品の中に、澁澤龍彦氏の著書がある。氏の作品とYOSHIKIの作品に共通する事柄として感じるのは、サディズムやマゾヒズムといった、ある種の〝狂気〟。

それは、YOSHIKI自身の内部にも潜んでいるのだろうか。

「あんまり無いですけどね」

しかし、彼らの打ち出してくるヴィジュアルを見る限り、

「ありそうですよね。でも、叩かれたら単純にアタマにきます(笑)。快楽だとは思わない(笑)。

だけど、人は欲望を追い続けてある程度満たされてしまうと、続いてわいてくる欲望が、どんどんアブ・ノーマルになっていくらしいんです。最終的に向かうのが〝自己破滅〟ですよね。

それが究極の快楽じゃないかって言う人もいるんですけど……なるほどな、って。そういうものが、どこかにインプットされてるのかなとは思いますけどね、たまに。

俺は、そこまで深い意味で、自分の体を痛めつけてるわけじゃないですけど。

自分の中の狂気は……〝YOSHIKI〟みたいな(笑)。わかんない。

やっぱり他と違うと思います?

自分自身も、きっと、普通の流れじゃないと思うんです。だけど、それに関連してくる時の流れ……タイミングも作用してると思うんですよ。〝こうならなきゃいいな〟と思っていることが、現実になってしまったり。

前に誰かに言われたけど〝YOSHIKIは時間と闘ってるのか、手を組んでいるのかわからない〟って。だから、今のこういう俺があるのは、微妙な時の流れとの絡みがあると思うんです。俺に狂気があるとすれば、状況がそうさせてるんだと思います。本当に時間を操れるものなら操りたいですよ」

それは、もどかしさを隠せない口調だった。

「だから、今いちばん興味があることは〝時の流れ〟ですね。あ、あともう一つ〝人の恋愛観〟かな。女性の勘とか男性の勘とかね」

セカンド・アルバムのタイトルを『Jealousy』としたあたりから、すでに幾つかのインタビューで答えているように、YOSHIKIには〝嫉妬〟が存在しないらしい。

「嫉妬はないけどコンプレックスはあるから、自分に返ってくるんですよ」

恋愛に限らず、コンプレックスを感じやすい彼。ゆえに、勤勉家であることは周知のとおりである。

が、そういった学習が、人間本来の〝動物的な勘〟を鈍らせているという説もある。

「ただの知識だと思えばいいんですよね。俺も勉強するの好きだけど、それはあくまでも知識と経験でしかないと思うし、今までがどうだろうと、過去のやり方にはとらわれたくないし。やっぱり〝勘〟を大切にしたいですよね。〝勘と気分〟ですか。〝あぁ、今日は何だか撮影したくないなぁ〟なんて(笑)」

〝そうだったんですか!?〟と編集者が嘆く。撮影時期のYOSHIKIの体調が非常に悪く、本誌の取材日も何度か変更されている。

「ウソです(笑)。それはないですよ。

でも、気分がのらないままの仕事もありますよ。レコーディングにしても、そうだけど。そういう時は、スケジュールが重みに感じることもありますよね。

逆にスケジュールが何も入っていないのに〝今日は撮影やりたくて仕方ないな。カメラマン呼んでくれ(笑)〟みたいな気分の日もある。〝勘と気分〟に従って生きていきたいですよね。

でも、普通の社会の流れの中で生活する以上、無理なんでしょうね。いろんなことが自分のまわりで動いているし、思いどおりに生きてたら迷惑をかける人が何十人……時には何千人、何万人になるかもしれないし……。

〝気分〟と〝責任感〟の闘いですよね」

この言葉の意味をYOSHIKIほど深く痛感している人はいないかもしれない。

ところで、ここまでは彼を〝アーティスト〟とした上で話を進めてきたが、実際、彼は、どちらの立場をより意識しているのだろう。

話の中心が〝音楽〟に触れるたびに別の顔……いわば〝ミュージシャン〟を感じさせる顔になるYOSHIKI。

何度か頭をかすめた疑問を愚問だとは思いながらも投げかけてみた。

「鋭い。スルドイ質問だなぁ……」

YOSHIKIは絶句してしまった。

しばらく沈黙が続く。

「ホントの意味で〝ミュージシャン〟でいたいんですけど……」

YOSHIKIは、ゆっくりと口を開いた。

「より深い、素敵なミュージシャンになるためにも、また、ミュージシャンでいられるためにも〝アーティスト〟でなきゃいけないと思うんですよね。最終的にはミュージシャンでありたいけど……それを守るためでもいいし、近付くためでもいいし、それになるためでもいいんだけど、その前に、アーティストとしてのYOSHIKIがいてもいいかな、と思う。

アーティストとして吸収したものの全てをぶつけてもいいし。まぁ、ぶつけてますけど。……難しいですね、それは。

自分でも混乱してるからな。一体、俺は何なんだろう〟って、よく思いますからね。

まだそれを探してるところかもしれないな」

自分の気持ちを確かめるように、言葉を選びながら丁寧に答える。

これが現時点での、彼の本音だ。

もしかしたら、彼はずっと〝ミュージシャンとしてのYOSHIKI〟を追いかけ続けているのかもしれない。それに追いついた時、彼の中の何かが、大きく変化するのだろうか。

数年後もう一度、彼に尋ねてみたい。その時の彼はミュージシャンだろうか。アーティストだろうか。

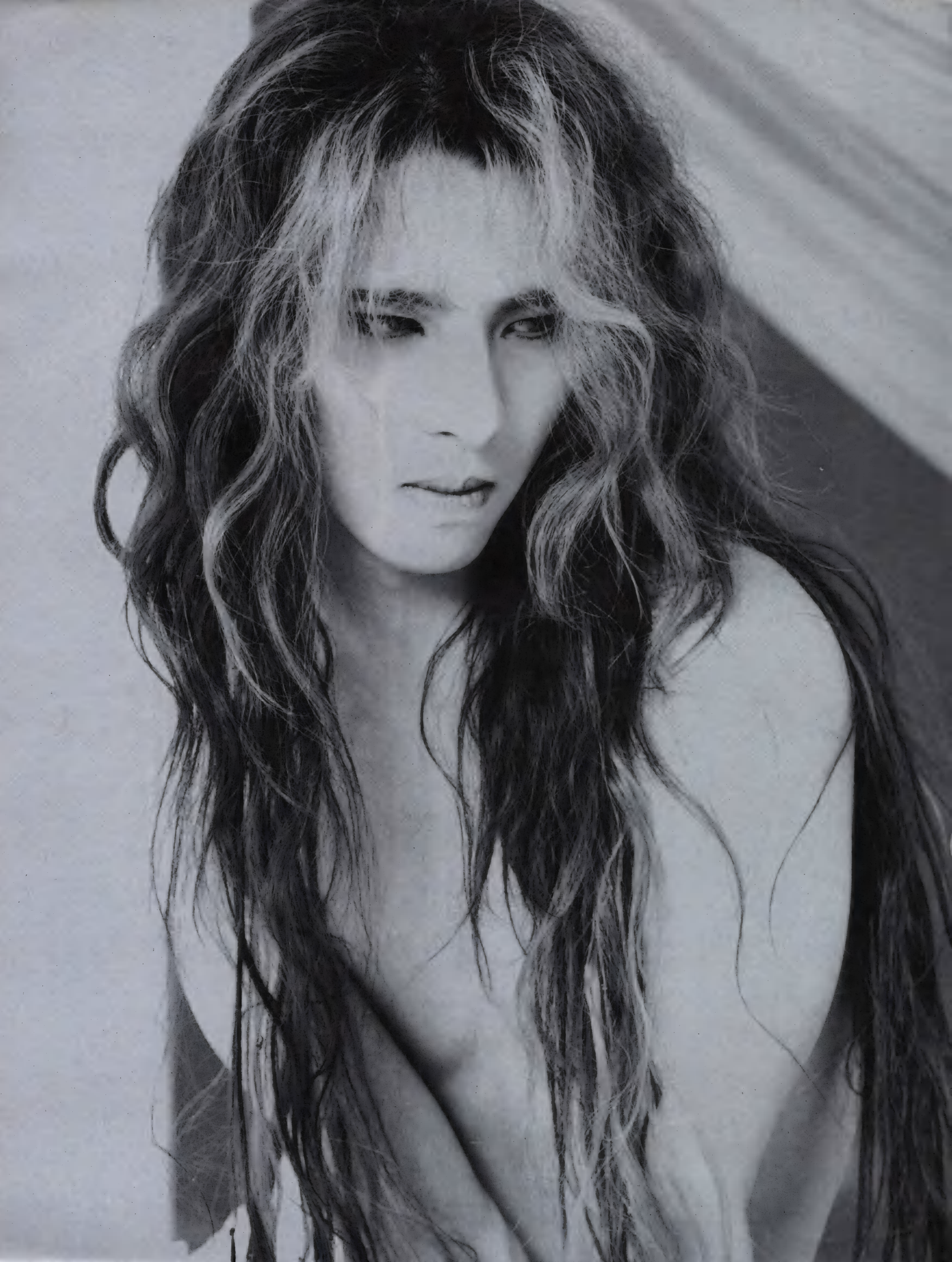
自他共に認める〝厳しさ〟をもって、音楽と向かい合うYOSHIKI。

彼が音楽を通じて自己を満たし、エクスタシーを感じることが出来るのは、どんな瞬間なのだろう。

最後の問いに、YOSHIKIは笑顔で答えた。

「曲が出来上がった瞬間ですね。あとは……コンサートで気持ちが一つになった時とか、リハーサルでも全員の気持ちが一つになった時は、うん……エクスタシーですよね(笑)」

いつも〝今、現在〟って思ってるから…瞬間瞬間ですよね。前後はどうでもいい。



Latest Long Interview

INTERVIEW: AKEMI OHSHIMA
PHOTOGRAPHY: HIDEO KANNO

白夜

解散する？ もう、勝手に言ってろ！

——東京ドームの「破滅に向かって」っていうサブタイトルは、ファンの子にとってショッキングなものだったみたいなんだけど？

YOSHIKI うん。そうかもしれないですね。

——YOSHIKIが考えたんでしょ？

YOSHIKI そう。でも、前からつけたかったんですよ。LAにいるときから、「破滅に向かって」っていうタイトルを考えてて、本当は「VIOLENCE IN JEALOUSYツアー」のサブタイトルに、「破滅に向かって」っていう言葉がついていたんです。だけど、タイアップの関係で、ダメになっちゃってね。今回、いろいろ企業がついてたでしょ？ だから、「企業イメージが悪い」って。とくに、某会社が何十周年記念で協賛してくれてるのに、やはり「破滅に向かって」はまずいっていうんでとっちゃったんです。それで、「夢のなかにだけ生きて」っていうサブをつけたんですよ。その言葉も、すごく好きだったから。だから、東京ドームだからどうこうじゃなくて、前からつけたかったんです。だって、基本的に、何もかもが破滅に向かってるでしょ？

——そう思う？

YOSHIKI 思う！ それはエックスに限らず、すべてのものが破滅に向かっているんですよ。破滅っていう言葉が、悪いのかな？ 破壊があってこそ、新しいものが生まれると思っているから。人間、誰にだって寿命はあるし。

——そういった大きい意味で？

YOSHIKI うん、そう。大きい意味で。それは、1年後？年後じゃないかもしれないけど。ただ、俺たちは結構、危機迫るものがあるよね。体力的な問題があるから。LAで俺が立ち直ったとき、「あとどのくらいもつか、わからない」「だから、破滅に向かう気持ちで俺はやる」「破滅に向かって、全力疾走する」って、思ったんですよ。メンバー・ミーティングでみんなに、「死ぬまで、つきあってくれ」って、発言したこともあったし。実際、自分でも、あと何年もつか、わからないしね。あと1、2年かも、しれないしさ。

——それは、ドラマーとしてという意味？

YOSHIKI もちろん、そうだし……何にしてもね。

——バンドとしては？

YOSHIKI それは、ない。これは、俺の個人的なことだから。個人的な、体のことで、そう思うんだよ。だけど、10年先のことなんかわからないし、そんな先のことを考えて生きていたくないからね。10年先を考えていたら、あんなドラムのたたき方はしないでしょう。何度倒れても、懲りないし（笑）。

——本当（笑）。

YOSHIKI ステージでドラムを叩きはじめると、全部、頭のなかからすっ飛んじゃうからな。

——でも、今、このタイミングであのタイトルは、やっぱり、みんな心配するでしょう？

YOSHIKI なに、なに、このタイミングって（笑）。なんか、勝手に噂が広がっているんじゃないの？ そういうの、聞いてるんでしょう？

——うん。いろいろ噂は耳に入ってくる。

YOSHIKI だって、アメリカにいるときから、俺たち、「解散する」っていわれてたんだよ。アメリカに行く前もあったし。

——たしかに、エックスは「解散」の噂の多いバンドだよね？

YOSHIKI それは俺たちに限らず、売れてるバンドはみんなそうだと思うよ。俺はもう、「勝手にいってろ！」って感じだな。

——そういう噂、本人の耳にも入ってくる？

YOSHIKI たまにね。でも、そんなの、エックス、始めた頃からいわれてるから。ずっと「解散するんですか？」って、いわれ続けてきた。それがバンドが大きくなると、ファンの数も多くなっていくから、いってる人の数も多くなるだけなんだよ。なんか、そういう噂をするのが、好きな人っているみたいね（笑）。でも、俺は全然気にしない。勝手に、いってなさい（笑）。

ただ、最近、俺がV2プロジェクトを始めたりしたから、本当に（噂が）すごくなっちゃってるよね。あれは別に前からやってたことだし、たまたまタイミング的に今になっただけなんだよ。それで、たまたま東京ドームのタイトルが「破滅に向かって」になって、重なっちゃったかなぁと思ったけど、何にも関係ないですよ。何も根拠ないし。「あのバンドは、解散しないんじゃない？」っていわれてるより、「解散するかもしれない」って周りをハラハラさせてたほうが、いいような気がするしね。

——それで、1月いっぱいでまた、人前から姿を消してしまうんだよね？

YOSHIKI それもね、誤解してる人がたくさんいるんだけど、別にバンドとしての活動を停止するわけじゃないんですよ。人前から姿を消して何をするかっていったら……レコーディングするんですよ。今、残されている「ART OF LIFE」なり、次のアルバムなり。

——じゃ、「Jealousy」を作るときと、同じパターン？

YOSHIKI 同じ。ただ、今回はアメリカが絡んでるっていうだけ。ま、どうとってくれたって、いいですけどね。だって、どんなにちゃんといっても、ファンはその言葉のとおりには受け取ってくれないんだもん。ステージのうえで「俺たち5人は止まらない」っていってるし、それが答えなわけでしょう？ それを、敢えて説明する必要もないんじゃない？ 解散すると思ってるやつは、（エックスを）自分の頭のなかでとっとと解散させちゃえばいいんだよ。もう、最近、頭にきちゃって。今はホテル暮らしなんだけど、LAから帰ってきたばかりの頃、家の電話が鳴りまくってたもん。「解散するんですか？」っていわれたり、「やめてください」っていって、受話器の向こうで泣いてたり。

——え、誰が電話かけてくるの？

YOSHIKI ファンの人。そういうのを聞くと、俺だって傷ついちゃう。だんだん、自分でも、解散するんじゃないかっていう気になってきちゃうよ（笑）。

——でも、エックスがここまで大きくなっちゃうと、そういう噂も止められないんだろうねぇ？

YOSHIKI あんまり大きくなったっていう実感は、ないけど。また、全然、昔の焦ってる自分と変わらない。逆に行動が大胆になってきちゃって、尖るとこは前より尖ってきちゃったと思うよ。コワさも増えてきてるけど、コワくないものも増えてきてる。でも、ここまできたら、コワいものなんかないですよ。なんでもこい。どうとでもなれ！

——おい、おい、おい（笑）。

YOSHIKI いや。本当にそういう気持ちなんです。

——パワー・ステーションのライヴのとき、「ENDLESS RAIN」の前に、「いろいろとつらいことがあったとき、励ましてくれた歌です」っていって、演奏を始めたよね？ あのとき、YOSHIKIがいってたつらいことやプレッシャーっていうのは、何に対してのことだったの？

YOSHIKI ……いろいろ、ありますよ。やっぱり、週刊誌とかに載るようになっちゃったら、事実じゃないことも書かれるし。小さなことも、大きく書かれるしね。だから、ファンの気持ちもよくわかるんだけど……つらいことは多かったですね。さまざまな事件で、企業とのタイアップが飛んだり、自粛しなくちゃいけないっていう状況になったり。これだけ人の前に立って歩いていると、風当たりは強いですよね。そういう意味でのつらいことは、たくさんあった。

——そういうつらいことに、YOSHIKIはどう対処していく？

YOSHIKI ぶん殴って、前に歩いていくタイプですね（笑）。

——でも、エックスって、本当に昔から、風当たりの強いバンドだったよね？

YOSHIKI ホント。昔から、強かったですね。強さはずっとそのままかな……。あ、風当たりもアップしてるかもしれないな。でも、決して開き直っているわけじゃなくて、全部その風当たりを受けとめてきましたから。ただ、解散についての噂は、ステージのうえで俺たちはちゃんと表現してるし、MCでもいってるし、それを聞いても疑うような人たちは、もういいです。もう知らない。

——でも、ファンの中には、そういう声を聞きたくても、チケットがとれなかったりして、ステージが見られない人もたくさんいると思うよ。

YOSHIKI うん。でも、俺はインタビューに答えたとき、そんなことを一言だっていった記憶はないよ。ただ、バンドとして、いつも危機感を持っていたいっていうのはある。どんなバンドでも同じだと思うけど、人が何人か集まってやってるんだから、難しいことはありますよ。だけど、今までだって俺たちはそういう危機感を背負ってやってきたわけだし、これからだってそうやってやっていきます。

——そういう人間関係で難しいことが起こったとき、YOSHIKIはどうしてきた？

YOSHIKI 地でぶつかるしか、ないですよ。裸でぶつかるしか……って、俺が「裸」っていう言葉を使うと、最近、違うふうにとられちゃうんだけど（笑）。だけど、自分に素直になって、ぶつかっていくしかないです。何事も、避けては通れませんよ。避けて通ろうとすると、嘘が出るし。だから、真っすぐ前に歩いていくだけです。

——LAから帰ってきてから、エックスとしてもそうだしYOSHIKI個人としても、すごいパワフルに活動しているよね？ もう、死に物狂いで突き進んでいるっていう感じがする。

YOSHIKI 生活のペースが、普通の人間より早いですからね（笑）。ただ、今までレコーディングしてた期間とか、もっとすごいじゃ時間を過ごしていたわけで、そういう意味では今は楽なほうなんですよ。だから、LAのテンションのまま、日本で活動を行なっ

週刊誌とかに載るようになっちゃったら、事実じゃないことも書かれるし……。

悩んでるときはいつも、ピアノの練習をし始めたりして、フッきっちゃう。

てしまったら、こうなっちゃったっていうか……。

音楽的な活動以外にも、センセーショナルな行動が多かったし。

YOSHIKI あれ（ヌード撮影）は自分でも興味があったし、自分では芸術だと思ってるんだけど、そうとらえてくれる人は少ないでしょうね。でも、何人かでも、そうとらえてくれる人がいれば、それでいいんです。僕は、その何人かのためにやるし。百人に反対されても、自分がやりたいと思ったらやりますよ。

たとえば、今回のでも、反対する人は多かった？

YOSHIKI うん。非難ゴウゴウはどこも、あるんじゃないですか？　ファンのなかにも「もうやめてください」って、電話かけてくる子がいる。どうして、俺んちの電話番号を知ってるのかわかんないんだけど（笑）。でも、今やってることが、2年後3年後にはわかってもらえるんじゃないかっていう気もするし。そういうことは、口では説明できない。ミュージシャンだしね。すべての答えは、音やステージで返します。ただ……本当は、つらいな。自分でも、「どこまで俺は、耐えられるんだろう」って思うことがある。良くも悪くも、こんなに騒がれちゃって。でも、「また大丈夫」っていう気持ちもあるよ。「こんなことで、挫けたら」って思うと、全部やる気が出てくるんですよね。

その風当たりというのは、誰から？　スタッフ？　ファン？　マスコミ？

YOSHIKI ファン、マスコミ。それに、一般の人からも。だって、たまたま変寝られなくてテレビつけたら、朝のワイドショーで「YOSHIKIくんがどーの」とか、やってたりするんだもん。頭にきて、テレビ壊っちゃったよ（笑）。あんなの見ると、自分でも傷ついちゃう。でも、自分で自分を傷つけるようなことしてるんだなぁ……とも、思うけど。でも、刺激的です。だから、いいの。まだ全然、「こんなこと、やっちゃったよぉー」っていう気は、ないな。

YOSHIKIって、いっつもそうだね。いつも「またたいしたことない」「またたいしたことない」って、いってるような気がする。

YOSHIKI だって、まだ本当に「売れた」とも、思ってないもの。もし、今、売れたと思ってたら、こんなに勉強とか練習とかしてないと思うし。今の状況を維持しようなんて、さらさら思ってない。まっさかさまに落ちるか、さらにうえにあがるかのどっちか。変えっていう言葉が、人生でいちばん嫌いだからね。まだ、なんてことはないんですよ。……でも、たまに遠方に暮れるな。だけど、僕はそういうことは他人に相談しないからね。

自分で解決しちゃうわけ？

YOSHIKI ひとりで、悩んじゃう。

YOSHIKIってそういうとき、悩みこんじゃうほうなの？

YOSHIKI うん。でも、結局、結論なんかでない。悩んでるんだったら、次にいっちゃおうって思う。悩んでるときはいつも、ピアノの練習をし始めたりして、フッきっちゃう。最後の（横浜）アリーナのとき、（自分が倒れたりして）いろいろあったでしょ？　だから、すーっとステージのうえから客席ばかりを見てたんですよ。客席にいる人たちを見ることによって、アーティストとしての自分を確認したかった。結構、アリーナも立きっぱなしだったんだけど、客席を見ることによっていろんなことを再確認したかったんだよね。自分でもときどき、「なんで、こんなことをしてるのかな」って、わからなくなっちゃうときがあるから。でも、そのくらいのことじゃないと、自分にとっての刺激にはならないから。

YOSHIKIって、「刺激」っていう言葉が好きでよく口にするけど、いつも刺激を求めていたい？

YOSHIKI うん。求めていたい。刺激的な人生を送りたい。

刺激って、どんどん麻痺していかない？

YOSHIKI いかないんですよ。感受性っていうものは、麻痺していかないと思う。やっぱり、自分にもいろんなショックがドバッってくるんだけど、「負けない、負けない」っていつも思ってる。その悔しさをいつも音楽にぶつけるわけだし、それが原動力になってるんですよ。どんなにいやなことでも、原動力になる。それを八つ当たりに「前に進もう、前に進もう」って思うわけだし。やっぱり、平凡な毎日は、いやですね。たまに、憧れるけど（笑）。

そういう「普通の人の毎日」みたいなものは、YOSHIKIにはまったくない？

YOSHIKI まったく、ないです。いちばん近いとしたら……受験生かな。勉強は、すごくしてるし。

何の勉強してるの？

YOSHIKI 英語とか、ピアノとか。その他、何でもそうだと思うけど。

ヴォイ・トレ（ヴォイス・トレーニング）は？

YOSHIKI あれは、秘密なの（笑）。

秘密なんだ？

YOSHIKI あ、でも、いいや。書いちゃっても（笑）。最近、行ってないけど。だから、あれは、最初はね。いつも、俺、ヴォーカル録りのとき、つきっきりでしょ。それで、TOSHIが声が出なくなっちゃったりしたとき、すごいつらそうだからさ。どれくらいつらいものなのか、自分でも知っておこうと思って、先生のところへ行ったんだ。そしたら、たまたま声を出してみることになったの。別に、自分で歌を歌いたいとか、そういうんじゃないですよ（笑）。

パワステのとき、「音痴だ」っていってたもんね？

YOSHIKI 音痴なんです（笑）。

本当なの？

YOSHIKI 真実です（笑）。

でも、やったら歌えそうに見える。「音痴」っていっても、みんなに信じてもらえないでしょ？

YOSHIKI 百人が、百人、信じない。自分でも、よくわからないけどね。とりあえず、僕は歌いません。歌は、TOSHIにまかせます！

さっき受験生のように勉強しているっていってたけど、それは期限とか目標があってという意味で？

YOSHIKI いや、別にそういう意味じゃない。実際、勉強はしたいと思ってるし。勉強してると、落ち着くんですよ。これだけ、いろんなことが速いテンポで起こってると、ひとりで学んでいる時間がいちばん充実してるんです。もし、なんかの間違いで一年間休暇ができちゃったとしたら、大学に行きたい。どうせ行くんなら、留学したいな。

それは、音楽を勉強するために？

YOSHIKI そう。もし、この先何年後かにエックスの活動が一段落するときがあるとしたら、絶対に大学に行きたいと思う。それで、今……あ、これはいうのやめよう。

なに、それ。途中まで、いいかけておいて（笑）。

YOSHIKI 実はね、今年、英検の1級を受けようって、決めたの。だから、一生懸命、勉強してます。といっても、移動中の車のなかとか、それくらいしか時間がないんだけど……。ああ、いっちゃった。内緒にしておこうと思ってたのに（笑）。

相変わらず、忙しい人たねぇ（笑）。

YOSHIKI でも、勉強している時間は、遊んでいるときよりも落ち着くかもしれないな。

YOSHIKIがいちばんホッとする時間って、どういうときなの？

YOSHIKI （しばらく考え込んで）ないかもしれないな。なんか、空白の時間ができると、今までやってきたことに関して、考えちゃったりするの。別に後悔っていうんじゃないけど、結構、追い詰められちゃったり。今の自分に耐えられなくなったり。だから、今、敢えて、自分のことを考えないようにして、とりあえず、進んでる。だって、考えると、自殺したくなっちゃうんだもん。

どうして？

YOSHIKI わかんないけど。結局、何のために生きているんだろう」って、思い始めちゃうから。常に「苦しい」っていう気持ちがあるし。もちろん、励ましの言葉っていうか、俺を理解して応援してくれる言葉っていうのもたくさんあるんだけど、それとおなじくらい、妬み……っていうか中傷の言葉もあるわけですよ。「なんて、こんなことをいわれなきゃならないんだろう」って、思うときもあるし。だけど、そこで引いたらダメだって、自分にいい聞かせてる。

でも、自殺したくなる……っていうのは、穏やかじゃないね？

YOSHIKI ちょっと考えたすと、すぐにそうなっちゃう。

どうして、そこまでいっちゃうのかな？

YOSHIKI だって、今の自分ってイヤだもん。だから、向上しようと思って、どんどんいろんなことをやってるのかもしれない。そう……今の自分って、イヤ。

なんで、イヤなの？

YOSHIKI いろんな意味でね。好きか嫌いかって聞かれたら、好きじゃない。

それは、人間的にっていう意味で？

YOSHIKI いや、そうじゃなくて。立場的にとか、そういう意味で、こんなとこに、こんな位置にいたくないっても思うんだよね。リーダーだからっていうこともあるかもしれないけど、そういうときは「なんて、リーダーなんたろう。つらい……」って思っちゃったりもする。

でも、YOSHIKIはリーダーじゃないと、バンドできないんじゃない？　きっとそうじゃなくてバンド始めても、いつのまにか、リーダーになっちゃうでしょ？

YOSHIKI それもそうかもしれないんだけど。ずーっとリーダーだったから……。ほら、こうやって考えてると、どんどん落ち込んできちゃうんだよ。落ち込む要素は、たくさんあるから。だから、本当は……弱いんですよ。弱いくせに、強く見せてるうちに、

自分で強いと思っちゃってるのかもしれない。ただ、あんまり他人に弱みは見せない。よく自信過剰って、いわれるもん。まぁ、自分ではそのくらいいわれるほうが、いいやと思ってるけど。

――でも、自分自身のこと、そんなに嫌いだとは思わなかったな。

YOSHIKI そぉ？　好きじゃないですよ！　だから、もし、今、自分が違う人間で、「YOSHIKIっていう人になれ」っていわれたら、絶対になりたくない。あと、もし、「生まれてから今までの人生を、もう一度繰り返せ」っていわれたら、冗談じゃない。そんなの、聞いただけで、震えあがっちゃう。生まれたと同時に、自殺してやるって感じ。こんな人生が待ってるんだったら（笑）。ただ、俺に夢を託している人もいっぱいいるだろうし、そういうのを背負ってるっていう自覚はある。だから、俺が弱気なことをいって、どうするんだっていうのは思ってるよ。相談してくるバンドも、いっぱいいるしね。そういうとき、俺は知識や経験じゃなくて、「俺だったら、こうするよ」って強い自分の意見をいってるから、それをいってる自分が何もできなかったら、ダメだからね。

俺は、なんでも、考えたらすぐに行動しちゃうタイプだから。それから、やるときは何に対しても、真剣にやる！　なんでも思いっきりやってれば、それは美しいと思うしね。でも……なにかいちばんかって聞かれたら、やっぱり「つらい」っていう気持ちだな。レコード会社に対してとか、メンバーに対してとか、リーダーとしてとか、仲間たちに対してとか、作曲してるときとか……。つらいと思い始めたら、いくらでもつらいですよ。だけど、気の持ちようっていうこともありますからね。それを「つらい」と思うか、「爽快」だと思うか……。

つらいと思いだしたら、すべてがつらくなっちゃうから、なるべくそう思わないように思わないようにしてるんだよね。でも、この状況について、「何もつらいことなんか、ありませんよ」っていう人がいたら、その人は狂っているんだと思う。

――この状況というのは、具体的にどういうこと？

YOSHIKI プレッシャーとか立場とか。

――あと、時間がないとか？

YOSHIKI 時間がないのは、自分でなくしてるっていう部分が大きいんだけど。あと、いつも逃げ回ってなきゃいけない。

――逃げ回る？　なにから？

YOSHIKI ファンから。EGG MANが終わったときなんか、あんな裏口から出たにも関わらず、タクシー4台にずっと追いかけられてたんですよ。それで、ずっと帰れなくて、1時間くらいカーチェイスを繰り広げてた。最後は一緒に乗ってたスタッフの人が、怒りに行ってくれたんだけど。だけど、タクシーの運転手、運転がうまいからまけないんですよ（笑）。それで、もし、居場所がばれちゃったら、今度は眠れない日々が続くし……。仕方がないんだなって思いながらも、やっぱり困る。

――ずいぶん前、ドームのなにかのコンサートを見に行ったら、ファンに囲まれちゃってライヴが見れなかったっていってたことがあったよね？

YOSHIKI ああ、DEAD OR ALIVEだ。

――あの頃は、「困るけど、それも嬉しいかな」みたいな感じもあったよね。

YOSHIKI う～ん、まだ余裕があったっていうか。チケットをわざわざ買ったのに、見られなかったっていうこと自体はつらかったんだけど、まだ「だからさぁ～」なんて口調でしゃべってたから、つらそうには聞こえなかったんじゃないかな。

――うん。今日の口調は、あの時とは全然違う。

YOSHIKI あの頃はまだそういうのが初めてだったから、驚きもあったんだけど、それがずーっと続いているわけだからね。家に帰れないのは、やっぱりつらい。ファンが訪ねてきていちばんいやなのは、そこで怒らなくちゃならないでしょ？　それが、いやなんですよ。

――ファンを怒ることもまた、つらい？

YOSHIKI うん。だって、わざわざ俺に会いたいと思って訪ねてきてくれて、本当はお客さんなんだから、全員にサインしてあげたいし、全員と握手してあげたいんだよ。だけど、そんなことしてたらキリがないし、ほかのことが何もできなくなってしまう。だから、結果的にドナらなくちゃいけなくなる。最初は「帰ってください」っていってても、だんだん「帰ってくれ！」になってきちゃうでしょ。そのときに、自分がイヤになっちゃう。街中を歩いててファンが集まってくると、スタッフが払い除けたりするでしょ？　ああいうのを見てるのも、イヤだもん。

――それはYOSHIKIの立場としては、つらいとこだよね？

YOSHIKI ぜいたくな悩みだと思われるんなら、それでもいいけど……。

――でも、寝る時間までなくなっちゃうと、死活問題になってくるもんね？

YOSHIKI だけど、はっきりいって、プライベートなんか、ないようなもんだから。

――今、YOSHIKIには、プライベートな時間が、まったくない？

YOSHIKI 強引に作るようにはしてるけど。だけどね、うしろから足音が近づいてくると、反射的にパーッと逃げちゃったり。俺のことじゃなくて、どこかで「きゃあ～」っていう声が聞こえただけで、隠れちゃったり（笑）。もう一種の病気でしょうね。だけど、もう最近、全然、街とかも歩かないんだよね。車で店の前まで行って、パッと中に入るっていう生活だし。

――じゃ、お陽さまの下を歩くことは？

YOSHIKI 全然、ない（笑）。あっても、車からおりて建物のなかに入るまでの、ほんの一瞬。あとね、外に出るとき、ひとりでいることはまずないんだよね。いつも、スタッフと一緒。ひとりでいたら、「サインしてください」って頼まれたとき、絶対に断れないから。

――「今、ちょっとダメなんだ」とも、いえない？

YOSHIKI う～ん、いえないなぁ。俺、きっとそういうとき、自分で断ったこと、一度もないですよ。だって、本当は「こんなに応援してくれて、ありがとう」って、お礼のひとつもいわなくちゃいけないところだもんね。だから……考えると、暗くなっちゃう。複雑なんですよ。

――なんか、今日は暗いなぁ（笑）。

YOSHIKI 暗いねぇ（笑）。どうしたんだろう？

――最近、暗い精神状態なの？

YOSHIKI そんなこと、ないよ。だから、本当は暗い……いや、性格的には決して暗くはないんだけど。なんていったらいいのかな。つらい状態が続いているんだけど、いつもはあんまりそれを表に出さないタイプだからね。「強気・強引・無謀な男」っていうイメージでさ。それで、「いつも陽気みたいな感じで。実際、陽気だよ。だって、俺、いつも陽気でしょ？

――普段は、陽気だけど……。こうやって話していると、「もしかしたら、YOSHIKIって根暗な部分もあるのかな」っていう感じがする。

YOSHIKI 根暗！　ひどい（笑）。根暗じゃないよ（笑）。根暗ではないんだけど……でも、やっぱり、死にたくなりますよね。

――ほら、やっぱり、話をそっちのほうにもってく（笑）。

YOSHIKI だって、ホントなんだってば（笑）。本当なの！　ときどき、何もかも、耐えられなくなっちゃうんだよ。でも、「こんなことで死にたくなってるようじゃ、でかくなれないぞ」って、自分で自分をあおる。まだ自分のやりたかったことを全然達成したとは思ってないし、これからやらなきゃいけないこともいっぱいあるし。自分が思ってたことが十だったとしたら、まだ一くらいしかやってないって思うしね。だから、「まだこれからだ」っていう気持ちと、「つらすぎる」って

根暗！　ひどい（笑）。…でもやっぱり、死にたくなりますよね。

「俺はダメだ。疲れた」と思うまで、どんなにつらくてもやり続けていきます。

いう気持ちか、自分のなかでゴッチャになってるんだ。

だからかな……最近、やたら、涙が出てくる。すごい泣きやすいんですよ。ちょっとしたことで、ブワーッと泣いちゃう。ステージでも、毎回、泣いちゃうし。

そういうときに、自分のなかにたまってる気持ちが、爆発して出てきちゃうのかなって思うけど、それはもう止められないからね。部屋でも、あるよ。帰ってきてドアをあけた瞬間に、バッて泣きだしちゃうこととか。ひとりで、大泣きしちゃう。だから、やっぱり（自分は）弱いと思う。

――昔から涙脆いとはいってたけど、それにさらに拍車がかかってるんだ？

YOSHIKI そう。感動すると、涙が止まらない。でも、人前で悔しいことがあっても絶対に泣かないし、つらいことがあっても泣かない。人前で泣くのは、感動を押さえられないとき。俺、男気で生きてるってとこが、あるでしょ？　だから、つらいときや悔しいときは、絶対に他人に涙を見せたくない。本当は人前で泣くのなんか、大嫌いなんだけどね。ただ、強引にイメージを作ろうとは思ってないから。涙が出てきちゃったら仕方がないと思ってる。ライヴでもそうなんだけど、特効とか照明とかいろいろあるけど、いちばん美しくてカッコいいのは生身の人間だと思う。だから、変にイメージを作りたくないっていうのは、ある。感動して泣いているんなら、それを変に隠したりはしたくない。

今回、日本に帰ってきてから、いろいろやってるけど、あれはみんな自分をさらけだしているなって感じてるんだ。パワステでMCや司会やっちゃったり、武道館もそうだけど。でも、自分のなかに、たしかにあいう自分がいるのは事実だから。今、自分が描いていたステージのうえのYOSHIKIのイメージと、実生活がつながってきちゃったから、どこまでがステージに立つ自分で、どこからがステージを下りた自分なのかっていうことが、わからなくなってきちゃっている。もう、あんまり区別がないみたい。常に、どこにいても、誰かに見られてるし、すべてがステージなのかなっていう感じ。

――以前、デビッド・ボウイと対談した直後（90年6月）にインタビューしたとき、同じことをいってたね。彼と「どこまでが生身の自分で、どこまでが演じてる自分なのか、わからない」っていう話をしたって。

YOSHIKI そう。それが、本当になっちゃって、今は全然わからない。あの時はそうなりつつある過程のときで、俺の目にそういう生き方をしてるように映った彼が、どういう考えを持っているのか。興味があったんだけど……。今は、オフとオンの区別がまったくないし、それが全部本当の自分なのかなって思ったりする。私生活がそういうふうにいつも誰かから見られている状態になってきた分、ステージ上で素直になってきたみたい。もう、ステージ上を走り回っちゃったり、泣いたり笑ったり。喜怒哀楽を、全部出しちゃってるもんな。

――カーテンコールのとき、本当に嬉しそうな表情、してるもんね。

YOSHIKI 嬉しいんだもん（笑）。ああいうのは、作ってもできないもんでしょ、きっと。

――じゃ、今、YOSHIKIにとって、いちばん幸せな瞬間って、ステージのうえにいるとき？

YOSHIKI ステージのうえと、楽曲が出来上がった瞬間。楽曲は作ってる間が苦しい分、出来上がったときはすごく嬉しい。いちばん自分を確認できる瞬間だから。

――でも、最近は忙しくて、曲を作る時間もないんじゃない？

YOSHIKI 基本的に、曲は1年中、作ってるよ。いつも、書きとめてるし。ホテルにもピアノあるし、曲はいつでも作れる状態にしてるんだ。レコーディングとか曲作りの期間っていうのは、それをまとめる時間で、基本的に曲はいつでも作ってる。

――ホテルにピアノ？　YOSHIKIって、今、家なき子なの？

YOSHIKI うん。前にけんでたとこはやめて、今はホテルを転々としてる。

――それがまた、精神的に「つらい」って思うことを増幅させているんじゃない？

YOSHIKI うん、それはあるかもしれない。やっぱり、ホテルだからね。自分の家とは、違う。心から、安らげないのかもしれないね。

――食事は、どうしてるの？

YOSHIKI 基本的に、外食しか食べない。でも、食事はぜいたくしてるから、大丈夫（笑）。食べ物には、うるさいぞ……とかいって（笑）。

――知ってる。パワステの楽屋で、YOSHIKIの食事、見たもん。テーブルのうえに10皿くらい料理がのってて、しかも、洋食、和食、中華、ソバって、いろんな種類があった。

YOSHIKI そう、そう。しかも、量を食べるしね。ちゃんと、朝、昼、晩って三食食べてるし、間にちゃんと間食も入る。量はすごい食べてるよ。昔からだけど。

――間食って、なに食べてるの？

YOSHIKI チョコレートとか……。そうだ、「俺にチョコレートを与えないでください」って、書いといて。大好きなんですよ。子供の頃、チョコレートを食べすぎて、救急車で運ばれたことがあるくらい（笑）。そのくらい好きで、実はドクター・ストップが、かかってるんです。ダメなの、食べ始めたら、本当に止まらないから。食べすぎると、ニキビもできるしね（笑）。だから、食べないようにしとるの。

――なんか、YOSHIKIとチョコレートって、イメージ的にあわないな（笑）。

YOSHIKI それが、あうんですよ。昔、ツアーに行くとき、チョコレートをいっぱい買って、持ってった。それで、みんなに「そんなの、ツアー丸で買えるしゃん」っていわれても、「この銘柄のこれがね……」って説明してたくらいだから（笑）。だから、今はファンからチョコレートをもらったとしても、スタッフに「頼むから、俺の前にチョコレートはださないでくれ」って、いってあるの（といいながら、テーブルのうえのキットカットに手を伸ばすYOSHIKI）。

――そういいながら、食べてるしゃん（笑）。

YOSHIKI キットカットは、いいの。チョコレートの成分が少ないから。これと、ポッキーは食べられる。でも、気がつくとこれ全部（籠に山盛りになっているキットカット）食べちゃってるから、やばいんですよ。食べおわってから、後悔する。

――じゃ、この本が出るのはバレンタインデーの前だから、ちゃんと書いとくね。

YOSHIKI 頼みますよ。「チョコレートは、受け付けません。YOSHIKI」って、ちゃんと書いといてね。

――だけど、すごい量の食事を三食食べて、しかも、間食にチョコレート食べて、YOSHIKIってどうしてそんなにスリムなんだろうね？

YOSHIKI どうしてなんでしょうね（笑）。だけど、マジに「人間じゃない説」っていうのが、あるんですよ。

――YOSHIKI宇宙人説？

YOSHIKI そう。俺も最初は「なに、いってんだ」って思ってたんだけど、だんだん、「そうかもしれない」って思えるようなことが、いっぱい出てきちゃってね。2、3年したら、星に帰るのかな、俺は（笑）。

――どこから、そういう説がでてきたの？

YOSHIKI 器材トラブルから。相変わらず、俺が行くところ、機械が壊れまくってますから。V2レコーディングでも、エンジニアの人が「十何年間、この仕事をやってきたけど、こんなことは初めてだ」っていうこと、とか、勃発して……。

――なにが壊れるの？

YOSHIKI とくに、コンピューターが多い。普通の、電化製品も壊れますけどね。HIDEなんか、最近、俺がエフェクターのほうに行こうとすると「頼むから、俺の器材に近寄らないでくれ」っていう。前に、俺が近寄っただけで、データがとんだことがあるんだって。エンジニアの人も怒鳴ってくと、「悪いけど、遠くで聞いててくれ」とか（笑）。そういうのが、いろいろとあるみたいなんですよ。

――わたしは「YOSHIKI宇宙人説」の根拠は、寝なくても大丈夫だからかなと思ってたんだけど、実はHIDE（詳しくは、前号のHIDEロング・インタビューを読んでね）ちゃんも寝ないんだってね？

YOSHIKI HIDEちゃんも、あんまり寝ないよね。でも、彼は寝つきが異常にいいんですよ。昔、ツアーで一緒の部屋で寝てた頃なんか、夜じゃべってて、「HIDEちゃん」っていうと、その一瞬の間にもう寝てる（笑）。でも、俺は一緒の部屋の人全員が眠るまで、眠れないんですよ。

――え、じゃあ、みんなで一緒に寝てた頃なんて、大変じゃない？

YOSHIKI そう。だから、不眠症気味なんですよ。コンサートの前の日は、たいてい眠れないし。ドームの前の日も、眠れなかった。俺、気が弱いのかなって思っちゃう。

――以前、眠れなくて苦しんでいたもんね？

YOSHIKI それは、今でも苦しんでるのかもしれないけど、「苦しい」って思うと余計に眠れなくなっちゃうから、「眠れない」って思わないようにしてるんですよ。やっぱ、人間じゃないのかな。不眠症で大食いで……（笑）。

――大酒飲み（笑）？

YOSHIKI 大酒飲みだよね。でも、宇宙人説はうちのディレクターとTOSHIKIがいいたしたんだよ。

――自分でも、そう思う？

YOSHIKI え～っ、わかんない。でも、宇宙人なら宇宙人でいいやっていう気もするけど。とにかく、宇宙人だろうがなんだろうが、俺は自分で限界だって思うまで、走り続けますよ。「俺はダメだ。疲れた」って思うまで、どんなにつらくてもやり続けていきます。

AMBITIOUS

BOYS BE AMBITIOUS……少年よ、大志をいだけですか？　小さい頃は、ピアニストになりたい、ロックスターになりたいって思ってた。そういう大志、野望を実現するためのエネルギーは、やっぱり、友人一人一人の励ましの言葉だったり、ファン一人一人の励ましの言葉だったような気がします。持ってるとつらいけど、絶対に捨ててはいけないもの。いい言葉ですよね。

なんだって、やれば出来るっていう雰囲気がする。

みんな不可能だと思って、やらないことがいっぱいあるよね。でも、それはやらないだけなんだと思うんだ。絶対にやって、出来ないことはない。

なんだって、出来ないと思ってあきらめる前に、やってみなくちゃ。飛ぼうと思ったら、飛べるんだ、くらいにね。なんか、自分で自分に檄を飛ばしてるみたいだな（笑）。

リチャード・バックっていう人の詩に出てくる「人は鳥にだってなれるはずだ。ただ、みんな、鳥になろうとしないだけだ」っていう言葉があるのね。つまり、本当は飛ぶ力があるのに、自分で出来ないと思っちゃって、やらないだけっていう意味なんだ。その言葉に、すごい感動しました。詩を読んだのは1年くらい前のことなんだけど、「そうだっ」って感じで、共感できた。「やろう」って思っていても、どこかで「できないんじゃないか」って考えて、一つ踏みだせないでいる人が多いと思うのね。

だから、そういうときは、この言葉を思い出してください。僕も、そういうときは思い出して、自分で自分を励ましていますから。

BABY

赤ちゃん、え……。自分が赤ちゃんだった頃はね。病弱で喘息で、風邪ばっかりひいてた。うん、入院してばかりいましたね。大きくなってからも、車にひかれたり、バイクにひかれたりで、本当に病院にはお世話になった。ホント、病院にばかり、通ってた。今でも、変わらないけど。ケガもしたし、病気という病気は、全部しましたよ。盲腸、脱腸……その傷が2個あるんだけど、この間のSHOXXの写真で見えちゃってた(笑)。んー、赤ちゃんねぇ。自分が赤ちゃんの頃のことは、覚えてないからねぇ。物心ついたら、病院にいたのを覚えてるくらいで。

今は、赤ちゃんとか子供とか、好き。うん、基本的には好きなんだけど、だけど、俺、相手が子供でもムキになっちゃうの。パンパンぶたれたりしてると、「いてーな、てめー」とかいって（笑）。だから、ダメみたい。一歩うえから見下せばいいのにって思うんだけど、いつのまにか同じになっちゃう。最初は自分が遊んであげてるんだっていう気持ちでいるのに、だんだん、遊んでもらってるのかなって感じになってきちゃう。だって、俺、子供とケンカして、怒って帰っちゃうんだもん。精神年令、低いのかな（笑）。

自分の子供？　こわい。想像つかない。絶対に手におえないもん。うちの母は俺のこと、子供の頃から手におえなかったっていってるからね。病弱で、表に出ていけばなにか事件を巻き起こすし。何も、変わってないな、今と(笑)。子供は嫌いじゃないけど、こわいって感じかな。

生意気なガキは、嫌いだけど。俺と、ケンカになるから。

CRASH

いいですね。俺に、ぴったりのテーマ。破壊は大好きです。今も昔も。CRASH&DESTROYでいきたいですね、すべて。最近だったら、とりあえず、ステージでドラムを全部壊してるでしょ。まぁ、ツアーの全ヵ所で壊したわけじゃないけど。横浜アリーナの1日目も、力尽きて壊せなかったし。でも、あれは、ショーの中で決まって必ず壊すってものじゃないから、壊したくないときは壊してない。だから、壊さなかったライヴもあります。でも、義務で壊すなんて、いやだもん。本当はドラムだけじゃなくて、ピアノもギターも全部壊したい。

壊したくないものは……ない。人間関係だけは……う～ん……わからないな。SAY ANYTHINGの「壊してくれ、なにもかも」っていう気持ちです。でも、基本的には、平和主義者ですよ。矛盾してると思うけど。でも、自分の中で何もまとまってないし、混乱しちゃってるから、こういうふうにして話してると矛盾だらけになっちゃうんですよね。それで、「ああ、もうわかんない。ええい、壊してしまえ～」って（笑）。自分で壊そうと思って壊すことも多いけど、機械なんか俺が前に座っただけで勝手に壊れちゃうんだよね。だから、やっぱり、俺にぴったりの言葉ということで（笑）。

DEYAMA TOSHIZO

いきなり、日本語でフル・ネームですか（笑）。やっぱり、素晴らしいヴォーカリストだと思う。すごく優しいし。俺とは180度タイプの違う人間だけど、やるときはやるヤツ。だから、今までずっと一緒にやってこれたんだと思う。切っても切れない縁ですよね。(「そういえば、来年で結成十周年になるんじゃない？」という筆者の質問に）あ、そうだ。来年でちょうど十年になるんだ。じゃ、なにかしなくちゃな。十周年記念コンサート……パーティにしようかな。よし、両方やろう(笑)。こうやって、コンサートっていうのは決まっていくんですよ。

TOSHIとは、エックスの前から一緒だし……いい人ですよね。たまに、ハメをはずすけど(笑)。でも、プライベートなことは、あんまりよくわからない。あいつは、いつも消息不明になっちゃうからな。他のメンバーとはよく飲むんだけど、あいつは普段何をしてるか、わからない。行動が、謎の人です。打ち上げにも、あまりいないしね。ツアー中、彼は酒が飲めないってこともあるから。でも、尊敬してる……ところも、あります(笑)。親友を超えたもんでしょうね。でも、性格とかはよくわからない。歌のうまい謎の中国人ということにしておきましょう（笑）。

EXTASY

扱いが、大変。大変だけど、やらなきゃいけないもの。「頑張れ、エクスタシー。メジャーをぶっつぶせ」とでも、いいましょうか(笑)。エクスタシー・サミットの次の目標？　ドームという噂があるみたいだけど……あ、俺が自分でいったのか。じゃ、ドームでやりましょう！　コンサートっていうのは、こうやって決まっていくんです、僕たちの場合（笑）。

エクスタシーの仲間たちは、いい友達だと思います。向こうは、どう思ってるか知らないけど（笑）。みんな、すごい純粋だし。一人一人がすごいですよ。俺も、尊敬する部分が、いっぱいあるし。あおられるし。ちょっと過激な人が多いけど、本当に素晴らしい人たちだと思う。うん、俺も負けていられないな。

エクスタシーを作った頃、もちろん、大きくしたいとは思ってたけど、正直いって、ここまで大きくなるとは思ってなかった。本当に、なんとなくやってるうちにね。なんか、人が集まってきちゃった。不思議ですね。よくHIDEにも、「YOSHIKIには、人が集まってくる傾向がある」っていわれるんだよね。「そうなのかな」と自分で思うこともあるけど、どうしてなのかはよくわからない。ナゼ？

A TO Z OF YOSHIKI

(PART1)

AMBITIOUS
大志

BABY
赤ちゃん

CRASH
破壊

DEYAMA TOSHIZO
出山利三

EXTASY
エクスタシー

FRIEND
友達

GOD
神様

HIDE
ヒデ

INDIES
インディーズ

FRIEND

ただ、昔から、友達は多いほうだった。大事にします。俺って、愛情と友情の境目が、あんまりないみたい。「素敵だな」と思う人がいても、友達になっちゃうことが多い。俺、知ってる人、全部、大切にしたいって思ってます。たとえば、エクスタシーだったら、「なにかあったら、俺にいって」っていってるしね。それは、エクスタシーじゃない他の人にもいえるけどね。よく「男同士の友情を大切にしてる」みたいに書かれることも多いんだけど、普通にしてるとああなっちゃう。全然、無理はしてないですよ。

ただ、エクスタシーのみんなにはいろいろと手伝ってもらってることもたくさんあるし、そういうのは俺が出来ることなら、出来る範囲内でなら、応援したいし。だから、遠慮しないで「俺を利用してくれ」って、いいたいですね。今、俺はこういう立場にいて、みんなに出来ないことが出来るかもしれないからっていう部分で。「利用」っていうと、変なふうに聞こえるかもしれないけどね。

女の人にも……友情を感じることはありますよ。愛情と友情が、ゴッチャになっちゃったこともあるけど（笑）。とりあえず、俺、嫌いな人って、いない。嫌いな人、たいてい、ブチのめしちゃったからね(笑)。ただ、ケンカすると、そのあと仲良くなることが多いけど。嫌いな人には「嫌いだ」っていうから、絶対にケンカになるしね。だから……うん、俺、嫌いな人はいないです。

INTERVIEW:AKEMI OHSHIMA
PHOTOGRAPHY:HIDEO KANNO

GOD

神様は信じないことはないけど、俺にとってはどうでもいい。人に頼るのが、嫌いなほうだから。なんでもまず自分でやらなきゃって思うから。人にお願いするのはやっぱり好きじゃない。たとえば、なにかお願いして、それで本当にいいことがあったら、その人は一生その宗教から離れられないでしょ。自分自身、他人にお願いしたことがないからなぁ……。それに、逃げるのが、いやだからな。ま、でも、人によってはそういうのが必要な人もいるんだろうけど、俺はあんまり必要としない。関係ないです。別にイヤだとまでは思わないんだけど、自分のことは自分でやるっていう感じだな。

そこまでの挫折感を、味わったことがないからかもしれない。神にもすがる思い……って、いうのは。挫折感はあるかもしれないけど、まず、自分が立ち直らないとって思うからね。そういうとこは、強いのかもしれない。ん……強いんだか、弱いんだか、わからなくなってきたな（笑）。

死後の世界は、信じたりもする。本も読むし、興味なくはない。そういうのがあったほうが、夢があっていいなと思うよ。だいたい超常現象とかも、なんでも信じますよ。宇宙人も、UFOも。それにはまりこむタイプじゃないんだけどね。宇宙人とか、早く地球に来ればいいのにね。俺、会ってみたいよ。

結構、そういうのもなんでもロマンティックに考えちゃって、あんまりコワくは考えない。「宇宙人と、友達になれるのかな？」「死んだら、今、ここに持ってる気持ちはどうなるんだろう？」とかって。でも、結局は死ななきゃ、わからないことだから。うん、死後の世界のことは、死んだらわかるでしょう（笑）。でも、そういうのは、面白い。みんなロマンを求めているんでしょうね。

本は乱読で、なんでも読みます。ただ……最近は、読んでない。英語の勉強に忙しいし。だから、最近、読んだのは英語の「ILLUSION」っていう小説かな。あと、ジャパン・タイムズを、一生懸命に読んでる。だから、そういうの読むのに精一杯で、本のほうにまで時間が回らないっていうのが現状、かな。

あと、GODっていうと、どうしても後藤さん（エックスのビデオ・ディレクター）を思い出しちゃうな。後藤さ～ん、もっとおいしいもの、食べさえてよぉー（笑）。え、俺、ゼイタクじゃないんだよ。ただ、食べ物に関して、正直なだけ。

たとえば、食べ物のことでよくHIDEちゃんと争うんだけど、みんな、雰囲気にだまされてることが多いと思うんだ。いかにも高そうで、まわりに水槽があってその中で魚が泳いでいるような店の刺身だと、みんな、うまいと思っちゃうんだよ。でも、どこに行っても、おいしくないものはおいしくないの！　みんなきれいなお店に行って、まわりのシチュエーションが整えられていると、おいしいと思ってしまう。

それに、俺はいつも反発してるだけ。だから、俺、わりと質素なものが好きだったりするよ。豆腐とか、冷奴とか。もともと、和食が好きだからね。だから、俺は食べ物に関しては、値段とか雰囲気に、ゴマかされない……と、自分では思っている（笑）。

宇宙人とか、早く地球に来ればいいのにね。俺、会ってみたいよ。

HIDE

HIDEちゃん？　食べ物戦争は、今、一段落してるんだけど。でも、HIDEちゃんは、味なんかわかってないんですよ（笑）。あぁ、これでまた戦争の口火を切ってしまった（笑）。HIDEちゃんはみんながおいしいっていうと、自分もおいしいと思ってしまうの。「あそこの店、おいしいんだよ」っていわれると、食べる前からおいしい気になってる。便利ですよね（笑）。雰囲気と状況で、「これ、おいしいんだ？」「おいしいかもしれない」「おいしいよ！」って、なる（笑）。まだまだ、子供だな（笑）。

でも、尊敬してます。食べ物のことは子供だけど、他の面でね（笑）。彼もやっぱり、いろんなこと考えてる。バンドの戦略的なことからなにから、考えすぎるほど考えてる。それに、超純粋。アーティスティックで、発想も次から次へといろんなことが出てくる。ま～、爬虫類みたいな人ですけどね（笑）。うちの爬虫類ってとこかな。TOSHIはうちの一般人で、PATAはうちのクソジジィでしょ（笑）。

TAIJIは、なんだろう。昔は、うちの暴れん坊だったんだけど、最近はそうでもないしな。TOSHIは「TATOO野郎」っていってたけど、俺はそういうふうにはいわないな。あとで、みんな、出てくるんでしょ？　じゃ、他のメンバーはのちほどっていうことで……。HIDEちゃんは、本当にバンドを支えてくれてるとっとも優しい人。

だけど、あんまり誉めると、また恋愛説が出てくるからな（笑）。え、俺、全員とできてるっていう噂が、あるんですよ。TOSHIもHIDEもTAIJIもある……あ、そういえば、PATAだけないな（笑）。PATA以外の全員とは、恋愛説があって……（笑）。たぶん、今でもあるんじゃないかな。でも、これこそ、本当に「勝手に、いっててください」っていう感じだよね（笑）。男の友情を、そんなくだらないふうに思うなーって感じ。でも、本当にHIDEちゃんは、素晴らしい人だと思います。

味覚をのぞけば……ね（笑）。

INDIES

パワーないですね、最近。インディーズの会社が、みんなメジャーに近づこうとしたから、よくないんじゃないかな。一時期、たくさん会社ができたけど、みんな、メジャーみたいにやろうっていう感じになっちゃったでしょ。だけど、そんなんだったら、メジャーにいったほうがいいわけじゃない。インディーズっていうのは、メジャーにできないことをやらなきゃ、意味がないと思うんだ。レコード協会に加入してないから、いろんな規制からはずされるしね。インディーズだからできることって、いっぱいあると思うし、メジャーの真似をしてるだけじゃダメですよ。

インディーズのバンドは……まぁ、みんな、それなりにパワーはあると思うんだけど。インディーズバンドって、インディーズだからできることって、いっぱいあると思うんですよ。そこに、メジャーも興味をもつんじゃないかな。世の中、メジャーにこんなにバンドがいるんだから、××の二番煎じ、三番煎じじゃ、いらないって思うだろうしね。個性だけを追求しろっていうわけじゃないんだけど……。ただ、知ってるバンドのなかにはいっぱいすごいバンドもあるんだけど、全体的にはパワーがないなって思っちゃう。

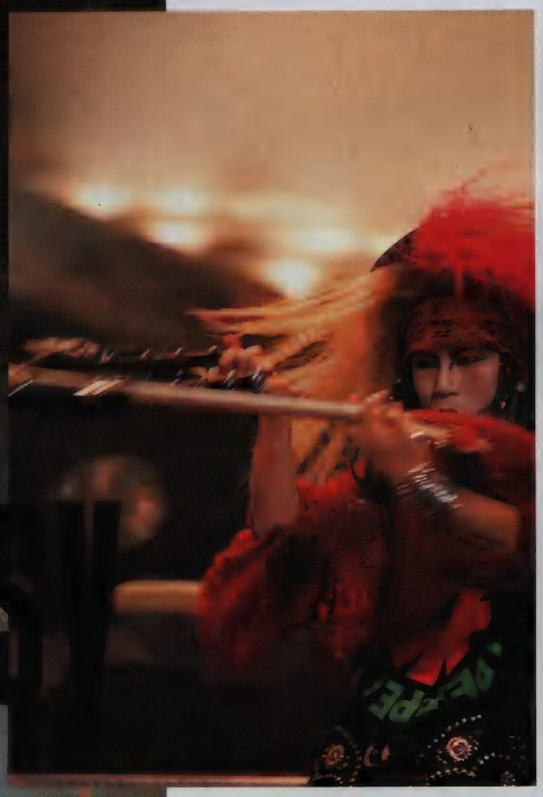
「もっと、ムチャクチャやっちゃえば、いいんだよ！」って、思っちゃう（笑）。俺には、いわれたくないかもしれないけど。パワーが足りないっていうと、失礼かもしれないけど……でも、書いといてください。だけど……俺も、インディーズに戻ろうかな。だって、インディーズにしかできないことって、いっぱいあるもの。やっぱり、メジャーはいろいろ規制されますからね。

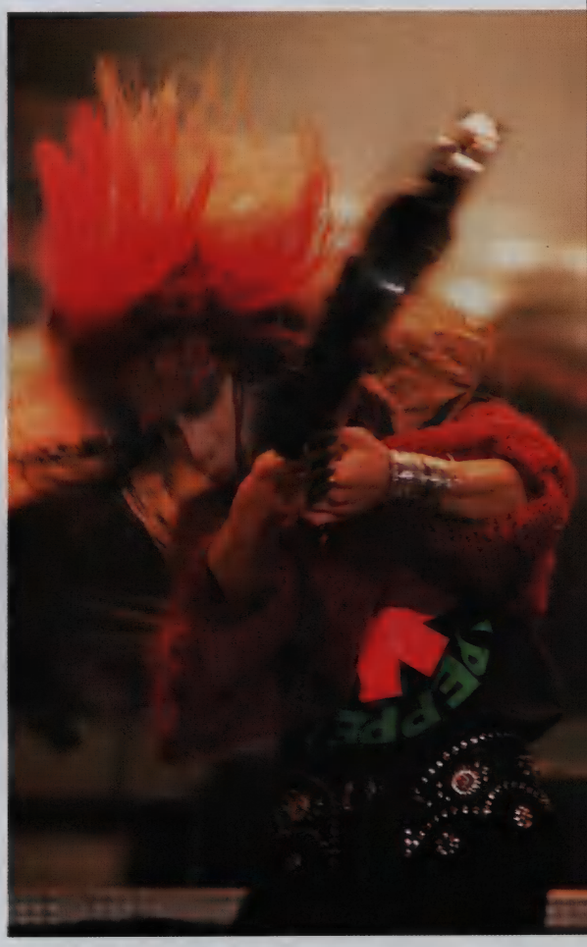
ただ、バンドブームとかは、俺は終わったとか全然思ってない。あれは、終わったんじゃなくて、メジャーが勝手に作り上げて、勝手に終わらせちゃっただけだからね。ブームが去ろうとなにしようと、バンド好きなやつはやってるんだし。そんなのは、気にすることはないと思う。やっぱり、インディーズやってる人たちは、どんなに大きな資本とかが入ってきても、それに反発するだけのエネルギーがなくちゃダメだと思うな。資本に買われちゃうようじゃ、インディーズじゃないですからねぇ。資本と、メディアかな……。

でも、みんな一生懸命頑張ってる人たちは、ちゃんと考えてやってると思うし。「お前にいわれたくないね」ってやつ、いっぱいいるだろうし（笑）。俺がこういうこといったってことで、「なにいってんだ」って触発されて、出てきてくれる人たちがたくさんいたら、俺は嬉しいですけどね。

■VOL.1➡オリジナル・カラーポスター■VOL.6➡巻頭42ページ大特集、東京ドーム&新潟ライブフォト&レポート、カラー・グラフィックフォト、TOSHIパーソナル・ロング・インタビュー、11項目インタビュー、実物大手形■VOL.7➡巻頭44ページ大特集、ヒデのショッキングカラーフォト集／詩の内面世界／ロングインタビュー16000字／10項目インタビュー、Xと仲間達、ヨシキのビデオ撮影現場密着フォト&レポート

何も変わってはいない。





Jealousy Tour 全記録

TEXT:AKIO YAMADA
CO-ORDINATE:YUSUKE KATOH
PHOTOGRAPHY:NORIO KAJIKI

★7月31日
JTスーパーサウンドatオニコウベ

このイベントはメンバーとアーティスト関係のスタッフで大型と中型バス2台でのバス移動だっただのだが「バンド1つ動くだけなのになんでこんなに大人数なんだ?」ということにまず驚かされる。しかも宿舎が温泉旅館みたいなところで、メンバーも和室に布団を敷いて寝る。この図はなかなか良いものだった。

とにかく、リハーサルもまともに出来ない状態だった。TOSHIの喉はようやく普通に喋れる状態になったばかりで、他のメンバーは個々にウエイト・トレーニングをしたりYOSHIKIは個人リハを積んではいたがやはり不安は残っていた。特にTOSHIとYOSHIKIがナーバスだ。

今もまだ気持ちは

だが、いざ本番になってみると、やはりXはXだった。曲数も少なかったのだが、TOSHIの喉はなんの問題もなく、YOSHIKIもリハーサルで普通に叩いてるのとはまるっきり違う。観客に見せるということを熟知していて、流石プロだと感心させられる。

★8月6・8日
新潟産業センター

今回のツアーはとにかく照明やステージ・セットが多い。普通はどこの会館でもステージに照明用のバトンがあってそこにライトやセットを吊るのだが、新潟の場合はそれでは重量オーバーになってしまう。そこで、既成の舞台は一切使わずにちょうど舞台の真反対の位置に仮設で舞台を組み、そこにトラスを吊るのだ。そうすると、普段は客席がある場所に舞台が来るため、当然楽屋が客席の後ろになってしまう。だから客席の後ろにプレハブで楽屋を建てた。

ツアーに入る前、ゲネプロは一回やったというものの、どこで誰が引っ込んでどこで誰が出るというステージ進行はまったく行われてはいなかった。結局本番前日に会場に着いたその足でリハーサルになった。YOSHIKIのドラム・ソロやHIDEの部屋でSEをどのきっかけで流し、どのきっかけでステージに出すかということが前日になってようやく見えて来た。

そんな状態の中で本番がスタートして舞台袖ではまさに戦場だった。舞台監督の益子さんと共同作業で袖からステージのメンバーにしきりに合図を送った。

中日の7日もリハーサルに費やした。まだまだ改善の余地はは多い。打ち上げでもいきなりあちこちでミーティングが始まってしまう有様だ。

★8月15・16日
福岡国際センター

Xの場合5人全員揃っての移動というのがあまりないのだが、今回は5人揃って飛行機に乗ったため、空港のターミナルから飛行機に行くバスの中でHIDEが「ああ、みんないる！」と驚いている。ビデオのGODも「今のうちの撮っとかないといつ集まるかわかんねぇぞ！」とビデオを回している。普通ならばそれが当たり前なのかもしれないけれど……。

今回初の2連チャンということで、YOSHIKI始めメンバーも緊張ぎみだ。YOSHIKIは初日が終わってからも飲みには行かずにホテルに帰って休養をとった。

そこで驚かされたのが、YOSHIKIの時間の感覚だ。当然YOSHIKIは会場入りの時間もリハーサルの進行も知っている。それでもYOSHIKIは自分の体調を整えるため遅れてしまうこともある。そこでスケジュール通りにリハをやってると当然開演も遅れるのだが、YOSHIKIは会場に来た瞬間にその時点での状況を把握して、「じゃあ次俺これやる。その次これやる」というように段取りを組んでその通りにリハを進めて行くと最終的には時間通りになってしまうのだ。決してYOSHIKIはわがままを言っているのではなく、確かにギリギリの状態ではあるが独特の時間感覚の中で完璧に状況を把握しているのだ。なんて頭の切れる男だろうと思い知らされた。

★8月23日
東京ドーム

この東京ドームは今でも本当によく出来たなぁと思う。あれだけのセットを前日の夜中から仕込んで、本番をやって、その日のうちに完全撤収して次の日の朝6時には明け渡さなければならないというどう考えても不可能なスケジュールだ。

前日は忘れもしない巨人VS広島戦が行われていた。そのために、巨人の選手が全員出てからでないと仕込みを始められないのだ。そ

ここで、もし巨人が勝とうものなら、ライトスタンドのファンがなかなか帰らずにまず1時間は押す。もし延長戦になったらその時点でもう本番は出来ないだろう。もし出来たとしても曲を何曲かカットしないと撤収が間に合わなくなってしまう。メンバーもスタッフも近くのホテルに入っていたのだが、もう完全にテレビに釘付け状態だ。9回の裏、3対4で広島が勝っていた。広島が2アウトを取ったところで巨人のランナーが3塁まで進んだ。中日ドラゴンズ応援団の僕も

「なんとか抑えてくれ、川口！」と叫んでいた。

抑えてくれて事なきを得たのだが、次の日PATAに会って「よかったね、PATAちゃん、広島が勝ってドーム出来るようになって」と言ったら「なんで？　俺別にリハーサル出来なくてもいいから巨人勝った方がよかったな」…さすがはジャイアンツ応援団のPATAである。

結局客入れが30分押したのだが、普通最低でも2時間かかるドームの客入れが本当にあっという間に入りきってしまった。おかげで18時35分にはメンバーがステージに上がれたのだが、本当にお客さんには感謝したい。

★9月8・9日
名古屋レインボーホール

この名古屋からツアーの行程が詰まってきた。ほぼ1週間に1回のペースでライヴがあるからだ。メンバーの体調がとにかく心配だったが、ようやく「ツアーを回っているんだな」という実感のような物が湧いて来た。

東京ドームが終わったということで精神的にはメンバーもスタッフも随分楽にはなった。メンバーもようやくアリーナのステージ・セットに慣れたようだ。演奏への集中力が高まってきている。この名古屋での2daysは今回のツアーを通じて一番良かったライヴだったと思う。

★9月14・15日
大阪城ホール

ここからTOSHIが例の事件をステージで謝り出す。

実際本番が始まってTOSHIがステージでファンに謝ったときには、正直驚いた。「もう関係ないよ」とファンが笑ってくれたからだ。この信頼の強さには驚かされると同時に感激もした。

★9月24日
広島サンプラザホール

この日は特に事件らしい事件もなく順調に本番やって帰って来たという感じだ。1日だけだったということもあるのだろうが、本番に慣れたということも手伝っているのだろう。

★9月28日
真駒内アイスアリーナ

この日は前日に台風19号が猛威を振るっていて、メンバーの乗った飛行機も最終便でなんとか札幌入りさせたという状態だった。メンバーは羽田空港の近くのホテルに出発前に入っていたのだが、飛行機を待っている間もただボーッとメンバーを待機させておくわけにはいかない。「じゃあメシでも食おう」とは言ったものの、飛行機が飛ぶのが先か頼んだ明太子スパゲッティーが来るのが先か、というつまらないことでも気を揉む。

それでなんとかメンバーは現地に到着させたのだが、当日に会場入りする予定のキーボードの田辺さんやバイオリンの中井さんが飛行機が欠航になっていてなかなか到着しない。メンバーの衣裳もだ。

結局ギリギリの16時半頃に到着し事なきを得たが、帰りにもまた一騒動あった。朝飛行機の時間にYOSHIKIはほとんど間に合いそうもなく、他のメンバーもギリギリでホテルを出させて空港に行ったのだが、その時

点ですでに離陸時間を3分ほど過ぎていた。ファンが大勢待っている中をYOSHIKIと二人でかき分けて飛行機に乗り込んで「YOSHIKI、よかったね間に合って」とホッとしてスーパーシートのドアを開けると、そこにいるはずの4人が誰もいない。もう離陸時間は15分も過ぎているというのに、4人は呑気にお土産を買っている。怒りだす空港の人をほとんどケンカごしで待たせている横をTOSHIが脳天気に「どうしたの?」などと言いながら通り過ぎる。「早く乗らなきゃ飛行機出ちゃうよ?」おまえが言うなっ(笑)。

★10月5日
盛岡アイスアリーナ

この日は5人全員揃っての新幹線移動。YOSHIKIは新幹線嫌いなのだが、一人用の個室に乗ったところそれがいたく気に入ったようで、「ねぇねぇ、俺ここに住む。これ欲しい。ちょうだい」と言いだす始末。

この日の本番はすごく良かった。話によるとこの盛岡アイスアリーナを満杯に出来るのはユーミンとXだけだということで、盛岡市内はアイスアリーナを中心に交通渋滞が起き、お客さんが定刻に入りきらなかったという理由で開演時間が押してしまった。

★10月24日
横浜アリーナ　中断

もう朝の時点でYOSHIKIが全然ダメだという情報を得ていて、舞台監督やアリーナの関係者と振替の日時の打合せを済ませておいたのだが、最終的にYOSHIKIがギリギリ15時に入ればリハをやっても間に合うという判断でYOSHIKIを待つ。

しかし本人の意志が異様に固く「とにかくやる!」ということで強行したのだが、もうドラム・ソロに入った時点で中断せざるを得ないということがはっきりする。HIDEの部屋の後のSEの流れる中でYOSHIKIは朦朧としながら針の先生に治療を受けるがそのときでもまだ「やる!」と言い張っている。最終的にはメンバー5人での話合いになり、中断することを納得させる。その足であの恰好のままYOSHIKIを病院に運んで点滴を打たせてホテルに食事を用意して待つ。その頃にはYOSHIKIも意識はしっかりしているのだが、やはり悔しそうだ。

★11月12・13日
横浜アリーナ

僕は他のメンバーとの仕事もあるのだが、YOSHIKIが倒れてからはずっとYOSHIKIに付きっ切りだった。ドラムを叩く前のマッサージは必ず僕がやるというせいもあるのだが。

前日はさすがのYOSHIKIもかなり気持ちが高ぶっていて、リハを済ますと横浜に泊まらず、東京に帰ったりした。

僕が感動したのが、初日のHIDEのSEがYOSHIKIのSEに変わったときの歓声のすごさだ。あれはものすごかった。メンバーも主催者もHIDEの部屋が終わった後に心配でYOSHIKIの楽屋を覗きに来たりしていた。YOSHIKIは頭5曲を張り切り過ぎて、肩に肉離れを起こしてしまっていたのだが、あの歓声には本人も相当感動したようだ。

僕は2日めのアンコールは舞台を降りて客席で見ていた。そこでTOSHIのMCが、「これまで支えてくれたメンバーやスタッフのためにこの曲を送ります」という台詞があって、「これは客席で見てる場合じゃない」と舞台袖に急いで戻った。「ああー、終わるねぇ。何も変わらないんだけど」と思いながらボーッとする。

今振り返ってみると、今回のツアーは限界に挑戦して本当にギリギリで、メンバーの音楽的な部分、精神的な部分、スタッフも含めて本当にギリギリのところで勝負して来たのだが、そこによく現実がついて来たなというのが正直な実感だ。よく形に残ったな、現実に出来たなぁと、益子さん始め舞台、バリライト、照明、音響、楽器、特効、トランスポート、電源、全てのスタッフの人の力のすごさを実感しました。

とりあえずツアーは終わったが、メンバーもスタッフも〝ツアーの終わり〟という雰囲気は皆無だった。打ち上げで飲んでいてもいつもと変わらない飲み会の風景がそこにあった。まだまだ東京ドーム3daysが残っているからだ。今もまだ気持ちは何も変わってはいない。きっと東京ドーム3daysが終わるまで何も変わらないのだろう。

二人の〝天才〟が向き合うステージは、絶世のきらめきを放っていた。

小室のピアノでオープニング・ナンバー「背徳の瞳〜Eyes of Venus〜(インストゥルメンタル)」が始まる。

YOSHIKIのピアノが奏でるベース・ラインの上を小室の弾くメロディーが流れる。二人の息が見事に合い、美しい旋律を作る。

「どうもありがとう」

最初の曲を終えて、小室が言った。大きな拍手が起こる。

彼は、このステージに込めた思いについて話してから、客席へ向けていたのと同じ笑顔をYOSHIKIにも向けた。

「YOSHIKIが前に居てくれて、とても嬉しいです。倒れないで(笑)。今日は、いろいろ……」

「頑張りましょう」

YOSHIKIも笑顔で答える。

あるスタッフの話では、このライヴの前日まで3日間に渡って行なわれたリハーサルに、YOSHIKIは1度も参加していないという。〝参加できなかった〟のだ。それほどまでに、彼の体調の悪さは限界を極めていた。

けれど、そんな様子はこの日のステージから露ほども感じられなかった。

それどころか、小室との、オーケストラとの、絶妙のコンビネーションはどうだろう。これが開演前、数時間の音合わせだけで成し得る技だろうか!?

この日の演奏者全員の、音楽家としての才気に敬服すると共に、YOSHIKIの精神力の強さに讃辞を贈りたい。

続いてYOSHIKIが、モーツアルトのレクイエムから「No.6 Lacrimosa」を奏でる。曲のタイトルを語ろうとする彼に、場に似合わない歓声が浴びせられる。V2にではなく、YOSHIKIに会いにきたファンは、オーディエンスに徹することができないらしい。口々に彼の名を叫ぶ。

「うるせぇ。黙れ」

思い余ったYOSHIKIは、叱咤の言葉を発した。スカッとする一瞬だった。

静まる客席に笑顔を向け、YOSHIKIは鍵盤に手を乗せた。ストリングスの調べに添われ、ピアノが鎮魂のメロディーをうたう。

小室は、彼が音楽を担当し、評判となったミュージカル〝マドモアゼル・モーツアルト〟から数曲を披露した。打ち込みドラムが、本物さながらの迫力でビートを叩く。彼のブースやピアノを乗せた座台が、彼と一緒に上昇。

デジタル・ポップスとオーケストラを組み合わせる術において、彼ほど鮮やかさに長ける人はいないだろう。

ならば、YOSHIKIは、ロックにオーケストラを用いるミュージシャンの最高峰だ。「UNFINISHED」のイントロが「トルコマーチ」へと変わり、「Es Durのピアノ線」へと導く。彼を連れて、ピアノが台座ごと宙に浮かぶ。最後のワン・フレーズで、YOSHIKIは狂ったようにキーを叩いた。尖った音が耳を刺す。

小室との競演「Space World」でV2本来のスタイルを匂わせると、YOSHIKIはドラム・ソロへ突入。オペラのごとく響く女性ソプラノの声を引き裂くように、聞き馴れたリズムが鳴り始める。延々と打ちつけられるバス・ドラムの音に、割れるようなスネアが絡む。壊れてしまいそうなプレイ。

TMNファンからも〝これほど凄いドラムを叩く人は、今まで生きてきた中で見たことがない〟と絶賛を受けていたYOSHIKIは、7回ゴングを鳴らしてソロを終えた。

彼がバック・ステージで気を失っているであろう間、小室は再び〝マドモアゼル・モーツアルト〟のナンバーから、オーケストラと共に、優美で切ないメロディーを奏でた。

それぞれの魅力を互いのファンへ知らしめた彼らは、終盤、V2として炸烈した。

「背徳の瞳〜Eyes of Venus〜」はピアノの流麗なイントロが、YOSHIKIの〝Eyes of Venus〟という囁きで、一転、暴力的なサウンドへ変貌する。激しい音の重なりの中を、ひた走る小室のキーボード。YOSHIKIのドラムは、火がついたように吠えている。センチメンタルな小室のヴォーカルが、かき乱された主人公の思いを伝える。二人を乗せたセットが、空中で交互に上下する。

ライヴ・タイトルでもある「VIRGINITY」は、まさにV2を象徴するナンバー。小室のヴォーカルと対等のインパクトで、女性と英詩の会話を繰り広げるYOSHIKI。声には恋人同士のようなニュアンスがあるが、語られている世界は、YOSHIKIのかなり内面的な部分である。

二つのアーティスト性は互いに頼り合い、ぶつかり合い、砕けた殻の内側に、至上の強さを築いていた。

砕けた殻の内側に、至上の強さを築いていた。

REPORT:FUZUKI WATANABE
PHOTOGRAPHY:MOTOI OHNISHI

At BAY NK Hall '91.12.5

SPECIAL LIVE V2

V2――それは、第二次世界大戦でナチスドイツが開発したミサイルの名だという。

が、戦争を知らない我々にとって、そして音楽の魅力に惹かれてやまない我々にとって、更に脅威的なV2がある。

それが、TMNの小室哲哉とXのYOSHIKIによるユニット〝V2〟だ。

この二人が親しいと知った時から、何らかの形でセッションが行なわれるだろうことは、予想がついていた。

しかし、その形とは？

受ける印象の全く違う二人が、一つに融合する姿は、まるで想像がつかなかった。

それが〝ユニット〟という形になると聞いた時には、驚きのあまり、頭の中が疑問の数珠つなぎになったほどだ。

何をやるの？　どうやるの？　いつやるの？　どこでやるの？　それは本当に実現するの？　自らを〝MAD〟と称する小室哲哉。

かたや〝無謀〟と書いてYOSHIKIと読ませる男。

強力な2つの個性は、ともすれば、打ち消し合いかねない。

が、毒は毒をもって制することを知らず、互いに交わり更に毒気を強める結果となった。

そうして誕生したV2は、記者会見で最初のベールを脱いでから、36日目にして初めて大衆の前に姿を見せた。

1991年12月5日。モーツァルト没後200年にあたるこの日、東京ベイNKホールも、音楽史上に歴史的な1ページを刻む。

18時50分、いよいよV2が動き始めた。

荘厳な鐘の音が、開演ベルの代わりに鳴り響く中、客席を照らしていた明かりが消えた。

深い薔薇色をしたビロードのような幕が左右に開くと、65名のMADEMOISELLE MOZART TRIBUTE ORCHESTRAが目に入る。

上手からゆっくり現れる人影に、歓声が起こる。白い衣裳の小室哲哉がライトに浮かぶ。

後方にオーケストラを控えたステージ。

上手に配されているのは、コンピューターのようなディスプレイを持ったシンクラビアと、数台のシンセサイザー・キーボード。いわば小室のブースだ。

手前に置かれているのは、木目に金色のパーツが目をひく、不思議な曲線のオリジナル・ピアノ。椅子に腰掛けた小室が、ステージ両脇の巨大なスクリーンに映し出される。

YOSHIKIの華やかさに劣ることない端正な容姿は、ロマンティックに例えるなら、太陽神・アポロンだ。明るい色の髪が、流れるようにセットされている。

下手から現れたのはYOSHIKIだ。

ボディーを鋭く光らせたドラム・セットの後ろを通り、やはりオリジナルのクリスタル・ピアノに向かって据わる。肩に垂れた長い髪と艶やかな黒い衣裳のYOSHIKIは、月の女神・ダイアナといったところか。

KAWAI

KAWAI

X with ORCHESTRA

At NHK Hall '91.12.8

熱気と鼓動が、僅かな透き間の隅々にまで満ちている。

アンコールで、TOSHIは〝紅白歌合戦〟出場の話をした。そして

「変なことばっかりやってるXだけど、これからも〝運命共同体〟だぞ！」

と、泣かせるようなセリフを言った。

〝運命共同体〟。この言葉を直接TOSHIの口から聞くのも、しばらくぶりのことだ。

重く優しく響く言葉だった。

曲は、このところステージのラストをSEとして飾っていた「Say Anything」。公の場で初めて、しかもオーケストラとの競演だ。

「知ってるヤツは〝究極のカラオケ状態〟をやってもいいぞ」

そんな言葉に誘われて、客席じゅうが大合唱となる。オーケストラの人々は、こんなヘタクソな合唱隊の歌を、どんな気持ちで聞いていたのだろう。

2度目のアンコールでは、海外進出の話にも触れた。

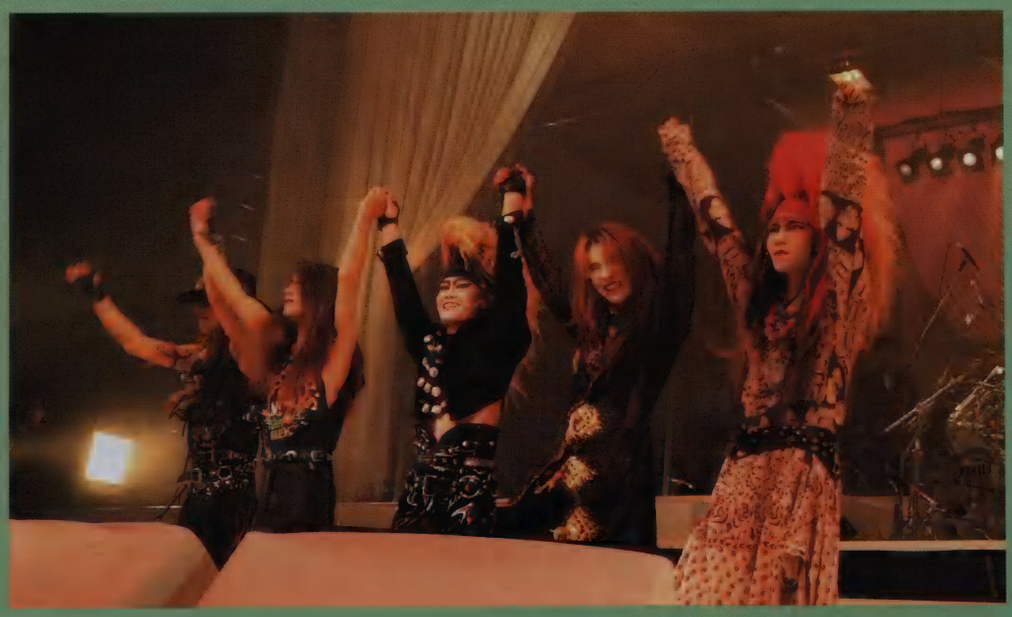
「オレたちはXのまま走り続けるからな。よろしく頼むぜ！」

とも言っていた。

そんなこと、言われなくても承知してるよ。

一人一人が答える代わりに、客席はまた一緒に歌った。「Endless Rain」。

スモークがゆっくりと床を這う。ミラーボールが、ライトの雨を降らせる。ステージに、客席に、みんなの上に降り注いでいる。



放射線上のライトが、会場内をまんべんなく照らし出す中で、オーケストラの雄大な音が、ゆったりと曲の最後をしめた。

ステージの上を無邪気に駆け抜けるXは、本当にいつでも変わらない。

見守る客席のみんなの心も、Xと一緒に、ずっと変わらないことを信じたい。

Xがいる限り、Xのファンも存在し続ける。

そんな、共同の運命を生きていきたい。

巨大な薔薇が、音の蜜を溢れ出させて咲き誇っているのだ

REPORT：FUZUKI WATANABE
PHOTOGRAPHY：NORIO KAJIKI

1991年12月8日のNHKホールには、2日前にYOSHIKIが行なったV2のライヴをやや上回る人数のオーケストラが仕込まれていた。

開演時間は、ここでもかなり遅れた。

20時になってようやくオーケストラ奏者たちがステージに現れる。コンダクターが入場し、スモークの柱が高く上がると、絶大な威圧感をもって「WORLD ANTHEM」が奏でられ始めた。これには、まいった。

最初の1小節で、これから始まるライヴのスケールを劇的に予感させている。いまだかつて、オーケストラ演奏をバックに、悠々とステージへ上がってきたロック・バンドがあっただろうか。

〝X Withオーケストラ〟と題しているからには、やはりどこか厳かに進められるのだろう。という予想が、誰しもの頭の中に、微かにはあったと思う。

が、とんでもない！　Xは、いつものまんまのXで、オーケストラと一緒に「Blue Blood」を演奏し始めた。

驚くべきは、その音のスケール感だ。オーケストレーション効果によって、いつものXの〝音〟も響き方が増幅されている。

オーケストラの面々の早弾きは、視覚的にも訴えるものがある。

舞台のちょうど真ん中に、ドラム・セットごとはめ込まれているようなYOSHIKI。そのステージングも面白い。

最初のMCで、TOSHIが言う。

「〝X Withオーケストラ〟だ！　今日はいつものXの5人に加えて、オーケストラが後ろに68名。総勢73名でオマエたちに襲いかかっていくからな。それなりの〝気合い〟、入ってんだろうなぁ。気合い入れていけよ！」

言葉にならない声が、怪獣の呻きのように会場から湧き上がる。

「Week End」だ。

これが、襲いかかられる感覚か。

音圧が、胸板を叩いて痛い。

3階席最後列の更に後ろにも、パイプ椅子で席が作られていて、そのまた後ろにたっている取材陣たちの目には、正直言って何も見えない。

見えるものは、ホールの天井とステージの上方で瞬くライトの端、オールスタンディングで盛り上がっている観客の後ろ姿だけだ。

だが音だけは、人垣に吸収されることなく、ズンズンと響いてくる。とてつもない迫力。

真紅のライトに染まったステージ上にTOSHIの姿を見ることが出来たのは、「紅」が始まる時だった。

TOSHIの「紅だぁっ！」という声に続く爆発音と共に、銀色のテープが無数に吐き出された。輝きながら宙を舞い、客席へと降ってゆく。

TOSHIが歌っている。

〝オレが見えないのか　すぐそばにいるのに〟

そのとおりで、少し悲しくなる。

音楽というものは、きっと、こんなふうにして、個人の胸に残ってゆくのかもしれない。

間奏で、やっとYOSHIKIがドラムを叩く姿を確認。HIDEのピンク色の頭を発見したところで「紅」は終わった。

オーケストラのみの演奏による間奏を挟み、どこからともなく「Rose Of Pain」のイントロが聞こえてくる。

ホール右側の壁の中ほどにある小さなせり出しの上で、一台のオルガンがライトを浴びている。

誰だろう？

誰かがそこで「Rose Of Pain」を弾いている。

ステージの上では、YOSHIKIがドラムと一緒にピンクのライトを浴びている。

後ろのオーケストラを彩っているのは赤いライト。手前にいるXのメンバーは、グリーンのライトに照らされている。

人間73人分もある巨大な薔薇が、音の蜜を溢れ出させて咲き誇っているのだ。

ライティングが変わる。

ステージ上でXとオーケストラとを隔てている透明な壁が、光の加減でミラーのようになり、ドラムに向かうYOSHIKIの背中を映し出す。

曲の終わりと共に、大歓声が彼らを包んだ。

さきほどのオルガンが、またライトを受けている。今度は、演奏者のないままに、ピアノの音でメロディーを奏でる。叙情的で情熱的な調べ。

歓声に弾かれてステージに目をやると、ドラムの横に置かれたクリスタル・ピアノの前にYOSHIKIが座っていた。客席の方へ顔を向け、鳴り続けていた主なきピアノの音をたどる。メロディーは、いつかYOSHIKIが弾く生ピアノの音に変わっていた。

繰り返される同じフレーズが、時折、バランスを崩す。乱れた旋律はすぐに平静を取り戻す。また、乱れる。

オーケストラの不協和音が、ほんの一瞬、絡み付く。

YOSHIKIの奏でるピアノの音が、だんだんと狂気を帯び始める。左手が弾く伴奏は変わらないのに、右手のメロディーはリズムを失う。

クレッシェンドしてくるストリングスの音。

YOSHIKIは頭を大きく振り、髪を波打たせ、体を前後に揺らしながら、見えない何かを鍵盤にぶつける。

静まり返った客席は、固唾を飲んで見守っている。

ピアノはやがて、オーケストラの音に呑み込まれてしまった。

赤いスポット・ライトの中で、鍵盤の上に顔を伏していたYOSHIKIが、素早い動作でドラム・セットに身を収める。

「Silent Jealousy」。

会場がまた、脈打ち始める。

正直な話、取材者としての惰性も感じないわけではなかった。が、この最初の1曲は、彼らのステージを初めて見た時と同じ、純粋な感動を呼び起こした。東京ドームは確かにデカイ。だがXは、もっとデカイ。この存在のデカさは、宇宙の大きさとも比べられない。

「いよいよ東京ドーム三連戦の開幕だぜ。てめぇら、気合い入れていけよっ！」。TOSHIのMCは、いつもと変わらない。違うのは、並べられた単語と反応する人数だけだ。「MIS-CAST」から「SADISTICDESIRE」と続き、場内は汗ばむほどに熱した。

「新年明けてから初めてお前たちと会うからな。新年の挨拶をしなきゃいけないなぁ」やっぱりTOSHIは礼儀正しい。律義が服(衣裳？)を着ているようなものだ。筋を通すのが好きな観衆たちも、TOSHIが叫ぶ「あけましてぇ！」に「おめでとう！」と元気よく答えた。「新年早々お前たちと会えて、縁起のいい年になりそうだな。〝一年の計は、今日のドームにあり〟だからな。お正月らしく、めでたく派手にいけよ！」。十分派手な客席は声高らかに意志表明をした。

「DESPERATE ANGEL」。照明も更に派手な攻勢に出た。レーザー・ビームがステージのいたる所、そしてスクリーンの下からも飛んでくる。アリーナ前方はヘッドバンギングの嵐だ。TAIJIがベースを叩く。久々に聞く「XCLAMATION」だ。ステージをはさむスピーカーの巨大な壁が、覆われた黒い幕にマーブル模様を映す。混じり合ったサウンドと歓声も、熱気に溶けて大きな渦を巻く。PATAのギター・ソロから曲は「STAB ME IN THE BACK」へ。細かなライトが生き物のように蠢く。客席とのかけ合いで、TOSHIはステージを走り回る。スクリーン前を通って左右に伸びるステージロードの長さは、目測距離にしてドームの内周4分の1。いや、3分の1はあるだろうか。ドームに引けるトラック1周が400mというから、この道のりも100mには及ぶだろう。

「やっぱりドームは気持ちがいいな、おい。今日からの3日間、Xにとってもお前たちにとっても意味深いコンサートだからな。より一層の覚悟は出来てるんだろうな。その心意気を見せてもらうぞ！」と言われてひるむようではXのライヴに立ち会えない。白い閃光が瞬く「WEEK END」。赤いライトの血の海に4万からの歌声が漂う。

その波がひくように暗転。スピーカー壁に「SILENT JEALOUSY」のジャケット写真が映り、天井にはYOSHIKIのマスクが4つ並んだ。ドラム・ソロが始まる。SEの〝ムーンライト・ソナタ〟を突き破るYOSHIKIのドラム。まるで破滅へのカウントダウンを全身で叩きつけているような気迫。ドームじゅうの視線が、彼だけに注がれ釘づけになる。HIDEのソロは蛇のゴンドラで登場した。ヘッドセット・マイクを通す笑い声は、時にこどもの無邪気さで残忍に響く。神楽のような神妙なSEの中、HIDEが奏でる〝さくらさくら〟のフレーズ。やがて背の高い看護婦が現れ、HIDEを錯乱させる。ミラーのサークルに包囲されたHIDEが自己の姿に狂わされていくさまをスクリーンが映す。HIDEは縛られ、ベッドに乗せて連れ去られた。

TAIJIとPATAのアコースティック・セクション。緊張しきった客席に穏やかさが戻る。2人のギタープレイとTOSHIの歌声の悲哀を最も堪能できるナンバー「VOICELESS SCREAMING」だ。

YOSHIKIのピアノ・ソロに続いては「紅だ！」。銀のテープが舞い飛ぶ。祝宴を盛り上げる「CELEBRATION」にライトの縁どりがステージを流れ、「オルガスム」では幾つもの大きな目玉が場内を見回す。

ラストナンバーを終えてステージを去ったメンバーの代りに、スピーカーの壁に5人の顔写真が投影された。スタンド席でウェーブが起こる。どよめきがライトアップされる。「やっぱりドームのステージは感動するな。お前たちのおかげだぜ。ここにいる全員に、Xからの愛のお年玉を贈るぜ！」。Xへの〝ありがとう〟は、思いを込めた合唱に変わった。「ENDLESS RAIN」。感極まって泣き出す子がいる。その光景に圧倒されて息をのむ新参ファンがいる。ホームランも出にくいほどに広いドーム。けれど心のキャッチボールは確実に交わされている。

2度目のアンコールを求めて、客席のウェーブはアリーナにも及んだ。心の手を取り合っているのはX対個人だけではない。Xを愛する同志も、この空間で結びついているのだ。期待どおり2度目のアンコールに現れたメンバーは、スタンドにウェーブをねだった。上手側から生まれた鮮やかな波は、下手側まで見事に達し、戻ってきた。その光景にじっと見入っていたHIDE。YOSHIKIは拍手を贈った。TAIJIとPATAが微笑んでいる。TOSHIが誉め言葉を叫ぶ。

ごほうびは「20TH CENTURY BOY」しかも演奏はHIDEボーカルの〝今世紀最大のロックバンド〟。ドラムはTOSHI、ベースはPATA、YOSHIKIとTAIJIはツイン・ギターだ。カラフルなライトがバルーンのように丸く光る。

個性的すぎるボーカルも、形になっているだけのプレイも、この際もう何でも来いだ。TOSHIが全員に向かって叫んだ。「愛してるぜっ！」の言葉を胸に、Xに愛された人々は今後、ひたすら〝待つ身〟になるのだから。せめてこの3DAYSで、精一杯Xのすべてを体感したい。その気持ちがわかるから、彼らも精一杯の体力と愛情と気合いとで3DAYSに挑戦しているのだ。見に来てくれた全員にXを届けたい。Xの音楽を、真心を受け取ってほしい。それは陰ながらXをサポートするスタッフの思いでもあろう。

また会う日まで——。TOSHIは最後の最後にこう言った。「おめぇらのXだ！」。

X in TOKYO DOME

'92.1.5

Xに愛された人々は今後、ひたすら"待つ"身になる。

REPORT:FUZUKI WATANABE
PHOTOGRAPHY:NORIO KAJIKI

Xへの愛情を自分の内部だけには留めておけない。いつも一緒にいたい。そんな気持ちの表現手段として、彼女はYOSHIKIのコスチュームを真似るのだろう。HIDEと同じサングラスをかけ、同じ色の髪を同じようにセットしている彼女もそうだ。東京ドームに集まって来る何万という人々が、同じ思いを抱いていることの不思議。

1992年1月5日。東京ドーム3 DAYS初日の会場もまた、Xをこよなく愛する者たちで埋め尽くされていた。

18時36分、場内が暗くなった。ステージの両脇に備えられたスクリーンに映し出された画像。それは、開演の瞬間を迎えたバックステージの模様だった。SEの「PROLOGUE～WORLD ANTHEM」が流れると、ライトで作られた"X"の文字が暗闇の天井に浮かんだ。YOSHIKIは、まだスクリーンの中で軽くジャンプしている。色とりどりのスポットがサーチライトのようにグルグル回り、現れ来るメンバーを探している。

Xだ！HIDEがステージ上手へ勢いよく走った。YOSHIKIはこの日の観衆・41,875名に向かって両手を上げ、思い切りスティックを投げた。TAIJIとPATAが、ゆっくりと登場。TOSHIもステージに上がり、これですべての役者は揃った。

「BLUE BLOOD」のオープニングにスモークの柱が上がり、XのサウンドがBIG EGGに爆発した。TOSHIが上手へ走る。動きが少ないと言われるPATAも上手へと足を伸ばす。Xの大きさに改めて身震いがする。

昨年後半における彼らの活動勢力は信じがたく、年末に到っては"脅威"をとうに超えていた。鬼のように展開するライヴ・スケジュール。ステージごとの衝撃はあるものの、

3月7日午後、都内某所で何かが起きる!!

詳しくは次ページを見よ。

書籍注文書 (92年1月30日まで有効)

●書店(番線)印	●受注　月　日	●部数	●担当者
	●書名　ヴィジュアル&ハードショック写真集 ヒデの無言激　定価2800円(税込)3月7日発売		
	●あなたの住所　〒		●TEL
	●あたなの名前		
	●出版社名　㈱音楽専科社 〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F ☎03(3574)0201 FAX03(3574)8548		

厳重警戒注意報!!

3月7日、HIDEが都内某所に出現!!

おのおの方、一大事でござる!!
ど、ど、どうなされたのじゃ。
3月7日、都内某所にオチャ目なハ虫類が…。
なんじゃ、そりゃ??
いや、失礼つかまつった。実はここだけの話、
エックスのヒデと申す者が、自分の
写真集『無言激』の出版を記念して、3
月7日、都内某所にて"○○会"をやる
そうじゃ!

そ、そんな無茶な事、誰が企てたのじゃ。
そーいえば思いあたるふしが……先日、例に
よって飲んだくれのオヤジとヒデが、ヘラヘ
ラやっておったが、あれがもしかしたら……。
そんなことはどーでもよいから、早う、どー
したら参加できるのか、教えてくれ。
こりゃまた失礼。簡単でござる。住後ハガキ
(返信用には必ず、あなたの住所・名前を書
き入れること)に、右上の応募券を貼って、
〒104東京都中央区銀座5の1の7数寄屋橋ビ
ル5F「ヒデの○○会」まで申し込んで下さ
れ。抽選で当選された方のみ、返信部分に詳
しい内容、場所、時間、整理番号、入場方法
を教えてさしあげよう。ただし、〆切り日は
2月10日ですぞ!! 早う、ホレホレ。
㊟電話での問い合わせはダメじゃ。

X特別ビデオ通販

■爆発寸法GIG(ソニーレコード Ⓥ42ZH-241 60分15曲 89年6月1日発売 4326円)
①Prologue②Blue Blood③Sadistic Desire④Easy Fight Rambling⑤Week End⑥Stab Me In The Back⑦Piano solo⑧Drum solo⑨Guitar solo⑩紅⑪オルガスム⑫I'll kill You⑬20th Century Boy⑭X⑮Unfinished
Xのファースト・ビデオ。89年3月16日渋谷公会堂のライヴを収録。

■刺激/VISUAL SHOCK VOL.2(ソニーレコード ⓋCSVM-143 60分10曲 89年12月24日発売 4300円)
①VANISHING LOVE②XCLAMATION③紅④CELEBRATION⑤ROSE OF PAIN⑥BLUE BLOOD⑦オルガスム⑧X⑨ENDLESS RAIN⑩UNFINISHED
X初のヒストリー・ライヴ・ビデオ。ビデオクリップも入って、何回見ても楽しいゾ。

■VISUAL SHOCK 2.5(ソニーレコード ⓋCSVM-192 30分4曲 90年9月1日発売 3200円)
①CEREBRATION(ReMix)②ENDLESS RAIN(LIVE)③WEEK END他
Xのプロモーション・クリップをまとめたビデオ。プロモビデオの他にも、未発表のオリジナルビデオ、武道館(2月4日)でのライヴ・シーンなど、いろいろおりまぜて収録。

■VISUAL SHOCK VOL.3(ソニーレコード ⓋSRVM-285 60分9曲 91年9月30日 4800円)
①ENDLESS RAIN②PROLOGUE③JOKER④LOVE REPLICA⑤DESPERATE ANGEL⑥WHITE WIND FROM MR.MARTIN⑦VOICELESS SCREAMING⑧SILENT JEALOUSY⑨SAY ANYTHING
復活したXのビデオ。昨年のツアー、スタジオライヴ、クリップ、今回のツアーを含むオムニバスビデオ。

■VISUAL SHOCK VOL.3.5(ソニーレコード ⓋSRVM-298 25分3曲 91年12月21日 3000円)
①SAY ANYTHING②VOICELESS SCREAMING③ENDLESS RAIN
日清パワーステーション3day、ジェラシー・ツアーのドキュメントを含む全曲新編集によるバラード集。

■ボスッ! 9号(キャプテン VOS-0009 45分 2874円)
Xを中心に有頂天、ナナ、アンジー、レピッシュ、カラー他収録。特に、このビデオはXがメジャーデビューする前のステージをバッチシ収録した貴重品。追加10本のみ。早い者勝ち。

SHOXX ビデオ通販申込書

▲種類 VHSのみです

●本誌で紹介した「ミュージック・ビデオ・カセット」は、最寄りのお店でも販売しておりますが、購入しにくい方は「音楽専科社」でも通販致します。
●御希望の方は、右記申込み欄にビデオ番号、種類別(VHSのみ)、タイトル名とあなたの住所、氏名、郵便番号、電話番号をはっきり明記し、商品代金と送料¥500を合わせて現金書留で下記宛までお送り下さい。
●商品発送 申込み用紙到着後、3週間以内にお手もとに御送付致します。
●宛先 〒104 東京都中央区銀座5-1-7(数寄屋橋ビル)音楽専科社「ビデオ通信販売」係
TEL.03(3574)0201 担当 岩井

ビデオ番号		種類	本数
住所			
氏名	㊞	年齢 歳	男・女
TEL		同封金額¥	
保護者名		保護者印	

次号Vol.9予告 3月21日発売

"えーっ、まだエックスが続くの?"
の非難の声にもメゲず(笑)、チャンチャカチャン♡
それにしても今回、ヨシキにはしっかりイジメにあった。
撮影が1週間のうち3回も、当日キャンセルになったのだ。
さすがのあたしも、泡吹いてブッ倒れたな。ブクブク。
でも、4度目の正直ってあるんだよな(笑)。
前回のヒデに引き続き、
バリバリにショッキングなフォトが撮れただろ? ムフフフ。
さ〜て、お待ちかね。ワクワクの次号は、まず

HIDE with RYÖ初顔合せ対談さ。

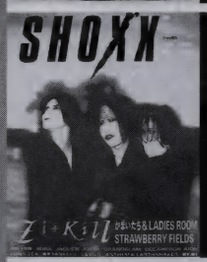
アッ、アッ、黒髪(/)で神父姿のヒデの唇と
尼僧に紛したRYÖのソレが…
もうこれ以上は言えない(…オレはバカか…)。
それにしても、この本はどこまでエスカレートするんだか…
もう誰にも止められない(笑)。
どーもオレは、ヨシキとヒデに出会ってから、
人格が異常性をおびてきているような気がする…
ワ・カ・ラ・ナ・イ。
最後は、しっかりレディースルーム特集でシメるのだ。
あっ、忘れてたけど、
ヨシキのA to Z《PartⅡ》があったんだ。
じゃ、3月21日をお楽しみに。

つーわけでVol.1〜7はもうとっくに書店から姿を消しているので、どーしても欲しい人は、定価金額(¥700、6〜7は¥750)に送料(1冊=¥260、2冊=¥310、3冊=¥360、4冊=¥410)を加えて、切手代用または小為替で、〒104 東京都中央区銀座5-1-7数寄屋橋ビル5F 音楽専科社経理部「SHOXX バックナンバーVol.○」(○の中に号数を入れて〈れ)係まで申し込んで〈れ。また、近〈の書店でVol.9(3月21日発売)を買いそびれないようにするには、下の注文書を今のうちに、その書店へ出して予約しておくと便利かな。

特典付(詳細はP108) バック・ナンバー

Vol.1 90年11月発売 ¥700
■ZIGGY35ページ大特集／①カラーグラフィック・フォトギャラリー②森重・松尾・大山パーソナル・インタビュー③国立代々木競技場ライヴ ■かまいたち14ページ特集／①SCEANA、KAZY、MOGWAI、けんCHAN個別インタビュー②ロケーション・カラーフォト集 ■ZI:KILL with COLORスペシャル対談10ページ ■LADIES ROOMカラー7ページ

Vol.2 91年1月発売 ¥700
■BUCK-TICK33ページ大特集／①大型カラーポスター②「狂った太陽」の全貌③BUCK-TICK進化論④ビデオ「スピード」撮影現場密着取材⑤ライヴat武道館 ■LADIES ROOM12ページ特集／①百太郎、GEORGE、NAO、JUN個別インタビュー②カラー・スタジオフォトセッション ■かまいたち15ページ特集／①カラー・グラフィックフォト集②対談→けんCHAN & SCEANA、KAZY & MOGWAI

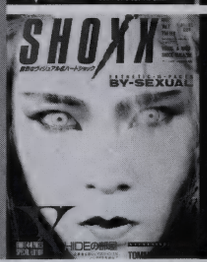


Vol.3 91年3月発売 ¥700
■ZI:KILL29ページ大特集／①大型カラーポスター②TUSK、KEN、SEIICHI個別ロング・インタビュー③ロケーション・カラーフォト集 ■かまいたちand LADIES ROOM14ページ特集／①ハチャメチャ爆笑座談会②スペシャル競演レポート■STRAWBERRY FIELDS13ページ特集／LEZYNA with SEISHIRO、福井 with SHU-KEN対談 ■LUNA SEA幻惑カラーフォト&インタビュー7ページ

Vol.4 91年5月発売 ¥700
■かまいたち35ページ大特集／①SCENAロング・インタビュー②KAZZY & MOGWAI対談③けんCHAN & SCENA10項目インタビュー④スタジオ&ロケ特写集⑤クラブ・チッタ速報 ■BY-SEXUAL9ページ特集／SHO and RYO、DEN and NAOスペシャル対談 ■GARGOYLEカラー8ページ ■LUNA SEAカラー7ページ ■LADIES ROOMカラー8ページ特集／百太郎 & GEORGE、NAO & JUNリラックス対談

Vol.5 91年7月発売 ¥750
■X55ページ[illegible]集／①妖美カラーグラフィック・フォト集②[illegible]I (15000字) HIDE (14000字)、TAIJI (140[illegible]ATA (12000字) 個別超ロング・インタビュー[illegible]オ「サイレント・ジェラシー」撮影現場密[illegible] & レポート ■かまいたち解散発言!/(け[illegible]の独白 ■AION with LUNA SEA師[illegible]別対談カラー8ページ ■LADIES [illegible] STRAWBERRY FIELDS最新ラ[illegible]レポート

Vol.6 91年9月発売 ¥750
■X42ページ巻頭特集／①新潟産業センター／東京ドーム・カラー速報②HIDE、PATA、TAIJI、YOSHIKIヴィジュアル・フォト集③TOSHIの東京ドーム公演第一声インタビュー④全メンバー11項目独白インタビュー■GRAND SLAMカラー15ページ特集／個別ロング・インタビュー■かまいたち/最初で最後の対談—SCEANA with けんCHAN■DEEP/本誌独占!デビュー・インタビュー■LUNA SEA/暴動寸前!



Vol.7 91年11月発売 ¥750
■X45ページ激迫特集／①驚愕!/唖然!/ヒデのショッキング・カラーフォト集②ヒデが詩の内面世界を独白③ヒデの最新超ロング・インタビュー16000字④ヒデの10項目徹底インタビュー⑤Xとその仲間達⑥ヨシキのビデオ撮影現場密着フォト&レポート⑦ヨシキ倒れる ■森重樹一 in ニューヨーク/ZIGGYは何処へ… ■TOMMY & けんChan/本誌独占取材!/衝撃的なユニット、Sister's No Futureの誕生 ■BY-SEXUALカラー15ページ特集/この身焦がせ

雑誌注文書

●書店(番線)印	●受注 月 日	●部数	●担当者
	●書名 アリーナ37°C 4月号臨時増刊ショックス Vol.9 特別定価750円(税込) 3月21日発売		
	●あなたの住所 〒		●TEL
	●あなたの名前		
	●出版社名 (株)音楽専科社 〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F ☎03(3574)0201 FAX03(3574)8548		

※この注文書はコピーしたものでもかまいません。

GRAND SLAM JUN-YA

NOW ON RECORDING

一個ずつ、反省を踏んづけてやっていく。

2月1日にシングル「CRY AGAIN」をリーリスするグランド・スラム。そのボーナス・トラックとして収録される「CRY AGAIN」の別ヴァージョンをレコーディング中のスタジオを訪ねた。歌入れをしているJUNYAを取材せよとの命を受けて行ったところ、他のメンバーもインタヴューに応じてくれるというので、せっかくだから予定を変更。ギター・パートのレコーディングがあるRUDYを除く3人に話をしてもらった。

INTERVIEW:MARI ITOH
PHOTOGRAPHY:MOTOKO SASHI

午後6時過ぎに都内の某スタジオに着くと、JUNYAの歌入れが着々と進行中だった。BANは早くからスタジオ入りして、ボーナス・トラック用のアレンジのあがり具合を確認していたそうだ。TOYOKAWAも来ていた。バンド・メンバー以外の人がアレンジしたボーナス・トラック・ヴァージョンでのドラムとベースには打ち込みを採用したため、彼らが演奏することはなかった。この日レコーディングするのは、ヴォーカル・パートとギター・パートのみ。でも、他人のアレンジとは言え、元のアイディアはバンドが出しているものだし、自分たちの作品を他人に任せっきりにするわけがない。それに、一日でTDまでのすべての行程を終えなければならないという状況。リズム隊の二人は、ブースの中のJUNYAが歌っているのを真剣な面持ちで聴いていた。

ところで、ご存じのことと思うが、JUNYAは昨年10月のツアーが終了したその日に自動車事故に遭ってしまった。気になるケガのほうだが、ムチウチになって、まぶたから目尻にかけて6針も縫った。おまけに愛車は大破して廃車に……。本人は「まだ頭痛が激しくなったりするんだけど、まぁ、今は歌を歌うぶんには支障はないよ」と言っていたが、この事故があったために、2月21日にリリースされる予定のビデオ『INFINITY/VIDEO』のシューティングにも遅れが出てしまったそうで、これはバンド全体にとっても災難だった。それでも、JUNYAが仕事に差し支えないところまで回復しているようなので、ひとまずは安心だ。

作業が進む中で、ときどきスタジオから出てきてタバコを吸ったりして息抜きをしていたBANとTOYOKAWAは、そのうちロビーの椅子に座って雑談を始めた。彼らとたわいないオシャベリをしながら待ち、JUNYAのレコーディングが終了したところでインタヴューを行なうことになった。それはそうと、RUDYの姿がない。彼だってレコーディングがあるはずなのに、7時を過ぎても、まだ現れない。それどころか、彼を迎えに行っていたマネージャー氏から「家にいない」という連絡が入った。しかし、一同、たいして慌てた様子もなかったが……。

7時50分、RUDY無事到着。人を心配させておきながら、あいかわらずマイペースでニコニコしている。新しいギターを手にして、弾きごこちをチェック。来て早々にギターを抱え、人と話をしながらも放さない……いつもながら、さすがはギター小僧。まぁ、何はともあれ全員が揃ったので、取材用の撮影が開始された。その後、RUDYはレコーディングのためスタジオ内に残り、他の三人はインタヴューに応じるべく外へ……。

尚、RUDYのレコーディングは、インタヴュー後終了後も延々と続いていた。

——今日(=12月1日)録音した「CRY AGAIN」の別ヴァージョンは、外部の人のアレンジだということだけど……。

BAN うん。外部の人にお願いしてみるのもおもしろいと思って。

——ドラムとベースを打ち込みにすることに抵抗はなかった?

BAN べつに。

JUNYA アレンジも大人っぽいし。

TOYOKAWA 打ち込みの方がハマるよね……って感じ。

——JUNYAは、歌ってどうだった? バックの演奏が変わると、歌も多少、変わるで

一歩だろうと半歩だろうとステップアップしていきたい。

しょ？

JUNYA　うん。どうやるのがいちばん、そのアレンジのイメージに合うかな、というところで変わるね。前（＝ノーマル・ヴァージョン）は、ピッチ（＝音程）云々より感情が出ればいいなと思ってやったけど、今回はシンプルに……シックに、というか……。

――作曲者のBANちゃんとしては、別のアレンジに乗ったJUNYAの歌を聴いてて、どう思った？

BAN　要するに、JUNYAが歌えば、バックが変わってもグランド・スラムなのよ。

JUNYA　そうだね。楽曲自体とか構成は変わってないわけだし、俺も、BANちゃんやRUDYの曲を俺が歌えばグランド・スラムだと思うよ。今回の「CRY　AGAIN」は、聴いた感じは大人っぽいけど。

――このボーナス・トラックのヴァージョンというのは、ライヴとかではやらないよね？

BAN　うん。

――シングルCDのみで、ちょっと違う雰囲気を味わってもらおう、と？

TOYOKAWA　ファン・サービスだね。（CDシングルを）二曲で出すんじゃ、つまんないじゃん。

――メインの「CRY　AGAIN」のノーマル・ヴァージョンと「HEARTACHE」は、アルバムと同じ？

TOYOKAWA　そう。

――前にも、ビデオにシングルを付けてみたり……ファン・サービスっていう部分、グランド・スラムっていうバンドは、いろんなこと考えるよね。

JUNYA　と言うか、つまんないもん作りたくないし、おざなりなもん作りたくないからね。

BAN　ファン・サービスっていうのもあるけど、結局、（グランド・スラムは）音楽に貪欲なんだよ。今回の（他人の）アレンジにしても、よけりゃ吸収してやろうって思ったり、メンバー自身も楽しんでやってる。

JUNYA　ライヴと同じで、自分らが楽しんで、それを楽しいと思ってくれるファンがついてきてくれる、そう思ってるんだ。変化があるのはおもしろいことだし……つまり、俺らは、（今回の「CRY　AGAIN」の場合）元のアレンジしかないと思ってたところへ他のアレンジが成立してるっていうおもしろさもあるし。日々、刺激がほしいでしょ。ファンだって、刺激とか変化がほしいでしょ。ただし、これからバンドをこういうアレンジの方向で持っていくっていうんじゃないから。俺らも勉強して、変化のあるシングルを出して、それをファンのコが興味持って聴いてくれるといいな、と。

――今後のアルバムで、メイン路線でないにせよ、バンド・メンバー以外のアレンジ、あるいは打ち込みなり他の楽器を取り入れる可能性はある？

BAN　アルバムを作りあげる上で必要であれば使うかもしれないけど、それに走るってことはないよ。

――時間的には、今日一日で歌とギターを録ってTDも終わらせるというキツいスケジュールだけど……。

JUNYA　そうなんだけど、与えられた仕事でどれだけ楽しもうかってことしか考えてないから。

BAN　時間が決まってる中で、どれだけのもの作れるかっていうのも挑戦だしね。時間がないからいい加減に作った、なんてのは逃げじゃん。でも、もう少しゆっくりできたらいいな、と思うけど。今度は、デモ・テープをちゃんと作ってからレコーディングしたい……と、声を大にしてボクは言いたい（笑）。

――ところで、今までのシングルは元気のいい曲だったけど、「CRY　AGAIN」はバラード。今までと、ちょっぴり違う感じにしようと思うところはあったの？

JUNYA　べつに。元気のいいのもバラードも、どっちもグランド・スラムの色だから。ファンは、違う感じとか、そういうふうに考えないんじゃないかな。（シングルだけでなく）アルバムも聴いてるし。

BAN　まぁ、（「CRY　AGAIN」のプロモーション・）ビデオは、ちょっと違うっ感じるかもしれない。まだ今は構想の段階だけど、そういう気がするな。

――このシングルのリリースのあと、2月12日にNHKホールでのコンサート、21日にビデオ・リリースと続くけど、92年の展望は？

BAN　92年がどうのこうのっていうのは、ないよ。毎年、同じなんだよ。とりあえず、やるしかないでしょ。

JUNYA　聞いてる人（読んでる人）は、つまんないかもしれないけどね。「今年は武道館でやりたい」とか「東京ドームでやりたい」とか言ったほうがわかりやすいと思うけど、俺ら、そうじゃないんだもん。

BAN　そりゃ、武道館云々かんぬんより（バンドを）長く続けることのほうが大事だと思うから。

JUNYA　で、長く続けるためには、一歩だろうと半歩だろうとステップ・アップしていきたい、と。

BAN　自分たちの確信した音楽をやっていって、いいライヴを続けていくっていうのがバンドの原点じゃないっスか？　足もと見失ったら、もうおしまいだよ。

――たしかに、ブームからあと、バンドの概念も変わってきたりしてると思う。グランド・スラムが実際に長く続けてくれて、その原点をみんながわかってくれるといいよね。

JUNYA　うん。グランド・スラムを見て、バンドに対する思い入れの部分で、おもしろそうだなって思ったりしてバンドを始めるコがいてくれたら、うれしいよね。三年やって、一ヤマ当てればいいやって思ってやってるコだっているだろうけど、少なくとも俺らが今までカッコいいと思ってきたバンドは、そうじゃなかったから、俺らも……ね。

BAN　チープ・トリックなんて、すごい売れて上のほうにいたバンドなのに、『ラック・オブ・ラグジュアリー』を出す前とかはライヴ・ハウスでやってる状況だったでしょ。でも、ずーっと続けてたら、どこかのプロデューサーが「もう一度こいつらでやってやろう」って思ったわけ。すごいよ、それは。彼らの場合、テッペンからどん底だったんだからね。でも、それだから、あんなにいい曲もできるんだと思う。楽曲は外注でも、ロビン・ザンダーが歌って、バーニー・カルロスがドラム叩いて、リック・ニールセンがベース弾いて、トム・ピーターソンがベース弾くと、チープ・トリックになってた。バンドのパワーを維持し続けてたんだろうね。そういうのって理想だし、カッコいいな。

JUNYA　長くやってるバンドは、いいよね。「まだやってるのぉ？」って言われるのはイヤだけど。毎年毎年、それなりの存在感を残して、長く続けていきたいよね。

――グランド・スラムは90年の終わりのほうにデビューして、一年過ぎたよね。91年という一年で今いるところまで来た。毎年同じだってBANちゃんは言ったけど、92年、あるいは二年目という年は、ステップ・アップするためにある意味では前年と違うことをやっていかなきゃいけないわけでしょ？

TOYOKAWA　でも、根本的なところは一緒じゃないかな。

BAN　音楽性を高めるとか、演奏がうまくなるとか、いいライヴできるとか、そういう自分たちの中にあるもんは変わらずにあるし……だって、まだ一年なんだよ。

JUNYA　俺らは、たぶん、周りが客観的に見てるより、ぜんぜんダメだと思ってる。まだまだ原石で、もっと磨いていかなくちゃいけないと思うの。

BAN　そう。今、原石を水で洗ったぐらいのところさ。今までにそれぞれがやってきたキャリアはあるけど、このバンドとしては、まだ、たった一年なんだ。

――その、水で洗った次の作業に移るのが92年……。

BAN　うん。だから、石を光らせる。ただ、それが具体的にどういうことなのかっていうのは言えないんだけど。

JUNYA　まぁ、一年目と同じことやってたらダメだし、それ以下のことやったら、もっとダメだし……。

――91年にやらなかったこと、できなかった

《バックナンバー》■VOL.1➡インタビュー■VOL.3➡渋谷ライヴフォト&JUNYAパーソナル・インタビュー■VOL.4➡RUDY vs TATSUスペシャル対談カラー6ページ■VOL.5➡RUDYパーソナル・ロング・インタビュー5ページ■VOL.6➡表紙&全15ページ大特集、個別ロング・インタビュー&カラーフォト集■VOL.7➡日比谷野音ライヴ&バックステージ潜入取材

ことで、92年にやりたいこと、やろうと考えてることはあるの？

TOYOKAWA　まぁ、前のツアーで課題は残ってるからね。カッコ悪くて言いたかないけど、いっぱいにならなかったところは次に行ったときいっぱいにしよう、とかさ。バンドとしてまだ成しえてないことがあるわけで……一人一人の悔しい思いとかを次への糧にしなきゃ。

JUNYA　うん。でも、そのために何をしなきゃいけないかっていうのは、算数じゃないから、わかんいんだよね。方程式が成立してるわけじゃないからさ。いろいろ試行錯誤して、悩んだり考えたりしながらトライしていくもんだから。ただ、レコーディングでもツアーでも、一度反省したら次に同じことで反省はしたくない。一個ずつ反省を踏んづけてやっていく……すごく漠然としてるけど、そうやっていくことに生き甲斐を感じるんだ。

BAN　純粋な部分を直視してるんだよ。なんで音楽を始めたとか、なんで好きなのかとか、なんでバンドがいいのかとか……。

JUNYA　だから、初めてロック・バンドとかコンサートとか観たときのフィーリングが忘れられないわけ。忘れないようにもしてるわけだよね。

TOYOKAWA　そういう部分を表に出さないで、取り繕ってきれいごと並べて……てのもありだと思うけど、俺たちは違うんだよ。ピュアなの。ブアじゃないよ（笑）。思ったこと、感じたことを、そのまま言ってるだけだから。

JUNYA　今、きれいごと言ってる若いコとかが多いと感じられるから、逆に俺たちは純粋な中にいたい、とも思うの。バンドが生活の一部になってるし、そのスタイルを守っていきたい。

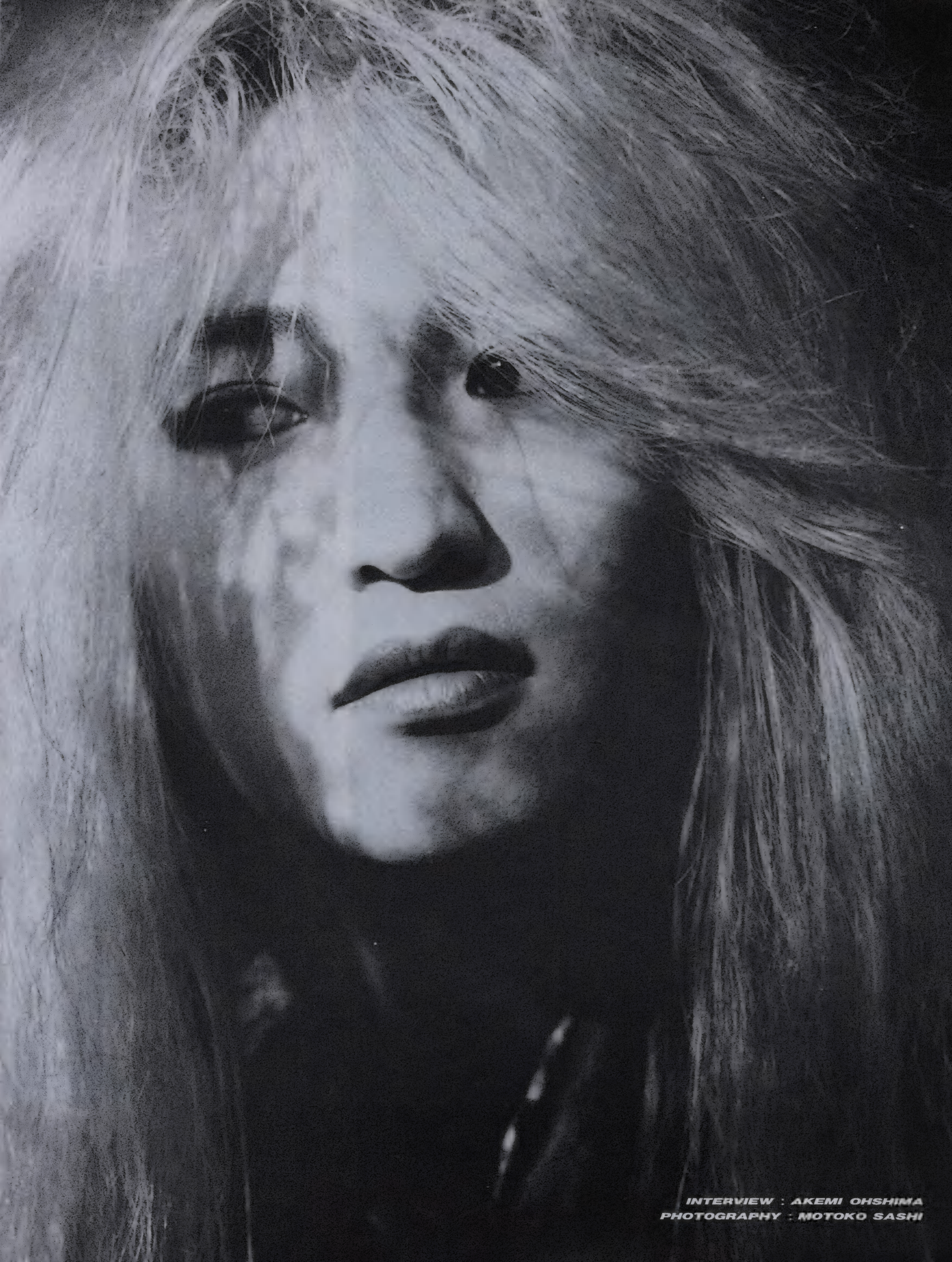
――そういうグランド・スラムに、周りの評価もついてきてる。これは、うれしいことだよね。

JUNYA　うん。だから、俺たちの信じたことは間違ってなかったと思えるよね。たとえセールスが低下しても動員が減っても、信じる気持ちは変わらないと思うね。最後に、自分の音楽人生が終わったときに後悔したくはないからさ。

BAN　バンド・ブームのときのバンドなんかからすれば、俺たちは意固地だったかもしれない。でも、意固地でここまでできたんだからね。意固地で上等や！って。

TOYOKAWA　そう。間違っても、イボ痔じゃないよ（笑）。

BAN　とにかく、それがグランド・スラムなんだよ。



INTERVIEW : AKEMI OHSHIMA
PHOTOGRAPHY : MOTOKO SASHI

筋肉少女帯

橘高文彦

「氷の世界」

とにかく、俺が脱退することはない！

ツアーが終わって一段落する間もなく、ニューアルバムのプリプロダクションに突入した筋肉少女帯。来年は結成十周年ということで、記念イベントも目白押しらしい。そこで今回は橘高くんに、『筋少の近況&ニューアルバム』について語ってもらうことにした。しかし、取材を始めようとしたら、「俺、読者に絶対言いたいことがあるんだ」と、いつになくマジな表情の橘高くん。さて、彼がみんなにいいたいことは、いったい……？

俺、ダメなの。気になっちゃうタイプなんだよ。

――では、まず、その橋高くんの「読者にいいたいこと」を聞かせてほしいな。

橋高：本当はいうのもアホらしいくらいのことなんだけど、いつつも決まってこの時期になると、筋少は解散するっていう噂が流れるんだよ。その中でも、いちばん多いのが、「俺が抜ける」っていう噂なんだ。だから、今日はまず、そういう誤解をといておきたいと思ったんだ。とにかく、俺が脱退することはない！　だいたいバンドというものは、年間スケジュールみたいなものが、ちゃんとたっているんだよ。それで、もう92年の年間のスケジュールも、たっているわけ。それにもう新しいアルバムを作り始めているっていうのに、解散なんてするわけないじゃない。

俺たち、誤解されやすいのは、バンドのスポークスマンの大槻が、そういうこと（解散しないということ）について、あんまり雑誌とかで発言しないじゃない。それはあいつの美意識だからそれでいいんだし、俺たちも別に改まっていう必要はないと思ってたから、今までいわなかったんだけど、あまりにも噂がエスカレートしてるからさ。ここらへんで、俺がちゃんと発言しておこうかなって、思ったんだ。いつも、ツアーが終わって新しいアルバムのレコーディングに入る時期って、音沙汰のなくなる頃なのね。その期間が今回特に長いから、噂にも火がついちゃったのかもしれないけど、そんなことはないから、みんな安心してなさい。

それで、今までの流れとしては、ツアーが終わって、その学祭の合間もシングルや10周年記念のベストに新録で入る曲のレコーディングをしてた。またね……10周年っていう節目だから、脱退とか解散とかっていう噂が出てくるんだろうけど、俺はここで宣言します！　解散は、ない！　フレディ・マーキュリーが死んだとき、俺は一晩泣き明かしたけど、ファン心理として、クイーンのまま死んだってことが、嬉しくもあったのよ。だから、俺も、筋肉少女帯のまま、「酒の飲みすぎで、死んだ」っていわれるほうがいいし、そうする努力もしてるしね。

このメンバーになってからずいぶん長いけど、この5人が集まったとき、俺たちはなにかマジックを感じたんだよ。それは今でも全然失われていないし、こんなにポンポン、年間2枚もアルバムを作っていけるほど、そのマジックは俺たちのなかに存在してるんだからさ。それがなくならない限り、解散もないし、脱退もないよ。それで、次の話の展開は？（と、取材をしきる橋高くん）

――次は、シングル「氷の世界」についてかな（笑）？

橋高：これは、井上陽水先生の名曲の、カバーです。実は、インディーズのとき、筋少はこの曲をやってたんだよ。俺が入ってすぐのアルバム『猫の手袋』に入れないかっていう話が出たほど、俺たちには馴染みのある曲なんだ。ただ、そのときはメンバーチェンジもあったし、早く新しい筋少のカラーを作ろうよっていうことで、アルバムには入らなかったんだ。それを、今になって、思い出した（笑）。大槻は、ずっとあの曲を歌いたかったみたいで、俺も、その気持ちはわかるんだ。あの詩とか、大槻が八つるっていうのはね。あいつが初めてこの曲を聞いたとき、「この曲は俺が歌うために、井上陽水が書いた曲だ」って思ったっていうほどだからさ。それで、当時はまだ筋少のカラーが固まってなかったけど、今ならどんな曲をやっても筋少になるっていうスタイルを確立した自信があるから、やることになったわけ。

音としては、アレンジ面で、結構、もめたんだよね。カバー曲って、原曲に忠実にやる場合と、まったく変える場合があるじゃない。俺はまったく変えていいと判断して、アレンジを始めたんだ。「もし、この曲を大槻が（自分で作って）持ってきたら、こうするだろう」っていうアレンジにして、うちの作曲方法でやったのね。つまり、いつも大槻は歌メロだけを持ってくるから、この曲も歌メロだけを先に覚えて、間奏も「こうきたら、絶対こうだよ」っていうのを考えたんだ。でも、それが、人々には不思議だったみたいなんだよ。間奏聞いたら、みんな、ブッ飛んじゃってね。「なんで、間奏で砂漠に行かなきゃならないの？」って。俺、エンジニアとかにずっと「ラクダに乗ってる風景を、思い浮かべてくれ」って、説明してたのね。

でも、いかんせん、氷の世界だからさ。みんな、冷たいほうに行っちゃってるのよ。ま、俺もどうして砂漠なんだか、よくわからないんだけどさ（笑）。ただ、あとからこじつけると、氷の世界にオーロラがかかってて、ふと見上げるとそのオーロラにラクダが映ってたっていう……ひどいこじつけだな（笑）。

――じゃ、原曲とは、全然、違う仕上がりなんだ？

橋高：全然、違う。でも、多分、初めて聞く人は、元からああいう曲だと思うんじゃないかなっていうほど、ハマってる。ただ、原曲を知ってる人は、「なんで、橋高ちゃんって、間奏でこうなるの？」って、首をかしげるだろうね（笑）。でも、原曲には、歌の部分と、ブリッジ的に決めメロの間奏があって、その両方が売りの曲だったのよ。だから、その間奏のほうも残さなきゃいけないんじゃないかって、最後までこだわってるメンバーもいたんだ。ただ、それがバンドでやると、異常にダサくてさ。とりあえず、それは却下させてもらった（笑）。でも、本当に、この時期に出すシングルとしては、いいものに仕上がったなっていう満足感はある。大槻の歌も、妙に八マってるしね。

――シングルの2曲目は？

橋高：新曲を書き下ろしました。「戦え／何を!?人生を！」っていう曲。前半は3分くらい演奏形態が次々変わっていくうえに、「戦え／何を!?人生を／」って大槻がずっと叫んでいるインストみたいな曲で、後半は大泣きの世界に行くっていう、ふたつ分の曲が混ざったような感じ。音を聞く前に想像できるとしたら、「ヘイ・ジュード」みたいに、後半になると前半のメロディを忘れちゃうほど二分化されてるんだけど、「戦え／何を!?人生を／」っていう主軸のメロディだけは、頭から最後までずっと残ってるっていったら、少しはわかってもらえるかな。でも、これは、結構、今度のアルバムにつながる可能性の大きい曲だと思うよ。大槻のテーマでもあるし、92年の筋少のキーワードでもあるような曲だね。

――いつ頃、レコーディングしてたの？

橋高：学園祭が終わった……91年の半ばごろから、1週間でレコーディングした。そのときに、この2曲と、ベストに入る「釈迦」の3曲を同時に録ったんだ。だけど、今回のシングルは、「氷の世界」と「戦え／何を!?人生を／」を両A面でいきたかったのね。だけど、今、CDじゃん。CDって両A面ってないからね。だから、どうしても1曲目と2曲目になっちゃうんだよね。でも、本当に、最初は1曲ずつ入ったCDを2枚つけようかって話になったくらい、押したかった曲なんだ。「氷の世界」が今までの筋少ワールドでカバーした曲だとしたら、「戦え／何を!?人生を／」はちょっと新しい筋少を垣間見れる曲だと思う。その曲で、今度の新譜が読めるかもわからないっていう前振りにもなってる。

でも、もしかしたら、この曲は、今までのファンの人たちに、ショックを与えるかもしれないな。前作まではなんだかんだいって、マイナー・チェンジしかしない保守的なアルバムを作ってきたでしょ。「あ、筋少も変わっていくのかしら」っていう不安を抱かせるかもしれない。もちろん、時間がたてば、みんな、納得してくれるとは思うんだけど、一発聞きはびっくりするんじゃない？

その曲は、なんとチャンネル数を61使ってるんだ。エンジニアの人も、大喜びだったけどね（笑）。演奏面でいうと、その曲はひっぱるだけひっぱっておいて、最後は大泣きのギターが出てきて終わるっていう感じ。そのへんで、ちょっと、また、みんな、安心するんじゃないかな（笑）。

最近、アルバムとか作ってて思うんだけど、筋少のお約束要素って、あとから入ったはずの俺のギターとかアレンジとかになっちゃってるのね。大槻の持ってくるもののほうが、お約束じゃなくなってるっていうのが、不思議。だからあ、そんなやお約束になった俺が、脱退するわけないでしょ！

――そこで、また強調（笑）。

橋高：だって、今日はこれをいおうって思って、来たんだから（笑）。だから、シングルはヴォリューム満載。シングルだけど、みんなを待たせた分、満足感はいっぱいだと思うよ。これを聞けば、解散・脱退説の不安は、吹き飛ぶでしょう。

――橋高くん、よっぽどその噂が気になっているんだね？

橋高：俺、ダメなの。気になっちゃうタイプなんだよ。

――でも、そういう噂って、今に始まったことじゃないでしょ？

橋高：うん。そういう噂、いつつもある。アルバムのレコーディングに入る時期になると、いつも。ツアーは、毎回、ラスト・ツアーだし。俺、直接いわれるしさ、この時期になると、手紙もいっぱい来るんだよ。だから、ちゃんと説明しておきたいんだ。

――それで、3月に10周年記念のベスト盤も、出るんだよね？

橋高：うん。前作の「断罪／断罪／また断罪!!」までのアルバムの曲を、まんべんなく2～3曲ずつ選んで、「釈迦」だけ今までの歴代メンバーが参加している新録で収録してあるんだ。歴代メンバーっていっても、海外に行っちゃってるやつもいるから、全員じゃないんだけど。参加メンバーは、インディーズのときからやってる三柴江戸蔵くんが、まずピアノを弾いてくれてる。昔からのファンは泣いて喜ぶと思うんだけど、曲の前に三柴くんのインテリジェンスあふれるピアノが流れて、それから怒濤のような曲が始まると

いう懐かしいパターン。相変らず、いいピアノを、弾いてくれてるよ。

本当は彼が抜けて俺が入ったとき、キーボードを入れたいねっていってたんだ。だから、俺は新しいキーボードを探すもんだと、てっきり思ってたんだよね。でも、これも彼らの美学で口に出してはいわないんだけど、キーボードは永久欠番にしたいってことだったんだよ。だから、永久欠番だけあって、御大の演奏はすごいものがあるよ（笑）。

ギターは、「高木ブー伝説」のインディーズ盤の時にギターを弾いてた友森昭一くん。現在はリッツっていうバンドをやってます。次が「仏陀L」を録った関口博史さん。大槻が似てる関口宏さんとは、別の人。彼は今、ケンヂのツアーでギターを弾いてます。それから、インディーズの頃に筋少にいて、今はソフト・バレエとかでギターを弾いてる石塚のりひろ……みんな、ベラと呼んでたけど。その人と、俺の前にサポートでギターをを弾いてた横関敦さん。それに、俺を加えた5人。本城はコゾクにも、ソロをとらなかったんだよ。今回は三柴くん以外、全員、ギタリストなんだ。その5人でまず8小節ずつソロを回して、そのあと4小節ずつもう一度回して、最後はみんなで弾きまくるっていう"宴たけなわギターソロ"を披露してます。

その順番は、それぞれがいちばん映えるようにって、俺が考えたんだ。だけど、そういうかけあいって、楽器やってない子が聞いたって、どのソロをだれが弾いているか、わからないじゃない。だから、世界初の……多分、初めてだと思うんだけど、呼び込みが入ってるの。

——呼び込みって？

橋高：だからさあ。ギターソロの前に、ライヴみたいに「橋高！」っていう声が入ってるんだ。それで、二回し目の前に「もうイッチョウ！」って入ってて、最後にみんなで弾くとこは「ご一緒に！」っていう声が入ってる。（笑）

だから、大槻の声さえ聞いてたら、素人さんにもどのソロをだれが弾いているのか、わかるようになっているんだ。

——それは、だれのアイデア？

橋高：これはね。今まで、いろんなセッション・アルバムを聞いてて、弾いてる人がわからないとイヤだなっていう自分たちの欲望でもあるわけよ。俺、前に藤本泰司くんっていうギタリストのアルバムに参加して、そのときもギタリスト8人くらいでソロを回したのね。それで、そのプレイ・バックも聞かないで、しばらくしてから出来上がったCDをもらって聞いてみたら、自分で自分の弾いてる部分がわからなくなっちゃってさ（笑）。内田に当ててもらったのよ。

だけど、それじゃいかんなと思って。ましてや、筋少じゃない。ギター・キッズだけが、聞いてるようなタイプのバンドじゃないから、ご親切にいってみようかなと。ちょっと恥ずかしいんだけど。

——え〜、面白い試みだと思うけど。ファン思いの橋高ちゃんらしい。

橋高：でも、おかしいでしょ？　こんなの、筋少にしか、できないもんね（笑）。でも、このバージョンは、昔からのファンにとっても満足だろうし、今のメンバーになってからのファンにも"昔から筋少は、すぐれたプレイヤーを輩出していっているのね"ってことが、わかってもらえていいんじゃないかな。なにしろ、筋少スクールといわれているくらいだから。だから、今回はギタリストだけだけど、筋少の歴史を感じてもらえたら、嬉しいよね。

——92年の4月6日で10周年なんだっけ？

橋高：そう。その日には、バーン！とめでたく10周年記念ライヴをやろうと思ってるんだけど、そのあおりで1月からマンスリー・ライヴというのをやります。それは通常のライヴじゃなくて、お祭りものなんで、いろいろと趣向を考えているんだ。筋少のメンバーが昔やってたバンドが復活したり、お友達ミュージシャンに出てもらったり、まだ企画段階でハッキリしないこともあるんだけど、楽しいパーティ・ライヴを考えてます。それで、4月6日を盛大に盛り上げようと。

——4月6日のことは、もうなにか考えてるの？

橋高：今、考えているのは、「釈迦」で弾いてくれたメンバーを全員集めて、みんなの前でライヴをやりたい。スケジュールの調整がつけばだけど……むりやりにでも、あわせてもらう（笑）。

——盛り上がりそうだね？

橋高：でしょ？　だから、解散もないし、脱退もないの！

——また、いってるよ（笑）。

橋高：だって、今日のテーマなんだもん（笑）

■ライヴ・スケジュール　1月18日、2月14日、3月22〜23日＝新宿パワーステーション　問い合わせ先＝ホットスタッフ（☎03-3478-8820）

〈バックナンバー〉■VOL.1➡橋高インタビュー■VOL.5➡全員インタビュー

BURST UP DEEP

最近はカッコつけてないんですよ。

1992年、DEEPはクラブ・シーンに欧り込みをかけるという。マンチェスター系ギターバンドやハウス・ユニットがしのぎを削る未知の世界へ身を投じることは、彼らにとっての必然なのだろうか？　結成当初からすでに既存のアンダーグランド・シーンを超越してしまっているDEEP。彼らにとってひとつのターニング・ポイントになるであろう、今年に向けた新しいDEEPサウンドとは？　撤底インタビュー。

INTERVIEW：YUSUKE KATOH
PHOTOGRAPHY：YOUSUKE KOMATSU

——まず音を聴かせてもらって驚いたのが、「まだこういうやり方が残っていたのか！　してやられた！」みたいな。例えばハウス系のバンドとかマンチェスター系のギター・バンドって70年代のハードロックとかをモチーフにしてるけど、DEEPの場合はもっと古い60年代や50年代のオールディーズとかビッグバンド・ジャズからリズム・パターンを持ってきてるでしょ？

ATSUSHI　そう言っていただけると（笑）。

RAY　やっとわかってくれる人が出て来たな（笑）。

JYUICHI　みんな音聴いて「ハードですね」って言うだけだったからな（笑）。

RAY　あと、「ダークですね」とか（笑）、決まりきった反応しか出ない（笑）。

——（笑）。だから、プロフィールの好きなバンドのところにも全然その時代のバンドとかミュージシャンの名前があがっていないのにもかかわらずそういうサウンドになっているというところにすごく興味があるんだけど。そういうコンセプトとかはどこから出て来たのかな？

JYUICHI　そういう話は全然してないですよ。

——誰か個人的にその時代のサウンドが好きな人がいるとか？

ATSUSHI　個人的には古いのは結構好きです。

——古いっていうと、オールディーズとか？

ATSUSHI　そういうのはあんまり聴いたことないんですけど、エルビス・プレスリーとかは軽くベスト盤でかじったぐらいで。

RAY　僕はジーン・ビンセントが好きなんですよ。

——へーっ。じゃあ敢えて勉強したっていうことでもなくて？

ATSUSHI　マンチェスター系のギターバンドは話題だったから聴いて、いいなって思うバンドもいくつかいましたけど、あとはホントに60年代のバンドで。ドアーズはみんな共通して好きみたいですけど。

——あ、ドアーズっぽいっていうか、もちろんサウンド的には違うんだけど方法論的には近い物を感じたんだよね。ドアーズもバックはすごくオーソドックスなスタイルで、その上にジム・モリソンのあの歌詞とボーカルが乗っかってるっていう。その辺は意識してるのかな？

RAY　全然意識はしてないです。

——このバンドを作った当時は今みたいな方向性っていうのは見えてなかったのかな？

RAY　「DEEPらしい曲をやろう」っていうのはあったけど、「何をやろう」っていう狙いがなくて始めたバンドだから。

——プロフィールによると「初めてスタジオに入ったその日にすでに2曲もオリジナルが出来てしまった」ってあるけど、その頃の曲と今の曲とではかなり雰囲気は違うのかな？

ATSUSHI　ていうか、そのときの曲は今はかなり端の方に追いやられてるよね（笑）。

——ライヴでは真ん中あたりにいわゆる耽美系っていうかダークな雰囲気の曲が2曲並んでたんだけど—ごめんね、曲名わかんなくて（笑）—それが初期に作った曲なの？

ATSUSHI　静かなやつですか？　それは違いますね。ちょっとジャジーな雰囲気の曲あるでしょ？　あれは最初の方に作った曲なんですよ。

——えっ、そうなんだ？

ATSUSHI　なんかこう、「ロックだなぁ」みたいな曲の方が新しめかなぁ？

JYUICHI　「ロックだなぁ」？　なにそれ（笑）。

——（笑）。僕はてっきりあのジャジーな雰囲気の曲は最近作ったものだとばっかり思ってたんだけどね。じゃあ別に音楽性を変えていこうとかそういうのではなくて、もともとDEEPの中にあったものだ、と？

JYUICHI　自然に変わってってるらしいっていうか（笑）。

ATSUSHI　楽曲はみんな作れるんで、個人個人がアイデアを提供するっていうレベルではそういう意識はあるのかもしれないですけど—僕個人的にはあるんですけど—でも誰か一人が曲を作ってるわけじゃないからひとつの色に染まらないだろうし、それに誰かが曲を出したからっていっても全部は作って来ないんですよ。歌メロはRAYがつけてるしギターはJYUICHIがつけるし。そう

今年はちゃんとした形で音を聴かせられたらいいな。

いうノリで、出す前に自分が想像してたのと違うかたちで出来上がるから、意図してもあんまりね。

JYUICHI だから特別変えて行こうっていうのはないんですよ。

ATSUSHI ていうかそっちのが楽しいし。自分一人で最初から最後まで作ったらつまんないと思うんですよね。自分が持ってった曲にRAYがメロディーをつけたときに「そうか、こうきたか」みたいな、そうやって広がって行くっていうか。

——僕は曲を作るときにも4人でビッチリとミーティングをして、「このリズムはこうでこのギターはこうで、そこにこういうメロディーを乗っけよう」みたいにキメキメで作ってるのかと思ってたんだよね。

RAY それはないですよ。

JUN 「こういう曲になるだろうな」っていうのは見えてるんですけど、ちゃんとこういう曲なんだっていうのは出来上がるまでは見えないんですよね。

——あと、リズム・パターンから作ってるような感じがすごいしたんだけど。

JUN 特にリズムから作ったっていう曲はないですね。

——あの50年代の雰囲気のリズム・パターンはかなり意識しないと出てこないと思うんだよね。この若さで(笑)。実は歳ごまかしてるんじゃねぇか、こいつら、みたいな(笑)。

一同 爆笑

RAY あやしいのは一人いますけどね(笑)。

ATSUSHI なんかドラム叩いてるやつがあやしい(笑)。

JUN 秘密です(笑)。ホントは30とかいって(笑)。

——(笑)。やっぱり普通その歳だと出て来ないと思うんだよね、こういうノリは。

JUN でも「こういうリズムでこういうノリで」っていって作ったっていうことは俺はないです。

ATSUSHI 個人的に言えばああいうベースの雰囲気好きなんですよ、シンプルなのが。そういうのが好きだからそういうの弾いちゃうんですよ。かといってあんまり聴いてはいないんですけどね。

——JUNは?

JUN 俺もATSUSHIに比べるとそういう音楽は全然知らないんですよ。

ATSUSHI 最近あれだよね、ドラミングが手数が増えてきて古臭くなってきてるよね。カッコいいなぁ、みたいな(笑)。

RAY メンバー同志で褒めてどうすんだよ(笑)。

JUN いや、おまえのベースも最高だよ(笑)。

——JYUICHIはどうなの、その辺は?

JYUICHI 俺はまぁ、古いのとかも聴きますけど、どっちかっていうと影響の影響っていうのが強いんじゃないですかね。古いの聴いてた人の音楽を聴いてその流れでそういうのも聴くようになったっていう。そんな感じでしょう、多分。

——これからはクラブ系のイベントにたくさん出るということなんだけど、そこでちょっと深読みするとですね、いわゆるラッパーやおマンチェ系が70年代のハードロックなり60年代のロックなりを取り入れたっていうのは、彼らはお客さんに踊ってもらうっていうのが第一でしょ? そうすると、そういう誰でも知ってる音楽をモチーフにした方がわかってもらいやすいというか、のってもらいやすいと。そこでDEEPももっと昔の本当に誰でも知ってるオールディーズとかジャズとかを取り入れたという作戦なんじゃないか、と私は考えた次第なんですが?

RAY ブーッ(笑)!

ATSUSHI 作戦はないよね。

JYUICHI でもとりあえず「シンプルにいこう」っていうのはあったから、シンプル=今みたいな形になってるんじゃないんですかね。

ATSUSHI でもこのバンドの前のバンドのときに、ギター・バンドでサンプリングとか取り入れたバンドがイギリスでバーッと流行ったでしょ? それで、コンピューターとか駆使してサンプリングとかやったらおもしろいなと思ったんですけど、難しいでしょ、MIDIとか。こんなちっちゃなMIDIでもマニュアルがこんなにぶ厚いし。そこで挫折したんですよね(笑)。だから今個人的には原点回帰しちゃってるのはその反動で(笑)、そういうサンプリングとかを使わないで自分たちなりにそこら辺のおいしいところを持って来ていい音楽作れればいいなと思ってるんですよね。

——そこでサンプリング的って言ったらあれだけど、いいアクセントになってるのがRAYのボーカルなり歌詞だと思うんだけど。

ATSUSHI うん、すごい好きなんですよ。

RAY また褒めてる(笑)。おまえのベースもいいぜ(笑)。

一同 爆笑

ATSUSHI 曲を作って持ってくときにはまだメロディーは乗ってないんですよ。そこでどういうメロが乗っかるかとか家で考えるんですけど、つまんないんですよ、コード進行に沿ったメロディーしか浮かばなくて。でもRAYは全然考えつかないようなメロディーを乗っけるんで、驚かされるんですよね、「こういう風に来たか!」みたいな。

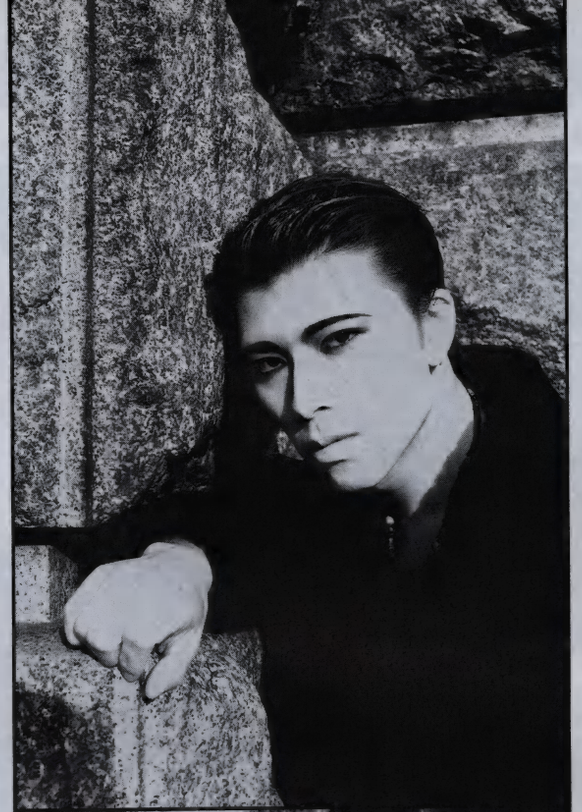
RAY ホントにコードに沿ってないんですよ(笑)。

——それって本人も唄いにくいし、バックも合わせづらいと思うんだけど?

《ライヴ・スケジュール》2月2日=クラブチッタ川崎、14日=新宿LOFT、22日=INKSTIC SUZUE FACTORY●問い合わせ先・グラスハウス☎03-3359-9416

BURST UP

DEEP



ATSUSHI　でもそういうのが来るのってサビで来る場合が多いんですよ。コードがこうポンポンポンって進行してても、メロディーだけ流れるようにスーッて来るからそんなやりづらいとかはないですよ。

——歌詞は歌詞カードがないんでよくはわからないんだけど、例えばEX—ANSの頃とかとは変わって来てるのかな？

RAY　なんか、意識してないんですよ、最近は。カッコつけてないっていうか、自分では。他人が見るとどうかわかんないですけど自分では素直に書いてるつもりです。あと、最近は恋愛とまではいかないけど、そういうのもちょろっと入って来ているし、男と女、みたいな。そういう歌詞を書いている自分にびっくりしている次第であります（笑）。

——いわゆる耽美系っていうか、刹那主義的なイメージはまだあると思うんだけど。

RAY　それが好きなんじゃないんですかね。好きなんでしょう。

——でもダンスっていうことを考えると、RAYのボーカルなり歌詞なりはマイナス要因になっちゃうような気もしないでもないんだけど？

RAY　いや、別に踊ってもらわなくてもいいんで。

ATSUSHI　でも個人的に言えば、ああいうダンス出来る音楽—ダンスってカッコ悪いね（笑）。っていうのは、その場に行って聴いてるのにはカッコいいけど、サビでガーッと来るような曲が好きだから、今自分たちがやってる曲も好きなタイプの曲なんですよね、サビでガーッと来るし。

——そこで既存のダンス系のバンドとは差別化を図っていると？

RAY　〝ダンス系〟っていうのは意識したことないです。

ATSUSHI　〝ダンス系〟っていうとどんな感じのバンドですか？

——今だったらマンチェスター系のギター・バンドかなぁ。

ATSUSHI　でもあの辺て結構ロックですよね。古いロックですよね。そこら辺には結構近いんじゃないですか、DEEPは。もっとハウスとかに行っちゃうと、そういうのはいろんな人たちがやってるし今更自分たちがやる必要もないし。

JYUICHI　だから「どこみたいにしよう」とか「どこみたいな感じにしよう」とかはないんですよ。「どこみたいなのはイヤだ」っていうのはあるんですけどね（笑）。

JUN　だから「こういうの作りたい」とか思ってもなかなか出来ないんですよね。「こういうのやりたい」と思って曲を作ってても途中でカッコいいフレーズが浮かぶとそっちになっちゃったりして（笑）。

JYUICHI　だから曲も出来てみないと全然わからないんですよ。

——いや、資料に「92年はクラブ系のイベントに多く出演する」ってあったから、ダンスにこだわってるのかなと思ったんだけど。

JYUICHI　なんですか、それは？

マネージャー牛久氏　いや、今年はクラブ系のイベントに出そうかな、と……。

RAY　知らないよ、そんなの（笑）。牛久さーん（笑）。

JYUICHI　でも〝クラブ系〟っていっても幅広いよ。

ATSUSHI　〝クラブ系〟っていってもイギリス・ギター・バンドみたいなのだったら一緒に出来るでしょうけど、どハウスみたいなのはまるで一緒に出来ないよ（笑）。

JYUICHI　まるでダメお（笑）。

——古っるぅー（笑）！　本当は歳ごまかしてるだろ（笑）！

いや、プロフィールでATSUSHIとJUNが「SODOMが好き」ってあったから。

ATSUSHI　いや、SODOMっていっても昔トランスからレコード出してた頃のSODOMですけど。

——だから、SODOMっていうバンドは昔はもうバリバリのポジティヴ・パンクで、それからDJをメンバーに入れたりしてハウス系の音楽をやるようになったでしょ？　DEEPもそのノリに近いのかな、と思ったんだけど？

ATSUSHI　ああ、あれはすごいでしょ、変わり方が。活動休止して次に出て来たらもう全然違うバンドになってて。あそこまでは行かないですよ。

——で、ポジパンの頃のSODOMはダンスなんていう物からは一番遠いところに位置していたバンドだと思うんだけど、そこから急激にダンスに傾倒して行ったでしょ？　それがDEEPにもあてはまるのかな、と思って。

JYUICHI　うん、そういう流れではないんですよ。RAYにしても前はEX—ANSっていうバンドをやってたから今んところはそういう見られ方が強いのかもしれないけど、このメンバーが集まって、メンバーが変わったわけですよね？　そうすると自然に音も変わるっていう感じで、それだけで特別変えて行こうっていう意識的な物でもないんですよ。メンバーが変わって出した音がこうだったというだけで。

RAY　メンバー集める時点ではなにやりたいかよくわかってなかったんですよ。なんかドーン！　としてるのがいいな、っていうのはあったけど。

——ドーン！　て？

RAY　なんか、重いやつ（笑）。

——その上でボーカルが遊んでる、みたいな

RAY　そうなんですよ（笑）！

ATSUSHI　だから曲単位では「こういう曲がやりたい」っていうのはありますけどバンドとしてどういう風になりたいっていうのはないんですよね。60年代が好きだからといってドアーズみたいになりたいわけじゃないし（笑）。それはまた一要素でありぃの。

JUN「こういう風に踊ってくれ」とかお客さんに押しつけることはないんじゃないですかね。そりゃ黙って腕組みして観てられるよりはのってもらった方が嬉しいですけど（笑）。それがその人で楽しいんだったらそれでも全然構わないですね。

ATSUSHI　まあ、今年はちゃんとした形で音を聴かせられたらいいなと思いつつ、練習もして上手くなり、カッコいいライヴと、あと、&いい曲ですね。それでバッチグーですね。

《バックナンバー》■VOL.6➡RAY単独インタビュー■VOL.7➡全メンバー・インタビュー

残りものには福がある(笑)

バックナンバー

Vol.② Zi:Kill のすべてが1冊に!!

Vol.① 筋肉少女帯 がまるごと1冊に!!

SHOXX SPECIALシリーズ

好評発売中!!

各1,500円

A4判132ページの豪華版

主な内容

- ▶80ページにも及ぶカラーページには未公開最新フォトがいっぱいだ。
- ▶全メンバーの個別ロング・インタビューを一挙掲載
- ▶幼時〜子供時代の珍しい写真も公開されるノンフィクション・ストーリー。
- ▶最新ステージを完全密着独占レポート／バックステージでの素顔ものぞけるぞ、と。
- ▶全メンバーの特技・趣味・宝物etcを公開。
- ▶項目別インタビューは興味深いテーマで、今まで誰も知らなかったことが…。
- ▶全アルバムそしてビデオを自己解説。
- ▶ロッキン・コミックまである。

胸の中で響くこの声が、あなたに聞こえますか。

断罪！断罪！また断罪!!
キンショーボ〜〜〜ン!!

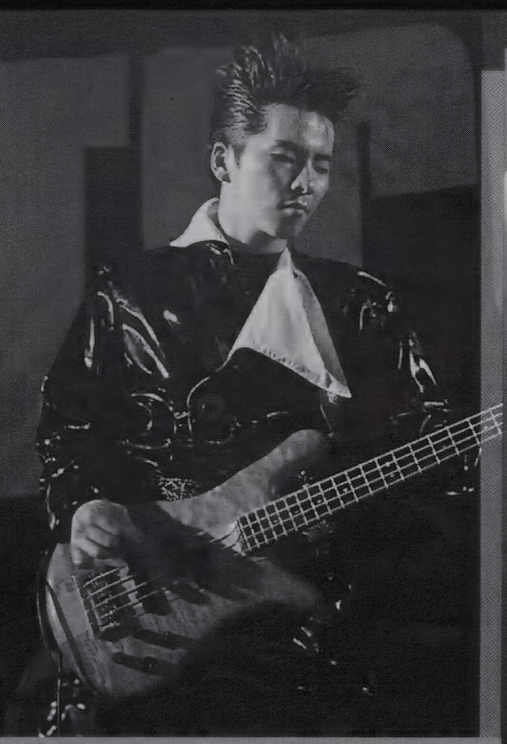
■購入方法■

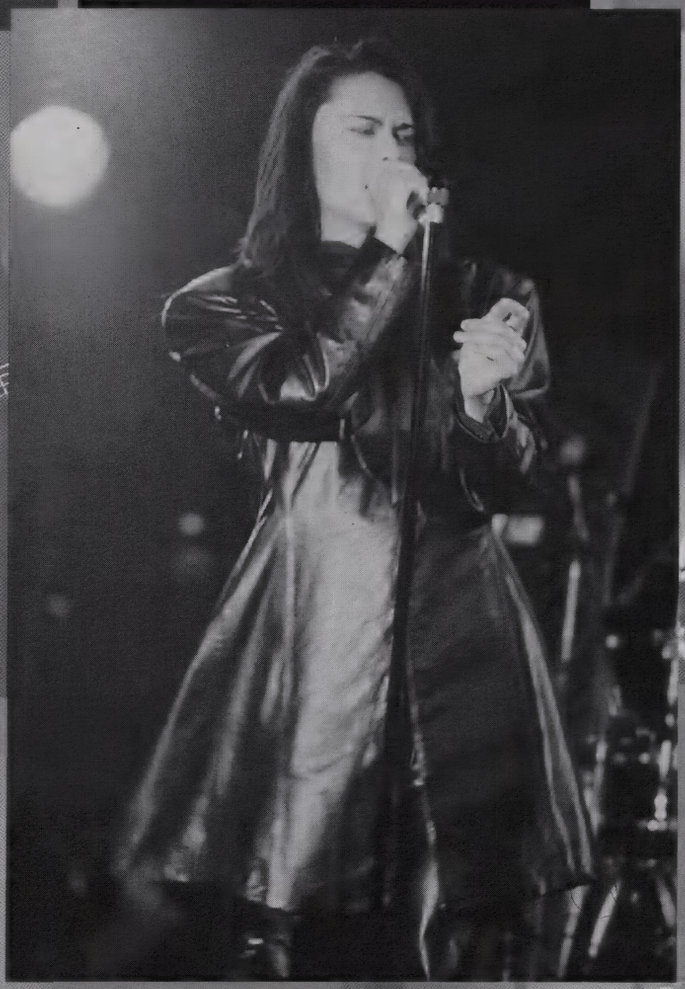
直接当社に注文する場合は、定価＋送料（1冊260円、2冊310円）分を、切手または現金書留、小為替で、〒104 東京都中央区銀座5－1－7数寄屋橋ビル5F　音楽専科社経理部「ショックス・スペシャル　Vol.○（○の中には希望のナンバーを入れる）」係まで送って下さい。

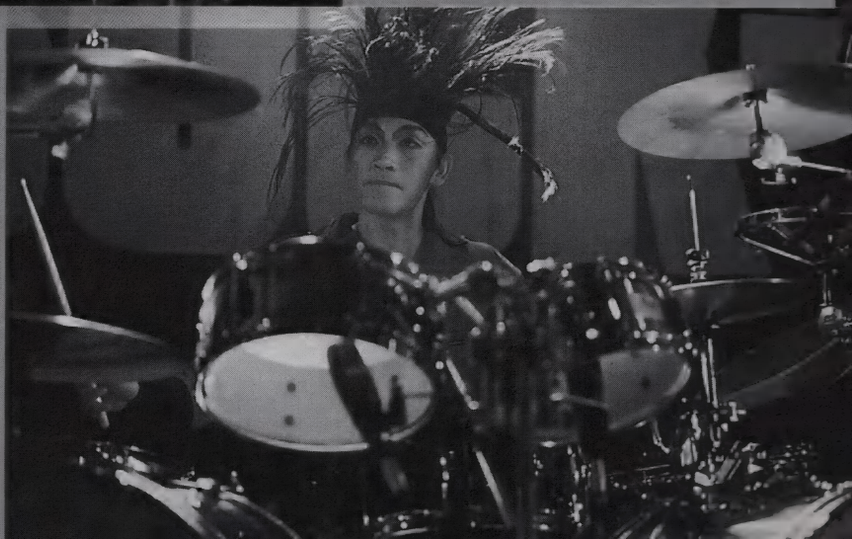
Buck-Tick

Live at Shibuya-Quatoro '91.11.27

REPORT:KIYORI MATSUMOTO







選ばれなかった何万の人達の分まで、今日は覚悟してって下さい。

ライブを見終わった時に満足感が残るのも、音楽にグッと入り込めるのも、自分にだけに響いてくる秘密のメッセージがあるからではないか!? 日頃からそう考えていたら、ほら聞こえた！――そういう話しを書きました。

全てが事実であって事実じゃないような浮遊感を持って同時体験する……ライヴを見れた気になれるバーチャルリアリティを、この日クアトロのライヴを見ることのできなかった数万人の方に送ります。

太陽ニ殺サレタ……
目撃者ハ誰モイナイ
僕ハ心ニ傷ヲ負ッテイル
太陽ガ確信犯
傷ハ　カナリ深イ
僕ハモウ　ダメカモシレナイ
モウジキ死ンデイクノダ……
果テシナイ悲哀トトモニ
ヒッソリト
誰ニモ気ズカレズ
僕ハ　暗闇ニ葬ラレル
サヨウナラ
アノ人ニモウ一度逢ッテ伝エタイ
アイシテル
サ・ヨ・ナ・ラ……
僕ハ　太陽ニ殺サレタ……

ハッとして我に返ると、私は人と人とに挟まれながら始まったばかりのBUCK-TI-CKのステージをボンヤリと見つめていた。さっきのメッセージは一体何だったんだろうと思い、ステージ上の5人の動きに目を移す。テレパシー!? 暗闇からのメッセージは鮮明に頭の中で繰り返し、繰り返し、まるで教会の鐘の音のように響き渡っていた。500人も押し込めば、超満員というライヴハウスでBUCK-TI-CKがライヴを行うという試みに、つめかけたファン。幸運にもチケットを手にすることができた一握りのファンの中に私もいた。生々しい程リアルにメンバーを見ることができる距離のオールスタンディング。真ん中あたりはギュウギュウに押されて、人の圧力でユラユラと右へ左へ、満員電車の中みたいに揺れる。その中で私も体を預けたまま、ほんの数メートル先のアッシを見た。アッシの視線がこっちに移った。ドキッとしたけど、"よくあることよ"と心の中で自分を戒める。事実、隣のケバイ女の子2人組が

「ねえ、今アッちゃん、こっち見たよね」

「見た見た。目が合ったもん」

と嬉しそうに話している。ところが、再びこっちを見たアッシの唇の動きは、さっき聞いたメッセージとシンクロして……まさか!?

ハッとして我に返ると、開演前のクアトロの店内に私はいた。客入れが半分以上進行している。ステージは至ってシンプルで、ドラム後方の壁側に"BUCK-TI-CK"の文字だけが大きく主張しているだけのものだ。ステージ正面の、一段高くなった所にポジションを構え、開演を待った。

7時35分、場内アナウンス。開演前の緊張した場所の雰囲気の中、一人の男のファンが(彼は初期のアッシを意識した髪型)「アッシー!」と叫び、ウォーと拍手をあびるシーンもあって、狭い空間における一体感は次第に高まってゆく。

7時43分、SEが流れ、BUCK-TI-CKの文字を照らしているライトがブルーからパープルに変わった時、メンバーが登場した。サングラスをかけ、タバコを吸いながら、アッシがステージにそろうと、余裕がない位に狭い。前方へ押し寄せるファン。真赤な衣装に身を包んだ今井のノイジーなギターが大音量でスピーカーから流れる。ゴージャスなセットも、大量のライティングもない。何もない。BUCK-TI-CKをデコレートするものは何もなく、武装していないまま。"太陽ニ殺サレタ……"からライヴはスタートした。

渡された曲順表に目をやると、割と初期の曲が取り入れられていることに驚いた。"TO-SEARCH""HURRY-UP MODE""VICTIMS OF LOVE""PHYSICAL NEUROSE"……

大きなホールでライヴ展開をしている彼等が、今回あえてライヴハウスという、アンダーなスポットを望んだのは何故だろうか。人間はないものねだりだから、広い空間が手に入った現在、狭い空間に興味を持ったのだろうか。昔の曲を、通常のツアーから離れてプレイしてみたかったのだろうか。……違う。マスターベーション的なノリは感じなかった。メンバーは個々に、少々緊張している風であった。それは勝手が掴めなかったからかもしれないが……。他に考えられる理由として"初心を思い出すため"というのもある。古い曲を演奏し、かつて彼らが新宿JAMでライヴを行って来た日々を再現することによって貪欲な精神さえも蘇らせようという企画なのだろうか。

「久し振りです。あ……(息が荒い)は……久し振りに、みんな興奮してます。え……それじゃ、選ばれなかった何万の人達の分まで今日は覚悟してって下さい」

MCの後、"VICTIMS OF LOVE"はギターとボーカルのみで始まった。彼等が欲しかったのはコーフン!? 自らに刺激を与えることなのだろうか。そんな漠然とした思いを抱きながらステージを目で追い続けた。曲が丁度、♪絡め会う指〜♬ のところへ差しかかった時、アッシはファンに手を差しのべ、わずかに触れそうになった。いや触れたかもしれない。もしかして、彼等がライヴハウスでやりたかったことは、これだったのかもしれない！ とっさに私はそう思った。実際にファンと手を触れ合うということではなく、一対一の、心に触れ合うような感触を求めていたのかもしれない。形のない大きな人気を、確かなテレパシーで感じ合うことによって、確信したかったのがもしれない。

私が傍受したメッセージと、隣の人、周りの人が受けたものは、きっと違うはずだ。だからこそ、BUCK-TI-CKは多くの人の心を虜にする"確信犯"なのだ。

異空間でのソリッドなアプローチは、また別の一面を、まるでトリックを明かすかのように見せてくれた。それは、彼等のサウンドが実にマニアックで、UKのクラブバンドのようなアンダーな部分をかなりのウエイトで持ち合わせているという点だ。ギターは、歪ませて大音量でうなっている。アシッド感漂うソロ。もしかしてBUCK-TI-CKがプライマル・スクリームのように、インディ・ダンスと呼ばれるようになっていたとしても決して不思議ではなかったような気がする。本来、相当にマニアックなルーツを持っているバンドであるから、突然のライヴハウスも妙にハマっていたりするのかもしれない。

ステージ上では、ほとんど派手に動きまわることなどできず、一口飲んで投げた紙コップの容器は天井に当って落ちた。

「今日は、ここで(ライヴが)できて嬉しいです。無理言って、狭いところで…狭いと言っても結構広いですけど、いろんな人に言って、3ヶ所できました(拍手)……熱い……(笑)今日、しゃべらなくていいみたい。どんどんやって…(笑)」

ファンの盛り上りは気に入ってる様子だったが、ライヴハウスだから"ラフ"なのかと思っていたものの、メンバー全員ビシッとステージ衣装を着込んでいる為、熱くて仕方ないという感じ。メンバーのいるステージ上は随分酸素も少いゾーンのようにも見えた。

"JUPITER""さくら""LOVE ME""スピード"で、本篇全15曲を終了。"JUPITER"ではゴスペルを彷徘させ、"スピード"ではレイヴに我々を陥れる。5人はダブル・アンコールに応え、トールは「全然疲れてねーや！」と毒気づき、ヒデはありったけのピックをバラまいた。

9時30分、全てが終わった。

「昔の曲さあ、アレンジ変わってなかったね」

「今日のアッちゃん、気取ってたよね、最初のところで(笑)」

「もう、服が汗でベッチョリ。絶対カゼひくよォ」

「結構長い時間やってくれたね」

「これで1週間は幸せな気分でいられる」

ファンの子達の、幸せそうな甲高い声が、建物の外へ出るまでの階段に響き渡っていた。BUCK-TI-CKのライヴで、ダイレクトなインナー・メッセージを、それぞれに受けとめて帰ってゆく。表へ出ると、チケットを入手できなかった多くのファンが、少しでも彼等と近い空間を共有したくてか、大勢待っていた。何故かこの日は、特別に冷え込む夜だった。

渋谷センター街を、余韻に浸りながら歩いていると、遠くの方で、耳鳴りのように聞こえる何かに私は反応した。

太隣ニ殺サレタ……
目撃者ハ誰モイナイ

ハッとして我に返ると、目の前のステージにいるBUCK-TI-CKが一曲目の"太陽ニ殺サレタ……"の演奏をしていた。

イメージからの解放 もう今、迷うことはない 新たに展開されるYUKAIワールドとは――？

DIAMOND YUKAI

〝今日はユカイなクリスマス〟。DIAMOND YUKAIも今夜だけはいつものライヴとは趣向を変えて、ゲストのZIGGYの森重クン達と楽しいパーティを観せてくれました。

こんなに楽しいライヴが出来るようになったのも『ピエロの囁き』を作ったことで、何かをふっ切ったからなんだろうな。いや、何かを掴んだと言った方が正しいかな？

そこで今回は〝『ピエロの囁き』その後〟と題して、彼の内面にまで迫ってみよう――。

――今日は『ピエロの囁き』その後ということで話を進めていきたいんですが、ぼちぼち周りの反応も耳に入って来てます？

「そうだねえ。まあ〝丸くなったねえ〟って言われるかな（笑）。」

――それは予想通りの反応？

「うん、予想通り。」

――でも「丸くなった」って言われるのにはちょっと抵抗があるんじゃないですか？

「いや、別に、いいんじゃない？　作戦だから（笑）。人間なんてイメージなんかどうにでもなるさ。（SHOXXをペラペラ見ながら）この人たちだって髪の毛立てないで普通の顔してたら普通の人だもん。イメージだよ、そんなの。俺だってこういう恰好してればそういう人に見えるって。」

――でもそのイメージっていうのをレッド・ウォーリアーズ時代は大切にしてたっていうか、自ら作ってた部分ていうのはあったわけですよね？

「作ったわけでもないけどね。」

――自然に周りからそういうイメージで捉えられてしまったっていう方が強い？

「いや、最初は作ったな、やっぱな。作ったっていうか、ちょっと古い話になっちゃうけど、当時そういうバンドっていうのはいなかったのよ、周りに。マイナーなライヴハウスでやってるようなバンドしか。そこでまぁロックンロールでさ、ニューヨーク・ドールズみたいなのやったらおもしれぇなっって、そっから広がってったのかな。

だから、最初はレベッカの後に作ったバンドだったからそんな感じのサウンドだったけど、まぁ好きなことやろうっって始めたバンドだったから。それがどういうわけかこうなってっただけだよ。」

――じゃあ戦略とかうんぬんかんぬんよりもまずは「好きなことをやろう」と？

「そうだな。イメージは大切にしたけどね。でも当時にしてみればそういうロックの恰好するっていうのが斬新だったんだよね。すっぽり穴の空いてる時期でさ、アクションとかいたけど、そういうメタル系の人たちの後だったからさ。」

――いわゆるパンクがきて、ニューウェーブがきて王道っていうかバッド・ボーイズ系がすっぽり抜けてた時代ではありましたよね。

「うーん、バッド・ボーイズっていうのは後からついた言葉だからさ、よく作ったなと思って、そういう言葉を。だって元々ロックなんてバッド・ボーイズの物だからさ、悪いヤツっていうイメージあるじゃん？　それをやってみたくてやってただけだからね。それがすっぽり穴が空いてたのかな。そういうメタルの間にさ。

それでブームみたいなのが起こっちゃってさ、ブームを利用して成功した人たちもいるし、それはそれで人それぞれの生き方だからいいことだけど、ブームがあったことによって見えたね。日本の中のロック人口っていうのが。レッド・ウォーリアーズでも来てくれたファンっていうのは本当の意味で半分もいなかったなって、ロック人口は。あとはまやかしだったな。」

――そこでロックじゃない人に合わせようとか歩み寄ろうとはしなかったでしょ？

「そういうのもあったよ。そうしないと寂しいじゃない。もちろんコアな人たちに喜んでもらえる物を一生懸命作って来たけどさ。」

――まぁそれでレッド・ウォーリアーズが終わって、ソロ第一弾『I'M THE BEST』を出したわけなんですけど、俺はあの展開すごく好きだったんですよ。「なに、世界の女は俺の物？　よしよし、これぞYUKAIだ。次は宇宙まで行って金星の女とでもエッチしたれ！」みたいな（笑）。で、第二弾が『ピエロの囁き』でしょ？『このギャップはなんだ？』と。

「うん、だから一度引いてみたのよ。なんか押し一辺倒だったんだけど、引いてみてさ。アルバム的にはさっきも言ったけど丸くなったように取られると思うけど、全然丸くなってないと思うよ。」

――もっともっとガンガンいってくれる人だと思ってたんですよ。

「だからね、いくっていうことをもう一回よく考えてみた上でさ、いくってルックスやイメージでいくんじゃなくてさ。狂気っていうのは関係ないわけよ、そんな物はさ。今狂気っていう物にすごい興味持ってるんだけどさ、もう何にもいらないわけよ、普通なわけ。元々狂気の人間なんてさ、狂気な服は着ないって。普通の人間がバンパイアになるのが狂気なわけよ。

白くなれるんだよ、狂気って。白くなった時ってモラルがないわけ。モラルで生きてるんだよな、人間って。白くなった時が狂気なんだ。

今回は、このアルバムではまだ完璧には表現できなかったんだけど、自分のやりたいことを試行錯誤しててさ、どんな物が自分にとって一番エキサイティングな物なんだろうなって。

最初はさ、今まである物を全部否定して別の物に乗り移るっていうのがエキサイティングだと思ってたわけ。でも動き出して初めてわかったんだけど、それをもう一歩踏み込んだ形でステージでは表現したいのよ。今度のNHKホールは一本の映画を監督したような感じで新たな世界を表現したいんだ。」

――そこで敢えて今までのイメージをぬぐい去る必要が果してあった、と？

「邪魔だよ。それはコンサート観に来ればわかるよ。」

――すいません、まだコンサート観てなくて。

「いやいや、これは難しいし俺も表現しにく

かったわけね。今回のアルバム作るときも、"こういう物なんだ"って納得させることなかなかできなかったし。(吉田)建さんとかの力で新しい物とかできたのもあるんだけど、改めて見えたのは、そこじゃないっていうことなんだよ。それは全部ステージに傾けるよ。今、次のアルバムを作れば一番いいことなんだけど、もっとわかりやすくなると思うんだよ、俺のやりたいことが。でもそれはコンサートで表現するよ。今までやってみて見えた自分ていうのがあるからさ。だから、ステージっていうのはひとつのアートだね、今の俺にとっては、アルバムを作るのと同等な。それは感じた。

――その中で監督であり、主演男優であり?

「そうだな。そういう展開しようかなと。」

――前はやっぱり主演男優のみ、みたいな感じだったと?

「そんなことないけど、ある意味で前は前で試行錯誤してたから。要するに『I'M THE BEST』の自分ていうのはちょっとミスキャストだったんだな(笑)。わかったのは、ハリウッド映画の嫌いな俺がハリウッド映画をやったってしょうがないよ。LAの嫌いな人間がさ、LA行ってやってたってだけよ、名声売るために(笑)。でも俺はやっぱりインディーズ系の映画好きなのよ。だからやっと自分の古巣に戻ったって感じだな。」

――そこでまたこだわっちゃうと、例えば沢田研二とか吉川晃司とか、あの人たちは作り物は所詮作り物として受け止めて、その上で遊んでるっていう感じがするんですよ。DIAMOND YUKAIという人もきっとそういう資質を持っていると思ってたんですけどね。たとえハリウッド映画だろうとその中で十分遊べるし自分を表現できる人だと。

「俺は違うな。わかんないけどさ、吉川とかジュリーとかに関しては。コンサートとか観に行ったこともあるし面白いなとも思ったけど、俺は違うよ。別に彼らと同じ土壌歩きたいとも思わないし、俺は俺の道があるからさ。どうでもいいね。」

――いや、今回吉田建さんとやってるということで、建さんにはそういうニュアンスを求めたのかなと思ってたんですよ。

「だから、俺は違う意味で建さんとやったんだけど、俺が変わるだけじゃなくて建さん自身も変わってほしかったんだよ。

だから『ピエロの囁き』に関してはちょっと丸い感じの波長みたいなさ、丸くないけどさ、全然。『I'M THE BEST』よりは角ばってると思うんだけど、その角ばり方が見えないアルバムになっちゃったなっていうかさ。『I'M THE BEST』よりはとんがってるんだよ、実は。」

――とんがってますよね。確かに『羊の皮を被った狼』みたいな感じはしますけど。

「だからそれはステージで表現するよ。ステージで狼を全部出しちゃうよ。

今回建さんとやって初めて気づいたのは、俺は吉川とかジュリーとかとは違うところにいる人間だっていうことなんだよ。全く違う。それはやる前は気づいてなかったのよ。『I'M THE BEST』のときも試行錯誤してたしね。でも今回はっきりわかったよ。だから今迷うことはないし、もう今からDIAMOND YUKAIを100%注ぐよ。」

――それでもやっぱりコンサートでは、レッド・ウォーリアーズの頃のファンとか『I'M THE BEST』のファンとかが大半を占めてるわけでしょう?

「それは十分楽しませる自信あるよ。まあ正直言って今ね、ただロックンロールをやるっていうこととかさ、新しいことをバグってやるっていうことに全然興味ないのよ。一番興味あるのは自分の世界だよ。これを広げることが出来たらさ、俺はもっと新たな喜びを感じられるんだなって。

それは俺がこういうこと言ってててもライヴ観たら"なんだ、違うじゃないか"って思うかもしれないし感動してくれるかもしれないし。それはひとつの映画を観て判断してくればいいし。俺は単なる映画の論評を言ってるだけだからさ。」

――観たあとで嫌いなら嫌いでも全然構わないし、みたいな?

「そうだな。そりゃそうよ。

俺今思ったんだけどさ。アルバムを作るっていうことはミュージシャンやシンガーのやることなんだけど、俺はミュージシャンやシンガーじゃないっていうことに気づいたんだよ。それだけやってるってことはなんのスリルもないし面白くもないのよ。もちろんそれを煮詰めたり、いい音楽を作るとかっていうことにはすごい興味あるけど、俺は音楽家じゃないのよ、単なる。」

――じゃあ何てお呼びすればいいんでしょうか?

「難しいんだけど、ステージ構成を含めた上での、映画仕掛けのアート・ミュージックかな。今度はそういう構成でやっていこうと思ってるし、新たな自分が見えてきたから迷うことなく行こうと思ってる。

正直言って俺自身は別の世界に行ってるつもり。バンドやってる人たちともソロ・シンガーとも別の次元に行ってるつもり。見えちゃったの、すべて。」

――それでも音楽にこだわってるっていうのは何故なんでしょう?

「こだわる?」

――例えば本当に映画一本撮っちゃうとか。

「映画ってさ、正直言ってそれなりの技術いるし、頭もいるし、金もかかるしさ(笑)。

でもさ、ミックスなんだよね、これからは。単なる音楽やってるだけとかさ、単なる映画をやってるだけじゃ、もう面白くもなんともないわけよ。ミックスだよ、これからは、いろんな物の。アートのミックスだよ。もうさ、なんでもあるのよ、今。新しい物なんてないのよ。新しい物はアバンギャルドになり過ぎるとかさ。」

――それはつらくないですか? クリエイティヴな仕事をしている人が「新しい物は何もないんだ」という認識に立っちゃうと。

「ミックスで作れるよ。子供作るのと一緒だよ(笑)。一人じゃできないんだよ。

それと、俺にとってステージってこんなに大切な物なんだっていうのがわかったね。レコードより大切だよ。レコードじゃ表現できないよ。映画と一緒だよ。俺にとっての今回の『ピエロの囁き』はステージのサントラ・ミュージックだよ。そういうことに気づいた。だからサントラ・ミュージックを聴いてステージ観に来てほしいな。サントラ・ミュージックだけを聴いても映画わかんないしな。」

――それでステージを観ればサントラ・ミュージックもよりわかるし?

「そうだね。だからさ、話は戻るけど、いわゆるイメージとかルックスなんてさ、俺は日常こういう恰好してるし髪の毛赤してるしさ、それはそれよ。だって映画の役者だってみんなそうじゃない。その役のまんま舞台挨拶するわけじゃないしさ。それと一緒だよ。どうでもいいことなのよ。でも、表現したい物っていうのは、新たなるYUKAIワールドだよね。」

――それは日常とは完璧に切り離されている物だ、と?

「うん。それはまぁ自分の中の遊びだよね。」

――だからこそイメージはいらないっていうことなんでしょうかね?

「そうだな。」

――前はやっぱり、起きてから寝るまでもうDIAMOND YUKAIそのまんまっていう感じでしたもんね?

「いや、生活は全然変わってないよ、相変わらず家庭ないしさ(笑)。」

――(笑)。家庭があっちゃダメ?

「いや、ダメじゃないよ。来るときが来れば作るんだろうなぁとは思うけど。だから今は優雅な生活してるよ(笑)。」

――でも今家庭を持ったらちゃんと発表して「これが俺のカミさんだ」ってみんなに紹介するんでしょうけど、ちょっと前だったら隠してたような気がするんですよね。

「隠さないよ。昔から隠し事嫌いだもん。結婚したら結婚したって言うよ。だって俺平気で好きな女と手ぇ繋いで街歩いちゃうもん。

でも面倒臭いよ、好きな女とかさ。面倒臭いじゃん。まぁ、今んところいらないね(笑)。」

――ステージなりレコーディングの方が全然面白い、と?

「だってさ、生活ないんだよ、俺。生きていて生きてないようなもんだよ、俺自身。」

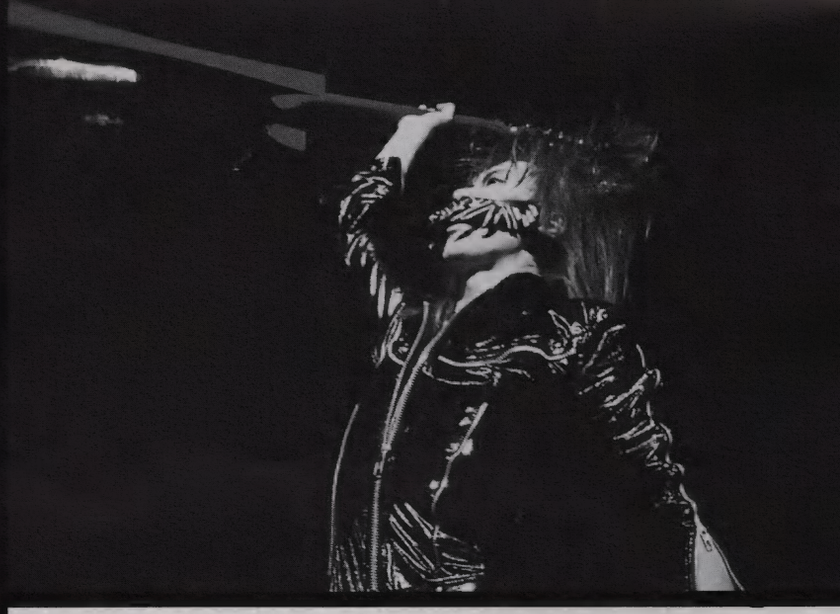
――ステージやレコーディング以外は?

「うん。生きていて生きてない存在かもしれないな、今んところ。どうでもいいわけよ、生活なんて。俺にしてみれば。だって面倒臭いじゃん、いちいちさ。全部お手伝いさんにやってもらいたいよね(笑)。家政婦さんが欲しいよね、俺になんの迷惑もかけないツーカーの家政婦さんが欲しいね(笑)。帰ったら家が綺麗になってててさ(笑)。他にはなんにもいらない(笑)。」

「映画と一緒だよ、俺にとって『ピエロの囁き』はステージのサントラ・ミュージックだよ」

INTERVIEW: YŪSUKE KATŌ
PHOTOGRAPHY: MOTOI ŌHNISHI

ライヴ・スケジュール 1月23日―札幌市民会館、27日―大阪サンケイホール、29日―NHKホール●問 MMG・マザー&チルドレン(☎03・3225・2361)



INTERVIEW:REIKO ARAKAWA
PHOTOGRAPHY:REIKO ARAKAWA

ON THE ROAD AION

今回のツアーは、リラックスし過ぎ!?

メジャー・デビュー・ツアーを終え、ホッと一段落(?)のAION。新しいファン、そして男性ファンが増えたという今回のツアー、本人達は満足のような、不満のような……?各地でかなりリラックスして出来たというライヴ、彼等の新しい一面に触れたファンも多いのでは?このツアーを振り返っての思い出話しをNOVとIZUMIに、これまた、かなりリラックスして語ってもらった。

——大阪から始まった今回のメジャー・デビュー・ツアーも無事、先日の青年館ホールで終わりましたが、このツアーでお互い思ったことって何かありますか?例えば質問でも。

NOV:質問はないなぁ。どお?

IZUMI:質問はないけど、博多の時のビデオ見たら可哀相やったな(笑)。

NOV:(笑)ありゃ、参ったもんな。

IZUMI:アンコールで、NOVだけ先に出てって、で俺等がなかなか出てこなかったと。ハムスターみたいにウロチョロ、ウロチョロして。で、あげくの果てには3人が出てきたら勝手に演奏し始めて、NOVギター振り回して踊ってんの(笑)。

NOV:俺、あの時、何してんのやーって言ってなかった?

IZUMI:JDI安達〜!(ローディとマネージャーの名前)とか言うとった。(笑)

NOV:(笑)もう誰でも呼ぶよ。そう、それでやっと3人出て来てくれたら、サブちゃんがベース持って、IZUMIくんドラムや。何するんやろ?と思ったら、サブちゃんが弾き始めて……。

IZUMI:NOVをだまそうと、ドッキリ・カメラやったんや、3人で。

——**(笑)それは、ひどい。**

NOV:歌が分かってたら、それを歌えばいいやん?曲は知ってるけど、外タレの曲やから、歌全然知らないし、どうしよう!って。ウァーッて、もう暴れろ!って(笑)。あれはホンマにドッキリした。過去のライヴの中でもあれほどドッキリしたのは初めてちゃうかな?へんに戸惑ったわ。俺はどこへ行けばいいんだ、みたいな。

IZUMI:何していいんか、分からん状態。(笑)——その後、皆に文句言ったんですか?

NOV:何であんなんすんの?って。

IZUMI:曲終わっても動転してた(笑)。

——**それって前から決めてたんですか?**

IZUMI:いや、急に。NOV驚かしたろって。

——**前のツアーでもそんなのありましたよね、確か8月神戸で。**

NOV:そう、神戸。アンコールで「CARE KILLED THE CAT」のはずが、突然「HUMAN GREIFMAN」に変わった。俺がステージの上で〝CARE〜〟って言ったらIZUMIくんが〝ちゃう、ちゃう〟って。(笑)

IZUMI:ああ、その時は俺も「HUMAN〜」はやめよう言うとったんや。

NOV:そや、そや。皆で話して「CARE〜」で決まっとったんよ。で、俺が先出ていって喋ってて、皆出てきたんで、〝アンコールいくぞーCARE〜〟とか言ったら、〝ちゃうちゃう〟って。(笑)〝えええええー?替えやがったか〟と思いながらも、「HUMAN GREIFMAN」を歌った。

——**どうして、そういうことするんですか?**

IZUMI:ま、言ったらかなりリラックスしてきたって感じがするな、ライヴで。

NOV:や、でもあれはお客さんは、またNOVさんぼけて、みたいな(笑)。もう博多は

究極やった。

IZUMI：ま、かなりリラックスはしとった、MCとか。カタさはなかった。

NOV：逆にそれで、ほぐれたんかな？

IZUMI：ほぐれ過ぎー（笑）

――今迄のインディーズの頃のライヴでは、こういうことはなかったんですか？

IZUMI：ないな。今回、リラックスし過ぎっていうくらい。

NOV：インディーズのラストの方で「レモンティ」とかやり出したんや。あの辺ぐらいからちょっと……。

――何ですか、それ？

NOV：〝甘くてすっぱいレモンティ～♪〟シーナ&ロケッツの。それを俺等がメンバー・チェンジしてカバーした。俺がベースでIZUMIくんドラムで、サブちゃんがヴォーカルのDEANくんがギター。あの辺からやね、なごやかな雰囲気のライヴをやっていこうっていう感じになってきたのは。

IZUMI：でも、それってな、アンコールの時って決めとるやん？前から決めてここでやろうーって。けど最近はそうじゃないやん、その場で決めるやん？（笑）

NOV：（笑）ラウドネスも突然やったもんな。

IZUMI：ホンマに気分的にほぐれてきた。形だけじゃなくて、人間が。

――楽しさの追求っていうのが変わってきた要因なんじゃないですか？

IZUMI：多分。ライヴが仕事的なものになってくるのが嫌なんやな。やっぱり楽しみたいっていうのあるから。

――ファンが思ってたAION像とのギャップっていうのもあるとは思うんですが。

NOV：うん、やっぱり違和感持つやろね、ある程度は。でも、どうなんかな？

IZUMI：って言うか、初めての客が多いんやないの？だから違和感ってあるんかな？ないような気もするけど。コワイっていうイメージはあったと思うけど、それはなくなったと思う、ある意味で。暴力的なコワさっていうのは……。緊張感のある張りつめたコワさはあるかも知れないけど。

NOV：襲いかかられそうな、そういう雰囲気はもう消えてると思うけど。

――そうですか？まだまだあると思いますけど。

IZUMI：そりゃ、DEANの前で写真撮っとるからや。（笑）

――（笑）あの人はコワイですよ！どういう動きに出るかわかりませんからね。

IZUMI：俺等もコワイ。いつヘッドで殴られるかわからん。

――でも、IZUMIさんのあの尖がったヘッドで刺されるっていう恐怖がメンバー間にはないんですか？

IZUMI：いや、俺は常にヘッドは見とるもん。

NOV：俺、DEANくんによく刺される（笑）。ツアー中、1回思いっきりみぞにきた。あれはコワかったなぁ。あと、どっかでね、もろにぶつかって頭にたんこぶ。もう頭デコボコ（笑）。IZUMIくんに当たったことはないんちゃうかな？

IZUMI：俺はないと思うで。

NOV：周りのスタッフはよくヘッドが俺に刺さりそうなことがあるって言うんやけど、でも当たったことはない。

IZUMI：ギターの立ち位置でも、ヘッドの方だけ気を付けてればいいやん？ベースはまぁ、来たがるやん？タイプてきに（笑）。そやから余計危ない。突っ込んでくるからな。

NOV：（笑）また長いから、あのベース。

IZUMI：デカイもんなぁ。

――今、居ないのをいいことにDEANさんの話しが出ましたが、このツアーで他の2人が成長したなぁと思う点は？

NOV：何か言ってなかった？DEANくんと、動きの問題で。

IZUMI：動きっていうよりな、コーラスを歌って欲しかった（笑）。DEAN、ライヴでコーラスとかよく忘れるんや。コーラスのいらん時はマイクの前に立っとるけど、コーラスの時はいない！だから、コーラス言うて欲しい、と。今は俺がコーラスの大黒柱（笑）。

――それに関して彼は反省してるんですか？

IZUMI：いや、わかってない。キレとるから、憶えてないと思う。罰金いうとんのに忘れとる（笑）。

――サブリさんのMCはどうですか？

NOV：結構影響された部分もあるんちゃうかな？客とのやりとりの雰囲気とか面白いなと思うし。彼は声量あるんですよ、客もそれに合わせてウォーッみたいな。結構フロントマンの素質があるなぁ、と（笑）。

IZUMI：ホンマはギターやりたかったんやから（笑）。

――（笑）このツアーで個人的に得たものはありますか？

NOV：まず、初日の大阪でライヴ終わってぶっ倒れてしまったんですよ。そのおかげでツアー中の配分を考えて、後は結構うまく出来たんちゃうかな？ノドの調整に関しても、昔は気張ってる部分が多かったんですよ。途中で声がおかしくなったり、しょっちゅうだったんですけど、今回のツアーでは、その考えた配分が体になじんできて、自然に体が動いてくれて、ちゃんと歌えるようになった。それが今まで出来なかったことやから、インディーズ、メジャー関わらず、自分自身ちょっとは成長したかな、みたいな。それが1番大きかった。

IZUMI：それはあるな。前のツアーやったら、声がすぐ枯れとったもん。声出てなかったもんな。それがいけるようになってきたから、テクニックを憶えていったからな、と。

NOV：そう？

IZUMI：ノドに無理な負担をかけずに歌えるっていう。

――IZUMIさん、毎回髪形違ったんじゃないですか？

IZUMI：今回は全部立たせんかった。どうかな？と思って反応が。でも何も変わらんかった（笑）。

NOV：（笑）客はビジュアルを見てくれると思うけど、それに対してこだわりは持ってないんとちゃう？

――逆にそういう面白さがあると思うんですね。常に同じものではないっていう。

IZUMI：次はどうなるか、わからんっていう。

NOV：そういう気持ち持ってくれたら嬉しいしね、毎回毎回同じライヴしようなんて思ってないから。同じ曲やっても、場所が変わればライヴの雰囲気も変わるもんやからね。

《バック・ナンバー》■VOL.3➡メンバー全員インタビュー■VOL.4➡IZUMI・パーソナル・インタビュー■VOL.5➡師弟激突対談with LUNA SEA■VOL.6➡メジャー・デビュー・インタビュー

STILL ALIVE

NO REASON TO PRAY

INTERVIEW : MARI ITOH
PHOTOGRAPHY : NORIO KAJIKI

今、必要なメッセージを……。

——いきなり部分的な話になるけどマーク・フェラーリ（元コールド・スェット）作曲、トミー・セイヤー（元ブラック&ブルー）作詞というナンバーがあるよね。どういういきさつで彼らの協力を得ることになったの？

TAKA　日本でスティル・アライヴっていうバンドがこういう活動をしてる。で、LAに限ってだけど、音楽的な交わりを持とうとこっちからも、向こうからも、アクションがあって……つまり、スティル・アライヴに曲を提供したいっていう向こうの人が何人も出てきた。その最初がマーク・フェラーリだった。俺たちが頼んだんじゃなくてね。

BASHI　時期的なこととかで間に合わなくて実現はしなかったけど、有名なミュージシャンからプロデュースしたいっていう声もかかったんだ。

——マークは、どういう形でその曲を持ってきたの？

SHIGE　7曲ぐらいを完成した形で持ってきて、合うものをチョイスしてくれって。

——その中で、「RUN FOR THE BORDER」が、いちばんスティル・アライヴにハマる曲だったわけ？

BASHI　と言うか、他の曲は自分たちでも作れるんじゃないかというタイプだったんだ。「RUN FOR～」は、作ろうと思っても、すぐにはできないだろうと思ったのと歌詞がよかったから。

——もう一曲、他人の曲があるよね。ビートルズの「PAPERBACK WRITER」のカヴァー。これは、どうしてやったの？

SHIGE　曲が好きだっていうのと、詞がちょっとひねってあっておもしろいから。たとえば、売れてるバンドでも自分たちが演奏しないで音を出してるっていう……そういうの、あるでしょ。そういうのも引っかけて……わかるかな……まぁ、好きなんです（笑）。

TAKA　あと、カヴァーを入れたいってのもあったし。

SOUGO　スタジオで、いつも遊びみたいにしてやってるんですよ。何も決めないで。で、録るとき、これはハズしたら徹底的にハズれるな、と思った。その代わり、シンプルな曲だし決め事がないから、うまくいけば、それぞれの個性が出るな、と。そういう瞬間的な形をレコーディングに持ち込んじゃえ、と。そういう点では、いちばん好き。

SHIGE　それぞれが好きなことやってる。

TAKA　荒削りだよ。

——そういうおもしろさがうまく出た、と？

SOUGO　うん。周りの反対もあったけど。

TAKA　そう。俺らは、ただのロックン・ロールだから勢いでいっちゃえ！って。で、その勢いが出たからいいと思ったの。でもビートルズに対する価値観が違うオジサンとかがいるらしくて……。

SOUGO　ビートルズのイメージが再現されてないって言うの。でも、それは、そういう年代の人たちの思い入れだからさ。俺らはビートルズを知らない人に聴いてほしいんだから、それでいいじゃない？　で、クレジット見てビートルズの曲だって気づいてオリジナルを聴いてくれたら、いいじゃない？

BASHI　カヴァーやるのって、知らないヤツに聴いてほしいっていうのがあるよね。ライヴでも、ハンブル・パイやグランド・フアンクのカヴァーやってるけど、俺らがやってるのを聴いたのがきっかけで、そういうバンドを聴き出したコがいるんだよ。

TAKA　今じゃ雑誌にも出ないようなバンドでしょ。そうやって、今ある媒体以外のものを取り入れられるってことだから、いいことだよね。

——そういう姿勢で、ライヴでもアルバムでもカヴァーをやっていくわけね？

BASHI　うん。でも、基本的には、好きだからやってるんだよ（笑）。

SHIGE　「あとね、「PAPERBACK～」に関しては、俺はシメたもんだと思ったの。何故かって、反対されたからシメたもんだと思った。アルバムが出る前から反発する力が働いてきたってのは、アクになるんじゃないかな、と。

——周りが何も言わないような無難なものを出すんじゃナンだし……みたいな感じ？

SHIGE　うん。けっこう重要な意味があるかもしれない。

TAKA　〝ワンパッケージ〟っていうのの幅を広げなきゃいけないよね。オジサンたちのワンパッケージってのは、聴きすぎてて、ちっちゃいんだ。俺らよりも下の世代とかに聴かせてやるためには、そのへん（自分たちの世界）ばっかり見てたらわからないからさ。

——スティル・アライヴって、けっこう周りのスタッフにとっては〝危ない〟タマだったりするみたいだね。

TAKA　危ないよ。急に全曲英語にしちゃうし（笑）。

BASHI　周りで「スティル・アライヴは大丈夫だ」とかって言って安心する人が多いから、よけいムチャクチャしたくなる（笑）。

SOUGO　放任主義で、ありがたいよね。で、わがままだから、やりたい放題やらしてもらってる（笑）。レコーディングにしても、SHIGEがプロデューサーで、バンドのメンバーとエンジニアだけでやったし。

——あと、個々の曲に関して、もう一点。ラストの「INSTRUMENTAL」は遊び感覚っぽいけど、こういうものを最後にポロッと入れるというのも意味があるんでしょ？

SOUGO　これは曲の合間に中休みとして入れようって考えて、「PAPERBACK～」みたいに何も決めないで一回か二回やって、ドラムとベースだけ録ったの。で、あとからギターは一人ずつ、好きなように入れてよって感じだった。短い曲だけど、あとから付け足していったということで他の曲と違うシチュエーションで録ったわけ。そういうことをやってみたかった。

SOUGO　「PAPERBACK～」とも少し違うんだけど、どっちも計算が成り立たない状態でやった。そのまま録っちゃおう、と。レコーディングがインタープレイの場になってるという……。今のレコーディングは機材がいっぱい揃ってるけど、昔のバンドは4トラックとか8トラックでスタジオ・ライヴで録ってたわけじゃん。

——今のレコーディングの細かさとか、型どおりにやられてるということへの問題提起でもあるわけだ？

TAKA　そういうのもある。音楽って、豊かなものでしょ。（型にはまったり）やってる側の了見が狭いと、伝わるもんも伝わらないし。聴いてる人も、音楽的に麻痺してるところってあると思うんだ。

——音楽本来の楽しみ方を、スティル・アライヴは身を以て示してくれる、と？

TAKA　うん。でも、現在っていうのも忘れてないよ。それがあっての話よ。

——最後になってしまったけど、ニュー・アルバムを通していちばん言いたいことは、どういうこと？

TAKA　アーティスト側からできる、世の中に対するメッセージの送り込み方っていうのがあると思うのね。俺たちには地位とか名声はないけど、プロでありCD出してるアーティストとして、音と（言葉による）メッセージを伝えるのが特権だし、義務でもある。それで、押し付けがましくなく、日本でも世界でも、今、自分たちや周りにとって必要なメッセージが今回のアルバムだと思う。

——それじゃ、アルバムが1月リリースということだし、92年の展開についてひとこと。

SHIGE　激動、熱烈、そして反逆の年にしたいですね。

SOUGO　バンドも自然淘汰されてきたし。

TAKA　アルバムに関しては、これをライヴでやっていって自分らで匂いを確かめるっていう作業が残ってる。アルバムに入ってる匂いを、自分たちの体から生で出すっていう作業がね。

SHIGE　そうだね。レコーディングした時点、つまり、アルバムに入ってるものは赤ん坊なんだ。赤ん坊の状態でみんなのところに届く。俺たちは、その間に赤ん坊を育てるために一生懸命やってるわけだから、ライヴに来れば、いろんな面でCDより熱い音になってるはずだよ。それは確実に言える。

——ライヴに通えば『NO REASON TO PRAY』の曲たちの成長過程が見られるということになるわけだ。

BASHI　そう。アルバムどおりのものを（ライヴでも）望む人が、まだ多いけど、そういうふうに考えてくれる人を一人でも増やしたい。

SOUGO　まったく同じにやることだってできるけど、体質的に俺らは、そういう人間じゃないから。そのときの感情とか勢いとかが露骨に出るバンドだと思うからね。

TAKA　なんせ……生モノだってことだよ。曲も、成長するもんであったり……さ。俺たちも作って間もないわけだから、お客さんがCD聴いてから観に来るのと俺らがやるのとが対等のシチュエーションなの。

SHIGE　3月からツアーで、いろんなところに顔出しに行くんで……。

BASHI　それまでにがんばって英語の歌詞を覚えて、一緒に歌う、と。前は英語だと覚えられないっていうクレームもあったけど、最近、ファンも「今度、全部英語なんですよね。早く覚えなきゃ」とか言ってる（笑）。

——それは、進歩だね。

TAKA　ただ、英語でやってるけど、日本語の重要性も感じてるってことを付け加えたい。日本語でロックをカッコよく歌うことのほうが難しいんだ。今、進行形で取り組んでるのは英語だけど、日本語でカッコよく歌いたいっていう憧れもあるんだよ。それは、今後の課題なんだ。

スティル・アライヴが3作目になるアルバム『NO REASON TO PRAY』を完成させた。もちろん、自信作。以前から半分ぐらいは英語で歌っていたが、今回は、全曲英詞。でも、べつにカッコつけてるわけではない。やりたいようにやっている、いつも気楽な感じのメンバーたちだが、見えないところでのさまざまな戦いもあるのだ。名前のごとく生き残るために、抵抗を続けながら、彼らはロックの王道を突き進む。

アリーナ37℃総力編集の'91年夏のイベント集決定版!!

THE LIVE '91

1991 SUMMER EVENT MEMORIAL BOOK

絶賛好評発売中!!

定価1350円

誰もが震えた!!

X

復活の日

J(S)W
UNICORN
BAKU

……and more

真夏のイベントをこの一冊に完全パック。
エックス、ユニコーン、ジュンスカ、バクなど、
イベントを荒らしまくったやつらが大集合だ。

発行:㈱音楽専科社 〒104 東京都中央区銀座5-1-7数寄屋橋ビル5F ☎03(3574)0201

〈きりとり線〉

書籍注文書

●書店(番線)印	●受注　月　日	●部数	●担当者
	●書名 ザ・ライヴ'91　定価1350円(税込)		
	●あなたの名前	●TEL	
	●あなたの住所 〒		
書籍扱い	●出版社名 ㈱音楽専科社 〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F ☎03(3574)0201 FAX.03(3574)8548		

※この注文書は切り取らないでコピーしたものでもかまいません。

1・22 ON SALE STILL ALIVE NEW ALBUM

ノー・リーズン・トゥ・プレイ

NO REASON TO PRAY

TECN-30126 ¥3,000

マーク・フェラーリ(ex.コールド・スウェット)、
トミー・セイヤー(ex.ブラック&ブルー)
書き下ろしの"Run For The Border"を
含む **全13曲!!**

M・フェラーリ&T・セイヤー来日決定!!
何かが起きる気配…。

SINGLE 同時リリース!! RUN FOR THE BORDER TEDN-205 ¥1,000

スティル・アライヴに関するお問い合わせは…●モンスター・プロダクション 0482-23-0073(担当:太田) ●コンチネンタル・レコード 03-3506-8702(担当:杉本)

Continental

ARENA37℃ '92年1月号臨時増刊

グレイテスト・ロック

GREATEST ROCK

1991 ROCK YEAR BOOK

1991年のロック・シーンを大総括！

X

大復活の全軌跡!!
50ページ大特集

LADIES ROOM

ARENA37℃誌上大好評連載
月刊レディース全12回完全再録

BY-SEXUAL

100 Q&A+NAO4コママンガ全12本

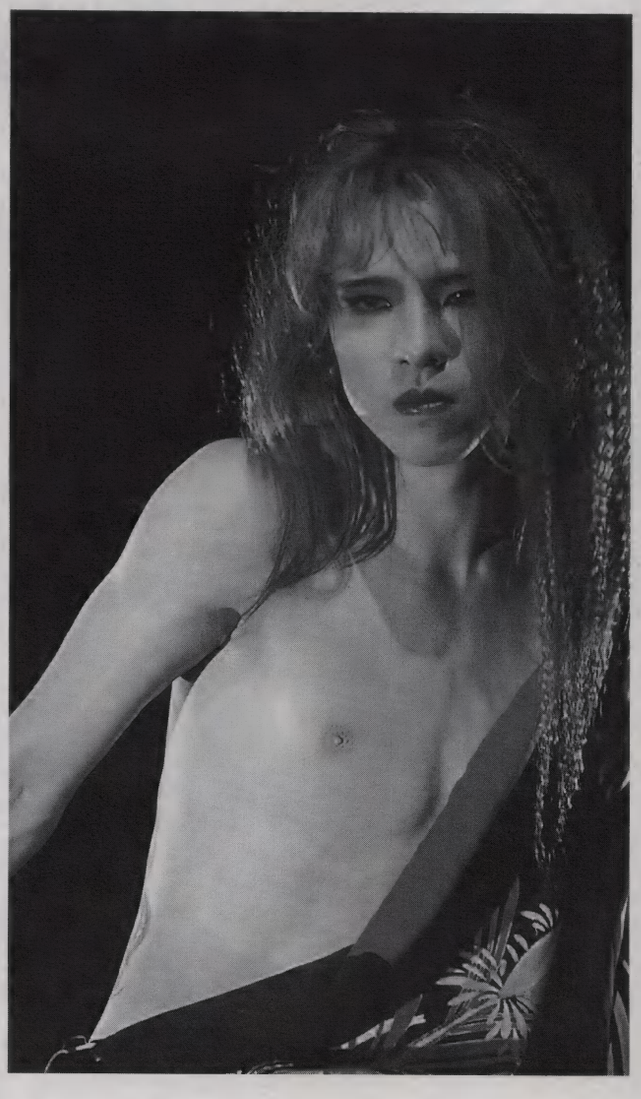
Zi:Kill

直筆50 Q&A+パーソナル・インタビュー!!

BUCK-TICK/SOFT BALLET
東京YANKEES/GRAND SLAM
JUSTY NASTY/DIE IN CRIES
かまいたち/LUNA SEA
STROWBERRY FIELDS

定価1500円

絶賛発売中！



＊発売と同時に売り切れが予想されます。今のうちに書店で予約してください。

〈きりとり線〉

雑誌注文書

●書店(番線)印	●受注　月　日	●部数	●担当者
	●書名　ARENA37℃ '92年1月号臨時増刊『グレイテスト・ロック』　定価1500円（税込）		
	●あなたの名前	●TEL	
	●あなたの住所　〒		
雑誌扱い	●出版社名　㈱音楽専科社　〒104 東京都中央区銀座5-1-7 數寄屋橋ビル5F　☎03(3574)0201 FAX.03(3574)8548		

※この注文書は切り取らないでコピーしたものでもかまいません。

Zazzle Records "OUTBREAK"

LIGHT & SHADE

―― 光と蔭の狭間で交錯するデカダンス ――

DEBUT ALBUM **"Trial Product"**

- S.M.D.
- HYPER
- LIFE
- PLASTIC
- HEAVEN

UKZZ-1028 ¥2,575 (¥2,500)

'92.1.25

超強力バンドZazzle Recordsより登場！

DEBUT！

無機質の中で増殖する
優しさ.哀しみ.怒りの融合体....

DEBUT ALBUM **"Dogmatism"**

- S.A.D.
- NO LIFE
- 水槽の中で
- URGENT-MIND
- BUST UP
- 君に関する短い時間

UKZZ-1029 ¥2,575 (¥2,500)

VELVET ENDROIT

VELVET ENDROIT

'92.2.25 DEBUT

JEANNE D'ARC

1st.ALBUM
"DANGEROUS ELEMENTS # 1"

HARD'N'HEAVY ROCK で押しまくる「ジャンヌ ダルク」フルアルバム（全9曲）でZazzle Recordsより登場！

UKZZ-1030 ¥2,884(¥2,800)

NOW! ON SALE

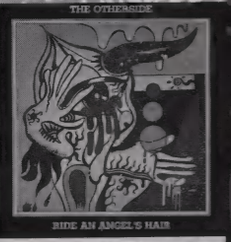
THE OTHERSIDE

くちずける5つの聖書（バイブル）、
駆け抜ける5つのスリル

"RIDE AN ANGEL'S HAIR"

■KISS YOUR PALE FACE■FLAME OUT
■人工天使■太陽の死■蜃気楼

UKZZ-1027 ¥2,575(¥2,500)



Zazzle Records / distributed by UK PROJECT tel : 03-5486-8771

MEMORIAL BOOK

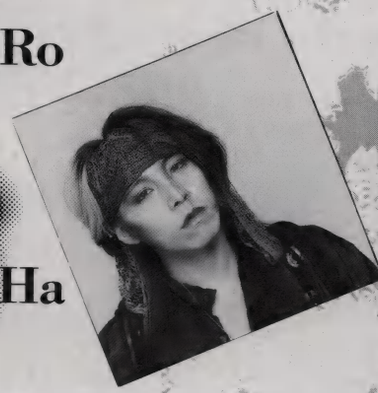
まさに旋風のように現われ、去って行ったかまいたち。妖怪事典より親切なかまいたちメモリアル・ブック！

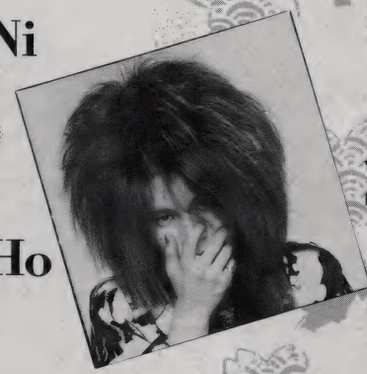
889歩のかまち

いろはにほへとかまいたち

I Ro Ha Ni Ho He To

Ka Ma I Ta Chi





絶賛発売中！・1980円

ありがとう、かまち！一生忘れない

■ARENA 37℃、P-5のかまち、すべてを出血大サービス！未公開フォトも盛り沢山!!★"かまち大作戦"で連載したP-5のパーソナルPHOTOをもう一度！メンバーが知られざる幼少時代を語ったパーソナル・インタビューも掲載。★かまちライヴ完全年表&なつかしのライヴPHOTO！

■もちろん最後のかまちもバッチリだ！★撮りおろし、ラスト・スタジオPHOTOは当然のこと！

★ラストTOUR"さよなら△またきて□"も密着取材。初日の名古屋、地元の京都、そして最後の渋谷公会堂は？★楽屋でのメンバーの素顔も独占取材。

■まだまだあるぞ!!★結成からの完全ヒストリー&ディスコグラフィー。

★ARENA 37℃連載中の"けんchanがやらねば誰がやる"より「はちゃめちゃ日記」を再録！★渋谷公会堂後のメンバーから自筆メッセージも！

発行：㈱音楽専科社
〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F

〈きりとり線〉

書籍注文書

●書店(番線)印	●受注　月　日	●部数	●担当者
	●書名　かまいたちメモリアル『いろはにほへとかまいたち』定価1980円(税込)		
	●あなたの名前	●TEL	
	●あなたの住所　〒		
	●出版社名　㈱音楽専科社　〒104　東京都中央区銀座5-1-7　数寄屋橋ビル5F　☎03(3574)0201　FAX 03(3574)8548		

※この注文書は切り取らないでコピーしたものでもかまいません。

LADIES ROOM

男と女のいろんな関係

人間という奴は外見と発言だけで他人を判断する癖がある。今まで、レディース・ルームもそういう判断のされ方をしてきたように思える。彼らは実力をひけらかしたり、自分たちがスタジオで見せている真剣な表情を語ったりすることがあまりなかった。ロッカーとして、そういう部分を語るのは確かに"美学"からはほど遠い。しかし、他人は誤解するのだ。今、レディース・ルームを誤解しないためにこのインタビューを読んでほしい。

INTERVIEW:YOSHIYUKI OHNO
PHOTOGRAPHY:COHSHU SAKAI

——メジャー・デビュー・アルバム『MADE IN SEX』は、前からやっていた曲も入っていたけど、今度のアルバム『LOCK AND KEY』は、ほとんど書きトしの曲でしょう？

百太郎：全部。新曲です。

JUN：1年前の曲が1曲かな。

——それは、LOCK AND KEYの中で、どれ？

JUN：そう。あれは1年前に書いた曲。

——クレジットを見ると、作詞・作曲・全員で書いたことになっているけど、それはそういう作り方をしたの？

GEORGE：バラバラで作ってきたものに、いろいろつけ加えて作ると、もう曲自体がまるっきり変わっちゃうから。アレンジなんていうナマやさしいものじゃなくてね。

——そういうふうに持っていきたかったの？

GEORGE：あんなめんどくさいこと、やりたいなんて思うわけないじゃない(笑)。

——詞に関しても、そういう作り方をした？

百太郎：詞に関しては、ほとんどオレが原案を出して作ったから。

——そのへんは、肩を歌うのはヴォーカリストだっていう責任感から？

百太郎：いやー、そんなんじゃないですよ。まぁ、流れのままっていうだけで(笑)。

——ファースト・アルバムと較べると、下世話じゃないっていうか、ラヴ・ソングにしても心情的な部分を歌っているけれど？

百太郎：そういう気分だったことは確かですね。若くなったんじゃないかな(笑)。

——エッ？　歳をとって落ち着いたっていうんならわかるけど……。

百太郎：いや、若くなってるんです。ホラ歳をとるほどエロくなるでしょ、人間って。

——アマチュア時代から続いていたSEX路線を、このアルバムで捨てようとしているのかな？

百太郎：いや、それはないですよ。SEXにしても、いろいろな表現にしても、恋愛の描写のひとつだから。それに、オレはただ女が好きで、いつも一緒にいたいっていう。

JUN：ただ、な(笑)。

百太郎：ただひたすら女が好きだから、オレにとって、SEXの歌も、ちょっとクサイ歌も同じなんですよ。もちろん、今回のアルバムも、後で読み返してみたら、けっこうスケべっぽくなっているところもあるし。オレたちはただ素直にやっているだけですよ。

——じゃあ、他のメンバーから「この部分を少し変えてくれない？」とか「こうした方がいいんじゃないか」っていうような意見は出た？

百太郎：具体的なことは覚えてないけれど、もちろんそういうことはありましたよ。

NAO：みんなクチ出したんじゃないかな。

百太郎：とりあえず、いちばん簡単なことで、いいとか悪いとか言って。で、悪いって言われるとカッとなる方だから(笑)、あとは何を言われたか覚えてないんですけれどね。だいたいそういうところから始めていくっていう感じですね。

——たとえば、自分のパートだけじゃなくて他のメンバーのフレーズなんかでも「ここはこうした方がいいんじゃないか」っていう意見を言ったりした？

NAO：箇所箇所で、そういうことは言っていたけれど……。

GEORGE：基本的に、そいつを信じてるから、クチを出さないんだけど。

百太郎：でも、今回は今まで以上に、ヴォーカル・ラインを厳しくチェックされましたよ。今まではあまり言われなかったけれど。

GEORGE(b)

百太郎(vo)

——たしかに、前のアルバムまではフェイクっぽいメロディが多かったけれど、今回はすごくピシッとしたメロディ・ラインが確立されているよね?

百太郎：音符に直したんですよ(笑)。ホントにクセが多いから、今回はかなり言われましたね。

——百太郎のヴォーカル・スタイルで特徴的なのが、半音下げてからまた元の音に戻すっていう、ちょっとブルースっぽいラインだけど……。

百太郎：それは今回のアルバムでもいっぱいありますよ。なんか、半音下がるのが好きみたいで。それで難しくなっちゃって、ライヴで歌えなくなったりして(笑)。

——また今回は、高域が前よりもストレートに伸びているような印象を受けたけれど?

百太郎：そうですか。レコーディングの前半がすごく調子が良くって。後半はちょっとカゼひいたんですけれど、前半は自分でも天才じゃないかと思うくらい調子が良かったんですよ。

——それにしても、音域が広がっているのには驚かされたよ。

百太郎：リハーサルの時に、それは感じていたけれど。また今回の曲が、オレのキーに合わせて作ってあるから、よけい伸びているように聴こえるんじゃないですかね。

——このアルバムの、もうひとつの特徴が、リズムが後ノリで、すごくドッシリとしているよね?

JUN：それは、オレだから(笑)。オレ自身がそのまま出てきたんですよ。

GEORGE：安定してきたっていうことでしょう。前はJUNが後ノリで、オレが前ノリだったから。

NAO：どうにかしてくれって、オレが良く言ってた(笑)。

百太郎：でも今回、JUNはすごく楽だったよな。すぐドラム録りも終わったし。オレ、ドラム録りに行った時、今回のアルバムはダメだと思ったもの。

——どうして?

百太郎：だって、ドラムが早すぎるから、"みんな適当にやってる"って思ったんですよ。そしたら、ただ単にJUNがうまくなっているだけの話で。

——練習しないドラマーっていう評判があるわりに、どうしてそんなにうまくなったの?

JUN：天才だから(笑)。

百太郎：ウソつけ。JUNはただのバカ(笑)。

——自分では、どうしてそういう変化が起こったと思う?

GEORGE：考えさせないほうがいいですよ。

——でも、ホントに「LIGHT OF YOUR EYES」なんて、気持ちのいいドラムで……。

全員　ヒャー、ハッハ(笑)。

——エッ、何かあるな、これは。もしかして打ち込みとか?

GEORGE：いや、打ち込みなんかは使いませんよ。まぁ、ミュージシャンは多くを語らないということで(笑)。

——逆にGEORGEから見るとどうなのかな。JUNとピッタリ合ったリズムを作り出すっていうのは?

GEORGE：音は合わせようなんて思ってなかったから(笑)。でも、やっぱり合っていると気持ちがいいでしょう。

——たとえば、シングルの「SEX DRIVE」とアルバムの「SEX DRIVE#2」とでは、ベース・ラインも違うし……。

GEORGE：それは違えてますよ。

百太郎：スタジオに来るまでベース・ラインを考えてなかったくせに(笑)。

GEORGE：もう、自分の中にあるものを出してやったから。何か考えていくと、たいていボツになるから、軽く考えていってスタジオで弾いてみるっていう感じですからね。

ホント、あまり考えないですよ。気分なんです。感覚でいかないとね。作り込んでいく曲があれば、それなりに考えなきゃいけないんだろうけれど……。

——ところで、今回はかなりギターに時間を

LADIES ROOM

レコーディングの前半は、自分でも天才じゃないかと思うくらい調子が良かった。

JUN(ds)

かけたサウンドになっているけれど、前回よりも時間をかけたの?

NAO：時間はかけましたけれど、前回と同じくらいかもしれない。でも、前回は録り終わると朝だったのに、今回は夜中の3時頃に終わってましたよ。

——今回のアルバムでつくづく感じさせられたのが、ピッキング・ニュアンスのうまさだね。若手でピカイチだと思うよ。

NAO：前回はギターをダブルで重ねているのが多かったから、そのニュアンスもあまり出なかったけれど、今回は同じパターンを重ねるダブルじゃなくて、違うパターンのピッキングをたくさん入れるっていうやり方を多くして。

——今、いろんなタイプのギタリストがいるけれど、自分自身のスタイルを確立させようとしているからこそ、ああいういろいろな試みをしているの?

NAO：そりゃあ、違う個性を打ち出したいとは思っているけれど、べつに意識して〝こうしてやろう〟って考えているわけじゃないんですけれどね。

——フレーズやピッキング・パターンなんかは、家でいつも考えてたりする?

NAO：他のメンバーになって、家では何もしないんですよ(笑)。スタジオに入ってから考えるという。

——それじゃ、ギター録りに時間もかかるわけだ(笑)。

NAO：そう、それが原因なんですよ。仮歌を出しながら、それを聴いていろいろとやってみるっていうやり方だから。

でも、今回はエンジニアとも2度目でわかっているから、好きな音を作るにしても、「いつものヤツでやってよ」っていう感じで、サウンド作りは楽でしたね。

——ヴォーカルとギター・サウンドが、うまく溶け合ってひとつの世界を築いているのも、NAOの特徴だと思うけど?

NAO：オレのこだわりはそこかな。ヴォーカルとのからみ。

——前のアルバムまでは、ライヴでやっていた曲をレコーディングするっていうことで、ヴォーカルとギターのからみも、ライヴを通じて作っていくことができたけれど、新曲がメインの今回はどうやったの?

NAO：だから、仮歌を聴きながらやったんですよ。フェイクが入るところは、〝たぶんこのへんにフェイクが入るだろうな〟って予想して。で、後でチェックしておかしいと思ったら、変えたりしてますよ。

——今回、前回とは違うことをやったっていうところは?

NAO：曲が違う(笑)。

GEORGE：言いたくない。そりゃあ誰だってそういうことはやってますよ。やってなかったらなぐられちゃうし、オレもなぐりますよ。

——そういうことを自分たちのクチから語るのが、カッコ悪いと思っているんだろうけれど、そんなことないと思うんだけどね。

GEORGE：それはオレたちはわかっていればいいことであって、あえて話す必要はないと思うんですよ。

——やっていることがともなってなくて、クチばかりのヤツらだったら、バケの皮がはがれてダサイけれど、ちゃんとやっているバンドが真剣に語ることが、今のロック・シーンには必要だと思うんだ。

GEORGE：いいですよ。やめましょう。

——OK、今はやめよう。そのうち、話したくなったら、また話せばいいし。ところで、アルバムの前にシングルで「SEX DRIVE」をリリースしたのはなぜ?

百太郎：「clock Strikes10」が出ているけれど、あれがオレたちのイメージだってみんなが言うから、〝じゃあ、オレたちらしい曲を作って出そうかい〟って。ポップで、スケベな歌詞で等身大の、ライフ・サイズ（レディース・ルームが所属しているレーベル名にひっかけたシャレ）なオレたちを(笑)。

レコード会社としては、次のアルバムが売れるようなシングルを出してもらいたかったんだろうけれど、オレたちとしては、ただひ

LADIES ROOM

ホント、あまり考えないですよ。気分なんです。感覚でいかないとね。

《バックナンバー》■VOL.1➡カラーフォト＆インタビュー7ページ■VOL.2➡表紙＆全12ページ特集、個別インタビュー＆カラーフォト集■VOL.3➡LADIES ROOM＆かまいたち爆笑座談会、スペシャル・ギャグ舞演レポート全14ページ特集■VOL.4➡百太郎＆GEORGE、NAO＆JUNリラックス対談カラー8ページ■VOL.5➡渋谷ライヴフォト＆レポート、百太郎インタビュー■VOL.6➡近況報告インタビュー6ページ■VOL.7➡ジョージ単独インタビュー

たすら自分の姿を見せたかった。

——アルバムの中にバラードが2曲あるけれど、バラードのシングル・カットは考えなかった？

百太郎：まだそれはわからないんですよ。

——ホントに「LIGHT OF YOUR EYES」は勝負がかけられる曲だと思うけれど？

百太郎：オレたち勝負とかは考えてないですよ。逆に毎日が勝負だから。だから、もしかすると次のシングルは、オレたちが知らないうちに、レコード会社が出しているかもしれないし(笑)。

——そういうのはイヤじゃない？

百太郎：べつにかまわないですよ。オレたちは曲を書いて、ステージやって生きているだけの話ですから。

GEORGE：オレたちに金が入ってくるなら、何も文句ありませんよ(笑)。最初のうちは、レコード会社から何か言われると、つっぱねていたけれど。

JUN：まず「いやだ」って言って、それから考えていた(笑)。

百太郎：でも今は安心してまかせていられるし。もう2枚目でしょう。守りの態勢には入りたくないから、オレたちはヘンに戦略とか考えないで、ひとつのロック・バンドとしてやっていこうかって、オレは思ってるんですよ。ただいいステージをやって、いいものを作るっていう。

——[illegible]

[illegible]：スタジオが六本木にあって、オレやつぱり飲みに行っちゃったんですよ。「ちょっとノドの調子が悪いから、明日休ませてま」って次の日をオフにして。しかも3万円もぶったくられて(笑)。

NAO：オレは、誰も触ってないのに、スタジオのテープレコーダーが勝手に動いちゃったっていうのがあって。勝手に巻き戻して、勝手に再生しちゃって。それが2回もあったから。

——それはコワイ話じゃない。

NAO：ウン、けっこうこわかった。

百太郎：そういうんだったら、オレ歌ってたら、ヘッドフォーンから違う声が聞こえてきて、気味が悪くて……。そうしたら、タクシー無線が入ってきていたっていう(笑)。

——それは、スタジオのケーブルが無線をひろっちゃったんだね。

NAO：そういうことがあるみたい。マーシャル・アンプからトラック無線が聞こえたりってね。

——タイトルの「LOCK AND KEY」って、ようするに男のアレと女のアソコっていうことだよね？

百太郎：そうです。もっと大きく言えば、男と女っていう感じで。今回は、詞にしても、素直になりたいっていう気持ちがあるから、男と女のいろんな関係を意味に含めたかったから、オレのひとつの案としてこのタイトルを出したんです。

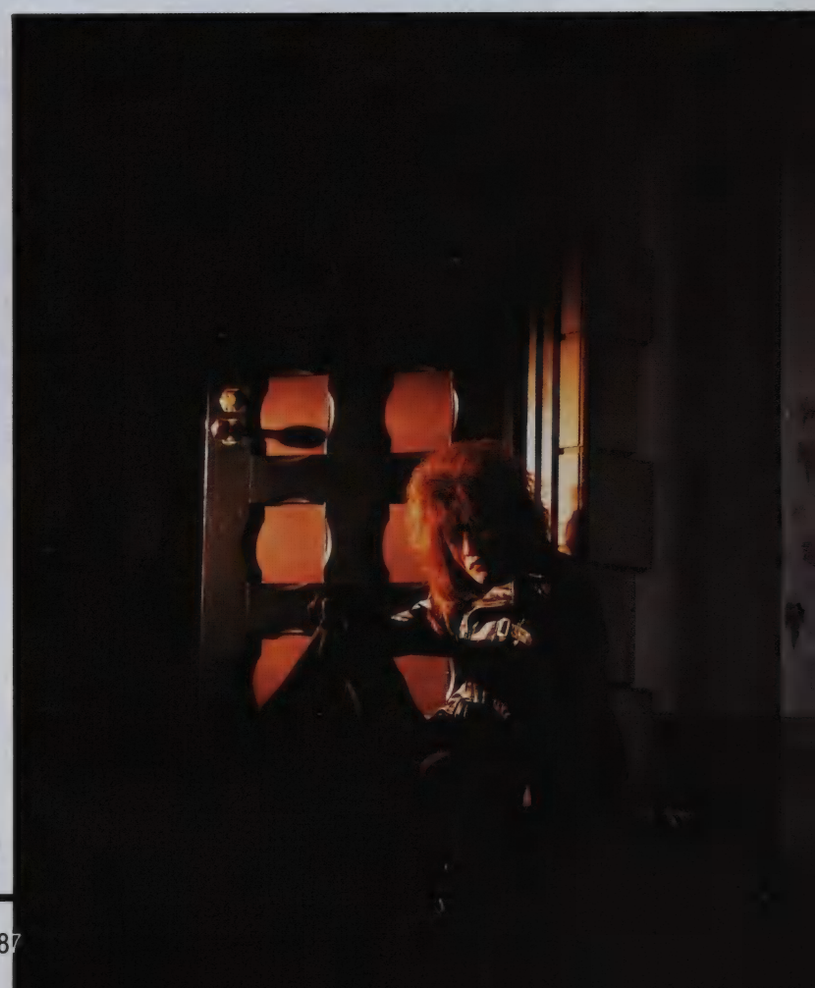
——じゃあ最後に、レディース・ルームとしては、このセカンド・アルバムをファンにどう聴いてほしい？

GEORGE：とりあえず買ってほしい。

百太郎：新しい部分を聴いてほしいっていうことですね。前のファンからすると、ちょっと論議をかもし出すかもしれないけれど、長い眼で見たら、こういうタイプの面もあるっていうことで……。

JUN：聴いていて、前回よりも自分で飽きないアルバムになったから。

NAO：ウン、そんなところでしょう(笑)。よろしくっていうことですね。



NAO(g)

DIE IN CRIES

硝子の肖像
ガラス

INTERVIEW : REIKO ARAKAWA
PHOTOGRAPHY : TAKASHI MATSUDA

DIE IN CRIES

愛がわかったから歌えるようになった。

既にデビュー・アルバムのレコーディングを完了させたというDIE IN CRIES。このバンドのヴォーカリストとして、新たなる活動を始動させたKYO。
彼個人の今までの活動は、現在どのように影響しているのか？そしてこのDIE IN CRIESをやることによって変わった精神面は？

——DIE IN CRIESとしてのアルバムのレコーディングを終えたそうですが、今回のレコーディング最中に考えたことで多かったことって何だったんですか？

「今回はね、考えてるようで、考えてなかったし、考えてないようで、考えてたっていうか……。レコーディングの最中に考えてたっていうよりも、とりあえず去年、DERLANGER解散して、活動が止まりましたよね？それから歌いたいなって始めて、それがバンドになるとか、なんないとか決めてなかった時期から……、DEINCRIESっていう名前でやろうかなって。

まぁ、実際DEINCRIESって名前になる時はもうメンバーはいたんだけどね。どっちにしろ、一人でも名前つけてやろうって思ってた時から始まって、その頃から詩とか曲をぼちぼち書き始めてた。

で、ある程度、今回のアルバムまでのアイデアっていうのは自分の中で固まってたんですよ、コンセプト的なテーマとか。楽曲がどういうのになるとか、そういうのまでは考えてなかったけど……、だから、詩を作る作業っていうのは相変わらず、締め切りが近くなんないとやんないんで、（笑）レコーディング中に書いてて、それで多少煮詰まった程度で、後は自分の描いてたビジョンに近い作業が出来たんで……。

考えたっていうのは、ネガティヴなことよりポジティヴな部分の方が多かったかな？手に取るように分かるじゃない？メンバーのレコーディングの作業って、どういうことをやってるかって。そういう部分でそれぞれのメンバーの再確認っていうのかな。ま、驚くこともあったり、安心させられたり、そういうこと考えてたから。

いつでもそうなんだけどヴォーカルって、一番最後に録るじゃない？だから、無責任な言い方かもしれないんだけど、オケによるんだよね、自分のテンションって。で、俺は恵まれることに、今まで自分が歌うレコーディングの時に、テンションが普通ーっていうオケを作られたことは一度もなかった。

過去アルバム3、4枚作ってるけど、そういう部分で刺激を受けてるから、常にレコーディングの後っていうのは、ドキドキしているよね。録る時もやっぱり意地もあるからさ、いいオケ録ってるのに歌で崩したくないっていうのもあるし、どっかに……。何だろうね？歌ってる時はライバルみたいなもんだから、音と。音と歌の戦いみたいな。で、まぁ出来た時はそれが、一体感になってカッコイイんだろうし、そういう部分での張り合いっていうか、刺激っていうのは常にあったんじゃないかな。

だから、ピリピリした緊張感じゃなくても、常に緊張感は持ってたし、皆それぞれそういうものがあったと思うな。」

——これから、DIE IN CRIESとしてアルバムをリリースする訳ですよね。とは言うもののどうしても、元DERLANGERっていうのがついちゃうと思うんですけど、そういうことに関しては？

「うーん、別に嫌だって思ったこともないし、何とかしてそれを取ろう、って思ったこともあまりないのね。極端に言っちゃうと俺、声だから。俺の声聴いて、〝やっぱりDERLANGERだな〟って思う人もいるだろうし、〝あ、違うな〟って思う人もいるだろうし。それはその人の自由で構わないけど、ただ元ナントカっていうのは、DERLANGERだけじゃなくてさ、ZI:KLLとTHE MAD CAPSULE MARKETSっていうのが3つあるじゃない？そんなのって、ブランド名みたいなもんだから。逆に言っちゃえば、ベースのTAKASHIって奴はそういうのがついてない訳じゃない？

でも変な風潮で、そういうのがないとあんまり注目されなかったりするじゃない？」

——ありますね、そういうの。

「でも、音聴いてもらえば分かると思うんだ、そんなんじゃない！っていうのは。言葉じゃなくて、プレイに出したっていうのがあるから……。それを凄い感じたのね、そんなもんじゃない！っていうのを。ちっぽけなことじゃないって？その元ナントカっていう自分のやってたバンドに対する思い入れっていうのは、ファンもあるだろうけど、俺なんかもっとある訳ね。だから、ずっとそれに付きまとわれるのもツライし、その思い入れに対する気持ちに反することになっちゃうからさ、ベーシストである彼が、言葉じゃなくて、プレイ！そういうことを教えてくれた。

俺はふっ切れてる、って最初から思ってたけど、やっぱりそうじゃなくて、もしかしたらDERLANGERっていう名前にあまえてた部分もあったと思うし、そういうのが手に取るように分かったんだ、自分自身で。アルバム作ってそういう部分教わったっていうのあるよね。」

——そうですね。元ナントカを言う前にまず、新しいバンドの音として受け取って欲しいですね。まぁ、そうは言うもののファンにとっては待ち望んでいたアルバムで、ホント、代表していいますけど歌声を聴きたかった訳ですよ。

「そうだね。前のアルバム歌ってないしね。（笑）。」

——（笑）ですね、見事な裏切りで。そういう意味でも今までのアルバム、DERLANGER時代の2枚（ライヴは除く）と、これからリリースされるアルバムも含め4枚のアルバムの中でのKYOさんの精神面はどう変わってきたんでしょうか？

「基本的には何も変わってないと思うんだ。18才の時に初めてライヴハウスに出た時から。でもある程度いろんなもの覚えてくると、がむしゃらだけじゃなくなっていくじゃない？そういう部分で変わったぐらいのような気がするんだよね。

ただ、やっぱり初めて作る時よりは、歌いたいことっていうのが明確にわかってくるし、それはただ単に経験の積み重ねだけのような気もするし、もしかするとそういうのに気付いた自分のパワーかもしれない。だから極端に変わったってことはないけど、小細工をしないようになってきたかな？

DERLANGERの後半から、そういうのに興味がいくようになってきて、まだ最後のライヴとか手探りだったけど、今年はあまり表だって活動してなかったけど、1年間歌い続けてきた訳で……よりエモーショナルにっていう。昔はね、曲と詩を照らし合わせて、自分の中でここはおとして歌おう！とか、ある程度計算して歌ってた時ってあったのね。だからそういうのってテイク全部録っても同じなんだよね、表情が。3本ぐらい録ってもこうで、まるっきり同じなんだよね。でもそうじゃなくなってきたかな。」

——作詞する時に使う言葉にも変化があったんじゃないですか？

「うん、結構難しい単語とか好きで、そういうのの名残りもあるけど、今まで使ってなかったような言葉で……、例えば〝愛〟。

今まで使ったことなかったんだよね、あんまり。でも、なんかそういうのが出てきたっていうのは何だろう？今の世の中で使われてる愛って、安っぽい感じがして大嫌いだったんだ。でも1番必要なものじゃない？でもその愛って、恋愛でいうとさ、ああ、仲良しベタベタっていうのが愛なのかな？っていう誤解をしてたと思うんだ、今までは。でもそうじゃなくて、突き放す愛もあるな、みたいな。その人のことを想ってるからこそ、突き放す人もいるだろうし、大袈裟に言っちゃうと、いろんな意味での優しさとか、愛がわかったから歌えるようになったのかな。」

——愛っていう言葉を素直に使えるようになったのは、今回のDIE IN CRIESから？

「そうだね、やっぱり今までって、例えばラヴ・ソングでも、あなたが好きですっていうフレーズって絶対使いたくなかったのね。そりゃ、ないだろう、みたいなさ。（笑）

でもホントに自分がそういう気持ちになった時はそれでもいいかな、っていう気持ちになれてきた。それって、やっぱり経験だよね、いろんなね。今まであまえられる環境の中にいたから、ずっと。今あまえられる環境も残ってるし、あまえちゃいけない環境も明確にわかってきたっていうのかな？

頭でわかってても、出来ない時ってあったじゃない？でも、それってきっとわかってなかったから出来なかったんだと思うんだ。やっぱりそういう部分の変化かな。いい年の取り方してるな、って自分で思うもん。（笑）」

——（笑）自分で言う。

「でも、そういう部分で、自分の周りの友達

〈ライヴ・スケジュール〉3月24日＝広島アステールプラザ、25日＝福岡都久志会館、31日＝仙台イズミティ21、4月2日＝札幌ペニーレイン24、9日＝新潟音楽文化会館、22日＝名古屋芸術創造センター、23日＝大阪御堂会館、30日＝渋谷公会堂　●問い合わせ先＝バックステージ・トーキョー☎03-3226-7312

とかにもすごい恵まれてると思うけどね。」

——それは感じますね。愛って言葉が女性に対してだけの言葉じゃないっていうのかな?

「きっと永遠のテーマじゃない?人間の。でも、本当の愛っていうのは、死ぬまで探してるんだと思うんだ。

だからDIE LANGERっていうバンドを離れてみて、改めて各メンバーの良いところとか凄いところがわかったりとか。だからDIE IN CRIES始めた頃よりも今の方が他のメンバーの考えてることも色々わかってきたし、存在も大きくなってきた。今まで自分と関わってた人の存在っていうのも凄く大きくなっていくっていうのかな?いい意味で、そういう人達の気持ちを背負えるようになったかな?そこまで言うとずうずうしいかもしれないけどね。でも、ちょっとずつでもそういうの、出していきたいって気持ちになれたような気がするな。」

——ファンが想うのも一種の愛ですよね。

「そうだよね。よく、冷たいとか、コワイとか、話しかけづらいとか言われるけどね。(笑)」

——話しかけづらいって言われるの?

「うーん、なんかね、らしいんだけど。どういう解釈の仕方かわからないけど、自分の歌を好きで来てくれる人に対しては、いろんな愛情があるしね。」

——言葉選びも素直になったんじゃないですか?

「うん。今までって美しい思い出に縛られて、その中で思ったことを歌ってた訳。今でもそういう部分っていうのもあるんだけど、〝でも、そうだったんだよね。だから、今僕はこう思うし、こうやって生きていきたい〟っていうか、凄く前向きな姿勢が出てきてると思うんだ。でも、相変わらずだと思うけどね、パッと見は。」

——またそれを深読みするのが面白いんですよ。

「でしょ?(笑)深読みされるのが好きだからさ。例えばタロット・カードって絵と言葉があって、その裏に意味があるじゃない?それっぽいニュアンスのものが好きだから。そんなに簡単に趣味って変わらないしさ、ホントに好きなものを自分のフィルターの中で、ワガママに出せるバンドだから。

皆もそうだと思うしね。だからYUKIHIROにしても、OPTIC NERVEっていうのをやってて、あーゆーことをやりたいーっていうのは知ってたけど、あれが出た時に客観的にかつ具体的に受け取れるじゃない?ちゃんと音源になるとさ。俺からしてみると、ドラマーっていう部分が凄く少なく感じたアルバムだったのね。大丈夫かなぁ?って不安にはなるよね?でもいざレコーディング始めると彼はやっぱりドラマーだったしさ。一直線な性格だから、勉強するし、入り込むし、そういう姿勢っていうのかな、そういう部分では俺も勉強になった。

ベースのTAKASHIはさっき言ったような不言実行みたいなさ、カッコイイじゃない?それってさ。ギターのSHINはシンセ・ギターに興味ある奴で、ギターっぽくないギターを弾くのかな?っていうのがあったんだけど、でもアイツ純粋で吸収力が凄くあって、細かいこと言うとメロディと和音の関係が好きな奴でさ、そういう部分のセンスとか感じたし。好奇心が強いみたいだし、そういう部分で勉強になったな。

ホント、常に自分の周りにいる人達っていうのは刺激的でいて欲しい。」

——それはありますよね。

「まぁ、ある部分じゃ短い間だよね。長かったようで短かった1年だから。その中でその人達とめぐり会えたっていうのは、良かったと思う。

もしかしたらある部分で、DIE LANGERでそういう芽を作ってもらえたのかも知れないしね。だから今まで自分のやってきたこと、サーベル・タイガーから……、そこからでも、自分にとってマイナスだったことって何もないと思うし。

今はそれがやっと……、四捨五入すると30になるけどさ、2月で。」

——何も無理矢理、四捨五入することないんですけど。

「(笑)だから、ホントここ数年、音楽始めてからの自分って常に充実感があるよね。その代わり、ジレンマとかいっぱいあったけど。でも何か、自分の書いてる詩の通りに生きてこれるようになったのかな。」

——私は約10カ月前に、KYOさんと話した時のことを思い出しますよ。

「あぁ、あの頃はネガティヴだったからね。どっか、ふっ切れてなかったしね。ふっ切れてるようなふりしてさ。やっぱり強がっちゃうじゃない?でもその頃に比べたら、気持ち的にも凄くラクになったし、肩が軽くなった、みたいな。」

——出来上がった音とか、ライヴを観ててもこういう速さで展開するとは思ってなかったんで、驚きもありましたけど、やってくれたよみたいなのってあるんですよね。

「今回、レコーディングにしてみても、普通のバンドのデビュー・アルバムって、ある程度ライヴでやってた曲をパッケージするっていう作業じゃない?でも俺達は、そうじゃなかった訳だから。曲作りをしながら、レコーディングに入った訳だから。

でもそれって、他のバンドもセカンド・アルバムってそうなるじゃない?」

——そうですね。

「それを先にやっちゃっただけで、まぁ長くやってれば、そのバンドの空気ってわかるけどさ、特別でもなんでもないし、特別なことをしたつもりもないし。ただ気持ちいいものを出せればっていうのが、基本だと思うから。頭デッカチになって音楽作る必要もないと思う。そういう共通意識っていうのは凄く湧いてきたよ。だから愛しく思えたり、憎たらしく思えたりって常にあるけど、その度合いっていうのは今、どんどん大きくなっていってる。」

——今のDIE IN CRIESの状態って、何て言うんでしょうか?KYOさんの気持ちの余裕もあるんでしょうけど、メジャー・シーンに出ていくことに関しての気負いっていうのを感じないし、逆に〝待たせちゃった?〟みたいな余裕を感じるんですよね。

「そうかもしれないね。ただ今回のアルバムに対しては、いろんな思いがあったからね。あまりにも訳わからないスタートで始まっちゃったから。(笑)」

——(笑)そこまでいわなくても。

「で、客とのコミュニケーションっていうのは、8月のパワステと10月の大宮ソニック・シティでのイベントの2本だったし、雑誌にも出てなかったから、もしかしたら、もう終わってるって思ってる奴もいるかも知れない(笑)。ある部分、その訳わからなかったスタートの答えがこのアルバムにある訳。だから、舞台にしてみたら、序章が終わって1幕の幕が開くってところって感じだよね。変なアセリもホントなくなっちゃったしさ。」

——そういう意識がバンド全体の余裕を出してるのかも知れませんね。

「そうなのかな、バンド・ブームが終わったら終わったでいいじゃない?俺にはこれしか出来ないから、っていうある部分の開き直りかも知れないね。」

——でもその開き直りが美しいんであればいいんじゃないですか?

「そうだよね。よく思うのは、バンドの母体っていうのは白でいたいのね。絵具がそれぞれで、それが混ざった時に、もしかしたらきたない色になるかも知れないんだけど、綺麗でもきたなくても、光ってられればいいかな、って。

でも、それって光っていたいーと思ってて光れるものじゃないんだよね。意識の表われだと思うんだよね、全て。ある程度売れて安心してる人ってインタビュー読んでも、ライヴ観ても分かっちゃうしさ。

満足することっていいことだと思うんだけど、満足するからこそ、次のことが見えるじゃない?常に安心だけしないようにしてればいいかなって。

だからそういう余裕っていうのも感じるんじゃないかな?変な気負いもないし、アセリもないし。」

——でも欲張りですよね?

「そう、欲張りだよね、やっぱり。だから今居るんだろうね、ここに。」

満足するからこそ、次のことが見えるんじゃない?
常に安心だけしないようにしてればいいかなって。

DIE IN CRIES

SISTER'S NO FUTURE

REPORT:TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY:MOTOI OHNISHI

12月18日（木）インクスティック鈴江ファクトリー。この日、2人の怪物が、大衆の前にその姿を現すべく待ちかまえていた。その怪物の名前はSISTER'S NO FUTURE。

その怪物達の生誕の場であるインクスティック鈴江ファクトリー。その扉を開けると、目の前に広がっていたのは、SISTER'S NO FUTUREの名前が刻まれた2つのデッかいバスドラの姿と、ステージの両脇にセットされた、尼僧姿と神父姿の2体のマネキンだった。まるで、これから始まる事件が驚異的であるゾとでも言わんばかりに、眼前の観客達をジッと睨み続けている2体のマネキン。果たしてこれから、彼らが公言する『パフォーマンス』の場であるこのステージで、一体何が始まるのだろうか。そんな期待と不安が入り交じった複雑な空気が、満員の会場の中には充満していた。

開演時間を20分は過ぎたであろうか、突如、場内が暗くなると同時に、近未来的なSEにノセて、この日の演奏のバックを担当するミュージシャン達がステージ上に現れ、おもむろにセッティングを始めた。あの怪物共はまだ現れないのか……そんな期待と不安を抱きつつ、ステージ上をジーッと凝視する観客達。やがてSEも終わる頃にようやく怪物の片割れであるCRAZY DANGER NANCY ケンちゃんが、その姿を現した。

破れんばかりの歓声が場内にこだまする中、SISTER'S NO FUTUREの演奏がスタートした。曲は2月21日に発売されるアルバム『SISTER'S NO FUTURE～DEMONSTRATION～』の1曲目にもなっている『IMAGINATION』である。やがて始まったケンちゃんの怒号の如きドラムと、壮大な音を奏でるキーボード群との音がミックスされた眩惑的なサウンドの中、もう一人の怪物がようやくステージ上に姿を現した。しかもその怪物はSISTER'S NO FUTUREと染め抜かれた白いマントを身体にはおり、手には拡声機を持って何やら叫びまくっている。

DINAMITE TOMMYの登場で、人々の前にその姿を現したSISTER'S NO FUTURE。その衝撃のパフォーマンスの幕は上がり、遂に2人の爆走がスタートした。もはや誰も彼らの衝動を止めることは出来ない。

奇抜なパフォーマンスを持って登場した2人は、勢いそのままに2曲目の『CLASH&CLASH』へと突入していく。しかもステージ後方からは、客席を真っ白におおってしまうほどのスモークが、執拗に観客達に襲いかかってくる。またステージ上はと言えば、TOMMYがおもむろにケンちゃんの側へと寄り添い、お互いに顔を見つめあいながら『CLASHS』をデュエットしている。

「ドラムの方へと寄ってって、歌を合わせようとしてたんだけど、ケンちゃんが全然こっちを見ないんですよ」（TOMMY）

「そんなぁ、僕は一生懸命に歌を合わせようと努力してたんですよ。でもTOMMYちゃんが言う以上に、ホンマはお互いバリバリ目え合ってたんですよ」（ケンちゃん）

まるで漫才コンビのように、ライヴの模様を振り返って語ってくれた2人。だが、実際にこの日のライヴは、2人ともかなり緊張していたらしい。

「ライヴが終わった時は、ほんまホッとしました」（TOMMY）

まぁTOMMYが言いたい事は、確かにわかる気がする。なんせ彼らは、この日のライヴの一週間前までレコーディング作業を行っており、しかも、その後に実質4回のリハーサルだけで、この日のライヴに臨まざるを得ないという、ギリギリに追い詰められた状況にあったのである。その上今回は、打ち込みをメインにした楽曲や、キーボードを多用した楽曲等々、これまでの2人が進んできた楽曲的イメージとは根本的に反対なアプローチの曲ばかりである。あの怪物的な2人にさえ、プレッシャーが襲いかかるのもわからなくはない。

「でも僕はね、演奏がとやかく言うよりも、またこうやってライヴができるようになったというだけでもう嬉しくって。ほんまジワーッとくるものがありましたよ」（ケンちゃん）

″ブッ飛び″戦闘機から振り落とされるな。

12月18日、インクスティック鈴江ファクトリーに、遂にその姿を現したSISTER'S NO FUTURE。さて今回は、DINAMITE TOMMYとCRAZY DANGER NANCY ケンちゃんの2人の怪物によって展開された狂乱のパフォーマンスの模様を誌上再現してみたいと思う。そうそう読者の人にこれだけは伝えとかねばならないだろう。このSISTER'S NO FUTUREのライヴは、非常に場所や数が限られてくるという展開が今後も予想されるので、もしチケットを手にいれる機会が現れたら、是が非でもチケットを手に入れることを切望する。でないと、この日のような衝撃的なパフォーマンスを見る機会を一生失ってしまうから。

3曲目に入り『SOFT TOUCH』『SOFT TOUCH』とMCで何度も連呼するTOMMY。そんな彼の言葉を受けて、やがてミディアムテンポのフューチャリズムあふれるサウンドが流れだした。そぅ、3曲目はシングルのC/Wにもなっており、かつTOMMYがステージ上で何度も連呼していた『SOFT TOUCH』である。

「あれホンマ助かりましたわあ。実は曲に入るきっかけとなる、ドンカマのクリック音が僕のヘッドホンから聞こえなかったんですよ。だから演奏に入ろうにも入れないでしょ。それに気づいたTOMMYちゃんが、何度も曲の名前を呼んでくれて。ホンマそのお陰で、PAの人も気づいてクリック音を流してくれたし。ようやく演奏にも入れたし」(ケンちゃん)

この日のライヴは、打ち込み多用という状況の為、色々と客席からは見えない機材的なトラブルが多々あったらしい。とはいえ、そんなトラブルさえ感じさせぬほど、彼らのライヴには異常なほどの気合が満ち溢れていた。

ステージ上は、『VAMPIRE』『TIME MEETS THE WALL』と、ミディアム&アップテンポのフューチャリズム・サウンドが続いていく。そして、そして『TIME MEETS~』の演奏が終了した時点で、2人の怪物はステージ上から姿を消していった。

突然の退陣に、どよめく観客達。ステージ上はと言えば、スローナンバー『LYRA』が壮厳に奏でられている。ちなみに『LYRA』は、アルバムの中ではTOMMYの歌入りできちんと収録されているという事を明記しておこう。

『LYRA』の演奏も終わる頃に、新しい衣装を羽織って再び登場してきた2人。そして曲はそのまま『VOICE OF RAIN』へと流れていく。

またもステージ後方から大量のスモークが流れ出し、客席前方の観客の姿を真っ白に覆っていく。あまりのスモークの量の多さと、場内の異様な熱気によって次々と前方の観客が倒れていく。そんな阿鼻叫喚と化した客席の状況など、目に入らぬという様相でTOMMYはジッと前を睨みすえながらガナリたてる。

「でもね『VOICE~』の時に、TOMMYちゃんがドラム叩いてる僕の方を見てニコッと笑ってくれたんですよ。もうその時に、昔、僕が入院してる時に、ロビーでTOMMYちゃんと話をしてた頃の事を思い出して、またここまでこれたんやなと思ってたら、なんか泣けてきましてね」(ケンちゃん)

非常に涙もろいケンちゃんである。

「ホンマ、ケンちゃんはよう泣くんですよ」(TOMMY)

『VOICE~』の演奏が終了すると同時に、またもTOMMYはステージ上から姿を消していった。と今度はスポットライトがケンちゃんを照らしだしていく。

♪ズンダン、ズダダン、ズダズダズダズダズダダダッ♪まばゆいばかりのスポットライトに照らしだされながら、壮絶なるスピードでドラムを連打するケンちゃん。ホント久々にみるケンちゃんのドラムソロである。しかも彼のソロは、かまちの時以上に過激で、そして巧みになっている。

しかも、しかもである。その怒号のドラムソロを終えたケンちゃんは、なんとステージ前方へと飛び出し、突然マイクをにぎりしめて歌いだしたのである。曲はパンキッシュなナンバー『READY STEADY GO!』だ。

マイクをガシッとにぎりしめて、ステージ前方へと身を乗り出して歌うケンちゃん。異様なほどボーカルスタイルが決まっている。きっと影でこっそり練習してたんだろうか。

「ホンマ僕、調子ノリすぎてますよね。実はTOMMYちゃんにはレコーディングの時から、もっと声出さなあかんて言われてたんですよ。でもボーカルなんて今までしたことなかったから、全然わからへんでしょ。だからがなりたててるだけでムッチャ楽しかったし。しかも僕の場合、今回はドラムソロもでけたし、歌も歌えたしと。ホンマ好き勝手にでけて、えぇ感じでしたよ」(ケンちゃん)

もうここぞとばかりにしっかりと自分をアピールしていくケンちゃん。

「でもね僕、ライヴが終わってから思いました。僕はかまちの頃は自分が一番目立つんだという自信が絶対にあったのに、TOMMYちゃんが相手だと絶対に目立てませんよホンマに。やっぱメンツ間違ったのかな」(ケンちゃん)

「自分がホンマは目立ってるという事をわかってない所が、ケンちゃんの良さですね。ケンちゃんホンマ目立ってたよ、その目立ってないって言葉、ホンマやったら俺の方がいいたいわ」(TOMMY)

やっぱり、ステージを降りたら漫才コンビの2人である。

そうそう、この2人のユニットという事に対して、TOMMYちゃんはこんな言葉も僕に返してくれた。

「この日のステージって、ケンちゃんが先に登場して、客を煽ってくれたでしょ。いつもなら僕が煽らなという意識があんねんけど、この日はそれをする必要もないほど、登場した頃にはムッチャ盛り上がってたから、ホンマ楽でしたよ。もう大船に載ってステージに上がってったって感じで」(TOMMY)

『READY』の演奏が終了すると同時に、ステージ袖から、手にサーベルを持って登場

してきたTOMMY。そして彼の登場と呼応するかのように、1月21日にシングル発売された『SONIC BEAT』のサイレン音が場内にこだました。このBPM（1分間の平均テンポ数）が260を越すという超アップテンポのナンバーが演奏されるや、もう客席は熱狂と興奮の渦・渦・渦である。しかも驚くべきことに、あのTOMMYがいきなり服を脱ぎだすや、上半身裸になって歌いだしたのである。これまで一度たりともステージ上で裸になることのなかった彼が脱いだのである。もうそれだけでビックリだ。

「ステージ上で裸になるのはやっぱ恥ずかしいですね。だから途中で片方だけ袖を通してしまったし」（TOMMY）

う〜ん、この恥じらいが何ともいえんではないか。

そうそう、『SONIC〜』が流れだした途端、ステージ後方から凄まじい勢いでスモークが噴出したのだが。そのスモークがあまりにも激しい噴き出し方をした為に、ステージ上に立っていた厄介のマネキンが風圧で倒されてしまったのである。ステージスタッフは急いでマネキンを立てようとしたのだが、哀れにもそのマネキンは、興奮しきった観客達によって無残にも服は剝ぎ取られ、身体は半分に引きちぎられてという、姿をさらしてしまってたという事も記しとかねばなるまい。

ステージも終盤に当たる10曲目の『NEVER SAY DIE』で、再びデュエットを披露する2人。そしてライヴは、言いようのない熱狂を含んだままラストナンバーの『DREAM COME TRUE』へと突入し、更なる大饗宴を迎えたまま、SISTER'S NO FUTUREの生誕とも言うべき、この日のパフォーマンスの序章の幕を閉じていった。

とはいえ、これだけじゃおさまり効かないのが観客達である。延々10分も続いたであろうかアンコールのエールの中、またも2人がステージ上へと登場してきた。そして彼らがステージ上から奏でたナンバーが……な、なんとこの曲は、かまいたちの『TOY DOLLS』ではないか。しかも演奏は、そのままメドレーでCOLORの『ラブミー』へと続いていく。ドッヒャ〜！

当然、観客も人気ナンバーの連発でボゴダンスの嵐・嵐・嵐。もう場内の壁が湿気を帯びて、べとつくほどの熱狂である。

「あれ、まるごと1曲ずつ演った方が良かったかな。

えっ？ 今後もお互いの曲を演るのかって？ けっこうお客さんも喜んでくれたし。だからもしかしたら演るかも知れませんね」（TOMMY）

なんともファンにしてみれば嬉しい話じゃないか。

そしてこの日のステージの最後を締め括ってくれたのは、再びシングルナンバーである『SONIC BEAT』であった。しかもアンコールでは、『SONICS』をバージョン&歌詞違いで披露と、またしても奥の深い手口を見せつけてくれた2人。

やがて演奏も終了し、グッタリとした2人は、お互いに上半身裸になり、抱き合いながら観客達に微笑みかけている。おっ、こっこれはもしかして……

「あれはフォト・パフォーマンスの再現をしてやろうかなと思ってね」（TOMMY）

さすが何が飛び出すかわからないSISTER'S NO FUTUREだけある、ホントこの日は、なかなか面白いステージを見せてもらったぜ。

「でもねSISTER'S NO FUTUREパフォーマンスは、まだまだこんなもんじゃないですよ。言っときますけど、今回は準備する時間も殆ど無かったし、けっこうバタバタとした展開やったから、ホンマ2分くらいの力しか出してませんから」（TOMMY）

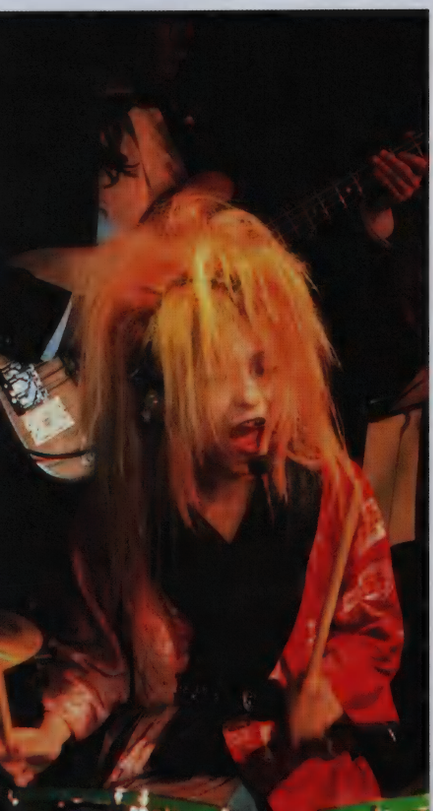
そうそう、この日、ケンちゃんのドラムキットの前にブタの剝製かぬいぐるみ（ごめんないさい。どっちかわかんないです）が括りつけてあったのを、この日ライヴに来たお客さん達は気づいていたであろうか。実はこのブタが、彼らの今後の動向を示唆する、一つのバロメーターになっているのである。

「あのブタがSISTER'S NO FUTUREのパワーを現してるんですよ。今回はホンマちっちゃかったでしょ。だからあれはまだ2分の力なんです。だからあのブタがでっかくなればなるだけ、SISTER'S NO FUTUREのパワーがアップしてくんです」（TOMMY）

「今後はブタをSISTER'S NO FUTUREのキャラクターにしようかな」と語ってくれた2人の怪物達。そんなSISTER'S NO FUTUREに、今後の展望はと尋ねたら、今度はこんな答えが返ってきた。

「今年はもうブッ飛びですよ。だから今後のSISTER'S NO FUTUREのキャッチフレーズは『ブッ飛び』やな」（TOMMY）

ステージ終了後も強気な姿勢でグイグイとまくしたてる2人の怪物。きっと、この本が出る頃には、ホコ天でのパフォーマンスも終了してるだろうし、今年も突拍子のないパフォーマンスを次々と仕かけていくであろうSISTER'S NO FUTURE。君たちも彼らの今後の展開から絶対に目を放すんじゃないソ。でないと彼らの『ブッ飛び』という戦闘機から振り落されてしまうぜ。



《かまいたちバックナンバー》

VOL.1➡ロケーション・カラーフォト&個別インタビュー全14ページ特集■VOL.2➡けんchan & SCEANA、KAZZY & MOGWAIスペシャル対談、カラー・グラフィックフォト全15ページ特集■VOL.3➡かまいたち & LADIES ROOM爆笑座談会、スペシャル・ギク競演レポート、カラー全14ページ特集■VOL.4➡表紙 & 巻頭大特集、SCEANAロング・インタビュー、KAZZY & MOGWAI対談、けんchan & SCEANA 10項目インタビュー他、カラー30ページ■VOL.5➡けんchanパーソナル・ロング・インタビュー、カラー5ページ■VOL.6➡SCEANA & けんchanスペシャル対談カラー5ページ

《COLORバックナンバー》

■VOL.1➡COLOR vs ZI:KILLパート別スペシャル対談カラー10ページ■VOL.5➡TOMMY vs SAMMY師弟激突対談■VOL.6➡TOMMYパーソナル・インタビュー

《Sister's No Futureバックナンバー》

■VOL.7➡本誌独占／初インタビュー

ついにメジャー・デビュー発表!!

LUNA SEA

INTERVIEW:MARI ITOH
PHOTOGRAPHY:SAORI TSUJI, MOTOI OHNISHI

真矢
どんどん上に突き進みたい

——ツアーをやるようになってバンドが一緒にいる時間も長くなったと思うけど、他のメンバーについて新たに発見したことはある？

真矢　いや、うちのメンバーは前から、私生活には干渉しないから……。

——常に自分のペースを守ってるんだ？

真矢　そう。俺は、ツアー中は、あんまり寝ないんですよ。ちょっと寝不足ぎみのほうがカリカリしてて、ダラけなくてすむ。その代わり、ツアーから帰ってくると三年寝太郎になる(笑)。

——そうやって自己管理できるってことは、ツアー中、体力的にダメだったことはない？

真矢　うん。バンドやり始めた頃って精神的には疲れただろうけど、今は慣れて精神的にもコントロールできるようになってるし、ライヴやってるときがいちばん、解放されて……と言うか、気持ちいいし。

——いちばんリラックスできるのは、ライヴやバンドでの活動をしてるとき？

真矢　リラックスと言うか、いちばん素直になれる。

——他に、自分が素直になれる時間は？　たとえば、趣味の時間とか……。

真矢　趣味って、ないんですよ。テレビ鑑賞ぐらいで(笑)、ドラム以外に思いつかない。職業＝ドラム、趣味＝ドラムって感じ。

——ドラムとの付き合いの最初というのは？

真矢　高校二年のとき。俺、ワルさばっかりしてて無期停学をくらって、その間いいコにしてたら親父がバイクを買ってくれるってことになってた。で、そのとき、まだ15歳だったから16歳になるまで待ってたら、文化祭で誰かがバンドやってるのを見て気持ちよさそうだなって思って。しかも、周りに女のコがいっぱいいたから、これだ！と(笑)。その夜、親父に、バイク要らないからドラム・セットを買ってくれって言った。それでドラム始めたら、最初からビビッとくるって言うか……味わったことのない気持ちよさだと思って、病み付きになった。

——ロックとの付き合いは？　その前から？

真矢　いや、ドラムだけにしか興味なかったから……。高校のときは15個ぐらいバンドをかけ持ちしてて、コピー、コピー、コピーの毎日だったから、自分の好きな音とかを発見する暇がなかったし。歌謡曲とかは聴いてたけどね。菊池桃子が好きで……どうでもいいか(笑)。とにかく、リスナーよりプレイヤーで、しゃべるより物を叩いて表現したほうが自分を出しやすいんじゃないかって思ったこともある。

——いちばん好きなドラマーは？

真矢　高校を出てから好きになったレッド・ツェッペリンのジョン・ボーナムなんだけど、91年の4月頃から師匠（そうる透氏）についてるんで、また、一からドラムを見直してる。

——研究熱心なんだ？

真矢　と言うか……好きだから、ちゃんと知りたいんだろうね。高校のときも、自分でバイトしながらドラム・スクールに通ってた。

——基礎を学んでるのと学んでないのとでは、やっぱり違う？

LUNA SEA

その昔、ワルだった少年が、ドラムと出会ってから、ドラムひとすじに歩んできた。LUNA　SEAというバンドの一員となってから、LUNA　SEAひとすじに打ち込んできた。真矢はドラムという楽器を通して、彼自身が何たるか、また、LUNA　SEAが何たるかを追求し続けている。渋谷公会堂、メジャー・デビューと、今年は大きな動きが見られるLUNA　SEAだが、バンドも真矢も、さらに成長を続けるのである。

真矢　どっちがいいとは言えないけど、違うのは確かだね。俺は、安心できたっていう点でよかったと思う。

——本格的なバンド活動は、いつから？

真矢　高校三年ぐらいのとき、SUGIZOが家に来て、新しいバンドで一緒にプロになろうって言うんだ。俺は、プロなんて果てしない道のりだと思ったけど、やる気になればできるって言うから、それもいいかと思って……。それがINORANとJのLUNACYのライバル・バンドだったって、前にも言ったと思うけど。初期のLUNACYはハード・コアっぽくて硬派で、俺とSUGIZOはもっと明るい感じの、まったく反対の音だったから、気にはなってたのね。で、お互いにバンドがガタッとなってINORANとJが俺のところに誘いに来たけど、俺はSUGIZOと一緒にやっていきたくて、ずっと迷ってた。でも、いい答えが見つかったんだ。LUNACYに入る代わりに、SUGIZOも入れてツイン・ギターにしてくれっていう条件をつけた。それで四人が固まったんだけど、ヴォーカルだけしっくりこなくて、あとでRYUICHIを引き抜いたというわけ。今は、他のメンバーなんて考えられないね。この五人でLUNA SEAだから。

——バンド名は、LUNACY（当初）を残したわけだけど、形だけ見るとINORANとJのバンドに他の三人が吸収されたっていう感じがしちゃうんじゃない？

真矢　形としてはそうだけど、五人が集まったときには、まったく新しいバンドっていう意識だった。名前は、単純にいい名前だったから使った。

——今、LUNA　SEAにおける自分の存在というのは、どうとらえてる？

真矢　うちは、基本的には五人で一つで、みんなが100パーセント頑張って、なんぼのもんじゃ、みたいな感じ。だから、立場をわきまえて押さえたりっていうことは、ないね。

——全員が、自分＝LUNA　SEA、みたいな感じかな。各メンバーが1/5であり、1でもある、ということだよね？

真矢　うん。五人が集まって初めて一個のものになって、あるときは百、あるときは千の力が出る。一人一人が、パーツって感じかな。

——五人とも個性的で、「それぞれのベクトルが違う方向に向いてる」とかって、インタビューで言ってるじゃない？　一つにまとまるまでにバンド内での衝突や行き違いっていうのは、なかったの？

真矢　最大公約数を探すのが大変なんだけど、最近はバラバラなりにも他人のベクトルもわかってきてるから、まとめやすくなった。昔は、リーダー格のヤツが集まったようなもんだから、みんな我が強くて……もちろん、いい意味でね。で、けっこう、言い合いもした。でも、自分もLUNA　SEAだけど、他のメンバーもLUNA　SEAなわけだから。

——ドラマーってフロントマンではないから、ヴォーカリストやギタリストに比べてクローズアップされにくい場合もあるよね？　そのへんは、割り切れてるの？

真矢　うん。昔、それで悩んだ時期もあった。ネガティヴに考えててね。いつも後ろだし、何故ドラムだけ動けないんだろうって。でも、最近は、後ろにいるのが特権だっていうふうに、いい方向に切り替えられてる。だって、ギターって、座りっぱなしで弾いてたらカッコ悪いじゃない？(笑)。そこから、じゃ、自分はどうしたらいいかっていうのは、まだ課題だけど。

——サウンド面では、どう？　ドラムを叩いて主張したいことがあるよね？　でも、CD『LUNA　SEA』を聴いても、歌がメインになってる。聴く人によっては、ドラムがバックの演奏で終わってしまうかもしれない。

真矢　俺の考えとしては、このバンドは、みんなが〝歌〟に集結してやってるのね。五つのメロディを奏でているけど、結果的には歌に集中してる。だから、歌を殺すドラムを叩くのはクソだと思ってる。押さえたようなシンプルなドラムでも自分の持ち味が出せれば、最高。ただ、まだ、それだと物足りない気がしちゃう(笑)。それも、課題だな。

——それだけ意識が歌にいってるっていうのは、音楽以前にドラムにのめり込んだ人にしては珍しいかもしれないね。いつから、歌を大切に考えるようになったの？

真矢　このバンドをやり始めてから。でも、有名な話があってさ。どこかのプロの先生が、弟子入りを志願してくる人に、まず、ドラムを叩かせるんじゃなくて歌を歌わせるんだって。で、歌が下手なヤツのは切っていく。それだけ、音楽ってのは歌が大事なんだっていうことなんだよね。その教えを守ってるのかもしれない。そのぶん、ドラム・ソロとかでは別の意味で自分を100パーセント出したくて……青年館にはおカネをかけてしまった(笑)。

——あ、そのタネあかしして よ。

真矢　俺、ヤマハのモニターなんだけど、最新技術で、トリガー・システムっていうのがあって。生のドラムにピック・アップをつけて、それにサンプラーが反応する。たとえば、ピアノの音をサンプリングしておくと、ドラムを叩くたびにピアノの音がする。生のドラムにピック・アップをつけるっていうのに意味があるんだ。ドラム・ソロぐらい、他人がやってないことやりたいからね。自分の中でドラムっていうものの幅を広げたかったから、いくらおカネかけてもいいと思ったし。あまりにかかってビビったけど(笑)。でも、その次の渋公（3月31日）は、もっと凄いよ。今は、言わないけど(笑)。

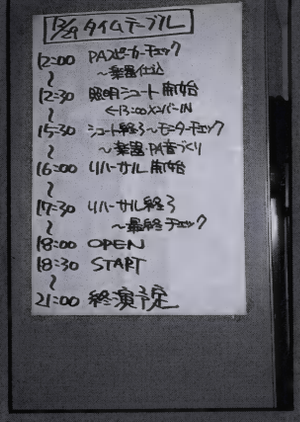
——その渋公の後、セカンド・アルバムがメジャーから発売されるけど、そのアルバムもライヴ同様、今までよりステップ・アップしたものになるよね？

真矢　ステップ・アップって言うか、基本的には、いつも100パーセント出したい。でも、セカンド・アルバムを作るにあたって、いちばん気になったのは『LUNA　SEA』っていうアルバムなんだ。あれをどう越えるかがテーマだった。

——それじゃ、いい年になりそうな92年に向けて、抱負などを……。

真矢　メジャー・デビューについては、個人的には、まったく意識してない。表面的なこととか出す音とかは流動的にいつも変わってるけど、心の中にあるものは変わらないから。メジャーに行ったら、遠くなっちゃうとか言うけど、それは、みんなのほうから遠ざけてる感じがしてしょうがないんだ。俺なんかは、ここにいるから、みんな、来ればいい。で、俺はドラムとかLUNA　SEAというバンドを通して、いつも、自分というのは何者なのかを探し続けてるんだけど、92年も探し続けていきたいな。どんどん上に突き進みたい。

《LUNA SEAバックナンバー》■VOL.2➡インタビュー■VOL.3➡幻惑カラーフォト&インタビュー7ページ■VOL.4➡カラーフォト&インタビュー7ページ■VOL.5➡LUNA SEA & AION師弟パート別対談カラー8ページ■VOL.6➡インタビュー6ページ■VOL.7➡SUGIZO単独インタビュー、J & TOSHI(GARGOYLE)対談



本誌独占!!

LIVE AT NIHON-SEINENKAN

['91.12.29]

狂乱のライヴが、いよいよ開幕だ!!

月と海に命を受け、同時に月の魔力と海の生命力をも手に入れた"LUNA SEA"。インディーズ最強のバンドというポジションをアッという間に築き上げた彼らは更に新たなる伝説を造ろうとしている。その先には何が待っているのか？　満ちくる潮を待つ海は、今まだ凪いだ状態にある。少なくとも、数時間後に訪れる開演の瞬間までは――。

1991年12月29日、日本青年館。嵐の前の静けさ漂うバックステージに密着だ！

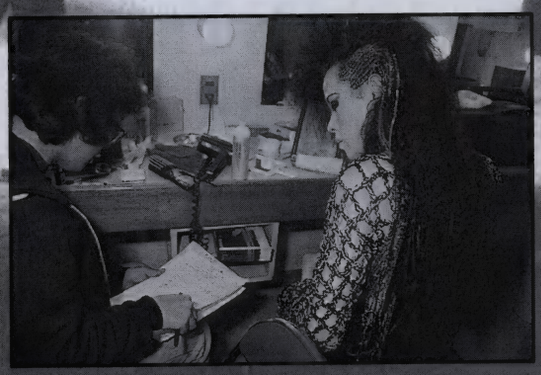
REPORT:FUZUKI WATANABE

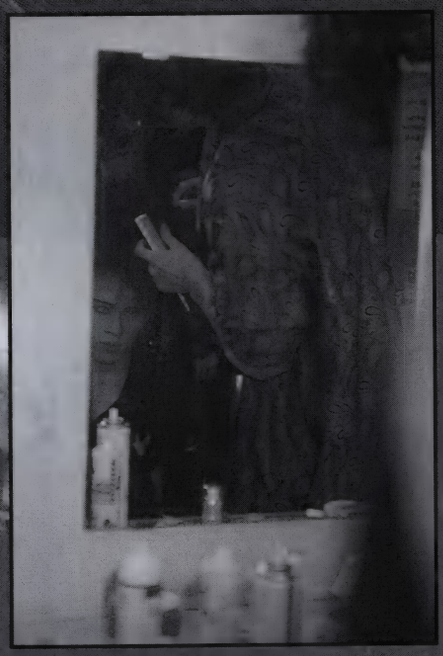
1991年12月29日。この年最後の巨象が初日となった日本青年館2DAYS。それは、10月にスタートした"UNDER THE NEW MOON TOUR/EPISODE III"のラストを締めくくるステージ。シーンに怒濤の旋風で革命を起こしたルナシーならではの快挙が、この2日間をインディーズ史に刻むのだ。

そしてまた、3カ月と10日前の台風で来場を阻まれたファンにとっての、仇討ちの場でもある。見えないパワーに恐れをなしてか、寒々とした空は実によく晴れ上がっていた。

メンバーの入り時間は13時頃と聞いていた。少し早めに会場に着くと、すでに周辺には黒ずくめのファンがチラホラと。間もなく1台のステーション・ワゴンが、駐車場へと進入してきた。開いたドアからは次々とメンバーが降りてくる。RYUICHIは、長い髪をテール状に束ねている。SUGIZOのサングラスか、カメラを構えるファンを映した。JとNORANは、この目に止まる間もなく関係者入口へ消えた。SHINYAはどうやら先に会場入りしているらしい。追うようにして、我々もバックステージへ。

メンバー楽屋の向かいに設けられたチューニング・ルームで、まずは本誌編集サイドの打ち合わせ。途中、Jがベースの弦の張り具合を見に来た。廊下の向こうからは、RYUICHIの発声練習が聞こえてくる。SUGIZOがドアの前を何度か行き来するのも見





LUNA SEA

える。

13時15分、密着取材開始。楽屋をのぞくとメンバーはメイクの準備を始めていた。軽くご挨拶をして、密着を了解してもらう。大切な日の大切な時間にお邪魔する無礼を緊張しつつ、とりあえず部屋の隅に腰掛けた。向こう側の隅では加湿器が蒸気を上げている。

やがてSUGIZOも楽屋に落ち着くと、当編集部からのミカンの差し入れを喜んで受け取った。「ビタミン不足なんですよ、オレら」だとか。RYUICHIに言わせれば、ミカン等コタツで食えるものは〝和菓子〟だそうで「じゃ、コタツで食えば何でも和菓子か!?」とJ他の突っ込みも。が、いつしか話題は本誌・星子編集長の酔態へ。まったく、不在だからって…(笑)。

13時45分になると、新しい衣裳が楽屋に到着。今日から着込まれるものもあれば、新しい年の新しいヴィジュアルのためのものもある。早速、試着が始まった。バックステージは、この頃からバタバタと忙しくなる。彩は気に入った」と満足そうなRYUICHI。材質・スタイル・サイズを細かくチェックし、衣裳担当の女性に意向を伝えるSUGIZO。

一方、BOØWYのボックスCDを手に入れて躍り上がっているINORAN。隣ではSHINYAが「オレ、宜保愛子に似てるって言われたじゃん。誕生日も同じなんだって!」などと笑い話をしている。彼は肘を痛めているらしい。先ほどのビタミンに続き、カルシウムの摂取をフォトグラファーの辻さんに指摘されると、Jは「ルナシー群団、永遠のテーマだよなぁ」と言って笑った。

チューニング・ルームからシンナーのような臭いが漂ってくる。RYUICHIが新しい衣裳をシルバーのマーカーで加工しているのだ。肩からの流れるようなラインが彼の髪にマッチしている様子は、この日のお客さまかご存のとおりだ。別な衣裳に鋲を打つ金槌の音も聞こえる。

14時30分、メイクが始まった。並んで隣に向かうと、それぞれのシェーバーが動き出す。衣裳の加工作業から戻ったRYUICHIも髪を立て始める。公演祝いの花が、続々と楽屋に届けられる。

15時、SUGIZOが一番早くメイクを終えた。SHINYAも、ほぼ上がっている。髪をおおかた仕上げたRYUICHIが「ヘアバンド取り忘れちゃった」と呟いた。首にかかったままのヘアバンドがなんともいえずにおかしい。結局、これは切って外された。SUGIZOが弁当を食べ始めた楽屋へ、一人のスタッフが入ってきた。MCの確認らしい。〝この日、ルナシーには発表すべき重大なことが2つあった。内容についてはライヴ・レポートのとおりだが、そのタイミングについても、開演前のバックステージでは重々しいミーティングが行なわれていたのだ。

今日は一つだけ発表しようか、との案もあった。が、SUGIZOは〝今日だけの客〟と〝明日の客〟の間に生じる差を嫌がった。

重大な告知を耐ったチラシが確実に客に渡るようにと、入場時に配る予定があった。が、Jは開演前に事情を知った客の動揺や混乱が、ステージの一体感を崩しかねないと考えて拒んだ。観客への愛情とステージへの愛情が、同じ強さで同居していることの顕著な一例だ。

15時20分、ドラムスからサウンド・チェックが始まった。バス・ドラムの振動が頭上の空気を震わせる。続いてINORANがステージへ移動。全員が揃ってリハーサルを始めたのは15時55分だった。通してやるだけの時間はない。RYUICHIが「よろしくお願いします」と挨拶すると、ガランとした場内に〝ルナシーの音〟が響き始めた。各自、細かいサウンド・チェック。JとSUGIZOは、方々へポジションを変えて弾いている。特効のタイミング確認。会場からオープニングまでのBGMやSE、ステージ幕に投影されるスライドのチェック。レーザー・ビーム、ライティングのチェックなどを交え、リハーサルは1時間程度で終えられた。

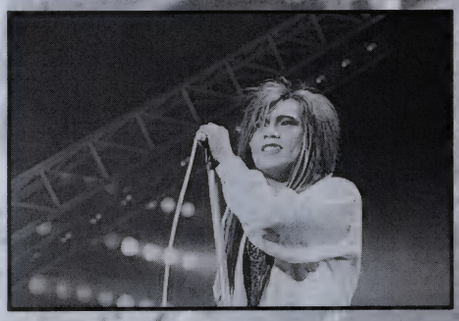
楽屋へ戻ると、急に人が増えていた。噂の星子編集長も登場。INORANが弁当を食べながら「今度(編集長と)対談させて下さいよ」と言えば、SUGIZOは「星子さんは忙しいからダメだよ、いつも飲んでて(笑)」と言い、SHINYAは「飲む前、ご機嫌。飲んだら不機嫌(笑)」と、その酔態ぶりを称した。真偽のほどは…。が、楽屋が爆笑の渦と化したことは言うまでもない。

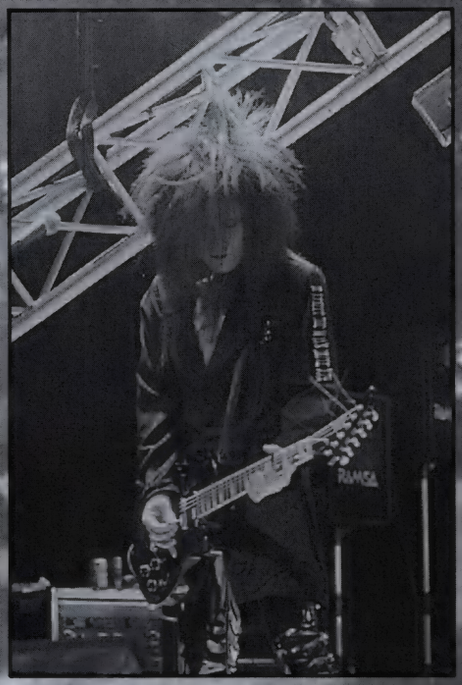
などと書くと、ずいぶん和やかなようだが、バックステージのテンションは急ピッチで上昇しているのだ。「もしこれが〝ドッキリ〟で、客がいなかったら発狂するよなぁ」と心配(?)するSUGIZO。

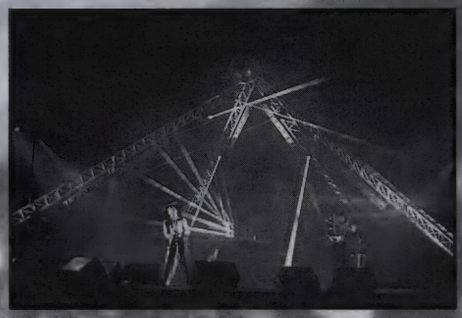
たが、その頃ファンは寒空の下で、凍えながら開場を待っていた。ある2人組の女の子にルナシーの魅力を尋ねると「悪魔的で毒々しいところかな」「RYUICHIの声がイイ。グっとくる。ホレちゃうよ」との答えが返ってきた。彼女たちは、すでにメジャー・デビューしている某バンドも好んでいるらしい。「ルナシーは、そのバンドの人気を脅かす存在」だとも言っていた。ルナシーの飛躍ぶりに最も驚きを覚えているのは、実はファンの彼女たちかもしれない。気温は下がる一方なのに、ルナシーを語る笑顔は温かい。

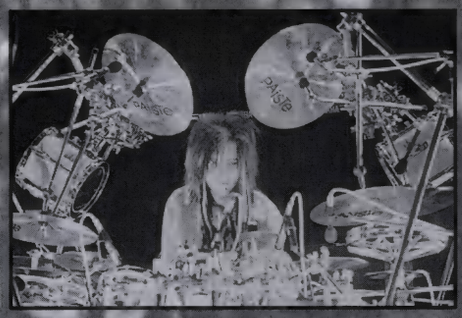
18時02分、「只今、開場しました」という声がバックステージに響いた。最後に衣裳に着替えたのはINORAN。RYUICHIは丁寧にうがいをしている。SHINYAは後ろで束ねた髪に、リボン飾りの付いたバレッタを留めた。ステージで見えないのが残念だが、金色のカチューシャと一緒に大阪で買ったものだと言っていた。

18時36分、本誌用のショットを撮影し終え、メンバーはステージのソデへと挑んで行った。人影の消えたバックステージが静まり返る。狂乱のライヴは、いよいよ開幕の時を迎えた。









お前ら一人一人の顔を覚えて帰るぞ。お前ら全員がルナシーだからな！

開演前のステージは、黒く透けた幕で覆われていた。白く大きな月が映っている。やがてBGMが消えた。客電がフェイド・アウト。SEが流れた。早くもオール・スタンディングとなった客席は、狂気の歓声をうねる大波にしてステージへ寄せた。

18時45分、視界にルナシー登場。この瞬間、自分の全身に走る電流を感知できなかった人は不幸だ。

真矢が、いきなりスティックを投げる。呼応し、揺らぐオーディエンス。一人でゆっくりと上手から表れたRYUICHI。オープニング・ナンバーは「DEJAVU」だ。すべての音が塊となり、最初の弾をブチ込んでくる。腹の底を振動させるドラミング。ステージ後方、高い位置にいる真矢の髪が、送風機の風になびいている。聴覚を貫いて脳髄に触れる強引なギター。SUGIZOの激しいプレイとは対象的に、無表情のカッティングを見せるINORAN。頭蓋に響くベース。

奏者のJはフットワークも軽く、ドラム・セットへと足を伸ばしている。RYUICHIの歌う声が胸を圧迫する。一瞬のスキも与えず、曲は「MECHANICALDANCE」へ。INORANが一転、激しく弦をかき鳴らした。RYUICHIのシルバーのエクステンションが肩から脱へと、鎖のように妖しく絡みつく。5人を囲くピラミッド形のステージ・セットは、鮮やかなライトを反射し続けていた。

「お前ら、よく来たな。好きなだけ楽しめよ。今日は、お前ら一人一人の顔を覚えて帰るぞ。全員で、かかって来い！」RYUICHIの最初のMCだ。これは、ただの"あおり"ではない。"ひとつになろう"。前号の本誌インタビューでSUGIZOが語っていたような、そういうニュアンスを含む大きさで聞こえた。続いて「来年（＝92年）のルナシーにとって大切な曲」と紹介されたのは「IMITATION」。RYUICHIの言葉の意味も間もなく分かるだろう。

また熱しきっていない空間をSUGIZOの奏でるヴァイオリンが鋭く切り裂く「SEARCH FOR REASON」。INORANのギターの音が滑り込んでくる。歌うRYUICHIの視線は限りなく遠く伸びて

LIVE AT NIHON-SEINENKAN

['91.12.29]

LUNA SEA

ゆく。何を探し、何を見つめているというのだろう。ピラミッドは青いライトに染められた。真矢のドラムが床を揺らす。Jのベースがステージを唸う。ギターに持ち替えたSUGIZOが片手を高く挙げた。その指先から生じた影が、ステージ後方から発する光のベールを2つに分けた。

「今日、来てくれた全員に、一つめのプレゼントだ」という2度目のMCをはさんで届けられた新曲は「SINFUL SONG」。戸惑いか、それとも聞き入っているのか、オーディエンスの揺れが心持ち落ち着いた。白いライトに浮かぶステージのピラミッドは、カラフルなスポットを受けてプリズムのごとく輝く。ルナシーからあふれ出した感情も、彼らというプリズムを通して音の放射になった。ギター・ノイズが神経を刺す「SLAVE」。両手を広げるRYUICHIとSUGIZO。己を誇示するようにも、祈るようにも見えるポーズ。けれど"会場じゅうを抱きしめたい"。そんな形容が一番似合う。各々がポジションを変え、好き勝手に入り乱れてのプレイ。ミュージシャンは、音楽を奏でている時に一番いい顔をする。単純に言えば"カッコイイ!"ってヤツだ。しかも楽しそうだから、こちらが誘われるのは当然だろう。熱気はもう、とっくに場内を満たしていた。

11曲を演奏し歌い終え、ライヴも後半を残すばかりとなって、RYUICHIは3度目のMCを迎えた。「今日・明日、出来る限りの愛情を持って帰って下さい"。語尾が丁寧になった。それが彼らにとって、より大切な言葉であることを伝えたかったせいだろう。"お前ら全員のステージの上に集結させろ! お前ら全員の夢をこのステージの上に集結させろ! かかって来い!"と仕掛けられた曲は「TIME IS DEAD」。ピラミッドに取り付けられたライトが光る。その三角形の中央をめがけ、見えないパワーが集まってゆく。

赤いスポットに照らされたJの鳴らすベースで「CHESS」がスタート。超音速のサウンドが、壁や天井で炸裂する。粉々になった音の飛沫が、座席の隅々へ攻撃的に散っていく。応戦するオーディエンスの体が激しく揺れ、振り乱される頭は曲と同じリズムを刻む。SUGIZOがステージの下手から上手へと駆け抜ける。何かに憑かれたように歌うRYUICHI。ドラム・ペダルに乗せた足で疾走し続ける真矢。INORANのギターが、タイトで流麗なフレーズを叫く。

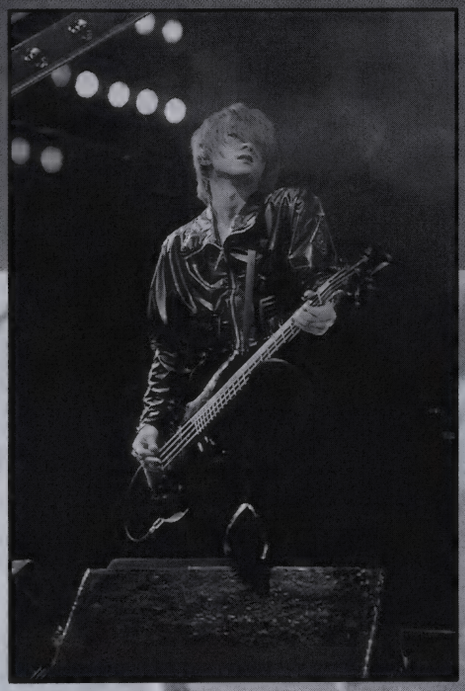
「1991年は、ありがとう。4月にエクスタシーレコードよりアルバム・リリースしたけど、来年の5月、MCAビクターから2nd アルバムをリリースする」。RYUICHIの言葉が重大な発表をした。"ついにメジャー入りだ! ここにいる全員、ついて来いよ!"。客席から歓喜の声が上がる。メンバーが晴れやかな表情で応えている。

祝福するクラッカーのように、特効で銀色のテープが宙を舞った。ラスト・ナンバーは「PRECIOUS」。緻密に折り重なって渦巻くメロディー。魂を乗せた声。体じゅうに感じる音圧。ステージから送られる精神波とステージへ集まる精神波が同調する快感。それは速度を上げ、いつしか合致していた。

だが、これで終わるわけはない。アンコールだ。再入場の先頭はINORAN。SUGIZOは、エナメルに鉄打ちのライダース・ジャケットから見慣れたコスチュームに着替えて登場。RYUICHIは会場を見渡して、ゆっくりと口を開いた。"あともう一つ、プレゼントがある"。その時SUGIZOがドリンクのアキ缶を客席に投げた。"それじゃないぞ(笑)"。もう一つのプレゼント。それは1992年3月31日、渋谷公会堂インディーズラストライヴだ。"お前ら、全員来いよ!"。地鳴りのような叫び声が、返事のかわりにあがった。あとから聞いた話だが、この時、RYUICHIのテンションは相当に高まり、"一瞬、何を言っているのかわからなくなりそうだった"らしい。

「BLUE TRANSPARENCY~限りなく透明に近いブルー」から「FATE」へ惜しみないプレイを披露し、手元の曲順表にプリントされているメニューのすべてを彼らは終えた。真矢とSUGIZOが、じゃれ合うように退場してゆく。やむことのない歓声。すっかり明るくなった場内!。

えっ!? SUGIZOだ。ステージにルナシーが戻って来た。"お前ら全員がルナシーだからな!"。そう叫んだのは真矢だ。予定にはないアンコール。"一番後ろのヤツ、オレの声が聞こえるか!"。RYUICHIも叫ぶ。"もう一度、SEが鳴った時を思い出して…"という言葉に導かれた曲は、まさしく「DEJAVU」。最高潮の興奮と熱気が、高速巻き戻しでオープニングの衝撃を再生する。INORANが走る。Jが微笑む。音に抱かれたRYUICHIの声がオーディエンスを抱く。リアクションがステージを抱き返す。激しく熱い抱擁。眩らしいほどの一体感が、この日の熱演を見事に飾っていた。



CHRONICLE

INTERVIEW: TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY: KAZUYOSHI OYAMA

ついに、新ドラマー決定！

やっと卵から孵化したな。

新メンバーにRICKY〔Ds〕を迎え、ようやくメンバーも固まった、しいもんきい。1月22日には渋谷エッグマンで今年最初のワンマンライヴもあるし、2月14日には3曲入りのビデオも発売を予定しているしと、今年のしいもんきいの活動は、これまでにも増して過激になりそうな気配だ。そんな全開バリバリのパワーで突っ走る彼らに、今回は新メンバーについてと、昨年の思い出&今年の豊富について語ってもらった。

——まずは新メンバーのドラムRICKY君の紹介からお願いしようかな。

RICKY（以下R）：今までは札幌でバイブレーターというヘヴィメタルバンドを演ってたんだけど、しいもんきいがドラムを募集してるという雑誌記事を見て応募したのが、入ったきっかけです。

——でもなんでしいもんきいのドラム募集に応募したの？

LUCY（以下L）：ボーカルが恰好いいから。

R：……。

——前からバンドのことは知ってたんだ。

R：うん。CDは聞いてて興味はあった。ただ、ライヴを見たことはなかったです。

——しいもんきいの、どの辺に興味を持ったの？

R：今ノッてきてるバンドだなって所。

——実際に入ってみて、どう？

R：入ってみて良かったんじゃないかな。たまにイジめられるけど、メンバーはいい人ばかりだし。

L：本当は僕がイジメられるんですよ。

R：……。

——せっかくだから、他のメンバーから見たRICKYの第一印象と、その後というのを聞かせてもらおうかな。

FUMITAKA（以下F）：とりあえず僕は、ヘヴィメタルな奴やと思ったな。性格的にもおとなしそうな人だし。しかも、実際付き合ってきててもお互いにノリが合うし、ホンマえぇ感じで進んでいきそうです。ただ、今一緒に住んでるんですけど、部屋がメッチャ汚いんですよ。「掃除しぃ」と言っても、「俺不潔マンだから」とか、ワケのわからん事言ってるし。

——続いてLUCYは？

L：第一印象は、僕が長州力になった気分でしたね。彼は新日本プロレスの社長に似てるんですよ。でも実際につき合ってみたら、お兄ちゃんみたいな人です（歳は21）。顔や体格はイカついのに、ホント優しい人なんですよ。その身体つきに似合わず、猫のジグソーパズルとか買ってきて、めんこいねぇとか言っとるし。ホンマ優しい人ですね。

YAYOI（以下Y）：僕の第一印象は、彼はけっこう怖かったですね。でも付き合ってみたらいい人やった。のんびりしてるし。

F：せや、初めてこの人と会った時、リッキー君はオールバックやったんなぁ。

L：焦ったなぁ。外人みたいやったもんな。

——逆にRICKYから見た他のメンバーの印象ってどうなの？

R：ヤヨイちゃんは物静かだね。だけどね、関西弁で言われたら、けっこう脅されてるように感じてしまうんですよ。でもそれは他のメンバー全員だな。あっ時々ヤヨイちゃんがかますギャグが面白いな。フミタカはリーダーとして、シメる所はシメてる。でもダラけてる所はダラけてる。ルーちゃんは俺の高校時代の連れと、顔も性格も似てるんです。だから初対面とは思えないんですよ。

——わかりました。続いては昨年の活動を振り返ってという話をお願いしようかな。まずはFUMITAKAから。

F：2月にドラムが辞めたりと、去年は初めからコケてましたね。おかげでビデオの話がポシャッてしまったり、ズーッとドラムはヘルパーでライヴを演ってたり。しかも、気持の上でもへたってましたしね。でもシーナ君とかのバックアップでなんとか立ち直れたし、年末にリッキー君が入ってくれたんで、ようやく活動していけそうですね。あとヤヨイちゃんの入院も91年の大ニュースです。なんせ初の鹿鳴館ワンマンで、しいもんきいはコンビでしたからね。

——続いてLUCYは？

L：今年こそはイクぞという感じだったんけど、いまいち周りの状態が良くなかったから。まぁ鹿鳴館ワンマンや、フリーウィルサミット等にも出れたし、リッキー君も入ったし、これからやなって所です。

——YAYOIちゃんは？

Y：色々あって早かったですね。でも年末になってようやくメンバーも固まったし。

——でも不調とはいいつつも、東京で初めてのワンマンを大成功に収めたり、CD『ちょうちんふかし』を発売したりと、バンドとしてはけっこう登り調子で来てたんじゃないの？

L：やっと卵から孵化したな。

F：でも周りの人に助けられっぱなしだったからなぁ。

——例えば各自、昨年を振り返っての思い出と言うと、どんなのがあるのかな？

F：とりあえず11月に東京に上京してきた事と、ドラムが入った事と、CDが出せた事かな。

——もしかして今メンバー全員で住んでいるの？

F：そうです。僕は炊事、洗濯、料理と全部やってるんで大変ですよ。他のメンバーは飲んだくれてますからね。

——でもデカメロンのメンバーが、しいもんきいはみんな几帳面なんだって言ってたけど。

L：そうなんですよ。ドラムとギターを抜いた2人はね（笑）。僕、髪の毛一本落ちてても嫌な人だし。頭も1日2回洗いますから。

F：それは嘘やん。

L：でも、まだ東京に来てチョットなんだけど。その間も2月に出すビデオの為の音源のレコーディングがあったり、ライヴがあったりとバタバタしてたよなぁ。

——えっ、そのビデオって、どういう内容の作品なの？

F：新曲2曲とCDに入ってた『FUNNY TONIGHT』の3曲入りで、ライヴありプロモビデオありって感じでいこうかなと思ってます。でも具体的な映像等はまだ（取材した12月4日時点では）決まってないんですよ。但し発売予定は2月14日です。

——なるほどね。で、さっきの昨年を振り返っての質問に戻るけど。

L：個人的な意見やけど、花火をしてた時に火花が髪の毛に移ってしまい、髪の毛を焦がしてしまって、髪型がずいぶん変わったなというのが思い出です。でも、どうせ髪の毛はまた伸びますからね。

F：僕は、生まれて初めてギュウギュウに詰まったスケジュールを体験して、リハーサルの辛さ等を知った事ですね。後はヤヨイちゃんの入院ですからね。

Y：昨年の思い出は、やっぱり盲腸でしょ。

——なるほどね。では最後に今年の展開を各自にお願いしようかな。

F：今年は2月にビデオが出るというのと、メンバーもようやく固まったので、昨年以上に派手な活動で、気合いを入れて頑張っていきたいなと思ってます。

——全国ツアーの予定もあるの？

F：演る予定です。地方のみなさんよろしくお願いします。

——例えば、俺らがフリーウィルを引っ張っていくとかいう抱負はないの？

L：あぁ、そりゃあなぁ、当然でしょう。今年はしいもんきいという名前を改め、ビッグマグナムと言う名前で、鉄砲玉のようにドスッて感じかな（笑）。

F：わけわからんわぁ。

——でもホント、ようやく本格的な活動が出来るって感じだもんね。

L：デカメのナオキには負けないぜ。

F：バンドのノリも良くなってきてるし、1月22日には渋谷エッグマンでワンマンライヴもやるし。

——続いてYAYOIちゃんは？

Y：メンバーも揃ったということで、1から頑張ります。

——RICKYは？

R：豊富ですか？　ドラムのモニターになりたいです。あと、しいもんきいの中で自分の色をもぅチョット出せるように頑張りたいと思います。

——そうそうRICKYは、しいもんきいに入って得したことって何がある？

R：得したことは、シーナ君の引っ越しを手伝えたこと。

——逆に失敗したなと思ったことは？

R：失敗したことは、東京に出て来たことによって借金が増えたこと（しいもんきいと関係ないぞ）。

——LUCYは？

L：今年はビッグマグナムになって、デカメのナオキさんに負けないゾ（笑）。&服ちょうだいということで。

F：あっ僕落ち着いたらバリ島に行きたいんですよ。なんかパンフレット見てたら、（観光客か島の人のどっちかが）下はビキニで上は何もつけてないんですよ。でもそれは関係ないですけど、行きたいなと思って。やっぱり今年はバリ島旅行です。

L：今年は実家のブラジルに帰ろうかなと思ってますから。

《バックナンバー》■VOL.4➡インタビュー■VOL.6➡インタビュー

ROCK'N ROLL PARTY

亀山哲哉写真集「美粧画廊」出版記念パーティー・レポート

12月上旬、渋谷の某所に今をときめく数多くのロック・ミュージシャン達が一同に会した。なんでこんなことになったかというと、本誌Vol. 7のHIDE特集の時、大胆なヘアメイク&フェイス・アクセサリーをほどこしてくれた亀山〝哲ちゃん〟が、何と自分の創作作品集『美粧画廊』の出版を記念して、パーティーを開いたのデス。

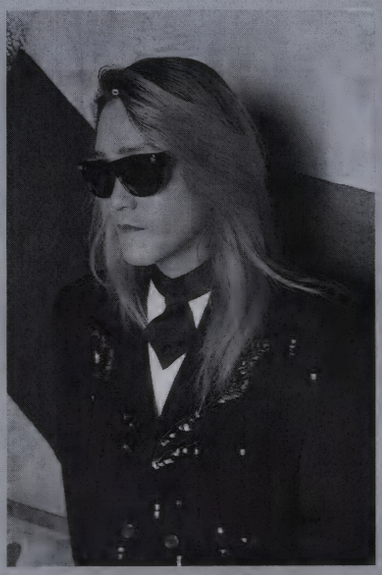
まあ〜顔ぶれのスゴイこと。HIDE、TOSHI、百太郎、MORRIE、TATSU、RYUICHI…大槻ケンヂは筋少のメンバー全員でやって来た。おーっ、田中律子もいれば荻野目慶子もいるじゃないか。めったに会えないからサインもらおうかな(笑)。パーソンズのジルは作品集そのまんまの銀髪だ。

食い放題、飲み放題ということでガブガブパクパクやってたら、ステージに張られたスクリーンに、作品制作中のメイキング・ビデオが写し出され始めた。これも哲ちゃんが自分で創ったんだよね。ヘアメイクだけじゃ飽き足らなくて、カメラ、ビデオまでやっちゃうなんて…こうなるともうアーティストだよね。色んなミュージシャンが自分のイメージを変えるために、哲ちゃんとこに通って来るのもうなづけるナ。当然、本誌今月号のYOSHIKIも彼の創作なんだ。

ま、その後は2次会、3次会へと流れて行き、渋谷の夜は更けて…いや、明けて行ったのデス。ゲロゲロ。

う〜ん、どれにしようかな…。(大槻)

好評発売中の『美粧画廊』

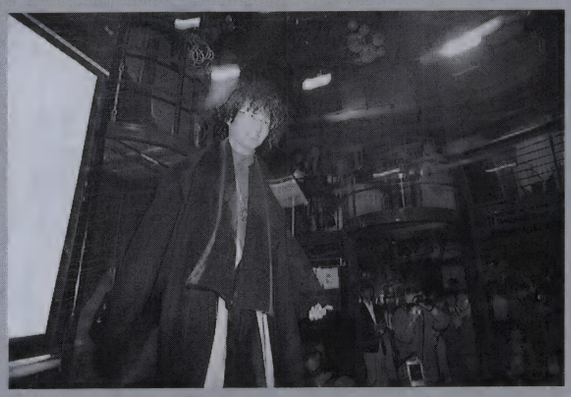


年は若いが、私がトシです（TOSHI）

この人差し指にと～まれ（ジル）

92年は着物でロックします（田中律子）

ねえヒデさん、俺をXに入れて下さい（RYUICHI）なんじゃコレ（HIDE）



ワタシが亀山"てっちゃん"です。(亀山哲哉)

こいつ、ハデだなあ（TATSU）。フン、ほっといて（HIDE）

TEXT:SEIICHI HOSHIKO(Chief Editor of SHOXX)

創刊10周年記念ファン感謝デー
BOOKフェアー
＝期間 平成4年1月～3月＝

創刊10周年を記念して、ファン感謝デーと銘打ち、BOOKフェアーを行ないます。小社発行の刊行物を現金書留又は郵便為替(切手代用も可)で、当社に直接お申し込みの方に限り、2500円以上お買い上げの方に当社特製オリジナル・テレホンカード(50度数)をもれなく全員にプレゼントいたします。この期間にふるってお申し込み下さい。

SHOXX Vol.1

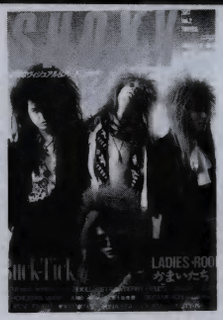
表紙＋巻頭＝ZIGGY（パーソナル・インタビュー他）／かまいたち／BY-SEXUAL／対談＝ZI：KILLVSCOLOR／LADIES ROOM／AURA／DERLANGER／JACKSN JOKER／筋肉少女帯／GRANDSLAM／MARCHOSIAS VANP

（700円＋送料260円）

SHOXX Vol.2

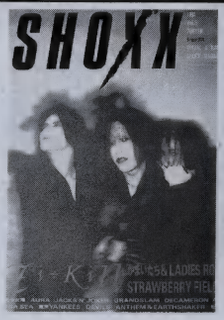
表紙＝LADIES ROOM 巻頭＝BUCK-TICK（インタビュー、ライヴ・リポート他）／LADIES ROOM／かまいたち／ガーゴイル／JUSTY-NASTY／JACKSN JOKER／対談＝AURAVSカブキロックス／COLOR／ストロベリーフィールズ他

（700円＋送料260円）



SHOXX Vol.3

表紙＋巻頭特集＝Zi：KiLL（ポスター・ロング・インタビュー）対談＝かまいたちVSLADIES ROOM／STRAWBERRY FIELDS／筋肉少女帯／AURA／デカメロン／LUNA SEA／JNJ／GRAND SLAM／東京ヤンキース／AION／DEVILS他（700円＋送料260円）



SHOXX Vol.4

表紙＋巻頭特集＝かまいたち（アルバム・インタビュー、対談、速報・けんちゃん入院）／BY-SEXUAL／LADIES ROOM／ストロベリーフィールズ／ガーゴイル／MORRIE／AURA／LUNA SEA／Zi：KiLL／対談＝TATSU&RUDY他

（700円＋送料260円）

SHOXX Vol.5

表紙＋巻頭特集＝X（55ページ大特集、ビデオ、パーソナル・インタビュー）／かまいたち（解散発言）／レディース・ルーム／ストロベリーフィールズ／筋肉少女帯／対談＝カラーvsビリー&ザ・スラッツ、AION vs LUNA SEA／Zi：KiLL／GRANDSLAM／JUSTY-NASTY／LUIS～MARY他

（750円＋送料260円）

SHOXX Vol.6

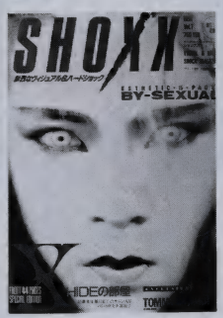
表紙＝GRAND SLAM 巻頭＝X（8／23東京ドーム速報、トシ・インタビュー）／GRAND SLAM（ロング・インタビュー）／かまいたち、Zi：KiLL、LADIES ROOM、DEEP、LUNA SEA、GARGOYLE、J、N、J、AION、COLOR、東京ヤンキース他

（750円＋送料260円）

SHOXX Vol.7

表紙＋巻頭特集＝X（HIDEの部屋・カラーフォト、詩解説、ロングインタビュー、10項目インタビュー、Xとその仲間、ヨシキビデオ撮影、ヨシキ倒れる、全45ページ）／BY-SEXUAL／TOMMY&けんChan・シスターズ・ノー・フューチャー／レディース・ルーム／グランドスラム／ストロベリーフィールズ／LUNA SEA他

（750円＋送料260円）



SHOXX Vol.8

表紙＋巻頭特集＝X（45ページ大特集、YOSHIKIの神秘世界・ヴィーナスの誕生、心象風景インタビュー、最新独占ロング・インタビュー、Xジェラシー・ツアー全記録、YOSHIKIのプロジェクトV2、X with オーケストラ、X at 東京ドーム'92・1・5）／新生Zi：KiLLの正体／レディース・ルーム他

（750円＋送料260円）

ARENA37℃

▼91年4月号

表紙＋大特集BY-SEXUAL全20頁＋カレンダー（スペシャル・フォト、パーソナル・インタビュー、ツアー・インタビュー）／デランジェ（総集編Pt2）／ストロベリーフィールズ（デビュー）／Zi：KiLL（デビュー）／かまいたち、BAKU、奥田民生、AURA、ブランキー・ジェット・シティ、JUSTY-NASTY、川村かおり、スピッツ、プライベーツ、コブラ、B'Z、吉川晃司他／付録1991 ROCKカレンダー

（620円＋送料76円）

▼91年5月号

表紙&巻頭大特集＝吉川晃司・全20頁（ロング・インタビュー、完全ディスコグラフィー・コメント入り、気になる奴ら）／B・J・C（アルバム・インタビュー）／BUCK-TICK（ツアー・スタート）／BAKU（ビデオ企画）／UNICORN（ツアー・ラスト、連載最終回）／BY-SEXUAL、Zi：KiLL、ストロベリーフィールズ、かまいたち、AURA、JUSTY-NASTY、筋肉少女帯、COBRA、MODS、山下久美子、

（620円＋送料76円）

▼91年6月号

表紙十大特集＝BAKU・全20頁（アルバム・インタビュー、パーソナル・インタビュー、仙台追っかけ、アルバム・ベスト5、やじうまワイド、双六）　吉川晃司（アルバム・インタビュー）　BUCK-TICK（ビデオ取材）　UNICORN（シングル、ソロ）　SOFT BARRET（アルバム）　J(S)W、ストロベリーフィールズ、COBRA、BY-SEXUAL、かまいたち、JUSTY-NASTY、AURA、KUSUKUSU、B・J・C、16TONS、PRIVATES、

（620円＋送料76円）

▼91年7月号

表紙＋巻頭大特集＝J(S)W（デビュー3周年記念・ジュンスカはライヴが命!!）ピンナップ、ロング・インタビュー、ライヴ大百科、コメント、ツアーの歴史、全33ページ）／BAKU（シングル・インタビュー、パーソナル・インタビュー、新連載「答えのない悩み相談」）／ブランキー・ジェット・シティ（福岡にて）／かまいたち（ジキルとハイド）／BUCK-TICK、BY-SEXUAL、SOFT BALLET、ストロベリーフィールズ、Zi：KiLL、吉川晃司、

（620円＋送料76円）

▼91年8月号

売り切れ

▼91年9月号

表紙＋巻頭大特集＝BAKU（パーソナル・インタビュー、6大ふろく、クロスワールド・パズル、悩み相談）／X（ビデオ撮影レポート、名古屋キャンペーン取材）／J(S)W（パーソナル・ストーリー・スタート）／かまいたち（野音レポート、インタビュー）／THE・B・J・C（パーソナル・インタビュー、ツアー総括、ツアー日記）／EBI（初ソロ・インタビュー）／JUSTYNASTY、Zi：KiLL、ストロベリーフィールズ、プライベーツ、GRANDSLAM、Jiæn、ラフィン・ノーズ、コブラ、マルコシアス・バンブ他

（620円＋送料76円）

▼91年10月号

売り切れ

▼91年11月号

表紙十巻頭大特集＝BY-SEXUAL（インスピレーション・トーク、「CRACKER」インタビュー、クロスレビュー、クロスワード・パズル）／BAKU（8／31EAST詳報、スタボー・レポート）／麗蘭（アルバム・インタビュー）／J(S)W（パーソナル・ストーリー最終回）／X（8／23東京ドームライヴ）／UNICORN（「ピゲとポイン」レビュー、EBIインタビュー）／スチャダラパー、かまいたち、ブランキー・ジェット・シティ、THE MODS、すかんち連載スタート、G・D・フリッカーズ他

（620円＋送料76円）

▼91年12月号

表紙＋大特集＝BAKU・全16頁（サンフランシスコ道中記、アルバム・インタビュー、パーソナル・インタビュー、悩み相談）／J(S)W（TOO BAD徹底インタビュー、アン

増刊、書籍

バックナンバーおよび増刊、書籍を申し込みの方は、定価＋送料分を現金書留又は小為替（切手代用も可）で〒104東京都中央区銀座5－1－7数寄屋橋ビル音楽専科社経理部BOOKフェアー係 まで送って下さい。申し込みの際、必ず希望商品名を書いて下さい。増刊、書籍を2冊以上の場合は送料310円です。

ケート）／KATSUMI（アルバム・インタビュー）／UNICORN（ヒゲとボインは何位でしょう）／すかんち、THE MODS、かまいたち、B・J・C、X、BYISEXUAL、LUNA SEA、らんまるのわがまま、スピッツ、LADIES ROOM、COBRA、DeILAX、AION、他

（620円＋送料76円）

▼92年1月号

巻頭＋大特集＝JUN SKY WALKER(S)（正月号はJ(S)Wで決まり！ 1日、年中J(S)W、パーソナル・朝・昼・夜・深夜インタビュー、久々4人全員インタビュー、92年大予想企画）／UNICORN（さよなら中島悟・ユニコーンが語る F1のすべて（笑）、ライヴレポート）／X（最新衝撃フォト）／BYISEXUAL（シングル・リリース）／THE MODS（モッズとスカーフェイスのすべて）／シスターズ・ノー・フューチュアー、MIAGE、ブランキー・ジェット・シティ、布袋寅泰、ルナシー、プライベーツ、すかんち、スパゴー、らんまるのわがまま他

（620円＋送料76円）

▼92年2月号

売り切れ

▼92年3月号

売り切れ

KOOL & KRAZY 延原達治

アリーナ本誌で大好評連載していたプライベーツ、延原達治の「KOOL&KRAZY」がついに単行本化。本年度最高の話題作！ 連載されていた本文はもちろん、対談などの追加もバッチリ。直木賞はいただいた。

（1500円＋送料260円）

人に歴史あり ユニコーン

87年にアリーナに登場して以来、90年7月号まで、ユニコーンの全ての記事を一冊にパック。まさにバンドに歴史ありです。その上、追加取材あり（ティッシーエッセイ書き下ろし、奥田民生対談、巻頭特写、人に歴史あり）でガンガンせまる。

（1500円＋送料260円）

アリーナお宝本

アリーナ37℃創刊100号記念出版！。今までのアリーナの好評記事をそのまま復刻。

100のQ&A（J(S)W、バクチク、AURA、UNICORN、プライベーツ他）／連載（ジュンスカッ子新聞、クスクス奥までついて、ブルーハーツ、ANGIE、米米クラブ）／企画（バイセクAtoZ、原発を語る＝宮田和弥・今井寿）／対談（陣内孝則vs浅野温子、デーモンvs本田美奈子、JUNvs上條淳士他）／アルバム自己紹介／体験カタログ他（1200円＋送料260円）

JUSTY-NASTY すべてをこの夜に

ジャスティ・ナスティ初の写真集。アルバム「すべてをこの夜に」のコンセプトそのままに再現。オール・ヨーロッパ・ロケ。パーソナル・インタビュー、バンド・ヒストリー、インディーズ時代も含めた完全ディスコグラフィーなど、ジャスティの全てがわかる一冊

（1600円＋送料260円）

ARB大研究 DAYS OF ARB

おしくも解散してしまったARBの大研究復刻本。音楽専科の復刻を初め、アリーナの復刻も含めた大豪華本。

内容＝フォト・ドキュメント、メンバーからのメッセージ、アリーナ＋専科復刻（石橋凌・俺の生き方、各アルバムインタビュー、新メンバー加入インタビュー他）対談（石橋凌vs大友康平、キースvsサンプラザ中野、石橋凌vs氷室京介他）白浜久エッセイ、ライヴ・ヒストリー他。

（1350円＋送料260円）

D'ERLANGER MOON AND THE MEMORIES

1月に正式に解散を表明したデランジェの結果的に最後のツアーとなってしまったツアー〝MOON AND THE MEMORIES〟を完全パッケージしたライヴ写真集。最後のインタビューとなったパーソナル・インタビューも掲載。

（1600円＋送料260円）

SHOXX SPECIAL 筋肉少女帯

ついにでた!! 筋少本の決定版。

▼パーソナル・インタビュー／ヒストリー／ロッキン・コミック／エッセイ／対談、などなど、やれることは全てやりつくしてしまった。もうやることはない（笑）。

（1500円＋送料260円）

SHOXX SPECIAL Zi÷Kill

ジキル初のアーティスト・ブックがついに登場

▼個別ロング・インタビュー／13アイテム・インタビュー／趣味の世界／ライヴ徹底取材／ジキル・ストーリー／8ビート・ギャグ・Zi÷Kill版他

（1500円＋送料260円）

THE LIVE'91

91年の夏のイベントをこの一冊にギューづめ。夏の決定版。J(S)W（名古屋、金沢、仙台）／UNICORN（名古屋、金沢）／UNICORN VS J(S)W（名古屋）／X（新潟、仙台）／BAKU（よみうりEAST）／その他のイベント多数！

（1350円＋送料260円）

吉川晃司 LUNATIC LUNACY

吉川晃司初のライヴ写真集。1991年5月～7月の〝Lunatic LUNACY TOUR 1991〟を完全再現！ さらにオフ・ステージでの素顔、スタジオ撮り下ろしフォト、ライヴ・レポートなどなど、ソロ再始動後の吉川晃司を全てを収めた豪華本。（2500円＋送料310円）

ZOO&DEER NATIVE

ZOO&DEER初の写真集。彼らの魅力を十分に味わってくれい。

▼ロケ、スタジオ・PHOTO、ビデオMAKING、ディスコGOLD、竹芝でのPHOTO、など、ボリューム満載。

（1850円＋260円）

かまいたち いろはにほへとかまいたち

解散してしまったかまいたちの全てを網羅した初のアーティストBOOK

▼LIVE HISTORY、MEMORIAL STUDIO PHOTO、かまいたちHISTORY、はちゃめちゃ日記、かまち年表、ディスコグラフィー、LAST TOUR完全レポート他

（1980円＋260円）

GREATST ROCK

巻頭50ページ大特集＝X（91年、Xの大復活の全軌跡がこの一冊で）、かまいたち解散!! BYISEXUAL、BUCKTICK他

（1500円＋260円）

久々にライヴハウスに帰って来たぜ！

「久々に、ライヴハウスに帰ってきたぜ！」それがTOSHIのMC第一声だった。いつもどおりのSE「WORLD ANTHEM」で幕を開けたシークレット・ギグ。一曲目の「Blue Blood」で早くも客席に上半身を突っ込み、歌い終えたTOSHIの最初の言葉は、Eggmanの低い天井にぶつかり、すぐに跳ね返ってきた。

客の大半はきっと、4日前の横浜アリーナでも数時間をXと共有しているはず。なのに、意味もなく〝お帰りなさい〟と答えたくなる。TOSHIの言葉に条件反射してしまうのだ。

魚が生まれた川に帰るのは、産卵のためだという。〝Violence In Jealousy Tour〟の全ステージを終えたXも、新たな活動展開という産卵のため、ライヴハウスに帰ってきたのかもしれない。

事実8日後のプレス・パーティーの席で、彼らは海外進出の予定について発表している。

ありふれた言葉にするなら〝初心に帰って〟きたのだろう。

いずれにせよXは、ライヴハウスを忘れちゃいないのだ。

「しかしオマエたちも、よくオレたちが（ここで）やるってわかったな？」

〝あったりまえじゃん！〟

ステージに向かって、誰もがそんな顔をしていたんだと思う。フロア最後部の私には、後頭部の群れしか見えないが（笑）。

「今日はオマエたちの大好きな肉弾戦だからな。気合い入れていかねぇと怪我すっからな、気合い入れていけよ、オラ！」

マイクを通した声よりも、肉声のほうがクリアに耳に届く。これが嬉しい。

「Are you ready？」

のセリフで、曲は「Joker」へ。

カラフルな頭を大きく左右に振るHIDE。ギターのフレーズの一音一音までが、ハッキリと聞き取れる。

このくらいのテンポの曲でも、大きなホールでは、会場の構造や音速のタイム・ラグの関係で聞きにくくなることがある。超ハイスパート・ナンバーなど言うに及ばず、鼓膜へ到達する頃には時に〝音の塊〟と化す。

ギターだけじゃなく、ベースのドラムのタムもスネアも、ここでは実に気持ち良く響く。テンション上昇中の客席に向かって、TOSHIが叫んだ。

「たまご……。たまごおとこ～っ！」

記念すべき今日のライヴハウス名をご丁寧にも和訳した叫びで、「Joker」はしめくくられた。

「前の方、大丈夫か」

客席を気づかうMC。これがホール・ライヴなら、後ろの席のノリが確かめられるところだ。このスペースに、そんな必要性はない。

「なんで、今日やるってわかったんだよ、オマエたち。ほんとは内緒でやろうと思ったからな、誰も客が入んないじゃないかと思ったけど、今日もよくも集まったな」

そりゃそうだ。昨今の〝運命共同体〟は、消極的ではいかん。Xに関するアンテナは常に高く、衛星放送よりもずっとダイレクトで幅広い情報を収集しているに違いない。

そんな健気で可愛らしいヤツらの顔を見回しながら、嬉しそうにTOSHIが言う。

「久々にこんなに近いんで、ちょっとXのメンバーも緊張気味だけど……お互いに楽しくやろうぜ、おい！」

シンバルのカウントで始まった「Desperate Angel」。これが走る走る。

ただでさえ♩=120程度から240程度へ展開するという、ものすごいナンバーなのに、ここでは更に♩=248強くらいまでスピード・アップしていたのではなかろうか。

引っ張っていくのはYOSHIKIのドラミングのようであり、HIDEのギターのカッティングのようにも聞こえる。が、そんなことはどうでもいい。ただ、この感涙の音が

VISUAL & HARD SHOXX INVASION

ショックス連続企画
第8回

ヴィジュアル&ハード・ショックス・インヴェイジョン

ショックス連続企画 第8回

LIVE HOUSE SPECIAL GIGS At Shibuya Egg-man '91.11.17

TEXT:FUZUKI WATANABE
PHOTOGRAPHY:SAORI TSUJI

気持ちいい。

ライトの赤い光と、緑色の光が激しく交錯する。音と光、声と体が、ライヴ・ハウスこそとシャッフルするように入り乱れる。

「Standing SEX」で、TOSHIは客席へ飛び込む。ローディの肩越しに、何本もの腕がTOSHIをつかみに伸びる。キレイにセットされていた髪の毛も、もうグシャグシャだ。

5曲目の「オルガスム」で、アッという間に最後の曲。場内いっぱいに充満している熱気が、残念そうに大きくうねる。

「オマエたちのパワーを悔いのないように発揮しろよ!」

スモークが勢いよく噴き出す。

Xのプレイは、ホールと少しも変わらない。近くで見える分、かえって激しく感じる。

思いっきりドラムを叩くYOSHIKIの腕など、ひと振りごとにちぎれてフッ飛んできそうだ。

この距離感が、怖いほどのリアルさを感じさせる。ライヴを見ている、などといった悠長な感覚はない。楽しいのは確かだが、それほど平和な気分でもない。

刺激も感動もPATAもTAIJIも、みんなひっくるめて〝ライヴ〟なのだ。この一体感は、実際に感じたことのない人には想像もつかないだろう。

瞬間〝自己〟をも失うくらい、すべてが一体になってしまうのだ。その点では、どんなに素晴らしいコンサートをもってしても、ライヴハウスで生じる結束には勝てないだろう。

いまやヒット・メーカーとしても、型破りなビッグ・アーティストの代名詞、X。

彼らは、彼らを育てたそういう魅力を体で知っている。そして、それが大好きだから、今、この瞬間があるのだろう。ライヴの意味をよりスピリチュアルにとらえている証拠だ。

ドラムが打ち込み音に変わり、YOSHIKIがセットの前を離れた。

「オマエらの声を聞かせてくれよ!」

TOSHIの言葉に呼応する叫び。感情のボルテージは上がる一方だ。ステージ上のメンバーも、入り乱れ始める。

「そんなもんか! 昔みたいに、もっとハチャメチャやっちゃえよっ! 足りねぇんだよ、おら!」

あおり続けるX。呼応し続ける客席。

CO2をまき散らし、YOSHIKIがステージに現れる。シュッという音と共に噴き出したガスは、フロア最後部へ容易に届いた。

ついにYOSHIKIも客席へダイビング。きっとドラム・セットの中で、TOSHIを羨ましく見ていたのだろう。彼は、瞬く間に上着を引き剝されてしまった。

打ち込みのドラムが鳴り続く中、激しいかけ合いが始まる。

「Hey Hey Hey!」

幾度となく繰り返される、何てことない単語。繰り返されるたび、絆が深まる気がする。

「こんな近くでオマエたちと話ができるのも、しばらくないかもしれないからな。

呼びたいだけ、メンバーの名前でも呼んでくれよ!」

誰がどの名を呼んでいるのかなど、聞き分けられるわけもない声の応酬を、彼らは笑顔で聞いている。それは、じっと、胸に焼き付けるように。

彼らがロスでのレコーディングに苦戦を強いられた時も、日本に残されたファンの様子に支えられたように、こんな瞬間の光景もまた、いつか彼らの内部で、頼もしくフラッシュ・バックするのだろう。

メンバーが元のポジションに戻って、再び演奏を始めると、YOSHIKIは頭を左右に振り始めた。他の4人が客席に背を向ける。5人が揃って頭を揺らす。これも久しぶりに見る気がする。

Xは、どこにいてもXで、どこまで行ってもXなのだ。だから私たちは、Xが大好きだ。

THE OTHERSIDE

INTERVIEW:TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY:SAORI TSUJI

LtoR 前2人、Ryo(B)、HAL(Dr)、後3人、Knob(G)、優朗(Vo)、Mist(G)

VISUAL & HARD SHOXX INVASION

ヴィジュアル&ハードショックス・インヴェイジョン

単なるBGMになる物だけは、演りたくない。

ポジパンとハードロックの融合を目指す新レーベルZazzle Recordsの第1弾アーティストとして、12月に5曲入りのミニアルバム『RIDE AN ANGEL'S HAIR』をリリースしたTHE OTHERSIDE。メンバーは、優朗(Vo)、Mist(G)、Knob(G)、Ryo(B)、HAL(Dr)の5人。今回はバンドを代表して、リーダーでもあり、バンドのヴォーカリストでもある優朗にインタヴューをした。

——アザーサイド自体の活動は、もうどれくらいなの?

「そうですね。結成してから2年チョットくらいです。当初は、すごいアンダーグラウンドな活動で、髪の毛にしても、パーマぐるぐるでしかもノーメイク。また恰好にしても、サイケやガレージっぽくと。ホントださいバンドとしてスタートしたんです。」

——それがどうして、こんなにガラッとイメチエンしたんですか?

「なんか、いらない物にネガティブになった時期があったんですよ。だからこそ汚い恰好を好んでしてたという。でも演ってくうちに、それをポジティブに見れるようになったというか。人に見てもらう以上、お洒落しなきゃいけないんじゃないかと気づいたというか。」

——またアザーサイドと言うと、昔からローゼンクロイツと一緒に『CUT』なるイベントを企画してるけど、イベント自体は何時頃から演るようになったのかな?

「昨年の頭くらいからかな。当時からうちらにしろクロイツにしろ、音楽的には一癖も二癖もあるんですけど。ただ、そういう能書きをいくら垂れてても、なかなかライヴで伝えていくのは難しいんじゃないかと、お互いに話してたんです。で、たまたまうちとローゼンクロイツの場合、ルックス等は似通ってたけど、目指してくものが全然違ってたから。

同じようなビジュアルのイメージで魅かれてきたお客さんに、全然違った2つのキャラクターを見せてやることが、イベントとしての理想じゃないかという話になり、じゃあという事で一緒に演り始めたんです。」

——所でアザーサイドって、昔は非常にポジパン色の強いバンドだったけど、今じゃけっこうハードな面も押し出してくるようになったわけじゃない。その辺の音に対する意識の変化って何かしらあったのかな?

「やっぱり、自分達の手作りの自主製作盤として、ファーストCD『Waters of Forgetfulness』をリリースしたのが一番強かったですね。実際、このCDを発売した事によって、バンドとしての演りやすい状況が出来てきたんです。そういった所で気持的にも、単純なメロディとか、音楽そのものに対する視点が、ポジティブな面から一転して、徐々に、しかも素直に受入れられるようになってきたなという気がしてます。」

——でも自主製作という割りには、当時、宣伝もかなりお金をかけてやったんじゃない?

「そうなんです。何て言うかな、自主製作という面を見せたくなかったというのもあったし。買う方にしてみれば、インディーズもメジャーもあんまりわかってない所があると思うんですよね。だからこそ、そこで自分達の日常的な部分は見せたくなかったというかね。」

——やはり日常と非日常の区別というのは、自分達の中にはっきりとあるのかな?

「やはりバンドを演ってる以上、本当の日常と言うか、それを見せたらアーティストとして三流になっちゃうような部分というのは、ステージに上がる人間である以上、絶対にあると思うんですよ。」

——やはり私生活を出してしまうと。

「せっかく作ってきたものを醒ましちゃうというか、逆に見る方も醒めてしまうでしょ。」

——せっかくだから、ここらで1stCDの内容を教えてもらいたいんだけど。

「曲は当時からいっぱいあったんですけど、ファーストアルバムの時点では、ストーリー性等を重視して、完全なトータルアルバムとして作りました。でもけっこうマニアックな面にいっちゃったかなという点もあるんですけどね。」

——でも初めて1枚の作品を作ることによって、バンドに対する価値観が違ってきたりもしなかった?

「もう後には引けないなという意識が更に強まったというか。しかも、これは俺たち5人で作ったんだという事での、バンドとしての結束が更に固まったりもしたし。」

——それからあまり時期を置かずに今回のCD発売だよね。まずは、今回のCDを出す経緯から教えてもらえるかな。

「最初は、ポジパンとハードロックの融合みたいな感じの、新しいレーベルが出来るからって誘われたんです。で、最初はフルアルバムで出す予定だったんですけど、たまたまファーストをリリースした直後だったので。あと、アルバムというのは長くじっくりと時間をかけて作りたいという意識がバンドの中にはあったんです。でもタイミング的には何か当て込みたいなというのがあったので、だったらミニアルバムにしようかと。」

——ちなみに今回の曲のセレクトの基準というのは?

「昔から演ってる曲なんだけど、ファーストの時にテーマの基準性から漏れてしまった曲で固めて。そこにプラスして新曲も書き下ろしていこうかなと。しかもアルバムとしても、短くなくお腹いっぱいにもならない、客観的に聞いてて気持ちのいい5曲を、というのをセレクトしてきたんです。」

——しかしサウンドがハードになってきたというのは、バンド内での向かう意識が変化してきたからと言うのもあるのかな?

「生々しくなってきたというか。例えば歌詞を書く際にも、実はけっこう非日常的な言葉を使ってるんだけど。そういう言葉を使った表現の中においても、自分にとっては現実的というか、自分が今現在感じてることをリアルに表現するという事を意識してるし。また、それをどんどん追求していく過程として、音的にハードになって行くしかないんじゃないかという所に今は向かってるんです。」

——それは今後もっとハードになっていくということなのかな?

「なっていくかも知れないし。もっとアダルトになるかも知れないし。それだけはその時の自分達次第だから、予定として立てられないというか。」

——例えば今の状況を自分達としては客観的に見て、どのように受け止めてます?

「いや、客観的には見れないですねぇ。ただ今の自分達は、中途半端な位置にいるというか。例えばいろんな意味で大衆性がないと思うんですよ。単純にポップじゃないとか、ポップであっても、ある界隈以外では認められにくいというか。でもすごくアンダーグラウンドな音楽でも、大衆性を生み出す素養はあると思うんです。そういう意味での大衆性に、うちらは欠けてるというか。」

——やはりバンドとしても大衆性を求めていきたいし?

「そうですね。でもそれはイコール、ポップ性とは違いますから。音楽って難しいんですよね。それが映画だとしたら、トレンディドラマや、ラブロマンスばかりじゃなくて。ドキュメンタリーでもホラーでも、しっかり大衆性という面を持ってたりするんですよね。でも音楽になっちゃうと、シビアな物やシリアスな物は、大衆性から遠のいちゃうというか。その辺ですごく考えちゃうんですけど。」

——でも、そこでポップにすればイコール大衆性かと言ったら違うわけだしさ。

「結局、大衆性というのを音楽に求めていくと言うのは、うちらとしては嫌だなというのがあったんです。音楽を大衆的にしていく事に対して、絶対にプライドが許さなかったというか。

でも、いわゆるアンダーグラウンドなものを、どれだけ多くの一般大衆に、どうすればわかりやすく聞かせていけるかというのを考えた場合、それがルックスだったり、提供の仕方として変わっていくべきじゃないかと思ったんですよ。だから音楽性という部分を変えないで、そういう所で変えてくというのは、すごく意識するようになってきたし。」

——実際、今後の展開はどのように考えてるわけ?

「とりあえず自分達で出来る事を演っていくというか。考えてる事は色々とあるんですけど。元々アザーサイドというバンドを演り始めた頃から、ルックスの変化や音楽性の変化以前の所で、俺達の中では普遍のテーマというのがあったんだけど、でも結局変わっていくのは、その普遍のテーマをどういう形で提供するかということなんだと気づいたんですよ。だから今年の展開としても、その辺のテーマ性というのは、絶対に変わっていかないだろうから。逆に見せ方という点で変わった展開をしていきたいなと。」

——例えばアンチポップという意識はあるのかな?

「というか、ポップイズムというのにはすごく肯定的なんですよね。アンチポップというのはすごくあるんですけど、ポップでもロックだったりとかするし。ただ、単なるBGMになって、何でもない日常の中に溶け込んでいく物だけは演りたくないんですよ。

つまり、聞いてくれるリスナーの人達に、いつまでも愛されるようなポップイズムであれば、それはすごく大事にしていきたいんです。」

《ライヴ・スケジュール》1月21日＝京都磔磔、23日＝名古屋ミュージックファーム、24日＝金沢バンバンV4、25日＝富山もみの木ハウス、26日＝新潟ジャンクボックス、27日＝長野J、30日＝新宿LOFT

オールワンマン●問＝ザズル・レコード(☎03・5486・8771)

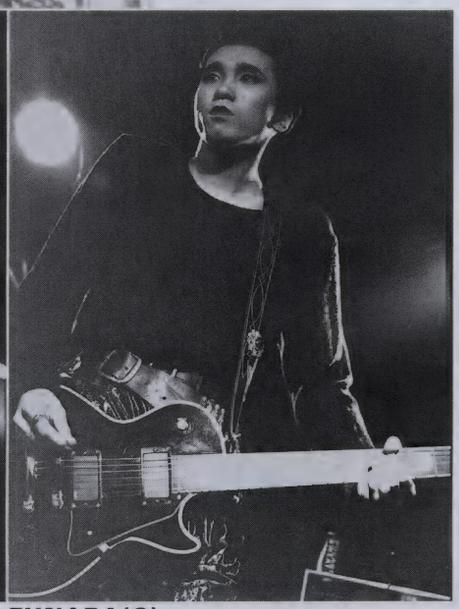
SHADE

INTERVIEW:TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY:MAKO ODAKURA

一つのカテゴリーに固まらずに、いろんな事をやっていきたい。

AKAI(Dr)

MIKAMI(B)


FUNABA(G)

Zazzle Recordsの第2弾アーティストとして、ミニアルバム『Trial Product』を発売するLIGHT & SHADE。メンバーはHARA〔vo〕、FUNABA〔G〕、MIKAMI〔B〕、AKAI〔Dr〕の4人。バンド自体は結成して1年半という短いキャリアだが、その精力的な活動も伴ってか、ライヴハウスでは既に中堅バンドとしての貫禄さえ備えている。さて今回のインタヴューでは残念ながらHARAは欠席したが、他の3人のメンバーに、1月25日に発売されるミニアルバムについてじっくりと伺ってきた。

——最初はどういった感じでバンドを演ろうとしてたんですか?

FUNABA(以下F):バンド自体は、僕とHARAで作ったんです。けっこう漠然とした状態で、こういう音楽を演ろうというのは全く無くて。とにかく2人とも、常にバンド活動をしなきゃいけないという意識から演ってたという感じです。

AKAI(以下A):でも考えてみれば、LIGHT&SHADEって、曲づくりにしても、各自が好きな要素を持ちよって作ってるよな。

——それはLIGHT&SHADEが、各自の個性のぶつかりあいで成り立ってるってことなの?

A:そうです。だから今回のCDにしても選曲がメチャクチャって感じなんです。

——せっかくだから各自の趣向性というのを聞いておこうかな。

F:そもそもこのバンド自体が、特にこういう感じという一つの色を持ってないんです。だからLIGHT&SHADEに対しての自分のアプローチというよりも、自分のその時々に於いて好きな趣向性を、常にバンドの中にぶつけて行くという感じですね。

A:僕もLIGHT&SHADEに対しては、ノンジャンルという感じで演ってますんで。つまりアフリカンビートありの、パンクノリありのという感じで、色々と自分の趣向性を試せるというか。こうだからじゃなくて、あれもこれも試そうというノリが、このバンドにはあるから。

——つまり、LIGHT&SHADEはこうだという色を持ってないと。

A:そう。こういったアプローチも、LIGHT&SHADEが演るとこうなるみたいな感じで、自分は演ってますね。

MIKAMI(以下M):僕の場合はほんとバックに徹したいというか、目立つこともせずにしかも邪魔にならず、もう言われた事だけを演るベーシストとして演っていきたいんです。でも何かそういうのって、逆にバンドの要っぽくて恰好いいでしょ。

——なるほどね。つまり3人の話を統合すると、LIGHT&SHADEというバンドを、一つの色に染めたくはないという事なんだ。

F:そうなんです。結局演ってるメンバーはズッと同じだけど、その各自の音楽的な趣向性が変わる度に、音楽も徐々に徐々に変化していってるんです。

——で、今回Zazzle Recordsからミニアルバムを出すことになったきっかけを教えて欲しいんだけど。

A:HARAの昔からの友達と一緒に、何か新しい事をやれたらいいよねという話をしていた時に、そこにザズルの人が話を持ってきてくれたという感じなんです。

——もしかしてバンドとしては初めての作品になるのかな?

F:デモテープを前に作った事はありますけど、販売作品としては初めてです。

——実際このアルバムを作る際にどういった狙いを持って作ったわけ?

A:持ち曲で気にいったのをみんなで民主主義的に出していって、多数決を取って決めたという感じですね。

——それは、いわゆるLIGHT&SHADEの代表曲撰集と考えてもいいのかな?

M:とは限らないんです。別にこの5曲がうちらの代表曲だから聞いてくれというんじゃなくて。これまで持ってる曲にしても、そしてこれから作る曲にしても、全部うちらの代表曲であるという意識を僕らは持ってるので、この5曲を代表曲として捉えられるのにはチョット抵抗があるんです。だから、たまたまメンバーが今好きな曲が、この5曲だったという感じで捉えて欲しいですね。

——じゃあ集大成というわけじゃなく……。

M:通過点であり、LIGHT&SHADEというバンドの中の一つの要素なんです。

——実際、出来上がってきた作品をバンドとして客観的に聞いた場合ってどうなのかな?

A:短期間でこれだけクオリティのある作品が出来たんだから、もっと時間をかければ、それ以上の物を作れるなという自信が芽生えてきましたね。

——それはバンドとしての今後の自信に繋がるっていうことなの?

A:自信というよりも、更なるふてぶてしさと言うか(笑)。

——例えば自分達にとってこのアルバムって、

VISUAL & HARD SHOXX INVASION

LIGHT &

HARA(vo)

どういう意味合いを持ってるのかな?

F:名刺みたいなもんかな。とりあえずこの作品をひっさげて全国をツアーしようと思ってますので。これを聞いて興味を持ってくれたらライヴに足を運んで欲しいですね。

——また別の見方をした場合、このアルバムがLIGHT&SHADEだという捉え方をされても構わないのかな?

A:一応強制はしません。

——実際LIGHT&SHADEとしての今後の展望ってどういう風に考えてる?

M:各個人個人が音楽的な趣味が違うように、その辺は各自思ってる事が違うんじゃないですか。つまり各自の持ってくる一つ一つの要素自体が違うというか、広く言えばまとまりがないのかも知れないけど。でも、それがあわさってLIGHT&SHADEというバンドになってるんだから、これからも一つのカテゴリーに固まることなく、いろんな事を演っていければいいんじゃないかな。

——じゃあこの辺で、LIGHT&SHADEを踏まえた上での、各自の今後の展望というのを聞かせてもらおうかな。

F:今と結局は変わらないんですけど、一つの枠には捉われずに、その場で演りたいと思ったものをどんどん吸収していこうかなと。第一うちらはまだまだ未熟ですし、これが自分らに一番合ってるというスタイルが、まだ見つかっていないだけに、それを探しながら続けていこうかなという感じです。

A:まぁ、今まで通りいろんな物に手を出しながら、その誘惑に負けずにガンガン行くと。とにかく更なる方向性というのかな、確かに一つの流れが見えてきた方がバンドの運営としては演りやすいんだけど。でもそうじゃなくて、その時その時の気分で聴く音楽の趣向性も人それぞれ変わるように、自分らがその時に出来るものを消化していって、いろんな曲を、もっと自分達なりに面白く出来たらという事を今年は演っていきたいな。

——つまり、自分達で出来上がった道を安全に進んでいくよりは、何もない所に一歩一歩道を作っていきたいということなのかな?

A:そうですね。そのうち一本の道が見つかるといいんですけどねぇ。そればっかりはまだはっきりとはわかりませんね。

——続いてMIKAMIは?

M:本当だったら、周りの状況とかも考えなきゃいけないんだろうけど。でも正直言って周りの状況というのは見えないし、どれが自分達に合ってるかなんてわからないので。自分が恰好いいなと感じたものを、例え時代とは合ってなかったとしても演って。それが評価されてもされなくてもどっちでもいいかなと。ホントに地道でもいいんで、好きな音楽だけ続けていけれたら僕はいいです。

——じゃあMIKAMIにしてみれば今の状況などは別に気にしてないって感じなんだ。

M:そうですね。

A:つまりCDにしても、出したからこうだじゃなくて。たまたまCDは出したけど、あくまでもバンドの活動の流れの中で出てきた一つの出来事でしかないから。

——じゃあ今の状況に対する焦りも、バンドとしては別にないし。

A:そうですね。だからこれからガンガン演って、ワンマン展開まで持っていって、そこからホール展開なりメジャー入りなどというのは特には考えてないんです。

M:結局は観に来たい人だけ観に来ればいいんだよな。

——じゃあ今回のCDにしても、あくまでも一つのプロモーション媒体みたいなもんだ。

A:そうですね。

M:別にCDを出したからと言って偉いわけでもないし。しかも売れる為にバンドを演ってるわけじゃないし。そりゃあ売れるに越したことはないんだろうけど、でも売れる為に曲を作ってるわけじゃないし。

だから僕らはいつも通りに演ってくだけですから。

——では最後にアルバムの宣伝で締めてもらおうかな。

M:本気と書いてマジと読みます。いい人と書いて女と読む(笑)。

A:まぁ、5曲入りのミニアルバムにしてはどれを取っても面白いんじゃないですか。しかもハウス系が好きな人も、パンク系が好きな人も、歌謡曲が好きな人も、みんな聞けるように作ってるので聞いてください。

(ライヴ・スケジュール:1月28日=新宿ロフト●問=ザズル・レコード(☎03・5486・8771))

TEXT:RAN HAYASHI

インディーズ ハードロック 最新情報

みんな〜、今年もインディーズ・シーンを盛りあげていこうぜ！ 今年こそは「ハードロックが盛り上がる」と思っているが、星子編集長は「今年もツンツンは好調！」と言っている。いきなり、大不況になってパンク、フォーク・ブームになったりして…、エ〜イ何だって本当はどうでもいい、若きバンドの諸君！ 自由にやっちゃってくれ〜。

●まずはライヴ情報の前にロッカーのための美容室を紹介しよう。目黒駅西口を出て恵比寿方面に歩いて3分「レトゥール」というお店があるが、そこはXのヘアメイクを担当しているナカジ氏の美容室。ゲストがカワイコちゃんアイドルのTV収録前だったりすると、トシがセットしに来る！ と思ったら、いつも顔を出しているんだってさぁ。ヘアスタイルに煮詰まっているバンドには特にお勧め！ ロンドン仕込みのセンスに驚くぜ。詳しくは☎3779—6554（毎週火、第3水休）

●池袋に新しいインディーズ・シーンを盛りあげていこうというクラヴハウス「Adm」（アダム）がオープンした。ジ・アザーサイドやDKポリスとか、これからのバンドが出ている要チェックだぜ！ ☎3983—9387、（ブッキングは☎5950—4699ツイン・ピークスの松本氏まで）

●もうひとつ、ツアーで全国をまわるバンド達の為に姫路にあるサテンドールというクラブハウスを紹介しよう。キャパはスタンディングで250位、PAの腕は一流で特にハードロック系にお勧めしたい。しかもお店が、ビジネス・ホテルの下にある為、宿と駐車場の心配がない。☎0792—88—6991

●さて、ライヴ情報にいこう。今年の目黒鹿鳴館はハードロックの企画でいっぱいだぜ。1月23日は、今年もガツ〜ンとデトロイト・ディーゼル、大阪のディーラー、新ヴォーカリストを迎えパワーアップしたコート・オブアームス。24日はこれから面白くなりそうなDKポリス、大阪のハードロック界で動員がNO1という記録更新中のシグナス、女イングヴェイ?と一部で噂されるウェンディー。25日はハウリング・ブルの企画でローシェッド、ユースクェイク、デスプロウ。どうだい、まいったか編集長！

●一方、目黒ライヴ・ステーションでは1月22日元X—RAYの湯浅晋のローディーで、まるで同じようなギターを弾くマグの率いるAVモーションと動員NO1と騒がれるLEGENDが対バンする。24日はエレクトリック・ウォーリアー、バット・ボーイズ、大阪の7TH HEAVEN。26日は「ワイルドライス POT SHOP第2弾」（キャッチーな曲を聞かせます）と題してef—LINEがCD発売ギグを行うそうだ。

●そして、実力派のヴォーカルが聞きたいのなら最近、活動範囲を拡げてきているギャモンを紹介しとこう。笑い飛びかう楽しいハードロックを披露する。ライヴは、1月27日に川崎クラヴチッタ、2月27日原宿のルイードだ。お問い合わせ☎3741—0723

●1月29日は、鹿鳴館で博多のカリオストロとSTRIPE TEASE。ライヴ・ステーションでは大阪のKNOCK EM DEADとオールド・タイプのハードロックで、注目度の高いカントレットのライヴがある。

●30日は鹿鳴館でギャル・バンドのSEIRENとフロント・ローが。31日は大阪のギルティー・ヴァイスとスレンダーそして、前回助け っ人にパッション・ローズのヒデミを迎えたアンチェインがライヴ・バトルする。31日ライヴ・ステーションではSOBのワンマンでピア売りもするそうだ。

●今年の大型新人は、UKプロジェクトからCDをリリース、ライヴも満員という注目のジ・アザーサイド。ライヴは1月30日に新宿ロフトでワンマン、2月13日に市川のクラヴGIOで、これまた注目の新バンドのジョリー・ロジャースらと対バン。3月3日は目黒鹿鳴館、3月15日は川崎のクラヴチッタだ。その後、関西ツアーも予定していて、今年はガンガン騒がしていくとか。期待しよう。

●前出の新バンド、ジョリー・ロジャースを紹介しておこう。元スリップのB（ユウシ）と元パニックのG（ヘル）そして、元サブラのDr.（サブ）が結成したバンドで過激に活動していく予定とか。3月17日は鹿鳴館。

●ここのヴォーカルはスゲ〜上手だし、カッコイイ！ ベースは超ワイルドというJOEERKだが、どうやら春にオムニバスCDに参加する予定だ。1月30日に大阪のロケッツ2月2日は目黒鹿鳴館でライヴを行う。

●2月1日目黒のライヴ・ステーションではフォークソング・レコードからCDをリリースしたレイト・グリークと、どうやらフリーウィルと契約か?と噂されるドラエモンのイレズミでお馴染みのジョリー・ピックルスの激突ライヴが行われる。

●2月2日と8日は、ジェミー・ロケッツとLAのインディーズ代表BLACK BOARD JUNGLEが目黒鹿鳴館で、ライヴを行う。ちょっと、これはチェックだよな。

●市川のクラヴGIOでは定期的に「レヴォリューション」というハード系を集めたギグを行っている。2月3日はその第6回目で、ハサディナ、ウォークライ、ワイルドシン第7回は3月2日で、ブルティッシュ・ブルドック、FOADなどが出演する。また参加バンドも募集中だ。

●募集中といえば、京都のエボニー・アイズが解散し、元X—RAYのハイトーンアキラと元フジャスのパワフル・ババちゃんがスーパー・ギタリストをオーディション中だ。どうやら、全国のギタリストからのテープが、いっぱい集まっているとか、応募の締め切りは1月中ということなので君もどうかな?

詳しくは☎075—751—0899L&M

●ベテランの実力派TILTの連絡先が決まったので御報告しよう。☎0720—38—3439ヴィンテージ・サン・レコードまで

●さてとライヴ情報に戻って2月4〜7日の目黒鹿鳴館は…? 編集長が原稿料を上げてくれないから「ダメ！」だって。アレの日?

●目黒ライヴステーションでは2月7日に無名のバリバリ新人バンド、アタールと名古屋のギャル・バンのトランキライザー。9日ジェルソミーナとZINX、この日は売りきれ注意！ 10日にはウッドペッカーと横浜の若手実力NO1のガスティー・ボンブスそれと今年ビシッとした活動のツイン・ギターバトルを売りとするクィンドールとLEGENDプリズナーがライヴをする。

●2月15日デイー・キュセが目黒鹿鳴館で、サポートにバナナ・フィッシェを迎えてギグ

●パッション・ローズの強化合宿後のパワーアップはいかに…? マネージャーにも知らされていない（これマジで！）。何故か2月22日に目黒鹿鳴館のみだけ、ライヴがある。気になる人はチェックしといた方がイイ！ としかメンバーは言わなかった。

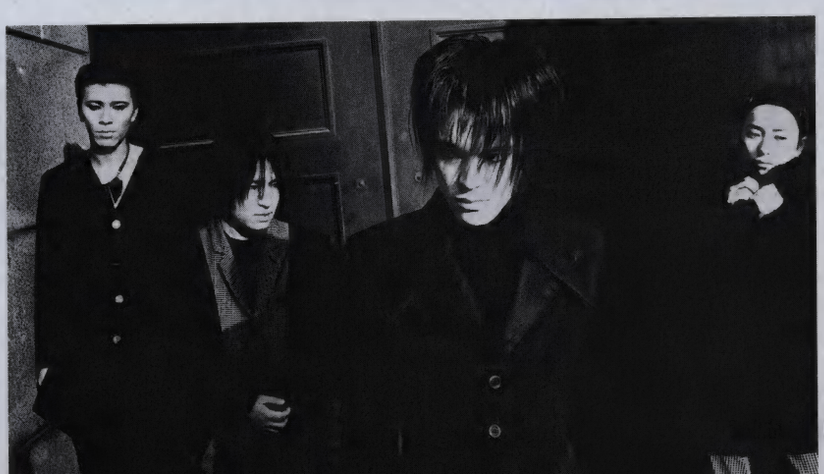
●ここまで、ちゃんと読んでいる人が得する情報。2月11日に目黒鹿鳴館で「スタージスナイト」（企画者はそう言っていた）という初のバイカーズ・ライヴが行われる予定だ。チョッパー、ハーレーの好きな奴はチェックだぜ。裏読みができる奴だけが解る！

●2月23日は鹿鳴館でDKポリス、ディジーラックら全4バンドが対決する。

●2月24日目黒鹿鳴館、かまちのケンちゃんがブッキング！ 発表していいのかなぁ〜?

●最近、ギャル・バンドでは一番クオリティーの高いと思われるデモ・テープを発表したギル・メサイアだが、2月25日に鹿鳴館でライヴがあり、そこで手に入れることができる地方の人は☎03—3494—8540マスターワークスまで問い合わせてみよう！

●3月2日は博多Be—1徒楽夢代表のヴァランタイン、4日は広島ウッディーストリート代表ZIPだ。どちらもステーションで。



OH, MY CHILDHOOD!

NAOKI(デカメロン)

「戦争が終わって、食べる物がなくて……、アワやヒエや、イモのつるなんかを食べてたそういう時代のＴＶを見ながら育ってきて、オバケのＱ太郎も、ジャングル大帝も、白黒だったけど……、でも幸せな子供時代で(笑)どんな子どもかって言うと…大事にされてたんかな。

で、弟ができて、普通の家庭では弟の方がほったらかしになるんやけど、僕の場合は、僕の方がほったらかしにされて（笑)。普通は、お兄ちゃんのおさがりの服とかやったりやけど、うちの弟は新しい衣装ばっかり着せてもらって、僕は大変でした(笑)。でも、けっこう外で遊ぶ子やったし、今の子みたいにファミコンとかもなかったし、元気はつらつでオロナミンＣでしたけど（笑)。

何して遊んでたかって言うと、めんこって言うんですか、あれですね。あとおはじきとか。あとザリガニ捕り。これが一番の楽しい遊びでしたね。アメリカザリガニがなかなかいなくてねぇ。あとやっぱり、野球ですね。野球は今でもやってますから。もう大好きです。僕、巨人好きなんですよ。家族は阪神ファンやって、やっぱり関西、京都、大阪やとね、熱狂的な阪神ファンばっかりで、けっこう肩身狭かったけど。〝お前、どこのファンや〟って言われて、〝えっ、どこでも好き〟とか言うて。でも、ホンマは巨人好きやのに。今はもう、どうどうと言うてますけどね。みんな阪神の帽子をかぶってるんですけど、僕はやっぱり巨人の帽子かぶりたかったからね、野球帽ってやつですか？　あれを買った頃とか、よくイジメられましたけど。帽子を隠されたりして。

ポジションは、ショートかサードですね。打順は、クリーンナップか１番。足、速いから１番か、あともう６番ぐらいかなぁ、何ぼいっても。

小学校の時、けっこうませたガキやって、近所の山に、Ｈな本ばっかり積んであるような、工事現場のおっちゃんが読んで捨てたようなんがあって、それを、雨の日にこそこそ行って。雨の日って本が貼りついてるでしょ、それを、アジトって言うんですか、隠れ家へ仲間で持ってって、１枚ずつ干してねぇ。何か、けっこうＨでしたね（笑)。」

私の貴重なアルバイト体験談

「アルバイトは、ちょこちょこしてたんだけど、一番おもしろかったのはビアガーデンかな。夏だけのバイトなんだけど、２年やってたのかな。初めてやったアルバイトがそれだったのかな。それで酒もおぼえたし。ああいうところって、中の調理場もみんな高校生だからね。やっぱり地元だから、知ってるやつも多くてね。バイト中に、ビールついでるやつが知り合いだったりすると、ついでくれたり。もう、好き放題というかねぇー。

ジョッキを12個もって。あれは誰でも持てる。オレも入って１日でできた。一応持ち方があるのかな。それをやれば誰でも持てるよ。〝12個持てるんだよ〟っていうと、みんな驚くんだけどね(笑)。それが一番ノリの良かったバイトかな。みんな同じ世代ばっかりだったから。オレらだけでやってるんだゾ、みたいな(笑)。アルバイトに行くっていう感じじゃなく、遊び場みたいな。

最近また、そういうバイトをしたいんですけどね。町とかで、バイトしてる子とか見ると〝あぁー、いいなぁ〟とかね。〝ちょっとバイトやってみたいな〟とか思う。捜そうかなぁ（笑)。」

SHOの巻
(BY-SEXUAL)

ARTISTS BOX

ミュージシャンが作るページ

新年あけましておめでとう！　外はまだまだ寒いけど、今年もSHOXXは元気にガンバルから、応援よろしくネ。

さて、このページは、ミュージシャンの皆様が作るページです。お遊び気分で、自由に参加して下さ〜い//

『新年あけましておめでとうございます。』今年も頑張らして頂きます。皆様の手紙だけが頼りのコーナーですので、昨年同様よろしくお願いしますよっ！ さて今回は、各星座別上半期の運勢&女の子には嬉しいバレンタインデーの占いをやってみたいと思います。

〈牡羊座〉小さな山が幾つもありますが可もなく不可もなく過ぎていきそう。後半に向けての充電時期になると思います。(3/4)渡しずらい相手には信頼できる友人に頼むと良い結果が。相手が車等に興味があればそれに関係する物も吉。

〈牡牛座〉落ち込みがちになりそう。何か気分転換できる物を探しておいて下さい。それを一発決めてから次の行動に出る様に。金銭面での失敗をこの時期してしまうと後に引きずりそうなので要注意。(3/4)できる限り手作りで頑張って。中身だけでなく包みなども工夫を。あなたのセンスで勝負です。

〈双子座〉いろいろチャレンジしてみたくなりそうですが何事も引き際を間違えない様に。沢山の事を吸収していける時期です。何か一つと決めるにはまだ早いでしょう。(3/4)もう一度自分の気持ちを確かめて。八方美人的行動は相手を傷つけるだけになりそう。コーヒー味は吉。

〈蟹座〉じっとがまんの上半期です。周りからいろいろ誘いがありそうですが、ここは自分の思ったことをつらぬきましょう。この時期は資本金をためるのも適しています。(3/4)相手が年上だったり、しっかりしている男性だと、なかなか良い結果が得られます。告白する前に相手をよく見て。

〈獅子座〉大切な友人関係にヒビが入りそうな気配が。他人の言葉にもじっくり耳を傾けて下さい。案外に良い答を見つけるキーワードが、必ず隠されています。親孝行も吉。(3/4)もしあなたにライバルがたくさんいるなら、このままではちょっと勝ち目はなさそう。そ

失敬！ DEANの先取りシネ・サロン
BY：DEAN(AION)

エルム街の悪夢 ザ・ファイナルナイトメア

GAGA㈱ギャガ・コミュニケーションズ提供　原作　監督　レイチェル・タラレー　出演　ロバート・イングランド　リサ・ゼーン　'92年正月（初悪夢）ロードショウ

こんにちは、AIONのDEANです。今回は1月中旬から公開の「エルム街の悪夢　ザ・ファイナル・ナイトメア」を紹介したいと思います。この作品は全米初登場No.1になったエルム街の6作目でフレディ最後の作品！といっても俺は「エルム街の悪夢」シリーズは勉強不足なんで、ゲストに1～5までしっかり見ている熱狂的なフレディ・マニアのIZUMIさんをお迎えしました。

IZUMI：フレディ・マニアちゃうで（笑）。まぁ今回のは、今までとまた違うストーリーで、面白い部分もあるけど、やっぱ延長線上っちゅーか、まだ終りじゃないんちゃうか？と思いたいぐらいの作り方やったな。

D：一応今回で死ぬことになっとんのやろ？

I：もう見たから死んだ、と（笑）。

D：俺はまだありそうな気がするな。思ったんやけど…フレディってキャラクター的に、冷酷で惨忍じゃなかったの？結構ふざけながら殺す、みたいなとこあるけど。

I：それが惨忍なんや。

D：そうなん？これ、楽しみながら殺してるような気がするわ。

I：惨忍や、目的ないから。無差別殺人や。殺し方のアイデアは「13日の金曜日」に近いノリがある。

D：ああ、そうやな。

I：アイデアを毎回考えて作ってる。

D：今回のは凝っとったんちゃう？3Dメガネで、ラスト15分見せるっていうのは。

I：あぁ、あのSFXな。「13金」にはそれがないな。殺し方っていう点で、夢やからなんでも出来んのや。

D：フレディはどっちかっていったら、でもキャッチーな殺し屋やな。殺しを楽しみながらっていうか、思っとったのはもっと冷酷惨忍な殺人鬼。

I：これ、何が面白かったかっていうと、それなんや、殺し方なんや。ドラマの流れがメチャクチャやん？そういう奇想天外のとこが好きなの。夢やから、何でも出来るっちゅー世界やん。

言うたら裏表やん？夢と現実の。それが面白いんや、今どっちの世界におるかわからん世界？ってあるやん？今この画像は夢か現実かってそれが面白い。

でも今回は夢と現実がハッキリしすぎとったっていうのが、あるな。

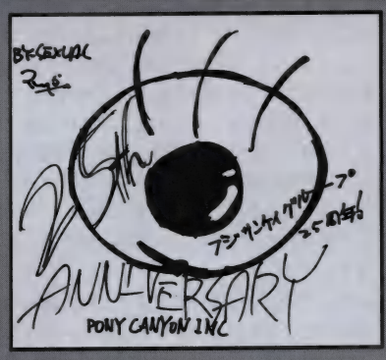
D：これひと通り見てみな、ハマるかもしれん。フレディを誤解しとった（笑）。誤解がとけたから、1から見よう！と思った。フレディ嫌い、食わず嫌いは良くない、と。

I：そうや。あとフレディの素顔はロブ・ハルフォードに似とるから、ジューダス・ファンは行ってくれ、と。

D：（笑）アリス・クーパーも出てるからアリス・ファンも行ってくれ。主題歌はイギー・ポップやから、イギー・ファンも行ってくれ！と言う訳で次回もよろしく。今回はこれにて、失敬!!

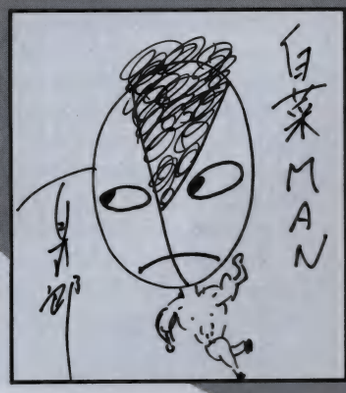
PICTURE GALLERY

イラストレーター／
RYÖ
(BY-SEXUAL)



イラストレーター
HIROMI
(ローゼンフェルド)

イラストレーター／
百太郎
(LADIES ROOM)



れでもという人は、自分の行動に責任を。

〈乙女座〉何事にも早め早めの行動がツキを呼びそう。思いたったらすぐ実行する積極性を。ただし人より遅れをとってしまった事にはあせらず行動を。3/4勇気を持ってアタックを。頼れるのは自分だけです。他人の力を借りず想像力に富んだプレゼントが吉。

〈天秤座〉今までの生活や環境を変えるには絶好の時期。思いきった行動で自分を磨くチャンスです。ただし迷った時は慎重に決断して下さい。異性からのアドバイスは吉。3/4友情の辛い板ばさみにあったら、男より女の友情をとるように。必ず後には幸福が来ます。

〈蠍座〉今まで地道に積み重ねていた事が大きく花開きます。しかしそれによって健康を損なう気配があるので体には充分注意して下さい。3/4控え目な態度で、でしゃばらない様に。ハデな物より質素な物で。

〈射手座〉あまりツイてない時期。何をやっても裏目に出そうな気配です。こういう時期は自らの感性、知性を磨きましょう。3/4思いつきの行動は信用をなくしそう。多くを望まず小さな愛をしっかりつかむ努力を。

〈山羊座〉先頭に立って物事を進めるより他人のサポートにまわっていた方が得する事が多そう。他人への気配りを忘れずに。後半に向けて貯金を。3/4なまじあれこれ工夫をこらすより、思いきってストレートに自分の思いを表現してみると良いと思われます。

〈水瓶座〉今までの不調が嘘の様に好調になりますが浮かれずじっくり行動を。思わぬ落とし穴があるかも。3/4すぐ結果を求めず、お互い考える時期を持つように。

〈魚座〉体調の変化に注意。悪い所はこの時期に治すように。サイフの口はきつめに。思わぬ出費がありそう。3/4自分のこだわりを相手に見せてあげて下さい。無難な線でいくのではなく、良いと思った事はつらぬいて。

それでは、また次号までバイバイ。

P・S『ギャンブル情報』2月生まれの方、どんどんぶっこめ！

◆返事の欲しい人は、占ってほしい内容と一緒に、62円切手を貼った返信用封筒に自分の住所・氏名を書いて同封して、SHOXX「TETSUの占いの部屋」まで送ってね。
なお、返事が届くまでけっこう時間がかかるので、気長に待っててね。

ARTIST'S BOX（ミュージシャンが作るページ）

似顔絵コーナー

参加者／今回はしいもんきいから、ルーシー&フミタカの登場だ！

フミタカが画いたルーシー

ルーシーが画いたフミタカ

俺のペット自慢

今回は特別ゲスト、偉大なる音楽評論家の大野さんの登場だ！　目の中に入れても痛くないぐらい可愛がっているウサギちゃんを、ご紹介しましょー!!

大野祥之さん（音楽評論家）

なぜだか、ウサギが好きなんだよな〜。昔からピーター・ラビットとか好きで、あるペット・ショップで2羽の子ウサギを買ったのが10年前。白黒のメスのパンダ・ウサギがZAZAで、白いオスがレナト。映画『ミスター・レディ、ミスター・マダム』から名前を取った。

その2ヵ月後、ピーター・ラビットにそっくりな子ウサギに出会って、思わず買ってしまったのが、『エデンの東』のジェームス・ディーンから名前をもらったキャルだった。

生まれてからずっと、根っからの犬派だと思っていたけれど、この3羽との出会いで、少し考えも変わってきた。それぞれのウサギに個性があるし、犬や猫とは違った方向性で頭がいいこともわかった。

3年前にZAZAが肝臓ガンで死んだ時には本当につらくて、1ヵ月くらい何も手につかなかったものだ。散歩に行けば犬とケンカするし、絶対にオスを寄せつけなかったほど気性の激しいZAZAだった。

今、皮ジャンのポケットに入るくらいの大きさだったキャルは、ネコなみの大きさでもうすぐ10歳。まるでウサマタで、言葉はほとんど理解しているんじゃないかと思うほど人間クサイ。

レナトはその後、実家にもらわれていって、シェトランド・シープドッグのハヤテと一緒に遊んだり、寝たりして暮している。

そしてなんと去年の夏に、新しく来たのが映画『フラッシュバック』のキーファー・サザーランドの役名をもらったアンゴラ・ウサギのフリー。毛むくじゃらで、耳の先からも長い毛がたれているフリーは、生きているぬいぐるみそのもの。

普通のチンチラ種やダッチ種よりも気性が激しいといわれているアンゴラウサギだけれど、フリーはかなり人なつっこくて、今この原稿を書いている時でも、オレの足元で横になって、オレの足をペロペロしている。

ただ、ウサギの生態に関しては、まだちゃんとした研究が完成されていないというのが、ちょっと不思議なところ。知られていないだけに、『ウサギに水を飲ませると死ぬ』なんていうバカなことが、今だに信じられているのだ。水なしで生物が生きられるわけないのにね。

キャルもZAZAもシャワーで体を洗うし、レナトなんて洗面器に張ったお湯につかって気持ち良さそうに目を細めたりもする。ウサギに水は厳禁っていうのがウソだっていうことが、これでわかってもらえると思う。ただし、その後は完璧に乾かしてやるけどね。

鳴かない、外へ出たがらない、かわいいと、3拍子そろったウサギは、マンション住まいに最適。これから、オレのようにウサギをペットにする人も増えるはずだ。

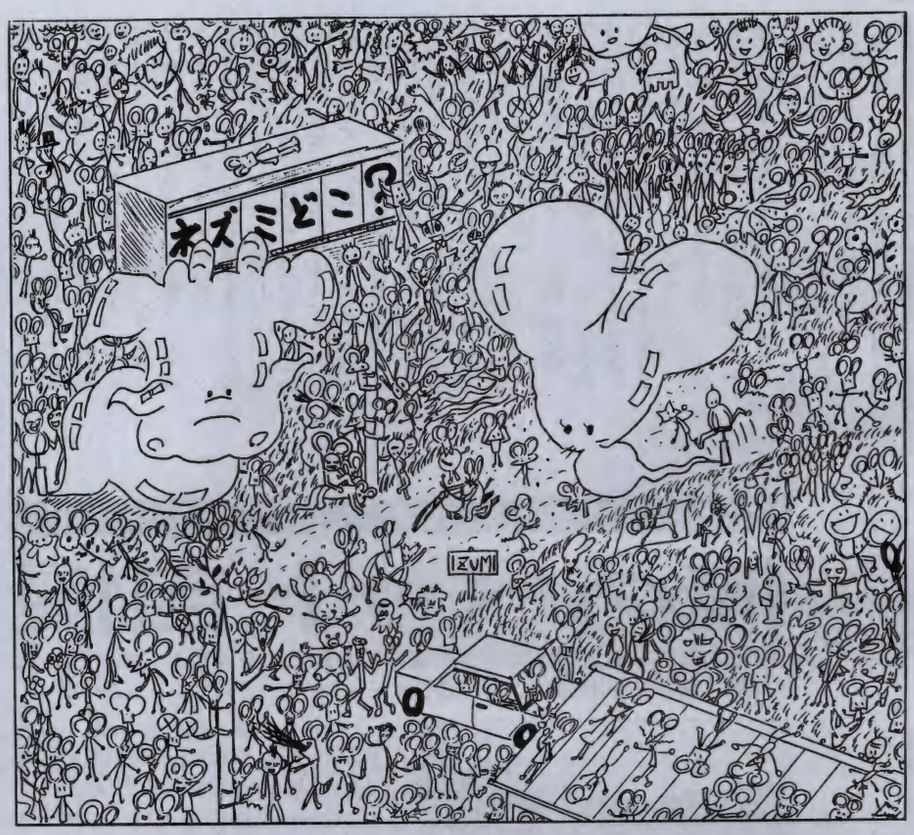
今の夢は、そういう人のために、ウサギの飼い方を書いた本を出版したいんだけどね…。

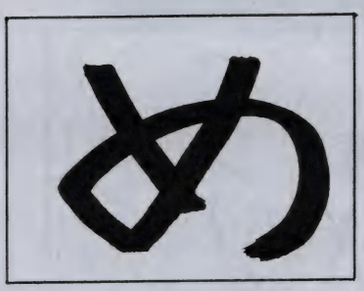
IZUMIのポレポレ人生劇場

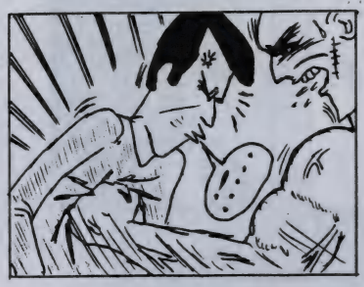
お正月スペシャル企画だ!?

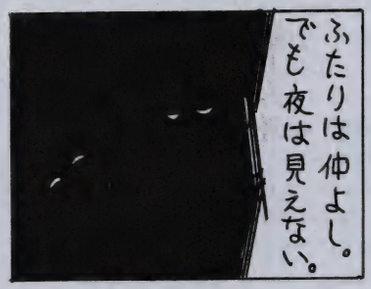
作／イズミ(AION)

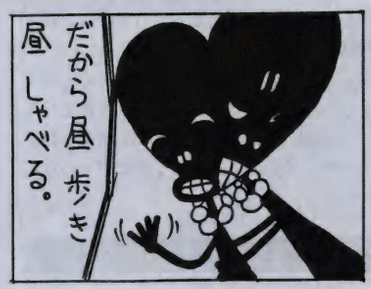
ネズミくんを探したら、ネズミくんに赤マルをつけて「とくにこのへん」と書いて、絵全体を切り取って(コピー不可)SHOXX「IZUMI様おめでとう」係まで送って下さい。正解者の中から抽選で10名様に、IZUMIの何かわからない品セットがおとし玉プレゼントされます。どしどし応募しよう。

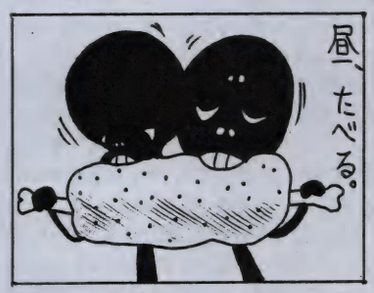


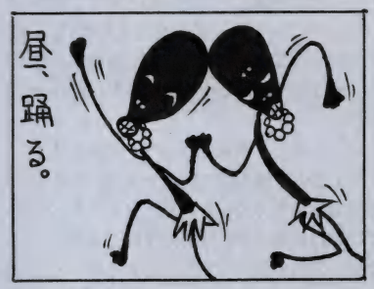












SHOXX VOL.7のクイズ

「これは何だ!?」の解答

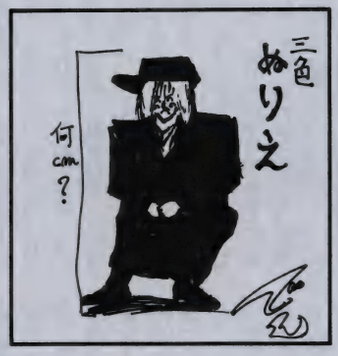
出題・JUN
(LADIES ROOM)

正解は、**かきデカ**でした。簡単だったでしょ。ほとんどの人は○だったけど、「パタリロ」とか「バカボン」なんて答もあったぞ。〝死刑〟なんて言葉、もう誰も使ってないもんなぁ…。さて、今回の当選者は、川崎の永田正美だ！はずれた人は、JUNの絵を真似して書いてみよう!!

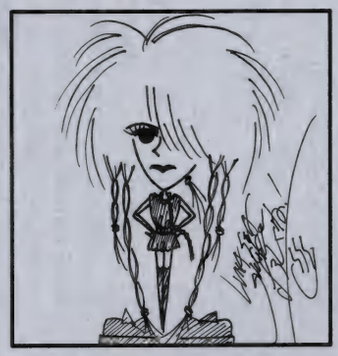
自画像公開

「私は誰でしょう!?」

TOSHI
(ガーゴイル)



DEN
(BY-SEXUAL)



SUGIZO
(LUNA SEA)

SHOXX
恒例特別企画

ミュージシャンが語るシリーズ

『バレンタインデーの思い出』

今回のテーマ

今年もまた、バレンタインデーの季節がやって来ました。もう、お目あての彼へのチョコは買ったかな?
もらえた人ももらえなかった人も、それぞれいろんな思い出のあるバレンタインデー。これから計画をたてる人は、参考にしてネ。

A RTIST'S BOX
ミュージシャンが作る本ページ

STRAWBERRY FIELDS

福井「はっきり言って、バンドを始めるまでちゃんとしたバレンタインデーのチョコっていうのは、もらったことがないです。学生時代は、どうせもらえないんだからって、けっこう卑屈な青年でしたね(笑)。あんまりいい思い出はないです。」

ZIGGY

森重「バレンタインデーね。思い出と言うより、現在進行形なんですけど。毎年ね、チョコレートをもらうじゃないですか、ガーンと。ファンの人とか、プレゼントくれるでしょ。ワシはね、甘いもんが食えんのですよ。いっさい、受けつけないというか。まあ、ひとつやふたつだったら食べられるけど、鬼の様に来ますからね。ありがたい話なんですけど、本当に。こんな恵まれないオジサンに(笑)。ちょっとねぇ、食えんのですよ。

チョコレートが、ちょっと入ったお酒とか(笑)、いわゆるビンものにしてもらえると。なんで俺に、『ねりうに』とか、そういうものくれないんでしょうね(笑)。お菓子屋の陰謀にはまってるな、というね。気持はうれしいんですけど。やっぱり年も年ですから、だんだんそういうのも少なくなってくるのかもしれないですけど。少なくなると、淋しいのは淋しいんですけどね。なかなか複雑なもので。」

Luis～Mary

Haine「オレ、あんまないわー。オレ、あんまもらわへんかったもん。こういうバンドとか始めてから、結構そういうものもらうでしょ。それまで、学生の頃とか全然もらわへんかった。彼女もおれへんかったしね。もうギリギリ、2月のあたまぐらいで別れるとかね(笑)、そんなんはあったけど。

今度のバレンタインデーは、チョコレートだと、食べきれへんかったりしたらもったいないような気がするから、できたら食べんでも済むモノとかの方が、きっと、使い道がいいんじゃないかなーと思います。別に、要求してるワケちゃうけど(笑)。」

Shien「オレ、チョコレート嫌いなんですよ。甘いもんが大嫌いやから。

昔ね、中1の時につきあってたコに、何か手作りのチョコレートをもらったんですよ。それで〝食べた?〟て聞かれて〝食べた〟て言うたけど、実は捨てました(笑)。」

SISTER'S NO FUTURE

TOMMY「友達とかにはけっこうもらってた。数とかは、いっぱいもろてんけど、そのコからもらいたいなぁーいうコの、友達の方がくれるんですよ、いつも(笑)。あのコからもらったらうれしいなっていうのはあってんけど、そのコの友達が僕にくれて、そのコが僕の連れにあげてたりとか。

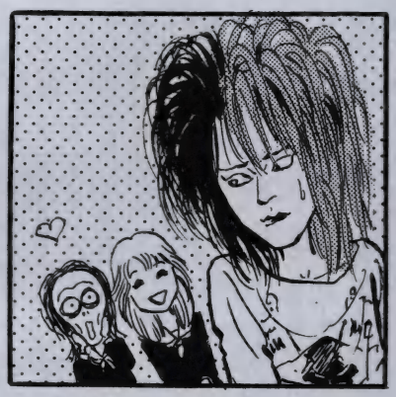
お返しは、したことないです。だから、くれて良かったなぁって思う様な子なら、返すんだろうと思うんやけど。今まで一回も返したことはないなぁ。」

ケンちゃん「メジャーになる前の方が、けっこうもらってて。何故かって言うと、僕、客商売やってて、バッヂとか売ってたんですよ。エックスとかジュンスカとか。頭とか派手やったから、まぁ若い女の子とか、よう来てくれて、だから、バレンタインとか、けっこうようもらえて。僕、その頃甘いもん嫌いやったから、家持って帰って。で、母ちゃんとかが好きやったから、喜んで朝から晩まで食べてた。お返しはしなかったね。〝ありがとう〟とか言って。最高80何ほもらいました。客商売やからね。まあ、かまちもやってて、ちょっと人気でてきた頃やったから。バイト先の

ミュージシャンが語るシリーズ

『バレンタインデーの思い出』

オジサンが、よう怒ってた。仕事もせんと、チョコレートばっかりもらって、何しに来てんのやって。」



BY-SEXUAL

SHO「特にないけど…、昔つき合っていた女の子に手作りのをもらったぐらいかな。デビューしてからは、地方から生物が届いたりとか、手作りのものが届いたり…。みんな、事務所とかに送ってくるじゃあないですか。全部は食べられないけど、中には、心のこもった手作りのチョコレートとか、ケーキとかあるし。チョコレートはいっぱいもらえるだろうからって、違うものをくれる人もいるし。今まで、そんなにいっぱいもらったって思い出もないし…。毎年姉貴にはもらうけど(笑)。こっちに来てからも、なんか送ってくるんだよね。」

BY-O「中学生の頃とか、結構もらっていたような気がするな。誰にもらっても嬉しいものだけど…。カワイイ子がくれるとやっぱり嬉しいですよね。それが一番自慢じゃないですか、数が少なくても。〝これ、アイツにもろうたんや〟って。オレ、チョコレート結構好きやったから、食べた。最近ちょっと嫌いになったけど。まぁー大人になったのかな。

やっぱり、今のほうが昔の何十倍ももらえるけど。でもまぁー、ジャニーズ系のアイドルのバレンタインの話とか聞くと、なんだ大したことないんだ、オレらって思うけど。まっ別格かなっと。」

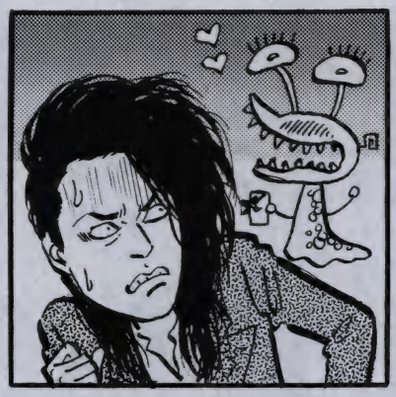
DEN「バレンタインは、あんまり印象ないかな。あんまり、いっぱいもらうほうじゃなかったから。小学校のとき、そういう物事が世の中にあるって知らなくてね。机からいつも通り本かなんか出そうとしたら、チョコレートがポトッと落ちたんですよ。〝なんじゃこりゃ〟って言って、周りの人に〝チョコが入ってたゾ、オレのところに〟とか言ってて、周りも結構うといやつばっかりだったから〝おぉー、えぇー。食おうぜ、食おうぜ〟て言ってポリポリ食っていたら、向こうのほうにいた女の子がすごいショックな顔で座っていてね。後で、その女の子の友達がパッときて〝アンタにあげたのよ、あれ。みんなに食わせたでしょ〟って言われて。〝何でオレにくれるの?〟ってきいたら〝これこれ、こういう日があるの〟って説明されて…、〝あっ、そう。なるほど〟って。

同じクラスでも、女の子の方が結構マセてるって言うか、早くて。オレなんかそんなの全然知らなくて〝うまいな、儲け、儲け〟とか言って。後で、その友達の女の子にすげぇー怒られたって言うね。」

NAO「バレンタインデーはね、オレ毎年嫌だったんですよ。オレ、チョコレート、ダメなんですよ。食えないんですよ。もらったら兄貴が食うか、おかんが食う。ちょっと自慢させてもらいますと、もらえなかったことがないんですよ。たいてい10個ぐらいはもらってたんですよ。ほかの学校の子からも、もらってたし。結構人気者だったんですよ、私、お調子者と言うことで。知ってるやつがひとりいるだけで、ほかの学校の宴会に乗り込んじゃったり…。そこでたまたま知りあった女の子が、オレのこと好きになって持ってきたりとかね。一応毎年ね、2けた代は突破していたんですよ。家には、チョコレートやプレゼント類があったんですけど…。食べられないんですよ。なかには手作りのやつとかあるでしょ。そうすると悪くなっちゃってね。食えないのに鼻つまみながら、とりあえず一口食って、水で流し込んで…。作ってくれた人に悪いから。

もし、チョコの代わりにもらえるとしたらお金がいいな。だって、5百円のチョコレート10個もらったとして、それ現金でくれって言ったら5千円になるんですよね。それだったら、酒屋で、ハーパー2本ぐらい買えますもん。」

LADIES ROOM



GEORGE「高校2年の時、〝バレンタインのチョコ、よこせよ〟って、女の友達に言いまくったんだ。そしたら〝じゃ、3月14日に義理キャンデーくれる?〟って言うから、〝当然やるよ、当たりめーじゃないかよ〟って言って、さんざんチョコレート集めたんだよ。それで、23個集まったんだけど、そのあとオレ、高校やめちゃって、誰にもあげてない(笑)。そんなんで、キャンデーもらおうなんて、甘いよな」

百太郎「小学校3年ぐらいかな。すっげーブスに追いかけ回されて、無理やり渡されたことがある(笑)。すっげーブス、絶対いらねぇっていう。びっくりしちゃうような子でした。何かあの頃って…、小学校の頃って、チョコレートとかもらう時ってみんな逃げ回ってたよね。オレは普通にもらってたんだけどその子だけは、どうしてもイヤで(笑)。どうしても、もらいたくなくて、もらっても食えないだろうみたいな。無理やり渡されて、次の日からオレは、黒板に、よくあいあい傘とかあるじゃない、その女と1ヵ月ぐらいずっとみんなにやられてました。

そう言えば、もっとイヤな思い出があった。家帰ったら、オフクロが中学終わるぐらいまで、毎回くれた(笑)。あれはちょっと、勘弁してもらいたいよ(笑)。」

NAO「中学の時、恥ずかしかった。紙袋とかもらうじゃない、もらうの嬉しかったんだけど、それを持って歩いて学校から帰る作業が、すごく恥ずかしかった。家に持って帰るのも、隠しながら持って入って。もらったんだなって、周りからそう思われるのがすごく恥ずかしかった。」

JUN「恥ずかしくってさぁ。ベルが鳴って学校終わって、すっごいダッシュで家に帰った。」

DIAMOND YUKAI

「どういうわけか、俺の周りっていうのはさ、モテる奴が多かったんだ。俺の親友になる奴がさ、モテるわけよ、みんな。学校のアイドルだったりして。で、俺はいつも後にくっついてる様なイメージになっちゃってさ。

中学の時ね、自転車通学だったんだけど、ある時、バレンタインデーで、帰る時にさ、何かそいつの自転車に、チョコレートがいっぱいあったわけ。それみんな、俺食っちゃった(笑)。〝何でコイツだけもらえるんだ、バカヤロー〟って、全部食っちゃってさ。全然ばれなかったよ。それが思い出だね。」

AURA

龍巻のPIE「義理チョコを本物と思って、勘違いしたことある(笑)。」

MARBLE「中学の時とか、下駄箱にあったりね。そういう日って、けっこう家出る前から緊張してるじゃない。周りの気配を感じながら、一人でドキドキして。まあ、お母さんとか近所のおばさんとか、そういう方が多かったよ。あとは姉貴と妹がいるから、その二人からもらえたし。ちゃんとしたのは、ほとんどなかったね。」

KOREOS「もう、超モテモテ(笑)。中学はテニス部で、もう絵に書いたようなトレンディ野郎だったから。高校の頃は男子校で男子校って意外とモテたのよ。バス通学で、他の女子校の生徒とか、中学の同級生の子とか一緒に乗ってて。ほんとカッコつけてたのよ。数はけっこうもらったね。友達と競ってたよね。

今年はチョコじゃないのちょうだい(笑)。スーパーファミコンのカセットとか、インドもんのシャツとか、イグアナのえさのチンゲンサイとか。」

REOS「けっこうコンスタントにもらってた方だな。そういうのやりだす小学校6年ぐらいから、常に3個は絶対もらってた。多いときは10個ぐらい。でも、やっぱり本命の子からもらうのが一番いいね。オレの家は坂の下の方なんだけど、100mぐらい離れた上の方で待ち合わせして。向こうは友達と3人で、遠くに二人いて、本人がこっちに来て。

ARTIST'S BOX

もう、オレなんてドキドキだったな。
チョコレートはけっこう食べるな。そこまで好きじゃないけど、あれば食う。」

LUNA SEA

J「もらうでしょ。手作りとかもらって、すごい嬉しくて…食べれないんですよ、悪くて。で、部屋のかどのところに置いとくでしょ。ずーっと忘れてて、二ヵ月ぐらいたつとカビはえてるとかね(笑)。でも、目で食べてます。」

筋肉少女帯

橘高「オレはね、小学校の時はすごいモテたの。何10個ともらったのよ。疑いなく、オレってすげぇなーって思ってたのね。で、中学に進んで、ギターとかのめりこんでって、だんだん時代が変わってきてさ。まあ、そのぐらいの年頃ってそうなんだけど、やっぱりさ、健康なスポーツやろうの方が人気が高くなっていくじゃない。オレはそこで、ギターやらで、けっこう何かに向かって一つしかやってないパターンになってて。はたから見ると、ウジウジしてたのかもわかんないけどね。中学になったらね、義理チョコ一個しかもらえなかった時があってね(笑)。その時以外は何だかんだいってずっともらってて、その後もバンドとかやるから本当にいっぱいもらってて。その中学1年か2年の時にね、パラソルチョコのさ(笑)、30円か50円ぐらいのを一個前の席の女がくれてさ。義理チョコは確かにもらえるじゃん。あと何か本物のちゃんとしたのもらえるだろうと思ったら、その年はそれしかもらえなかったの(笑)。それが一番の思い出だね。」

しいもんきい

フミタカ「小学校のバレンタインの時に、友達が〝お前、お道具箱見てみー〟ちゅうてね、〝なんでぇ〟とか言うて。何かあるってこと?〟とか言うてたんですよ。僕、お道具箱の中にチョコレート入れるなんか知らなかったんですよ。開けてパッと見たら、ガンダムのプラモのチョコが入っててね。これが、人生において残る思い出ですね。」

ヤヨイ「チョコレートもろうてもね、隠してました、たぶん。恥ずかしいて。自分で言うのも何ですけど、けっこうもらいました。」

リッキー「もらったら、姉ちゃんにあげてたのかな、あんまり好きじゃないんで。まあとりあえずいつも何個かはもらってました。」

ルーシー「小学校の時にね、家に持ってきてくれた子がいたんですよ。けっこう可愛いかって、手渡しでもらいたかってんけど、ちょうどクソしとって(笑)、〝おれへん言うとって〟とか言うて。それが後悔してるなぁっていう感じですね。」

THE OTHERSIDE

優朗「バンドのメンバーがみんなチョコレートもらってるのに、オレのとこに来たのは、バーボンとかスコッチばっかりで悲しかったです。初めてもらったのは、小学校の時でした。手作りのチョコレートケーキで、まずくて食えたもんじゃありませんでした。相手は小学生でした。」

東京YANKEES

AM「バレンタインにチョコレートくれた女を、半年かけてくどいて、チョコレートくれたわりには男がいて、9月だか10月におとして、つきあった思い出があります。」

U・D・A「甘いもん食うと太るから嫌いです。」

UME「ここんとこ、いろんな雑誌に載せてもらって、博打が好きとか言いますよね。そしたら去年、マージャンパイの形したのとか、そんなのばっかりもらって、なかなか嬉しかったです。」

NORI「今年こそは、チョコレートたくさんもらいたいな。」

DIE IN CRIES

KYO「高校生の時に、1年だったっけかな。いわゆるアイドルパーマって言うんですかね、そういう頭をしてたんですよ、たのきんトリオみたいな。ナンパ小僧で。で、そん時、電車通学だったんですよ。だいたいいつも、同じ時間の同じ車両に乗るでしょ。電車通学になって、初めての年のバレンタインに電車が遅れて、ダイヤがずれてるから〝もしかしたらもらえたかもしれないのに、だめだな〟と思ってたら、同じ駅から乗って来る頭のいい女子校の子に、オレが降りる瞬間に肩をポンポンてたたかれて、電車の中でもらったことがある。周りのオヤジがみんな見て、すごい恥ずかしい思いをして学校に行って、行ったらみんなにからかわれて。
手紙とか名前とか入ってなくて〝不思議な人だなぁ〟と思ってて。で、そん時彼女がいて、学校の帰りに待合わせをしてたんだけど、どうしようかなーと思いつつ、〝いいか、もらっちゃったって言えばいいや〟と思って降りてったら、改札の奥にくれた子が立ってて、絶対絶命だったっていう思い出がある(笑)。」

DEEP

ATSUSHI「小学校5年生ぐらいの時に、大きい板チョコをもらったのね。そんな大きいのもらったの生まれて初めてで、くれた子も可愛かったから、嬉しくて。あんまりチョコ好きじゃなかったけど、捨てるのももったいないでしょ。でも食べきれなくて、ずっと冷蔵庫にとっといたら、カビがはえてきちゃって捨てちゃったと。」

JYUICHI「中学1年生か2年生の時に女の子のグループがあって、それにめっちゃくちゃ嫌われてて。で、バレンタインになったら、みんなでチョコくれたぞっていうのが、よくわかんないなっていう。何だ、ほんとは好きだったんじゃないか、おめぇらって。オレの方は、好きじゃなかったんだけど。」

RAY「小学校の時に、バレンタインデーになると、女の子が男の子を休み時間に外に出して、カーテンをバーッと閉めて、好きな男の机にチョコレートを入れるんですよ。それで僕がクラスでトップになりました。」

GARGOYLE

TOSHI「僕、甘いもんあんまり食べないんですよ。ちょっと苦手な方やから。いちおう部屋の押し入れに入ってますけど、まだ。もらったものそのままにしておくのは悪いから、1個ずつちょっとずつは食べるようにしてるんですけど。でも酒とかもらった方が嬉しいですね。くれとは言わんけど。
中学ぐらいの時にね、一つひどいことしたなぁ思ったのが、女の子が、何かアップリケっていうか、スポンジみたいなやつあるでしょ、縫うて何かするやつ。あれを作ってきて、カバンにつけてぇって持ってきてんけど、中学ぐらいの時って、男と遊ぶほうがおもしろかったし、けっこう硬派なタイプやったから、それを〝いらん〟とか言うて、それでもその子の友達が無理やりカバンにつけようとしたから、それを引きちぎって捨てた思い出がある。
今考えると、何てひどいやつなんやろうっていう。ごめんなさい(笑)。バレンタインデーってあんまりええ思い出はないわ。」

DECAMERON

NAOKI「バレンタインにチョコもらうってことは、僕、つきあうことだと思ってたんですよ。子供の頃、キスしたら子供ができると思ってたんです(笑)。で、それはもうつきあえるあかしやと思って、3月14日にホワイトデーってあるでしょ。僕もあげて、小学校の時、つきあってたかなぁ。」

X

YOSHIKI「チョコレートは好きだけど、食べられないから、バレンタインは好きじゃないです(笑)。ただ、好きな人同士が結びつくきっかけになるのなら、それはそれで素晴らしい日だと思います。
個人的には……俺、中学時代から、もてましたからね(笑)。もう、言いきりますよ。ああ、あの頃に戻りたい(笑)。あの頃は、好きなだけ食べてましたから。
でも、チョコレートがもらいたいっていうよりも、もっと雰囲気っていうか……。うん、なんか違うな(笑)。なんか、恥ずかしい。学校行くとき、ドキドキしてたし。行きたくなくなっちゃって、よく休んじゃってたもん(笑)。
もらっても恥ずかしいし、もらえなくてもイヤだし、なんかイヤだった。恥ずかしいの、苦手なんです。
でも、チョコは、今、食べられないから、みなさんの心だけで十分です。でも、なんか、イヤな男ですね。〝チョコレートは、送ってこないで〟なんて(笑)。なんて、イヤなやつなんだろう。
でも、ドクター・ストップがかかってるから、仕方ないんです。みなさん、僕をイヤな男だと思わないでください(笑)。」

イラスト／シマあつこ

♡お手紙くれた方、返事が書けなくてゴメンナサイ！でも全部読んでるからね～～～♪

8ビートギャグ（国内版）

YOSHIKIを探せ!!

シマあつこ

だ～～れだっ！

知らない

だぁ～～れだっ！

知らない

ここは都内某所のフォトスタジオ

なんだよー

ねえねえかくれんぼしよ！

それではタイジさんから行きま～す

日刊SHOXX

ぱぁ

ジャンケン…

チェッ！

10数えてねー

1

2

3

おいヒデ！ヒデ!!

気分でも悪いのか？ヒデの番だよ

ヨシキー

早く早く！

撮影は順調に進んでいったのであった。

……が。

なにっ!? ヨシキがいないっ!!?

SHOXX

ヨシキ～～～

ヨシキ～～～

あ～～～っどーしようヒデちゃんのせいだ～～～！

RRRR…

えっ？ヨシキから連絡？別にないよ

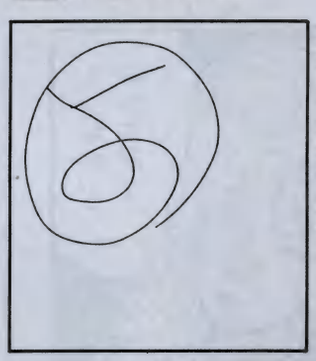
ヨシキが行方不明？
それは大変だ！失踪したって!?
え――っ!!
国外へ亡命したんだって!!
うっそー
ユキ
ばっ!!
人肌恋しい…じゃねーよひと肌脱ぐか
じゃ、パリに行ってみるよ
そりゃー無謀だ
オレたちはN.Y.に飛ぶよ
こんにちは―まいけるとみおかでーっす!
ひとまず今日は終わりにしましょうか
ほんじゃお疲れ様でした～～
SHOXX
よしっ！ロンドンだ!!
昔貴公子だったフレディ・マーキュリーさん
こうしてみんな各国へ探しに行ったのだった。
ガラパゴス島に行きませんか…
えっ…？
あ、パタそこ物置……
あっ!!
ひい～～～ん!!
何でこんなとこで寝てんだよー
ヒデがなかなか見つけてくんないからじゃ～～～ん！
心配したんだぞぉ！
ヨシキ!!
よしきぃ――――ッ
……。
(12 Dec. '91)

waku waku PRESENT

SHOXX 恒例スペシャル企画

さあ、
お待ちかねのプレゼントだ！
今年も頭っから、
すっごぉ〜い豪華商品(?)を
そろえたぞーっ!!
応募したければ、
P128を読むのだ！

2 YOSHIKI

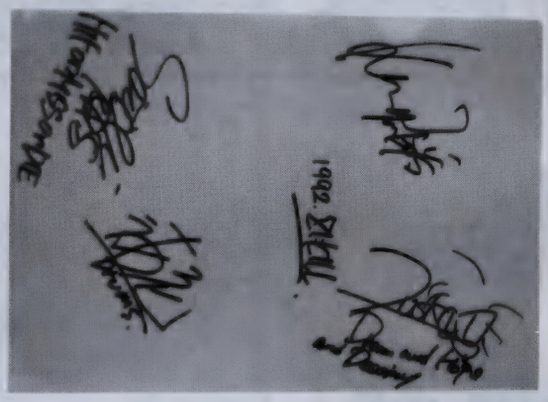


Ⓐサイン色紙を1名様に。

Ⓑサイン入りポラを2名様に。

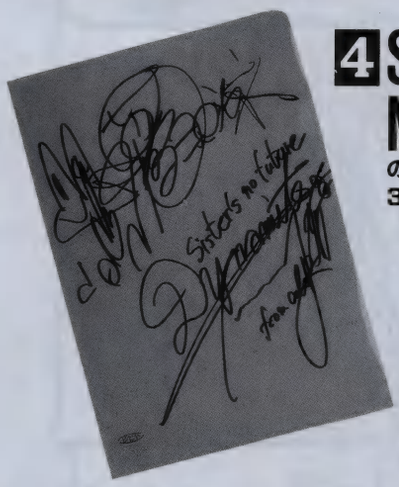
3 ZI:KILL

のサイン入りファイルを
3名様に。



4 SISTER'S NO FUTURE

のサイン入りファイルを
3名様に。

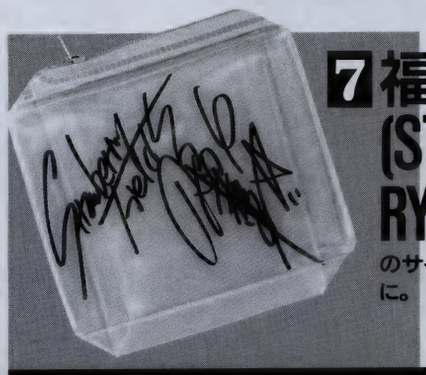


1 X

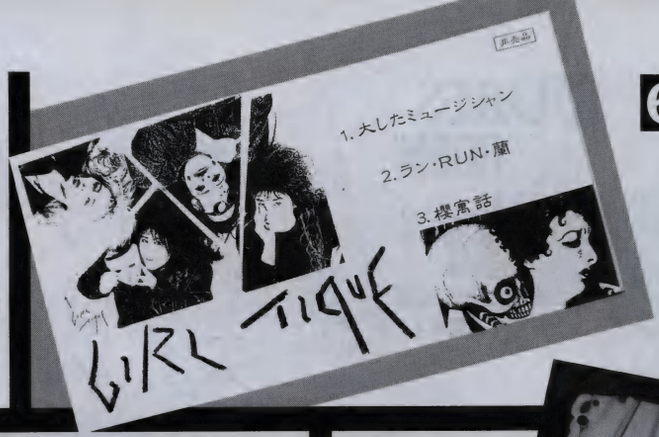
のサイン入りファイルを各１名ずつ、
計５名様に。

5 Luis~Mary

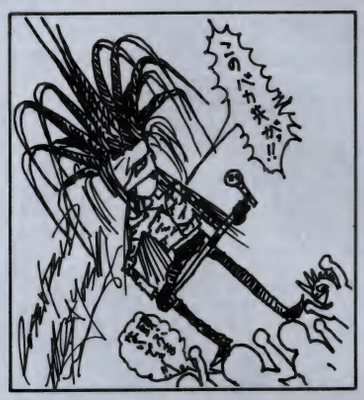
のテレカを10名様に。



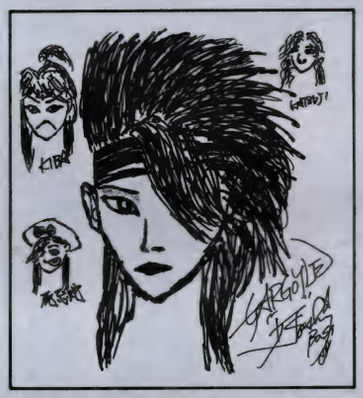
7 福井(STRAWBERRY FIELDS)
のサイン入りポーチを3名様に。



6 GIRLTIQUE
のCDを10名様に。



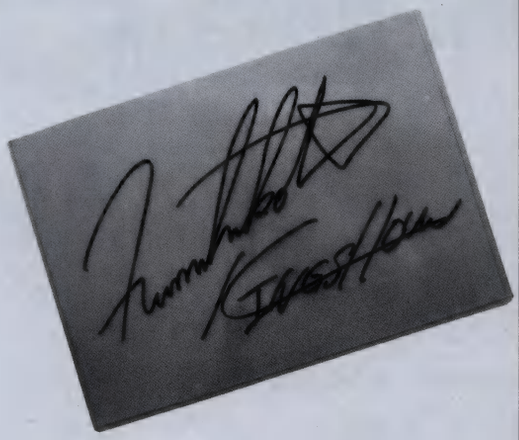
10 HIROMI(ローゼンフェルド)
のイラストを1名様に。



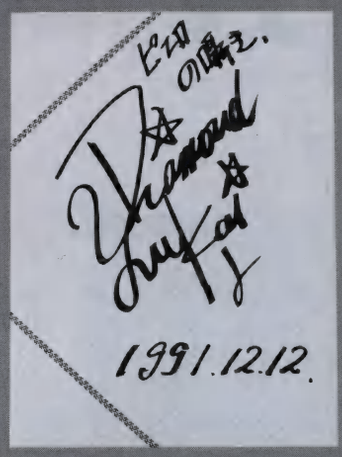
9 TOSHI(GARGOYLE)
の自画像を1名様に。

8 ALICEMARE
のポスターを10名様に。

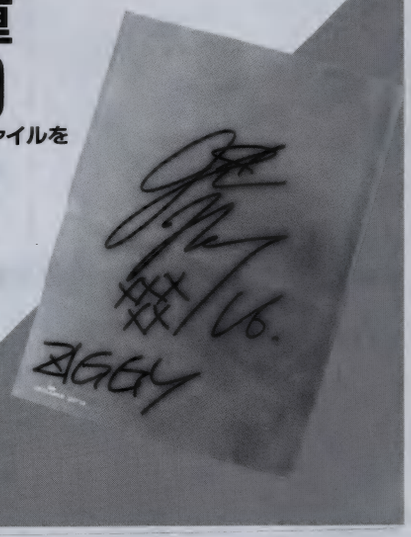
13 橘高(筋肉少女帯)
のサイン入りクリアー下じきを3名様に。



12 DIAMOND YUKAI
のサイン入りファイルケースを3名様に。



11 森重(ZIGGY)
のサイン入りファイルを3名様に。



カンタンな宛名書きの仕事
◉郵便の上書き主体の仕事です
◉男女・年齢・経験不問
◉字の上手・下手は問いません
◉全国どこでも自宅でできます
◉月収5万円上可能
★入会金・保証金は一切ありません★

★お急ぎの方はお電話で
☎03(3555)1277(代)
NIPPON-CHOKUHAN
日本直販1286係
〒104 東京都中央区築地4-4-15-1286

案内資料無料送呈
今スグ、電話かハガキで請求を!

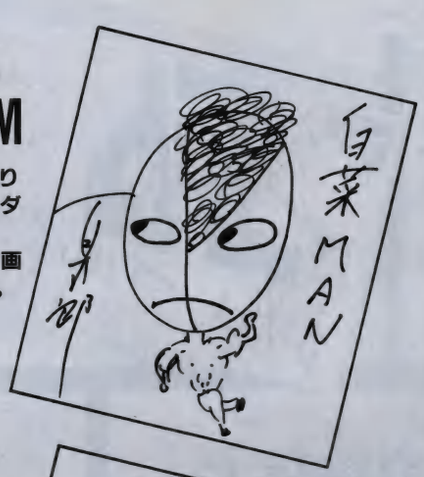
資料送れ
●住所(〒)
●氏名
●年令
●電話番号

41円
〒104
日本直販
1286係
東京都中央区築地
4-4-15-
1286

自宅仕事で一日数十分。月収5万円上可能!

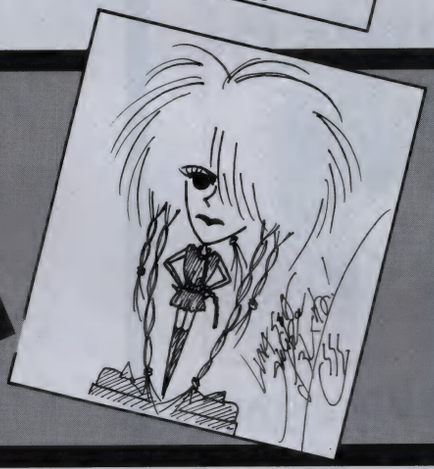
14 LADIES ROOM

のⒶサイン入りペーパーホルダーを2名様
Ⓑ百太郎の自画像を1名様に。



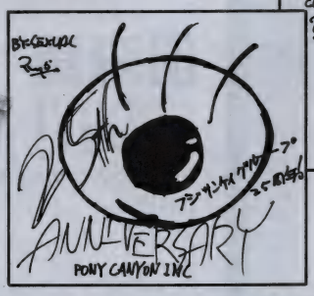
15 SUGIZO(LUNA SEA)

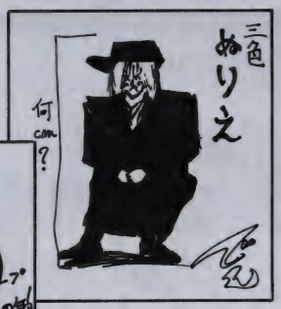
のⒶサイン入りポラ
Ⓑ自画像を各1名様に。



16 BY-SEXUAL

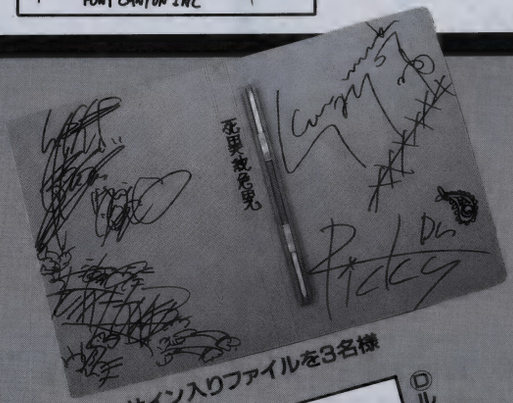
のⒶRYÖのサイン入りビニールバッグを3名様Ⓑ同じくRYÖのイラストを1名様ⒸDENの自画像を1名様に。





17 しいもんきい

のⒶステッカーを5名様



Ⓑサイン入りファイルを3名様

Ⓒフミタカのイラストを1名様

Ⓓルーシーのイラストを1名様に。

アンケートのお願い

●下のアンケートに答えて、用紙を切り取り、ハガキに貼ってくれ（コピーはダメ）。
●わくわくプレゼント（P126〜129）の中から欲しいプレゼントの番号を選び、アンケート用紙に書いて送ってくれたら、抽選で当たるんだヨ〜。
●あて先は、〒104 東京都中央区銀座5－1－7　数寄屋橋ビル5F　音楽専科社SHOXX編集部まで。
●〆切日＝92年2月20日（当日消印有効）

●Vol.7　プレゼント当選者発表

（敬称略）①熊本市　丸山よし子、北海道　大河内まゆみ、世田谷区　前田久美子、長野市　柳沢百代、大阪府　竹蔵祐司、佐賀市　辻本勝美、他5名②新潟県　今井信也、横浜市　藤井智宏、他8名③船橋市　金子裕美、京都市　平岡千佳子、埼玉県　宮前広美、他2名④福岡県　森崎亮平、他2名⑤静岡県　有賀航子、他2名⑥茨城県　福田育子、町田市　笹原恵子、川崎市　加藤晶子、他5名⑦兵庫県　中井良之、栃木県　角田亜夢、他5名⑧神奈川県　佐藤こずえ、他1名⑨群馬県　川辺紀子、他4名⑩浦和市　古堀真澄、宮城県　永沢善伸、他3名⑪山口県　浦田寛美、中野区　林由佳、他2名⑫和歌山県　谷本公子、他4名⑬青森県　佐野仁美⑭札幌市　菅原久美子、川越市　池内美晴、盛岡市　主浜美希、他2名⑮岡山市　竹林さちこ⑯神戸市　羽田理恵子⑰千葉市　丸山麻美子⑱大和市　香坂真由美⑲岡山県　安田美和⑳大宮市　竹林史子㉑北海道　木村恭子㉒新潟県　斉藤詩子

●今月号の記事一覧（アンケート★1〜2）

①X②GRANDSLAM③筋肉少女帯④DEEP⑤BUCK-TICK⑥DIAMOND YUKAI⑦AION⑧スティル・アライヴ⑨レディースルーム⑩タイ・イン・クライス⑪SISTER'S NO FUTURE⑫LUNA SEA⑬しいもんきい⑭THE OTHERSIDE⑮LIGHT&SHADE⑯ヴィジュアル・ショックス・インヴェイジョン⑰インディーズHR最新情報⑱アーティストBOX⑲8ビートギャグ⑳わくわくプレゼント㉑ロックンロール日記㉒ジキル㉓ロックンロールパーティ

SHOXX アンケート用紙

住所	〒　　TEL　（　　）		
氏名		年齢	男・女

★印今月号の記事一覧参照

★1．今月号で良かった記事の番号を3つあげて下さい。
□□□　●その理由

★2．今月号でつまらなかった記事の番号を3つあげて下さい。
□□□　●その理由

3．あなたの好きなアーティストは？
（　　）（　　）（　　）

4．上記以外で好きになりそうなアーティスト（インディーズ含む）は？
（　　）（　　）（　　）

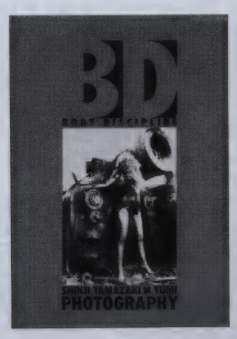
5．今月号（VOL.8）に対する意見、不満を聞かせて下さい。

6．欲しいプレゼントの番号
（P126〜P129参照）

第1希望	第2希望	第3希望
番	番	番

（キリトリ線）

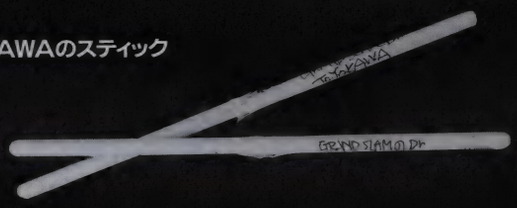
21 シンジ・ヤマザキ×ユミ写真集（提供フールズメイト）を5名様に。



19 優朗(THE OTHERS-IDE)のⒶサイン入りポスターを5名様に。

18 LIGHT & SHADE のサイン入りポスターを5名様に。

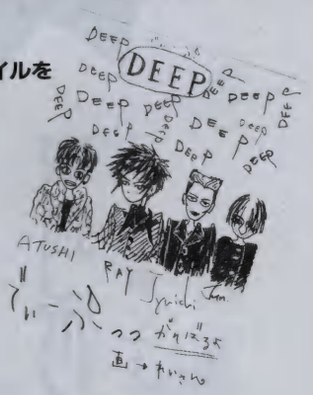
22 GRANDSLAM のⒶTOYOKAWAのスティック



Ⓑサイン入りリムを各1名様に。

ⒸBAN、RUDY、JUNYAのピックをそれぞれ5名様に。（誰のが欲しいかを記入して）

20 DEEP のサイン入りファイルを3名様に。



大仁田厚&F.M.W SOLDIER OF FORTUNE

ARENA37°C臨時増刊

定価2,000円(本体1,942円)

戦士の魂が炸裂 超人プロレス大仁田 厚の 真髄を集約

●5月6日大阪万博お祭り広場"有刺鉄線バリケードマット地雷爆破デスマッチ"●5月29日東京大田区体育館"SHO・GE・KI/奥義戦～世界マーシャルアーツ選手権"●6月30日東京後楽園ホール●8月17日"F.M.W＆ロックIN島根 炎のバトル"の模様の他、●サンダーファイアー・パワーボム対談"大仁田 厚vsCRAZY DANGER NANCYけんchan"●大仁田厚スタジオフォトセッション＆ロングインタビュー●工藤めぐみロングインタビュー＆オフショット●F.M.W名鑑●紙路～高槻～京見君節取材など大仁田 厚＆F.M.Wの魅力が一望できる必相写真集!!

株式会社音楽専科社
〒104 東京都中央区銀座5-1-7敷容屋銀ビル
TEL.03(3574)0201：FAX.03(3574)8548

好評発売中!!

大島暁美の

ロックンロール日記

取材コボレ話、イッキにあれこれ

ここまで書いてイイのか?(笑)

●×月×日

今日の取材は、GEORGEとJUN×SUGIZOと真矢の対談。この組み合わせだとレディース組みが圧倒的にしゃべりまくるんじゃないかという危惧もなんのその、SUGIZOと真矢はしっかりと健闘していた。そのなかで、GEORGEがインディーズ時代のステージ・ネーム(彼は以前、SEX GEORGEと名乗っていた)を、SUGIZOにプレゼントしたという話が飛び出した。「お前、これから、SEX SUGIZOになれよ!」というGEORGEに、SUGIZOはニコニコしながら、「わかりました」なんて答えている。取材が終わってからSUGIZOに、「あんなこと、雑誌に載せちゃっていいの?」と尋ねたら、彼は「全然、かまいませんよ」とケロリ。そこで、GEORGEに「どうして、あの名前をSUGIZOにあげたの?」と聞いたら、「あいつって、あんなルックスしてるけど、すごい勇気のあるヤツなんだ。それに、すげ一面白いし。どーせ、名前をあげるのなら、面白いヤツにあげたほうがいいじゃん。だから、SUGIZOにあげたんだ」という明白な答えが返ってきた。あの雑誌を読んでショックを受けたファンのみなさま、真相はそういうことなので、二人の友情に免じて(?)、SUGIZOの新しいニック・ネームを、暖かく見守ってあげてね。

●×月×日

今日は本誌でもお馴染みのビジュアル・アーチスト亀山哲哉氏の作品集『美粧画廊』出版記念パーティ。なんと、この作品集にモデルとして登場したアーチスト27人が、全員集まるという盛大なパーティだったのだ。わたしは彼の昔からの友人ということで、このパーティの発起人のひとりだったのだけど、彼の人徳がゆえの素晴らしい盛り上がりに、陰ながらウルウルと感動していたのだった。

さて、その二次会でのこと。わたしの席は右隣にHIDE、左隣に橘高ちゃんという超「両手に花」状態。つい、ご機嫌さんでヘラヘラと飲んでいたら、二人してこの日記のことを話し始めた。H「あの日記、ずるいよね〜。あれ読んでいると、飲んで騒いでいるのは俺たちだけで、筆者は端から冷静にそれを見てるって感じがする」橘「そうだよ。真っ先に騒いでんのは、誰なんだよ」H「今度、俺たちで『裏ロックンロール日記』を書こうか」橘「それ、いいね。それで、読者に、打ち上げにおける筆者の真実の姿を暴露しちゃおう」だってさ。でも、本当のこというと、わたしはこの二人の言葉にあんまり逆らえないの……。まぁ、原稿書いているときはシラフだからっていうことで、許してくださいませな。ペコペコ。

●×月×日

エックスの東京ドーム3DAYS正式発表記者会見&パーティ「破滅に向かって〜大懇親会」が、マスコミ各社を集めて盛大に開かれた。このタイトルを「破滅に向かって〜大行進会」だと信じていて、みんなに笑われた大馬鹿者はこのわたしです……。

●×月×日

今日は、デビルスのラスト・ライヴ。デビルスとはすご〜く長いつきあいだったので、ライヴを見てるときからとても悲しかった。フジトと初めて会ったのは、もう10年以上も前のこと。今も新宿にあるロック喫茶(死語だね)で、わたしはDJのバイトをしていて、フジトはその店の店員だった。当時、彼は一度デビューしたデビルスをアマチュアに戻して、もう一度活動を始めようとしているところだった。彼は一見コワそうに見えたけど、話してみると超がつくほど純粋で、子供みたいな人だったな。その後、とくに、今のメンバーになってからは、ライヴは必ず見ていたし、終わるとこれまた必ず飲みに行ってた。みんな、根っからのロックンロール馬鹿で、すごいいいヤツばかり。だから、解散するって聞いたときはすごいショックだったし、メチャクチャ悲しかった。バンドなんだからいつかは終わりが来るっていうことは、仕事柄よくわかっているくせに、この日は妙にセンチメンタルになってしまっていたわたし。

でも、彼らは1枚上手で、最後のライヴは明るく楽しいパーティでしめくくった。アンコールでは、GEORGE、PATA、ヤス(元リアクション)、キヨシ(元レッド・ウォーリアーズ)らがステージに登場しエアロスミスのナンバーを披露した。また、客席には彼らの最後のステージを見ようと、TOMMY、NAO、百太郎、オンちゃん、ウメちゃん、戸城画伯、HIDEと、そうそうたるミュージシャンがかけつけた。たぶん、今、デビルスのメンバーはうしろなんか振り返っている間もなく、新しい道を見つめているんだろうけど……。でも、でも、やっぱり大好きなバンドが解散してしまうのは、悲しいよ。グッスン。

●×月×日

突然、「今日の夜の11時から、YOSHIKIの取材ができます」という連絡が、彼らの所属事務所から入った。本当はV2のTDをするはずだったのが、小室さんが倒れて、急遽時間ができてしまったのだという。あわてて、彼らの事務所にかけつける。でも、YOSHIKIもずっと咳をしていて、体調が悪そう。「俺って、風邪ひいてる人と一緒にいると、必ずうつっちゃうんですよ〜」なんていいながらも、彼は一生懸命質問に答えてくれる。なのに、わたしは「YOSHIKIの風邪って性質悪そうだね」なんて、意地悪いってた。

そしたら、バチがあったのか、次の日から絶不調になってしまったわたし。朝起きたときから、喉が死ぬほど痛い。頭はクラクラするし、熱も出てくる。その3日後にあったLADIES ROOMの取材のときはもう死にそうで、インタビュー中に頭が真っ白になってしまうという最悪の状態。みかねたGEORGEが「じゃ、俺が進行してやるよ」と、わたしが持ってたニューアルバムの曲目表を奪いとり、勝手に取材を仕切ってくれた。取材が終わったあと、「いったい、どうしちゃったの?」とみんなが尋ねるので、「どうやら、YOSHIKIの風邪がうつったらしい」と答えたら、彼らは「ゲゲッ」という声とともに、ハチの子を散らすようにわたしのまわりから逃げてしまった。ん〜、YOSHIKIの風邪が最悪だというのは、身内では有名なことなのかもしれないな。

●×月×日

エックスWithオーケストラのコンサートが、NHKホールであった。開演時間がかなり押しはしたものの、無事にライヴが終わったあとのバックステージ。なぜか、いつも見かけない人たちが、いっぱい楽屋にいる。その人たちはメンバーにサインを頼んだり、一緒に記念撮影したりしているのだ。「ファンのはずはないし、いったい、誰なんだろう?」と首をかしげていたら、なんとそれは共演した68人のオーケストラの人たちだったのだ! それにしても、オーケストラの人たちにまで大人気だなんて、さすがにエックスっていう感じだよね!

さて、その時、「あの取材のあと、風邪がうつっちゃって、大変だったよ〜」とYOSHIKIにいったら、「俺の風邪なんだから、大切にしなくちゃね」なんて、彼は茶目っ気たっぷりに笑っている。だけど、もうほとんど治っていたわたしは「おあいにくさま。わたしは品行方正なので、もう治っちゃったよ」などといっていた。し、しかし。このあとの打ち上げで、YOSHIKIがいきなりシャンペンをみんなにかけちゃったのだ。それも、何の前触れもなく、突然に! 運悪く、いちばん端に座ってたわたしは、頭からビッショリ。その時はハンカチで拭いてなんとかなったと思っていたのだけれど、店を出て外の空気に触れたら、頭がひんやりと涼しい。そう。わたしは髪の毛がちょっとでも濡れていると、すぐに風邪をひいてしまうという体質の持ち主だったのだ。

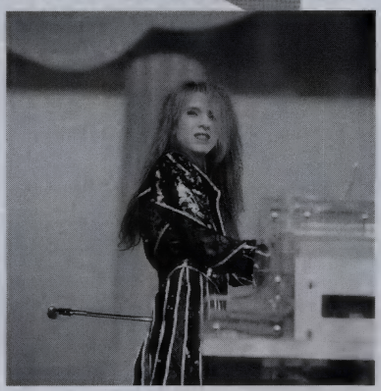
このあとのことは、読者の皆様の想像におまかせします……ハックション!

そういえば、この時に不思議だったのが、いちばん被害の大きかったわたしたちのテーブルにいたPATA。YOSHIKIが襲撃してくる90秒前まで席にいて、パッとトイレに行って、30秒後にまた戻ってきたのだ。びしょ濡れのわたしたちを見て、「いったい、なにが起こったんだよ?」と、びっくりしていたPATA、もしかしたら、彼には予知能力があるのかもしれない……と、そのテーブルにいた人たちは、みんな怪しんでいるのだ。

●×月×日

本誌のロング・インタビューの取材中、「HIEDちゃんは、味なんかわかってないんだよ」を連発していたYOSHIKI。記事の中には1回しか書いてないけれど、実はこのセリフを彼は5回も繰り返しているのだ。さて、そのことをHIEDに伝えたら、「あいつ、そんなこといったの?」と、子供みたいに口をとんがらしている。「あいつはひねくれてるから、本当においしくてもまわりの雰囲気がいいと、それを素直に認められないんだよ。ほら、食通とかいって、おいしいものは汚い食堂にしかないって信じてるオヤジと同じ。それに、あいつ、俺と一緒にその水槽のある店に行ったときは『まずい』っていってたくせに、そのあとこっそり別のヤツとまた行ってるんだよ。だいたい、YOSHIKIのいちばんの好物って、マクドナルドのモーニングセットなんだから、『食物にうるさい』なんて、笑っちゃうよね。俺、たとえ相手がYOSHIKIでも、このことに関しては絶対に譲らないから」だって。

イヤハヤ。この食べ物戦争、はたして、軍配はどっちにあがるんだろうね……(笑)。



Zi:Kill

新生Zi:Killの正体

INTERVIEW:TATSUMI USHIKU
PHOTOGRAPHY:YOUSUKE KO

本誌独占取材!!

自分自身が一番光ってて、一番とんがってた時――今、それをもう一度つかむ旅に出る。

知らず知らずのうちに自由を奪われ、地獄を直視してしまったTUSK、KEN、SEIICHIの3人。迷い迷った末に行きついたところは深い森の中。それでも彼らはしっかり息づいていた…ボロボロになった牙を磨きながら。

今回SHOXXは、TETSUが脱退し、EBIが加入したというZi:KiLLの情勢を一早くキャッチ。地誌に先駆け完全単独インタビューを敢行!

「まずツアーがキャンセルになって申し訳ありません。それからドラムがTETSUからEBIちゃんに代わりました。どこから説明していいのかわからないけど――いろんな悪いウワサもこの冬に飛び交っていたと思いますが、トラブル続きでいろんな事が重なって、自分たちの目の届かない部分でのトラブルなんかがけっこう多くて…。

バンドがあるからトラブルが起こるんであって、ZI：KILLというものが存在するから悪い事ばっかり起こるんだっていう考えにみんななっちゃって。ツアーがキャンセルになったり、やりたい事ができなくなってきたりして、頭おかしくなっちゃって。みんなで普通に遊んでる時にはすごい楽しいんだけど、バンドの話をするとクレイジーになっちゃったり。

それでだんだんみんな狂ってきちゃって、もう解散だねと。ZI：KILLというものがある限り、悪い虫みたいなのがついてくるんじゃねえかみたいになっちゃって、やっぱりバンドやめてしまおうかみたいになって。お互いその先、何をやるかとか決めてなかったんだけど、別々でも楽しく音楽をやっていければそれが一番幸せだね、みたいな。

それから何度か遊んだりしててみんなと会うと、またやっぱり一緒に音を鳴らしたくなるじゃない。テッつぁんのタイコで歌いたくなるし、KENのギターで歌いたくもなるし、セイイッちゃんのベースで歌いたくもなるし。でも、やっぱり1回気持ちが離れちゃったから、その間にテッつぁんももう別の事を考えちゃったんだよね。で、ZI：KILLから気持ちが離れたっていう訳ではないんだけど、もちろん一生懸命〝ZI：KILLのTETSU〟でいてくれたし――だけど1回離れた気持ちの中で、やっぱり別の事を考えちゃって、いろいろ考えた上で、じゃあ俺たちは新しいドラムを探してやっていこうと。

それで、〝ああ、もうこれで本当に終わりだな、ZI：KILLっていうバンドがなくなるんだな〟とか思ったんだけど、「ヒーロー」っていうシングルを出して消えたみたいなもんじゃない。俺なんかはずーっとZI：KILLやってきて、もしここで解散とかしちゃったら、すごく悔しい気がしてさ。それはやっぱり俺が今まで言ってきた事とかやってきた事に反する――それこそ裏切りみたいな気がしてね。だからどんな形にせよ〝ZI：KILL〟という中で俺は歌っていこうと思ったし、ZI：KILLの歌をこれからも作っていきたいなっていう気持ちが出てきて。そんでEBIちゃんに声かけて。

――それはけっこう速い展開だったの？

「そうだね、やっぱりすごくあせってたし。で、身近なドラマーでEBIちゃんていうのがけっこう名前が出てきたんだよね。

EBIちゃんはもちろん自分のバンドもその時あって、セッションとかもした事あったのね。けっこうイメージ的には一つのバンドだけでドラムをたたくって事がすごくイヤな人だなとか、俺は思ってたのね。だけど話してみたら、ZI：KILLやるからにはZI：KILLを精一杯やりたいから、今までとまったく違う気合でやるぜみたいな言葉を聞いて、俺らも助けられたっていうかね。〝ああ、じゃあもう1回やれるな〟っていう気になったっていう感じで。」

――EBIちゃも外見が今までと変わったもんね、合宿に来る前あたりから。

「そうだね、うち、今でもこの冬に起きたトラブルっていうのはぜんぜん解消されてなくて、まだ迷惑かけてる人なんかもたくさんいるだろうし、事務所がつぶれちゃったりとかで、外部の人間に裏でいろいろやられたとか、そういう問題っていうのはぜんぜん解決してなくて。

俺らもそっちの方では頭抱えてるんだけど、とりあえず音楽はやっぱりやっていきたいから、そういうのはなるべく考えないようにして、今はある種軽い気持ち――言い方は悪いけど、すごく軽く音楽をやるんだみたいな、すごい素直な気持ちでやってる感じがするよね。

どんな時でも、俺ってすごいいろいろ考えちゃってたから、深くね。それが今は純粋に、もう歌えれば何でもいいみたいなさ、声が出せれば何でもいいみたいな、そういう――言葉は悪いかもしんないけど、ホントに軽い気持ちで。

でも、せっかくテッつぁんが入って戦闘開始でツアーやって、「ヒーロー」っていうシングル作ってさ、全国回って俺らに会いに来たやつとかシングルきいてくれたやつなんかにはすごいショッキングな事だと思うんだけど、あの時の自分自身が一番光ってたと思うし、一番とんがってたと思うのね。一番胸張ってたと思うのね、今まで生きてきた中で。だから、それを今もう一度つかむ旅に出るみたいなさ、そういう感じがするな。」

――実際にEBIちゃんと4人で始まったのは11月ぐらい？

「そうだね。その前はヘンな話、外に出るのもマジで怖かったし。ずーっと家の中にいて。バンドの存在があるからいけないんだっていう所から、自分が音楽やってるからいけないんだとか、しまいには俺がこの世に存在してるのがいけないんだとかってなってってさ。それで自分の半生を振り返って、自分の生き方を見直して〝あー、そうか。俺はもう消えてしまうのか…〟みたいに思って、高い所から下を見たような事もあったしさ。そんな夢ばっかり見てたし。だけど、素直に〝やりたい〟っていう気持ちが出てきたのは12月前後じゃないかな。」

――だけど、どん底ばっかりじゃないからね。今までのZI：KILLとしては最悪でしょ。

「最悪であり、その最悪の中から俺たちが何とかしなきゃいけないってステージに上がって来たわけじゃない。だからより強いものが出せたと思うのね。だけど、その俺たちのパワーっていうのは崩れちゃって、結果的にこういう形になったけど、今度はその悪条件を――これからもそういう問題がいくつもあるだろうけど、素直に好きな事をやっていくっていう気持ちを失わないようにしてやるしかないよね。

今回の事はどう話していいのかわかんないけど、このインタビュー読んだやつは話の筋がぜんぜん見えないかもしんないけど、俺は素直に好きで音楽をこれからやるっていう、ただそれだけ。それで人が聞いてくれればうれしいし、聞かなけりゃ聞いてもらおうとするしさ。」

――このメンバーになったからには何事もなく？

「それはないでしょう。ヘンな話、その時その時ではもちろん、いつでもこのメンバーでやっていきたいとか、そういう事はその時の気持ちで強いものがあったけども、わかんないよね、ホントに。

でも活動停止の秋、冬の期間に送ってくれた手紙なんか見たりしてると、すごいみんな待っててくれるし、励まされた。すごい感謝してる。

だから気持ち的にも少し変わったかもしんないね、何か。けっこう腑抜けになったかもしんない（笑）。老いぼれて、ダラーみたいな。まだポワーンとしてるね。今、ステージに立てって言われたら、やっぱ立てないかもしんない。

でも、ステージは俺がいつも言うように、一本一本が宝だからさ、一番いい場所、ステキな場所だから、それへの意気込みっていうのはすごい大事にしたいからね。その時はまた偉そうに胸張って歌ってるんだろうけどさ。今、とりあえずこのメンバーで新曲作ったりしてる。」

――ガラッと変わるかな？

「それはないんじゃないかな。でも、一回音楽をやめようかなっていう所まで来た人間だから、いろんな事をやってみたいなっていうのがすごいあるよね。やれるんであればね。もうやれるんだから、それだけで幸せみたいな。でもやっぱり攻撃的になっちゃうよね、そればかりは自然と。

まだ不安材料はたくさんあるし、もろもろのトラブルで、ファンクラブなんかも活動がストップしちゃったりしてて、いろいろ迷惑かけたりしてる部分もまだクリアになってないから、それを早くクリアして、全員が納得して俺たちは表に出たみたいなさ。どっかに負い目みたいのがあると、強くは言えないじゃない。だから早くそういうトラブルを解消したい。」

――たぶんファンの子たちっていうのが一番気にしてるのは、解散するんじゃないかっていう事だと思うんだけど。

「ああ、なるほどね。やっぱり解散多いからね。かまいたちも解散しちゃったし、KATZEも解散しちゃったし、けっこう今バンドってないっていうか、そういう危機みたいのがすごくあるから。だけど今とりあえず――絶対ないっていうのはわかんないでしょ、でも（笑）。

でも、ホントに音楽やってりゃいいんじゃないかなとか思うけどな。だけど、メンバー以上に見に来てるやつらの方が、バンドの事すごい良く考えてるんだなっていうの感じた。だから、そういうのを裏切ったら裏切ったなりの見返りっていうか〝俺たちは裏切ったけどこれだけやったんだ、どうだ？〟みたいなさ、そういうのを今回の事でも提供していかなきゃいけないと思うね。

でも、みんな仲良くやってるからさ、今のメンバーだって。もちろんテッつぁんとだって仲良くやってるし。もちろんユキヒロ君だってがんばってるし。いろいろ迷惑かけてる部分あると思いますけど、今後ともよろしくお願いします。」

もしここで解散とかしちゃったら、すごく悔しい気がしてさ…。

——ベースの音とか変わってきてない？

「あんまり変わってない。曲にもよるしね。シンプルに押さえてるやつはシンプルに押さえてるし。わかんないね、自分がやってる側だから、うまく比較できないでしょ。自分の中で、前の自分、今の自分とかさ、うまい下手とか。いいふうに変わっていけばいいと思うけど。」

——今回間があいたでしょ。『クローズ・ダンス』の時は休みなしだったでしょ。のんびりとかしてた？

「のんびりはしてない。やっぱ、何もないなりに——何もないからこそ、いろいろ考えちゃったりしたのかな。いつもだったら考えないような事とか。」

——やっぱりアマチュアとプロの違いっていうのが大きく出来たんじゃない？

「どうだろうね。周りの人間に左右もされるし。左右されるっていうのは、考え方とかじゃなくて、行動ね。

深刻だったね、解散とかっていう話も出たし。複雑だったもんな。〝もういなくなるのかな〟みたいな気持ちはあったなー。自分もすごいローになって〝もうできねえんじゃねえか!?〟みたいな。

ほんと、余計な事は考えない事だよね。つまんねえ事考えてさ。もう実家へ帰ってバーテンでもやろうかなとかさ(笑)。自分ではそんな事やるつもりはないんだけど、そんな事もふと思ったりとかさ。

だけど大きい意味で、バンドっていうのはやめられないですよね。11月からリハ始めて、漠然と音出したって事だけど、〝やっぱ、コレだよな〟みたいなさ。〝やるしかねえな〟みたいな。くどくど考えてもしょうがないもんね。

時間はあったけど、あんまりほかのライヴとか行かないようにしてた。普段けっこうフットワーク軽いんだけど、なんか行けねえなみたいなさ。なんか不安があったんだろうね。胸張れないっていうか。

今まで細かいトラブルなんかはあったけど、ここまでっていうのは初めてだね。細かい事だったらバンドやってる上で、ホント良くある事なんだろうし。ここまできれいにズタズタになるっていうのはね…。自分たちもそう思ってなかったしさ。」

——でも、またうまくいくでしょう？　スタジオ見てるとそんな気がする。

「そう？そうね。こういう時だからこそうまく聞こえるとかそういうんじゃないんだけど、やっぱりとりあえずは後ろ見たら崖みたいな、俺はそういう気持ちでやってるから。みんなもそうだと思うんだけどな。背水の陣っていうか。もう引く所ないから。」

——逆にここまで来たら、上へあがるしかないからね。気持ちは楽だよね。守るものはないじゃない。極端な言い方すると、『クローズ・ダンス』を出す前の〝行くぞ!〟みたいな、そのぐらいのテンションに近いと思うんだよね。だけどこれからの方がZ：KILLの色が出てくるんじゃないかと思う。

「やっていく上で、何と言われても、嫌われてもいいんだけど、〝あ、この人たちには信用されてやっていきたいな〟とか〝この人たちは俺たちの事を信用してくれてんだ〟とか、そういう最低限のラインの信頼関係みたいのあるじゃない。そういうのキッチリ保ってやっていきたいですね。結局そういうのが崩れちゃったんだからさ。

なんか言いたい事はいっぱいあるんだけどね。内々の事はいいんだけど、それによってお客さんとかに迷惑かかったじゃない、結果として。それが悔しいっていうか、悪いっていうか、心配かけたなっていうか。それをこれから倍にして返さなきゃいけないと思ってるけどね。ま、今回であきれちゃったやつとかもいるかもしんないけど(笑)。でも、しょうがないもんね。俺らにどうにもできないような、すごい事じゃない。」

——自分たちの知らない所でデカい事が起きてた。

「そうそう。俺らが個々に思ってた事っていうのは、やっぱいいライヴやって、いいレコード作りたいって、それだけだから。結局それが遂行されなかったっていうのはつらいし。そういう事以外で、内々でもめてるような事だったらまだいいんだけど、俺らが常日ごろ思ってる根本の事ができなかったからさ。だから、期待してる人に対しては、今後お返ししなきゃいけないなと思ってる。」

——曲は新しいの作ってるんでしょ？

「うん、けっこうできてる。今回はまたまた新しいっていうか。アルバム出るたんびに言ってるような気がするんだけどさ(笑)、ホントまた違う雰囲気のができてるから。今の予定だと、ドラム、ベース、ギター、ヴォーカル、キーボード以外の楽器とかも入れようかっていう話もしてる。KENとかって〝じゃあ、ここはこういうのを入れて〟って頭に入れて考えるのが、すごい回転速いっていうかさ。そういう面ですごい広がるし、なるほどなとか思うし。

そういう、今から先の事はすごい楽しみだけどね。過去はどうしようもないからね、来てしまった事は。その辺の葛藤もありましたね。間があったでしょ。その間っていうのはいろいろ考えるんだけど、できた物事についていろいろ考えてたんだけど、もっと先の事も考えなきゃなとか、そういう葛藤があって、気がついたらボーッとしてたとか。

ツアーも楽しみにしてたのに、とんだし。厄年よ、91年は、いろんな事が重なっちゃって。ただ救いなのは春のツアー。すごい楽しかったし。」

——活動停止してからビデオが出て、チャートの2位までいったということは、まだ待ってるファンがいっぱいいるって事なんだから。

「そうなんだよね。1位はちょっと強すぎるバンドだったから(笑)。いつか抜きたいなみたいな。

私生活でもけっこう厄年だったし。今年はいい年にしたいな。〝楽あれば苦あり、苦あれば楽あり〟って言うかね、そう信じたいですよ。

ライヴは今すぐにでもやりたいっていうのが正直な気持ちだけどね。ただ、順序とかがあるじゃない。新曲出して、レコーディングしたりとか。でもできるだけ早くやりたいですよね。自分自身もホッとしたいし、お客さんもホッとさせたいし。ライヴが一番好きだから、俺は。それができなかったっていうのは、植木職人が植木を取られたような。」

——前も植木職人って言ってたけど、憧れてるの(笑)

「いや(笑)、例えばの話で。何でもいいんですけどね、ペンキ塗りでも、屋台のラーメンのにいちゃんでも。何か〝これだぜ!〟と思ってやってる事があって、それができないっていう。そうなればなるほど、気持ちばっかりあせっちゃって。

具体的な、表面的な事じゃなくて、自分のマインド・コントロールっていうか、そんなのが大変だったな。今も大変なんだけど。どう自分を落ち着かせるかとかさ。こうなんだけど、どう考えて自分を納得させるかとかさ。

でも、スタジオで合わせるとか勘は取り戻してるけど、ライヴの勘はね、さすがにちょっと…。このメンバーでの最初のライヴっていうのは緊張するんじゃない？　ライヴ自体やってなかったし。緊張すんだろうね、きっと。ガッチガチで、最初の音とか間違えちゃうんじゃないかな(笑)。

でも、うまくいくと思って。どうせ人生なんか当たりかはずれかあった後には当たりがあってもいいじゃんみたいなさ。

いろんな人に言われるんだけど、いい勉強になったんじゃねぇか？〟とかさ(笑)。まだ22～23じゃん。こんな年でこんな事体験していいのか!?みたいなさ。」

——これでメジャーっていうかプロっていうのが、逆に自覚できたんじゃない？　自分たちがやりたくてもできないっていう。

「そうだね。それがすごい規模がちっちゃくてさ、かわいい出来事でさ、そういう事を抜きにしてもガーッとできるぐらいだったら良かったんだろうけど、もう八方ふさがりっていうかさ。もちろん、自分たちも甘いところがあったんだろうけど。」

——ヘンな言い方だけど、この先に向けて休養を取らせてもらったみたいな。

「そうだね。ただ、その休養っていうのが見に来てくれるお客さん公認の休養じゃないわけじゃない。一方的なものだから。

自分たちは自分たちが何とかすればいい話なんだけど、それとくっついてお客さんに迷惑かけたっていうのが…。やつらがいるから俺らもあり得るわけじゃない？」

——今年の方が楽しみだよね。

「それ考えるしかないし。楽しくやりたいですよ。そういう楽しみが待ってるんだと思うと、かんばれるし。ここまで来たら、やるだけやるしかないですからね。

ただ、やるにあたって周りのスタッフとかお客さんの大切さみたいなのが、すごい良くわかったから、いい関係で——自分たちだけじゃライヴとかできないわけだから。イベンターさんから舞台、照明、PA——いろんな人がいるんだから。いい関係を保って、いい音楽をやって、いいライヴをやって。」

期待してる人に対しては、今後お返ししなきゃいけないなと思ってる。

「合宿はいいね。合宿なんてやったの初めてで。クールなバンドだから、みんなでメシを共にとかじゃなくって、時間が来たらみんなが集まって一つの場所でっていう。初めてなんだよ、こんなにメンバーと一緒に長くいるけど。ロンドンとツアー以外ではこれだけの日数いるのは、なかったね。

何時に起きようが何時にどうのこうのしようが、好きな時間にスタジオ入れるっていうのはいいよ。ただ、弾きたくない時にも一人が燃えてたらやんなくちゃいけない。〝玄関開けたら2分でゴハン〟系のね。

でも合宿ってあまりいいイメージなかった の。いいイメージっていうかさ、泊まるとこ とかねすべてにおいて。合宿っていうとスポ ーツ部のさ、〝隙間風吹いてるぜ、茶腕は確実 にヒビ入ってるんじゃねえか、隣にいるヤツ は学生服の第一ボタン開けながらメシ食って るんじゃねえか〟系の、そういうイメージあ るんだけど、ここはないね。建物もキレイだ し、メシもちゃんとしてるし。非常にいい体 験だよね。

なんか新鮮だよ。また来たいね。部屋3つ も取ってんのに一つしか使ってねえぜ、どう いう事だ?みたいなさ。元々みんな良くしゃ べるっていうか、意見を交換するバンドだか ら、それが過剰すぎておもしろい。」

——1部屋にベッド4つだし一人が話持って来ちゃったら止まらないって感じになっちゃうもんね。それで昨日も寝てないんでしょ。

「そうなんだよね。早く寝たもん勝ち、眠い時には早く寝るっていう。それを逃すともう後はダメヨよ、周りの力に負けちゃって。〝今日は早く寝るよ〟の一言が言えないと。ちょっと遊ぼうかなとかちょっとしゃべろうかなと思うと、知らぬ間に朝日っていう。

唯一決まってるものがあって、12時にお昼ご飯だよ、7時に晩ご飯だよ、その時間は起きようねっていう。〝あ、今寝ちゃったら12時のお昼に間に合わねえべ。あと2時間我慢して起きてよう〟とかね。

でも、いいんだよ、やれスタジオ急いで入らなくちゃとかじゃなくて、24時間好きな時に使いたいからさ。生きてる時間帯っていうのが4人とも一緒なわけじゃない。だから、何かしら合うのよ。ホントは俺ん中でビリヤードで遊んでたいと思っても、〝そうだな、4人の時間だから。俺の時間に合わせてたら、合宿じゃなくて旅行になっちゃうな〟みたいな。」

——もうEBIちゃんとはバッチシ?

「うん、いい感じでやれたと思う。ソリッド系のタイコ打ちで。けっこう職人肌タイプなんじゃないのかな。いい意味でも悪い意味でも職人肌でさ。

けっこう共通する好きなドラマーも多いしさ、共鳴できるものもあるし。何でも試そうと思ってていいんじゃないの。

やってて楽しいよ。基本的に音楽やってる人だからさ、人間的っていうのもあるけど、ある程度の線のものをやっていって、ちゃんと返答がドラムで返ってくるとかさ。任された楽器でちゃんとしたクオリティを出してるものをポンと出してくると、やっぱ楽しいよね。投げかけるものも意味あるしさ、どんなの返ってくるか楽しみになるし。

テッつぁんと云々っていうのも、正直言って人間的トラブルはまったくないし、音楽的トラブルもない。じゃあ、さて何なんだろうって話になっちゃうけどさ。まったくトラブルもなくて、いい形で来て、タイプもぜんぜん違って、また違う音が聞けてみたいな——そういう、ラフにいきたいよね。割りと今の取られ方としては、なんか一人変わると〝えーっ!?〟みたいのがあるかもしれないけどさ、でもそうじゃないんだよみたいなさ。

俺とか、こじつけに聞こえるかもしんないけど、好きなバンドで4人の好きなメンバーがいてさ、1人違うバンドに入るっていうと、好きなバンドが2つもできたと思うわけでさ。テッつぁんが違うとこでやるっていったら、見てる人は〝あ、あたしの好きなドラムが違うバンドで活動するから、好きなバンドが2つに増えてラッキー♡!〟みたいな、そういうふうにとりあえず思ってもらいたいね。いい活動していくと思うし。

でも、もしかしたらテッつぁんはレーサーになるかもしれない。F1の世界に進むって言ってたから。一応彼、『マンセルと戦えるのは俺しかいない』って、鈴鹿とかそういう甘い世界じゃなくて、故郷イギリスに行ってんじゃねえかな。大ボラ野郎だな、俺も(笑)。

俺はダメだね。タクシー乗ってぶつかって飛ばされて、やっぱり怖いなとか思ってて。タクシーって信用できるじゃん。プロだし。でもタクシーでもぶつかってさ、ぶっとばされて、けっこうさんざんな目に合ってて。怖いの、車が。けっこう車恐怖症の気ありよ。タクシーとか乗ったりする時も、ちょっとスピード出ると車についてる突手みたいのあるじゃん、あれにつかまっちゃってさ。すごい怖い。マジで。俺、車はついてないよ。

——ギターは音の出し方って変わってきた?

「うん、アンプ変えた。今まで最新鋭のギンギン使ってたんだけどさ、最新鋭のギンギンはいいんだけど、その最新鋭のギンギンでどう古い音を出そうかっていうか、自分の出したい音出そうとしてたら、何の事はない、俺は元々古い人だから、〝なーんだ…!〟みたいな。それだったらちゃんとした昔の系統のアンプ使えばいいんじゃないかって。

いいよ、でも。早くライヴで聞かせたいよ。たぶん太いんだよ、音が。シャラシャラの音もカッコいい音出しゃいいんだけどさ。俺、シャラシャラのカッコいい音出してたつもりなんだけど、なんか違うんだよ。けっこう先端に憧れてシャラシャラの音出してたんじゃないかな。先端っていうか、日本の中だけどね。

けっこう古いのは好き。ZI:KILLでもやろうとしてる。凝ってるの好きな人なんだけどさ、前はすごいストレートなものをやろうとすると〝なんだ、普通じゃん〟ていう感じがしたんだけど、俺たちが普通のやっても俺たちになるみたいなさ。やっぱ王道っていうのあるじゃん、絶対。ロックの王道みたいな。〝ちょっとソロ長えんじゃねえか〟系のさ。あんなのやってもZI:KILLになってるからさ。こないだまでの俺たちだったら、〝あんまり良くねえよ〟みたいのが、今ではもう味で全部カバーできてる。」

——ギタリストとしての音を出そうと。

「そう。悔しいじゃん、なんか。布袋さんのアルバムなんか聞いてると、〝あ、俺もこれできるかもしれねえな〟と言ってても、なんか邪道の方の音しか出してなかったみたいな。自分の出してる音がシャリシャリとか流行りすたりの音の一種で、真っ向から勝負できないっていうのはつらいからさ。でも、気づいたよ。邪道な事はいつでもできるから。

何が本物かなんてないかもしんないけど、俺ってけっこう古いのも聞いてて、ギタリスト的には古いギタリストのが絶対いいんだから。楽曲とかアレンジとかは新しいやつの方がいいのあるかもしんないけど、ピュアな人間の部分ではね。」

——こないだスタジオで見た時にスカみたいのやってたけど。

「今いっぱい新曲が急ピッチでできてるけど、バラエティが——間違えて見れば節操ないって言われそうだけどさ、けっこうスカをベースとした曲として笑ってごらんよっていうリズム体があったわけですよ。あれってでも、まったくスカやっちゃカッコ悪いみたいなあまのじゃく精神、ちょっと違う事やりたい精神っていうのがあったんたけど、もろスカのリズムだから、今度やってるのは。ホーンも入れようかみたいな話あるし。

それができるようになったのは、さっきも言ったように、何をやっても俺たちはZI:KILLっていうクオリティを保てるみたいなさ。俺たちが違うと思っても、音を聞いたら〝この楽曲はスカだな〟みたいなのあるじゃん。でも、カッコいいんだよ。スカをやってもスカのカッコ良さが出てると思う。スウイング系をやろうとハード系をやろうとさ。

1曲、死ぬほど自信ある曲あるから、それ早くみんなに聞かせたい。割りとうちはアルバム通していいっていうのが多かったけど、1曲でポンと出してもアルバム中に入ってもカッコいいっていう。シンプルになったというかいろいろ音は詰まってるんだけど数多いものを使ってなくて、一つの音色で小技系が効いてて、いい歌をのっけて。すっごいいい歌なの。モダンでロックでピュアで。ギターもすっごい空間効いてて、いいんだよ。その曲だけタイトルできてない。

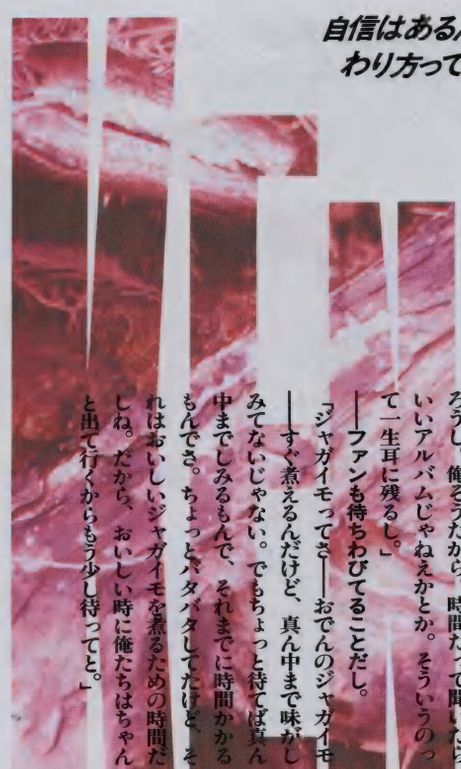
またアルバムとか出した時に、評論家の人たちはみんなほめるのかなとか、100%ほめる人はホントにいるのかなみたいな。自信はあるんだけどさ、絶対今回の変わり方って前回の変わり方と違うから。

けなしてもらいたいよね、どんどん。『デザート・タウン』てそんなにけなされた覚えなくてさ。むちゃくちゃけなしてもらいたいよ。けなしてもらって、後で評価される時がきて、枚数的にも内容的にもいいって言われたら、たぶんそういう評論家の人も違う耳で聞くだろうし。俺そうだから。時間たって聞いたらいいアルバムじゃねえかとか。そういうのって一生耳に残るし。」

——ファンも待ちわびてることだし。

「ジャガイモってさ——おでんのジャガイモ——すぐ煮えるんだけど、真ん中まで味がしみてないじゃない。でもちょっと待てば真ん中までしみるもんで、それまでに時間かかるもんでさ。ちょっとバタバタしてたけど、それはおいしいジャガイモを煮るための時間だしね。だから、おいしい時に俺たちはちゃんと出て行くからもう少し待ってて。」

自信はあるんだけどさ、絶対、今回の変わり方って前回の変わり方と違うから。



《バックナンバー》■VOL.1➡ZI:KILL vs COLORパート別スペシャル対談カラー10ページ■VOL.2➡カラーピンナップ&インタビュー■VOL.3➡表紙&巻頭24ページ大特集、大型カラーポスター、個別ロング・インタビュー、ロケーション・カラーフォト■VOL.4➡ライヴフォト&レポート■VOL.5➡DESERT TOWNツアー・レポート■VOL.6➡TUSKパーソナル・インタビュー■SHOXXスペシャルVOL.2 ZI:KILL

――まずバンド遍歴を。

「うーん、それは困りましたね。早速困っちゃったな。元○○っていうのは、この際必要じゃないんじゃないかなっていう感じでいるんですよ。あんまりそのバンド名をパッと言っちゃうと、〝ああ、そうなんだ〟とかいうイメージがついちゃうでしょ。僕もそれなりにいっぱいやってきちゃってるから、〝ああ、浮気もんなんだな〟みたいな。

特に今回はZI：KILLっていうバンドに対して、ファンの子たちにとってみたら不安材料が多いから、その中でまたそんな不安な材料を持ってるような人間が入って来て、〝え？　どうなるの!?〟っていうふうになっちゃうと…っていうのもあるし。

僕もあんまり昔やってたバンドの名前を出す事によって、〝俺、実はこういうのやってたんだぜ〟っていうのを出したくないと。だからすごく勝手な言い方かもしれないけども、とりあえず無名な新人扱いの方がすごく楽ですね。元○○って出しちゃうと、ある程度のカラーで見られちゃうっていうのが、バンドに対しても僕に対してもあまり好ましくないかなと。」

――ジャンル的にはどの辺の音が好きなの？

「広く浅く(笑)。ほんとにロック全般っていうか。特にこれっていうガチガチな思いはないですね。」

――ZI：KILLは客観的に見てどう？

「おもしろいですよ。客観的に見ておもしろいと思ってた部分が、入ってみたら〝あ、ホントはもっとおもしろいんだ〟っていう、新たなる発見が。けっこう今回曲調がバラエティに富んでるから、そういった意味でも〝あ、こういうのもやるのね〟とか、単純な驚きとか。

昔から知ってるから、けっこうもうイメージみたいのあったわけじゃない、ZI：KILLっていうとこういう曲だなっていう。実際そういう曲も、自分がたたこうと思ってやってみると〝あ、実は違うじゃない!?〟みたいな。けっこう客観的に見てた感じで、入ってみたらぜんぜん違うみたいな。

ドラムに関しては、昔の曲はまるっきり今はコピーの段階で、まるっきり変えたっていう点は今の所はないです。」

――淡々といっていうか、歯切れが良くてタイトなドラムを叩くじゃん。それにEBIちゃんの〝広く浅く〟がこれからのZI：KILLにうまくはまっていくんじゃないかな。

「それは恐縮ですね。僕は一応自分でも曲書いていこうとも思ってる人間だから、TUSKの声を聞いて、KENのギターがあって、セイイっちゃんのベースがあって、それを考えた上で、今の段階だったら曲ってすごくいっぱい出て来そうっていう可能性みたいのがあるから、楽しみですよね。」

――EBIちゃんは楽譜を読んだり書いたりできるんだね。

「簡単なものぐらいしか。そんなに五線譜におたまじゃくしがバーッとあっても読めないけど、構成表みたいな感じで書いてあれば今んとこって感じ。」

――みんなスタジオでは言葉でやってるけど、EBIちゃんとKENちゃんのやり取りは、KENちゃんが譜面を書いてEBIちゃんに渡して「うん」とか言ってたいてるから、ビックリしちゃった。

「あれは構成表的に考えちゃってるから、譜面であっても五線譜ではなくて小節とかコードが書いてあったりとか、そういう簡単なもんですから。見た目にはビビるかもしれない、譜面台立てて見ながらたたいてるから。外から見たら、ちょっと。

ほかの楽器とか、かじる程度ぐらいはできるんです。ギターとかベースとか、ちょこりと。夢はあるんですけどね。元々フロントマンに憧れてましたから。ホントはギタリストになりたかったんですよ。これからZI：KILLで作曲で名前が出て来る事もなきにしもあらずっていう(笑)。

先の事はまだわからないですけどね。いくらいっぱい曲作っても〝こんなの歌えねえよ!〟って言われたらボツだし。〝こんなのちょっと違うんじゃない?〟って言われたら…。だから、あくまでも歌が最優先ですからね。僕はそういう考えで作るつもりでいるし。」

――前からEBIちゃんとZI：KILLは遊び友達だったけど、加入してからもっと一緒に行動する事は増えた？

「ありますね、それは。今までは知り合いを通しての知り合いみたいな感じでつきあってたけれども、実際入って毎日のように顔合わせてるとおもしろいですね。遊ぶっていうよりも、一緒にいる時間が長いというか。〝あ、そうなんだ!?〟っていう部分はいっぱい見えてくるし。僕は結局後から加入した人間だから、すごく発見は多い毎日ですよね。

だから、僕以外の3人はずっと不動でやってきてて、もうお互いこういうふうにやればああくるだろうみたいな、その部分の信頼っていうのは僕は今の段階ではうらやましいっていうか、早くそれに入りたいなっていう考えですね。

最初はKENはクソ生意気な小僧だと思ったんだけど、話してみると芸人なのね(笑)。それ知らなくてね。KENの場合、お笑いに持っていくでしょ。それけっこう最初のうちはびっくりしたかな。セイイっちゃんにしてもTUSKにしても、もっと〝うりゃあ!〟系だと思ってたけど、実は違う所で神経質であったり、そういう部分っていうのも――そういう部分て、一緒にいる時間が長くなったからやっとわかってきたっていうか。

だから個人個人に対しても、別に彼はこうだろうっていうのはなくて、ただ〝ああ、そうなんだ。こういう部分もあるんだ!〟っていうのが強くて。まだそんな〝彼はこういう人です〟とかは、僕には言い切れないっていうか。〝ああ、なるほど、なるほど〟っていうのが多いですね、毎日。今まではそんな深くしゃべった事なかったしね。

やっぱりメンバーになったっていうと、一歩突っ込んだつきあいになるから、内面的な部分の発見は毎日当たり前だしね。」

――もう、なじんできたよね。最初見た時はまだ髪も切ってなかったし。

「たぶん最初知らない人が見たら、ローディーと間違えちゃうんじゃないかな(笑)。

とりあえず今、スタジオ入ってて、楽曲とかもどんどん新曲できてって、不安な要素っていうのはなるべくメンバーに対しては与えたくないっていうかね。どうしても新加入の人間だから、その辺の部分は全然なくっても、ささいな事でも気を使わなきゃっていう部分は少しはあるでしょ。それは今入ったばっかりだからかもしれないけど、要するにほかのメンバー3人の重荷っていうかプレッシャーっていうか――何って言ったらいいんでしょうね？――早く気を使わないでいい仲になれればいいなと。」

――ZI：KILLとしてアルバムを出す事に関してはどう？

「アレンジの部分っていうのはやっぱりバンドでやってる作業だから、それはそれでいっぱい口出しはしますね。ただ、やっぱり曲のイメージで、歌がメインだからじゃまにならないようなアレンジとか。ドラムに関しては別にそんなにハデな事やらなくていいんですよ。歌があってその後ろにいるっていう感じのを考えてるから。

〝俺が!〟〝俺が!〟っていうよりも、やっぱり歌を立てたいなというのはありますね。あんまりでしゃばりたくないし。とりあえず気持ちはフロントマンになりたいんだけど、ドラムに関してはそんなに〝俺が!〟〝俺が!〟っていう気持ちは出したくない。

どの楽器にも言える事だと思うんですけど、ドラムがあってのバンドではないですから。ギターがあってのバンドじゃなくて、バンドの中のギター。ベースあってのバンドじゃなくて、バンドの中のベース。でも、そのどれか一つ欠けてもダメだと。」

――そういう気持ちなら、EBIちゃんにとっても、ZI：KILLにとっても、これからは順風満帆みたいな。

「なればいいですよね。そういうふうにやればいいなと思ってます。」

――新加入っていってもEBIちゃんが引っ張ってるなっていう所も見られるしね。

「年だけとってるからかもしれないし(笑)。しょうがないでしょうね、裏方が長いから(笑)。自分が入ってこのバンドにとってプラスになれば、それは非常にうれしい事だし。」

――ギターとかベースのフレーズっていうのは聞こえないっていう所もあるじゃない。ドラムって絶対鳴り続けるものだから、それだけドラムが重要っていうか、それで同じ曲でも変わってきちゃうっていうのあるでしょ。EBIちゃんはうまくなじんでると思うよ。

「それはうれしいですね。僕はまるっきり無名の新人扱いでいいと思うし、いない時に適当なのが落ちてたから拾って来たっていう感覚でいいんじゃないかな。

ある日突然ていう感じで電話があって、とりあえず〝えっ!?〟っていう感じだった。まず、KENちゃんから電話がかかってくる自体不思議でしょ。モゴモゴしちゃって。即答ではなく。最初のスタジオ入る前にちょっと時間があったから、俺もいろいろやってたんで考える時間みたいなのが。

あやふやな気持ちのままスタジオに入ったわけじゃないから、最初のスタジオの時点で〝よっしゃ!〟っていう気持ちだったかな。とりあえず1回合わせてみようっていう軽い気持ちではなかったですね。そこまで行くのにいろいろと紆余曲折がありまして。でも、大丈夫でしょう。バンドっていうのは集合体ですからね。」

ある日、突然ていう感じで電話があって、とりあえず〝えっ!?〟っていう感じだった。

協力＝原宿イエローハウス、コンフュージョン、渋谷フロンティア、M'SQプロジェクト

Zi÷Kill

STAFF、正社員、商品取り扱い店大募集中!!

MARI'S ROCK

SHOP 新宿店

〒160
東京都新宿区西新宿7-8-2
福八ビルIF（本店）
TEL.03-3363-2270

SHOP 下北沢店

〒155
東京都世田谷区北沢2-26-25
久保ビルIF（下北沢店）
TEL 03-3485-6907
TEL 03-3481-9639

IMPORT T-SHIRTS
ALL¥3,800

①
◆魔女帽
¥3,800(FREE)

⑤ ⑥ ④
半袖のみです。SIZEはメーカーにより多少異なります。
種類は約140アーティスト400柄以上あります!

⑦
◆リング付
ブライアン帽
¥6,800

⑧
◆スェード風ベスト
¥6,900(FREE)

⑨
◆銀ゼブラ柄シャツ
¥6,900(FREE)

⑩
◆SIDベルト
¥6,800

②
◆中折れ帽HS-F
¥7,800(FREE)

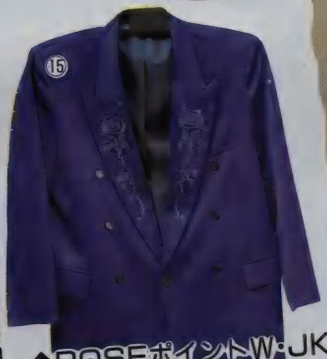
③
◆ポリスCAP
¥5,900
(SIZE：M・L)

⑪
◆REAL LEATHER RIDER JK
SIZE：M・L ¥29,800
SEXPISTOLS・CLASHの
T-SHIRTSを1枚プレゼント!!

⑫
◆サテンロング手袋
¥2,900
SIZE:FREE

⑬
◆オリジナルチョーカー
¥5,800
石の色は赤も紫もできます。

⑭
◆レースロング手袋
¥2,900
SIZE:FREE

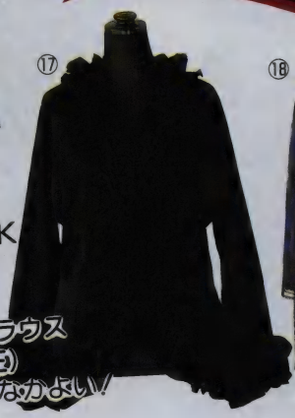


⑮
◆ROSEポイントW・JK
¥19,800 SIZE:FREE
黒・赤・エンジもあります。

♠この他にもROCK系各種商品多数とりそろえてあります！カタログ希望の方は300円分切手を同封の上、上記のどちらかのお店までどうぞ!!

SEXY & CUTE FOR YOU!!

⑯
◆3段レーススカートBK
¥3,980(FREE)

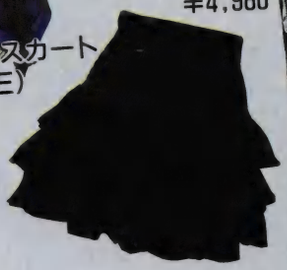


⑰
◆フリルフルブラウス
¥8,800(FREE)
ボレロ調でなかなかよい!

⑱
◆アンバランススカート
¥9,800(FREE)
(紫・黒)

⑲
◇ノーマルレーススカート
赤黒(FREE)
¥4,980

⑳
◆エナメルショートパンツ
ノーマルタイプ¥4,800
サイド あみあげタイプ¥6,800
(M：60cm/L：63cm)



㉑
◆べっちん3段スカート
¥3,980 (FREE)

㉒
◆サイドZipperエナメルブーツ(黒)
¥24,800 SIZE：5~8インチ

㉓
◆エナメルあみあげブーツ(黒)
¥21,800
SIZE:5~7インチ

MAIL ORDERお申し込み方法

◆必ず電話にて、商品の在庫確認をお願い致します。
◆商品は受付後、1週間から3週間でお届けします。
◆代金のお支払いは、商品のお届け時にお払い下さい。(代金引換です。)
◆現金書留でも受け付け致します。
(商品代金＋消費税＋送料¥1,000を添えて下さい。)
◆サイズ変換・不良返品は、受け取り後、1週間以内にお願い致します。
◆サイズ変換・不良返品以外の商品返品は固くお固り致します。
◆送料は一律¥1,000です。(輸入Tシャツのみ送料は無料です)
◆尚、上記商品に消費税は含まれておりません。

GRAND SLAM

2/12(WED)NHKホール

「LET IT GO」がTV-CF「オリンピック・スポーツ・ビックス'91冬」のキャンペーン・ソングに決定！全国ON AIR中!!

CONCERT'92

「DANCE! DANCE! DANCE!」

NHKホール 2/12(WED) OPEN18:30/START19:00

全席指定：前売¥3500(INCLUDE TAX)問：バックステージTOKYO 03-3226-7312

12/15 AM10:00チケットぴあにて→ON SALE

2/1 ON SALE

SINGLE「CRY AGAIN/クライ・アゲイン」

C/W「HEARTACHE」/BONUS TRACK「CRY AGAIN(I can't forget you)」

ALDA-44/¥900(INCLUDE TAX)

2/21 ON SALE

VIDEO「INFINITY/VIDEO」

収録→LET IT GO, CRY AGAIN, DANCE DANCE DANCE

ALVA-69/¥3,000(INCLUDE TAX)

NOW ON SALE

SINGLE

「オリンピック・スポーツ・ビックス '91冬」TV-CFテーマ・ソング

「LET IT GO/レット・イット・ゴー」:ALDA-35 ¥900(INCLUDE TAX)

C/W「I WANNA BE SOMEBODY」

ALBUM

「INFINITY/インフィニティー」:ALCA-178 ¥3,000(INCLUDE TAX)

LOOSE CONTROL, LET IT GO, DANCE DANCE DANCE, CRY AGAIN 他全12曲

「GRAND SLAM」の最新情報を送ります。62円切手を2枚同封の上、下記住所「SCREAMY-BOPPER」係まで

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-21-5ミサワビル401 DANGER CRUE INC. 03-3356-9648

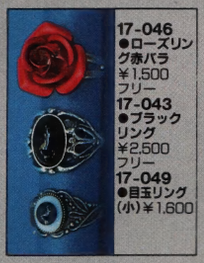
Alfa

D.C

SRC MAIL ORDER

左 13-310 ●ホワイトメタルネックレス ¥1,800
右 13-309 ●インドネックレス ¥2,300

13-303 ●水晶皮ひもネックレス ¥3,000
13-304 ●電十字架石付ネックレス ¥2,200



17-046 ●ローズリング赤バラ ¥1,500 フリー
17-043 ●ブラックリング ¥2,500 フリー
17-049 ●目玉リング(小) ¥1,600

12-312 ●目玉ネックレス ¥3,500
12-313 ●E5目玉ネックレス ¥3,500

33-003 ●カラースプレー 各¥1,750 ゴールド、ピンク、青、オレンジ、緑、シルバー
33-005 ●カラースプレー(大) 各¥1,500 紫、赤

13-305 ●パールネックレス ¥2,980

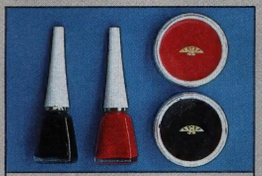
13-065 ●3連十字ペンダント ¥2,600

12-316 ●チョーカーY82 ¥1,500

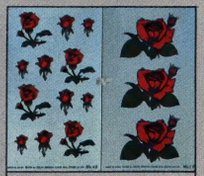
12-307 ●マグネットピアス(黒&赤) ¥2,000 2ケずつ4ケセット、磁気で付きます。

18-011 ●シルバーリングブレス ¥1,440 (12本入)/フリー

14-010 ●レザーグローブ(ビョウ付) ¥3,600 皮革/黒/フリー
14-005 ●レザーグローブ(ビョウなし) ¥2,980



33-002 ●リップ&フェイスカラー 各¥1,600 黒、紫、赤、青
33-004 ●マニキュアセット(黒&赤) ¥1,280 2色入り



32-003 ●タトウシール、バラ(小) ¥1,000
32-002 ●タトウシール、バラ(大) ¥1,000

●長袖Tシャツ ¥4,980 綿/黒/フリー
35-203 ●ローズドクロ　35-204 ●バッドボーン　35-205 ●ハーレー　35-206 ●デビル

01-303 ●プリーツカラージャケット ¥19,800 ポリエステル/黒/フリー/着丈79cm

01-285 ●ベルトジャケット ¥19,800 ポリエステル/黒/フリー/着丈95cm

01-007 ●ショートジャケット ¥10,800 綿/黒/フリー/着丈48cm
16-120 SIDベルト(1) ¥7,980 皮革/黒/フリー
08-101 ●レザーパンツ ¥8,800 合皮/黒/28、30、32インチ

30-031 ●ヨーロピアンコート ¥17,800 アセテート/黒、紫/フリー/着丈115cm
02-002 ●フリルブラウス ¥10,800 綿、レーヨン/白、黒、赤/フリー
09-0817 ●ブーツ817 ¥19,800 皮革/黒/メンズ24〜27 レディス22.5〜24.5

01-317 ●モヘアセーター ¥10,000 アクリル/紫×黒、赤×黒/フリー
08-135 ●ブラックスリムパンツ ¥8,800 綿/黒/28、30、32インチ

02-273 ●パンクシャツ ¥10,000 綿/白、黒、赤/フリー

35-128 ●ベルト付Tシャツ ¥6,800 綿/黒/フリー

02-211 ●ストラップシャツ ¥8,900 綿/黒/フリー

10-600 ●皮ジャン(ウエストベルト) ¥29,800 皮革/黒/M、L

14-021 ●黒手袋ロング ¥4,700 (レースもあります)
14-022 ●レース手袋 ¥2,980

●ベルト 皮革/黒/フリー
16-107 ●コンチ(小)15ヶ付ベルト ¥5,500
16-105 ●ビョウベルト(大) ¥5,200

01-329 ●金具付スタンドカラージャケット ¥29,800 ポリエステル/黒/フリー/着丈76cm
08-402 ●ワイドパンツ ¥11,800 ポリエステル/黒/フリー/W〜76cm
09-7060 ●ラバーソール ¥19,800 皮革/黒/メンズ24〜27 レディス22.5〜24.5cm

03-126 ●ショールカラーベスト ¥13,800 ポリエステル/黒/フリー
02-277 ●シャーリングブラウス ¥14,800 綿/白、黒/フリー
08-343 ●スリムパンツ ¥11,800 ポリエステル/黒/フリー/W〜74cm

08-344 ●ダブルバックルパンツ ¥11,800 ポリエステル/黒/フリー/W〜79cm
35-191 ●シースルーTシャツ ¥3,980 ナイロン100%/黒/フリー

09-0812 ●ブーツ812 メンズ24〜27cm レディスM、L
●シューズ 皮革/黒(レディスM 22.5〜23、L 23.5〜24cm)
09-0326 ●ブーツ326 ¥19,800 メンズ24〜27 レディス22.5〜24.5cm

●SRCの商品はスキンヘッド、コンフュージョンのブランドより特選したものをご紹介しております。

お申し込み方法

★ハガキでオーダーする人は
下記の要領で必要事項を書いてポストへ

41 〒151
東京都渋谷区代々木3の15の3 アベビル205
SRC SH1係

①〒住所(フリガナ)
②氏名(フリガナ)㊞
③生年月日
④電話番号(必ず)
⑤希望商品名・商品番号
⑥数量・色・サイズ
⑦保護者名㊞18才以上の方は必要ありません

★FAXでオーダーできます
ハガキと同じように必要事項を書いて
03-3378-6300
年中無休 ※必ずSH1係と書いて下さい。

★デンワでオーダーする人は
日・祭を除く AM10:00〜PM6:00
03-3378-6200

●商品はオーダー受付後2週間前後でお届けいたします。●代金のお支払いは、商品到着後1週間以内に送金して下さい。●万一届いた商品に破損等があった場合は新品と交換いたします。●郵便切手(10%増)でもお申し込みOK。●お買上げ合計が1万円以上の場合は代金引換です。

全商品、送料は無料サービス

●全商品消費税を含んだ価格です。

SRC
〒151 東京都渋谷区代々木3-15-3 アベビル205
★どうぞお気軽にお問い合せください

原宿駅
竹下通り
●マクドナルド
●クレープ店
★SKIN HEAD
★CONFUSION

原宿店(水曜定休)
●営業時間 AM11:00〜PM8:00
●原宿駅竹下通り口より約100m
●SHOP SKIN HEAD 03-3497-9856
●SHOP CONFUSION 03-3497-9867

カタログ無料急送

オリジナル新作カタログVol.12発行中!
ご希望の方はハガキに①住所②氏名③SH1係カタログ希望と書き左記まで

OFFICE & SHOP スタッフ募集!

写真を添えて履歴書急送せよ

●お急ぎの方は電話で確認の上、現金書留でご注文願います。また、急送希望の方は原則的に郵便物500円増、小包1,000円増になります。

EXTASY RECORDS PRESENTS

NEW VIDEO

『無敵と書いてEXTASYと読む!!』

1992年2月1日　発売決定!!

TOSHI, HIDE, PATA
TAIJI & YOSHIKI

百太郎, GEORGE
& JUN

VIRUS

LUNA SEA

東京YANKEES

SIGHS OF
LOVE POTION

THE ZOLGE

LIGHT & SHADE

GILLES DE RAIS

MAJESTIC ISABELLE

…AND MORE

1991年10月29日、日本武道館において決行されたEXTASY SUMMIT'91の映像を中心に、過去のEXTASY SUMMITの歴史的映像、他では決して見ることのできないEXTASY RECORDS無敵の打ち上げ風景＋αの映像で迫る怒濤のオムニバスビデオ！

ステレオ／60分収録予定／カラー　　税込￥4,800（税抜￥4,660）
（LD 2月21日発売）

制作・発売：EXTASY RECORDS　　VHS：EXVM-001　BETA：EXUM-001　LD：EXLM-001
販　　売：SONY RECORDS　　VHS：SRVM297　BETA：SRUM3297　LD：SRLM297

EXTASY RECORDS

アリーナ37℃
2月号臨時増刊
SHOXX 1992 Vol.8
ショックス

Victor
JVC
※JVCは、日本ビクターの世界ブランドです。

味方。

いい音の味方、7ショック・スピーカー搭載。
ふつうじゃない《シーディオスX770》、誕生。

NEW

音の衝撃、7ショック・スピーカー
新・重低音システム、GホーンEXサーボを含む
7つのスピーカーが広帯域・高音質再生する。

痛快、アクションディスプレイ
グリーン&アンバーの2ウェイ。操作する
ごとにディスプレイの色がスイッチする。

電動ドア、シャトルハッチ
リモコン開閉できる先進メカだ。
■ワン・ツー操作で
カンタン高音質録音 ■ウェイク
アップボリューム採用の
オン/オフ・プログラムタイマー
■5素子電子グライコ&スペアナ

RC-X770 標準価格 59,800円(税別)
(ワイヤレスリモコン付属)

シーディオス
CDioss

●あなたが録音したものは、個人として楽しむなどのほかは、著作権法上、権利者に無断で使用できません。
●ビクターへのお問い合わせ、カタログ請求は、型名および住所、氏名、電話番号をご記入のうえ、「ビクターお客様ご相談センター」
東京：〒113東京都文京区本郷3丁目14-7ビクター本郷ビル TEL03-3814-9311 / 大阪：〒543大阪市天王寺区小橋町10-16大阪ビクタービル TEL06-765-4181 代表へ 日本ビクター株式会社

VICTOR CREATES IT.

発行人：福島昌実
編集人：星子誠一
発行：音楽専科社 〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F ☎(03)3574-0201代 FAX：(03)3574-8548

雑誌01594-2 特別定価750円(本体728円 送料260円) Printed in Japan 三共グラフィック株式会社
T1001594020756